勉強の神様は人見知り

京夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勉強の神様は人見知り

【Ｎコード】
Ｎ６１７１Ｓ

【作者名】
京夜

【あらすじ】
勉強よりも運動が得意な如月まどか、ピカピカの高校一年生、陸上部所属。彼女はとあるきっかけから医者になる決意をした。成績を上げるにはどうすればいいか……悩む彼女が出会ったのがクラスメイトの一柳誠だった。メガネで無口、勉強は得意だけど人付き合いが苦手、大人しくて存在感の乏しい誠をまどかは「勉強の神様」だと勝手に思い込み、教えを乞うことになる。誠が教える勉強方法で成績を上げていくまどか。一方、まどかと接することで人見知りが徐々に直っていく誠。これは、そんな鈍い二人の春風のような青

春とほのかな恋の物語です。

窓際の神様

昼食後の国語の時間なんて、一番眠たい時間。
ほとんどの生徒が眠り込んでしまって、先生もあきらめて教科書の朗読をしている。

そんな中でひとり、彼は背筋を伸ばして座っていた。
きれいな姿勢だったけれど、自然体というか、力が入っている感じがしない。
そこに、たたずんでいるような。

穏やかな、楽しむような表情して、教科書を眺めたり、ノートに書き込んでいる。
視線がとっても集中しているようなのに、どこか優しげで。

窓からの陽光が、そんな彼を包み込んでいた。
まぶしいような、温かなような……。

まるで後光を背負い、慈しみの目をした、マリア像のような。
どことなく神聖な、静かな愛。

なんとなく、神様みたいに思えた。

勉強が好きなのかな。
それとも、何かいいことがあったのかな。

何となく、見ているこちらまで、幸せになってしまいそう。

聞いてみたい。

あなたが見ているものは、私とは違うのですか？
私にも教えて欲しい……。

神様発見

授業の終了のチャイムが、眠っていた如月まどかの意識を引き上げた。
顔を上げると教師はすでに扉を出ていくところだった。
授業は終わったらしい。

あの光景は夢なのかと思ったが、何ということはない、あの神様に思えた彼は、今も静かに座って次の授業の用意をしていた。
彼の名前は、確か……一柳だったはず。
ほとんど目立たず、周りの人の会話にも入らないため、まどかも今ひとつその名前に自信が持てずにいた。
高校入学して一月たったが、勉強ができるらしい、という話以外は聞いたこともなかった。
いつも授業が終わると静かに消えてしまっている。部活にも所属していないようだ。
しかしまどかは、先の光景で確信した。勉強を教えてもらうなら彼だ、と。

まどかは中学の頃から陸上部に所属していて、勉強よりは運動が得意な活発な女の子だった。
中学は髪も短くしていて、整った顔立ちだったが、性格的には男の子のような存在だった。
高校生となり髪もやや伸ばし始め、女の子らしい可愛らしさが見られるようになってきていたが、本人はあまりそのあたりは意識していなかった。

ただ、本人はやや悪い成績のことを気にしていた。

今まではそう気にしてもいなかったが、彼女は高校に入り、あらたな夢を見つけてしまった。
そのためには、何としても成績を上げる必要があった。
ただどうしたら良いか解らずに悩んでいた彼女だったが、彼に教えてもらうことで、何かこの壁を超えられそうな予感がした。

直感に近いものだったが、今までも彼女はそうした直感を大事にしていた。
今回もその思いを大事にし、次は行動にうつす番だと考えていた。

そう考えているあいだに、次の授業が始まってしまった。
物理の時間は、先程よりは授業らしく進み、生徒たちの間に彼の姿も埋もれてしまった。

『この授業が終わったら、声をかけてみよう』

そう決心したまどかだったが、うまくはいかなかった。
授業が終了して、親友の神谷曜子と話しを交わしているうちに、彼の姿はなくなってしまった。
ほんの数分の出来事だったが、本当に気配なく、彼は静かに帰ってしまったようだ。

「しまった……」

「どうしたの？」

「一柳くん……だったっけ、あのあたりに座っていた眼鏡の人。ちょっと聞きたいことがあったのだけど……」

「一柳くん？　誰だっけ……もしかして、あの目立たないけど勉強

ができそうな彼？」

「多分そうだと思う」

まどかは自信なげにうなずいた。

曜子も自信がないのは同じだった。

「その彼に何の用だったの？」

「うん、ちょっとね」

理由はまだ話すことが気恥ずかしかった。

勉強や成績が関わるし、夢についても話さなくてはいけなくなるかも知れないことで、何となくためらってしまった。

まだできたての、あわい、実現できるかどうか分からない夢だった。

「あっ、部活が始まるから、またね！」

まどかは曜子に手を振ると、陸上部の部室へ向かって走りだした。

まどかは陸上のなかでも短距離走を得意としていた。

走りこみは決して楽なものではなかったが、あの一瞬の集中と駆け抜けた後の達成感が大好きだった。

中学の時はさいわいにして県大会で準優勝までいった。

高校でも迷わずに陸上部にはいった。

いつもの練習を終えると、あたりはやや日が陰り始めていた。
ジャージのままで身支度を整えると、先輩たちに挨拶をして、駐輪場に留めていた自転車に乗って家に向かって走り始めた。

こうした夕方の風景が、まどかは好きだった。
どこからか夕ごはんのいい匂いがしてきたり、帰りを急ぐ子供たちの笑い声を聞くと、胸がなんとなく幸せな気持ちになるのだ。

まどかはいつも、わざと商店街の道を通って帰る。
その方が車も通っていないので安全だし、夕方の人々の賑わいを見ることも好きだった。

その視界の中に、思わぬ人物を見つけてまどかは急ブレーキをかけた。
制服は着ていなかったが、あの一柳くんがいた。
買い物袋を下げてひとり歩いていた。

今までもこうしてすれ違っていたのかも知れない。
しかし、今は彼が浮き上がるように見えた。

『神様発見！』

まどかはドキドキするのを感じながら、いきなり声を掛けることができなかった。
教室内で声を掛けることは自然でも、こんな商店街では不自然だ。
しかも、相手はたぶん私のことを知らない。

『どうしよう……あぁ、見失いそう』

どうするかを決めきれず、自転車を押しながら後を追ってしまった。

『これじゃあ、不審者だよぉ……』

そうは思うが、何となくこのまま見失うのはもったいない気持ちがして、しばらく後をついて行った。

彼はさいわいそのことに気づかず、商店街を抜け、路地を曲がると団地へと歩いて行った。

８階建てのやや古い４つほどの棟で団地が形成されていた。

その高い建物に夕陽があたり、なんとなくノスタルジックな印象を与えている。

棟の間で遊ぶ子どもや、同じように家路につく主婦などが、まばらに歩いていた。

その中の一つに、彼も入っていった。どうやらここに住んでいるらしい。

まどかは立ち止まった。その視線の先で、彼は棟の中に消えてしまった。

ついに声を掛けることはできなかった。

「はぁ……」

ため息をついた。

いつものまどからしくなかった。

いつもは、知らない人の輪でもすぐに入り込んで仲良く慣れる、垣根のないまどかだったが、今回はためらってしまった。

何となく、緊張してしまったのだ。

「どうしよう」

建物を見上げながら、ひとり呟いた。

あの神様のような教室での光景を見たとき、何かの運命のような直感を感じた。

きっと縁があるはずだ、と信じていた自信が揺らいでいた。

「帰るしかないよね」

まどかはもういちどため息をついて歩き始めた。

自転車と縁

自転車を押して歩き始めたまどかと、むかいから走ってきた自転車がすれ違った。

がっ！

何の音かと思って振り返ると、さきほどの自転車が倒れかけて止まっていた。

まどかは思わず声をかけた。

「大丈夫ですか?!」

自転車を置いて近づくと、その女性はびっくりしたように振り返った。

年齢は４０歳前後であろうか。

肩まであるウェーブした髪に、整った目鼻立ち。

彼女はすぐに笑顔になり、答えてくれた。

「大丈夫よ……と言いたいけれど、チェーンがはずれたみたい。古い自転車は駄目ね」

そういいながら、下を見つめていた。

確かに、チェーンがはずれていた。

すれ違ったときにぶつかったのかなと心配したまどかも、ただチェーンがはずれて倒れただけだと解り、相手の女性も特に怪我も無いようで、ほっと安心した。

「直せますか？」

「どうだろう。あまり得意じゃないから、いつも自転車屋に持って行っちゃうんだけど……」

「私、直せます。私も自転車通学なので、何回か自分のを直したことがあります」

彼女は断るように、横に手を振った。

「いいのよ。手が汚れるわ。大丈夫よ。家もすぐそこだし」

まどかはそう言われながらも、ためらわずに自転車のたもとに片膝をつき、チェーンに手をかけた。

いつもはこうしてためらいなく動ける。考えずに身体が動いてくれる。

まどかは、手が汚れることもいとわず、チェーンをかけ直し始めた。

「あっ、きれいな手が……ごめんなさいね。ありがとう」

女性も、ここは素直にお礼を言うことにした。

「いいえ」

まどかもにっこり笑って、作業を続けた。

さほど難しい行程もなく、チェーンをはめてペダルを回すと、カタッと音を立ててチェーンは元の位置におさまった。

「良かった」

「すごい。なおった」

まどかは立ち上がって彼女に笑顔を向けた。

「チェーンにゆるみがあるとはずれやすいそうですよ。自転車屋さんで調整してもらうといいかも知れません」

「ありがとう。そうするわ。ねえ、手だけでも洗っていって。すぐ近くだから」

彼女はぜひに、という顔でまどかに声をかけてきた。

「部活の帰りで汗をかいているから、家に帰ってすぐにシャワーを浴びるので、大丈夫ですよ」

「それでは申し訳ないわ。本当に助かったの。お礼にもならないけれど、手ぐらいは洗っていって。ねっ」

彼女はまどかの腕をとって言った。

そのまま引っ張っていきそうな勢いだった。

「あっ、はい。では手だけ……私も自転車なので、ちょっと持ってきます」

「わかったわ」

そう言うと、彼女は満面の笑顔で答えてくれた。

『かわいらしい方だなぁ……』

その笑顔をみて、まどかはそう考えた。年は少し離れているのに、どこかかわいらしさの残る笑顔にまどかもひかれた。
二人は自転車をひいて、置き場にとめると、目の前の団地に入っていった。

「あなた高校生？」

「はい、朝陽高校の一年生です」

「あら、息子と同じ」

まどかの胸がどきっとした。
あきらめた運命が、頭をよぎった。

「如月まどか、と言います。１年１組です」

「同じクラスじゃない。一柳誠って言うの。知ってる？　目立たないと思うけど」

「わっ！」

まどかは思わず声を上げた。
鼓動が高まる。

「なっ、何？」

「いや、かみっ……じゃなくて、勉強ができるって噂を聞いていて。知ってます」

彼女は納得したようにうなずいた。

「そう言えば、高校の入学試験、首席だったらしいわね」

「しゅ……」

思わず声が詰まった。

まどかは自分の直感の正しさを感じながら、高すぎる山に頼ろうとしているのでは、と不安も出てきた。

「私は誠の母親で、真穂。一柳真穂。よろしくね、まどかさん」

「よろしくお願いします」

息子に比べ、母親は気さくな人柄なようだ。

ちょっとほっとしながらも、家の扉の前まで来ると、再び動悸がしてきていた。

「ただいま。誠いる？」

扉を開けて中に入りながら、真穂さんは奥に向かって話しかけた。

神様のご馳走

「はい、お帰りなさい。母さん」

奥から彼がやってきた。

確かに、あの時の神様だった。今はちょっと印象が違うけれど。

何しろ、ジャージにエプロンをしていた。

『……神様。お願い。できればもう少し格好を……』

まどかが苦笑いをしながら誠のことを見つめていると、誠は突然の来客に目を丸くしていた。

「この子は、如月まどかさん。いま下で自転車のチェーンがはずれたのを助けてもらっちゃったの。聞いたら誠のクラスメイトのようだけど、あなた知ってる？」

真穂さんが聞くと、ちょっと思案顔のあとに誠は首を横に振った。

やっぱり……。

真穂さんはため息をついた。

「こんなかわいい子がクラスメイトで、あんたのことを知っているというのに、あんたは何をみているのよ。相変わらず黒板しか見ていないの？」

まどかも少し笑って、靴を脱いで、上がらせてもらった。

「お邪魔します。お母様、まだ入学して一月ですから」

まどかがフォローしたが、真穂はため息をついた。

「この子は確かに勉強はできるし、家のことも手伝ってくれる、真面目ないい子だけど、今まで一度だって友達を連れてきたことはないの。親としてはそれが心配なの」

誠は困ったような顔をして、台所へ戻っていった。どうやら夕食の用意をしているところだったようだ。

まどかは真穂さんに案内されて、洗面所で手を洗った。よく汚れを落としたら、タオルで手を拭くと、今度は台所のテーブルに呼ばれた。

「まどかさん、座って。お茶の一つも飲んで、学校の様子を聞かせて。この子は授業の話ぐらいしかしてくれないから」

「あっ、はい……でもそろそろ夕食のようですし、私もあまり遅くなってもいけないので」

まどかは遠慮してそう答えた。今日はきっかけができただけで、満足していた。

「そうだ、良かったら夕食を食べていかない？　こんな事でしかお礼ができないけれど」

まどかはびっくりして断った。

「いえ、そんな、申し訳ないです。お気になさらないで下さい」

「そんなこと言わないで。いつも二人であんまり会話もないの。女の子一人増えるだけでも、私は嬉しいのよ」

「でも……」

「お礼と言うよりは、お願い。困らせているのは解るけれど、私はあなたが気に入ったの。迷惑じゃなければ、受けて欲しいな」

真穂さんがあの笑顔で、お願いしてきた。

この人の笑顔は素敵だな、とまどかは素直に感心した。

「じゃあ、ご迷惑でなければ……」

誠が戸惑いながら、台所からつぶやいた。

「あの……ご飯作るの僕なんだけど……」

「いつものように、冷蔵庫残り物で何かちゃっと作りなさい。……あっ、残り物はあんたが食べるのよ。まどかちゃんと私にはちゃんと作りたてを出しなさい」

「……はい」

神様っ、印象が変わりすぎです……まどかは声を立てずに笑いながら、二人の様子をほほえましく見ていた。

「じゃあ、家に電話を入れますね」

「うん。途中で代わってくれる？　私も話をするから」

「はい、解りました」

まどかは携帯をとりだして、家へ電話をかけた。

誠は冷蔵庫を開いて思案中なのが、視界の隅に見えて、またまどかは笑った。

ほどなく電話に母親が出た。

「あっ、お母さん？　私、まどか」

電話口の母親に、手短に、正直に今日あった出来事を説明した。

二三の確認のあと、夕食を食べていくことには了解してくれたところで、真穂さんとバトンタッチした。

真穂さんは丁寧にお礼と、まどかのことをとても褒めながら、せっかく子供同士がクラスメイトだったので引き留めてしまったと、謝罪していた。

二三のやりとりのあと、再度まどかに代わり、「ご迷惑をおかけしないように、あまり遅くならないように」と注意を受けて、電話が切れた。

「よし、じゃあ。座って、座って。まずは改めてお互いの自己紹介ね」

さきほどの机に向かい合わせに座ると、真穂が言葉を続けた。

「私は一柳真穂。近くの齊生会病院で看護師長をしているの。旦那はいないわ。そして、あれが一人息子の誠。勉強好きで家事もしてくれるいい子だけれど、ある意味おたくで引きこもりね。家か学校か図書館ばっかりだもの」

真穂さんの紹介は遠慮がなかった。

「私は如月まどかです。朝陽高校1年生です。陸上部で短距離走をやっています。勉強は今ひとつ得意ではありません。友達と遊ぶことが大好きです」

「素敵。まどかちゃんみたいな娘も欲しかったわ。元気で明るくて。うちの子は男だからか会話がつまらなくて」

「お母様も看護師をされているなんて、凄いですね」

「お母様も悪くないけれど、良かったら真穂って呼んでほしいかな」

「真穂さん……ですか？　何かちょっと申し訳ないような」

「いいの、いいの。私はまどかちゃんって呼ばせてもらっていいかしら」

「はい」

誠が二人の前に、料理の皿を置いていった。

ひじきの煮物、豚肉の肉じゃが、カボチャの煮付け、豆腐のお味噌汁、ご飯に漬け物。

「すごい、全部誠さんが作ったの？」

誠はただうなずいて、台所へ戻った。まだ自分の分が調理中らしい。

「いつの間にか私より上手になってしまって、今ではほとんど誠が

作ってくれるのよ。さあ、温かいうちに食べましょう」

「はい」

「「いただきます」」

まどかは温かいお味噌汁からいただいた。

家の味とはまた違う、繊細なダシの味がした。

「美味しい！」

「この子はおたくというか凝り性だからね。お味噌汁のレシピに、ノート数冊もつぶしているなんて、主婦じゃないんだから」

味とともに、まどかは素直に感動した。

高校生の男の子でここまでできるなんて……。

誠は冷凍しておいた餃子を、お湯で温めて水餃子にしたようだ。

隣の席に座ると、手を合わせ、いただます、とつぶやいて食べ始めた。

契約成立

「ねえねえ、学校の様子を聞かせてよ」
「あっ、はい。と言っても、私もまだ一ヶ月ですからそれほど話せることもないのですが……」
「まあ、そうよね」

真穂もうなずいた。

「誠はどんな様子？」

まどかはうーんと考えたが、心を決めて話し始めた。

「神様のようです」

「神様？」

「はい。今日の午後の授業。お昼ご飯の後だし、陽気も良くて、とてもクラスみんながとても眠たかったんです」

「わかる、わかる」

「一人、二人と眠ってしまう中、ただ一人背筋を伸ばして授業を受けていたんです」

真穂が軽く吹き出して、笑った。

「想像できるわ」

「窓からの光に照らされて、何となく神様のように、私には見えたのです」

「神様ね……わからないでもないわ」

真穂さんも含んだ笑いをしながら、ちらっと誠を見た。

誠は戸惑った表情をしていた。

「なんて言うか、ガリ勉とかそう言うのではなく、勉強が好きというか、大切にしているというか、そんな真摯な気持ちが伝わってきたんです。……私も眠ってしまいましたが」

「あはは、そうね。私も眠りそう。ありがとう、息子のことをそう感じてくれて」

真穂は自分の笑いがおさまるのを待って、言葉を続けた。

「誠、食後にいつもの勉強の様子を見せてあげなさい。多分、再現できるわ」

誠は驚いていた。

「いつもの？　それが何で神様に……？」

「あなたにとっては自然なことだからね」

まどかも良くはわからなかったが，あとで見せてくれるのを待つことにした。

「そっ、それで一つお願いがあります」

「何？」

意を決して話し始めたまどかに、真穂が聞き返した。
「私に、勉強を教えて欲しいんです！」
言えた！　まどかは再び動悸をするのを感じた。
夢の一歩を踏み込んだような、そんな高揚感があった。
しかし、誠の一言は冷たかった。
「僕が？　無理です。時間がないし」
「えっ……」
まどかは明らかに残念そうな、戸惑った表情をした。
ばちんっ。
あたりに、やや鈍い音が広がった。
真穂さんが誠の頭をはたいていた。
「痛っ」
「やりなさい。誠。願ってもない話だわ。これよ、これなのよ」
真穂さんはずいぶんと興奮していた。
「そうよ、この子は勉強しかないから、勉強を教えるのがいいわ。
まどかちゃん、こちらこそよろしく。私はあなたが天使に見えてきたわ」
「えっ、ええ？　天使……ですか？」

「この子にも夢があるのよ。勉強もできるし、そのうち叶えていくのだろうけど、どんな夢だった一人では叶えられないものでしょ？私はこの子に人と関わることの楽しさや大変をもっと経験して欲しいの」

まどかは、なるほど、とうなずいた。

誠は戸惑っていた。

「そのきっかけが、こんなかわいい女の子なんて、最高よ。もう二度と無いわよ。ほら誠からもお願いしなさい。よろしくお願いしますって」

「僕がお願いされていたような……」

「生意気なこと言わないの。あなたにとっても勉強よ。人に教えるって、意外に難しいのよ」

まどかは申し訳ないかな、と思いつつ、もう一押しするとにした。

「お願い……駄目ですか？」

誠はうーん、とつぶやきながら、あきらめたようにうなずいた。

もともと母親の言うことには逆らえなかった。

「わかりました。やります」

「本当ですか？　嬉しい！　有り難うございます」

「よし、よく言った、誠。一度決めたんだから、責任もってやりなさいよ」

真穂さんは誠の頭を、がしがしなでながら嬉しそうに言った。

「そう言えば、先ほど話していた誠さんの夢って何ですか？」
「この子の？　この子の夢は、新薬を作り出す事よ」
「新薬？」
「ほら、自分で説明しなさいよ」
誠はいきなり振られた話に、また困ったような顔をした。
「……新しい薬を研究して、たくさんの人の役に立ちたい……と思っています……」
ぼつぼつって呟いた誠の言葉に、まどかはうなずいた。
「素敵な夢ですね」
まどかも本気で感心したが、真穂はため息をついた。
「もっといろんな背景があるでしょ。本当に人と話すのが苦手ね。男の子ってこんなものかしら」
「ははっ、そうですね。あまり上手ではない人も多いと思います。でも、ちょっと無口かな」
真穂は腕組みをして誠を見つめた。
「やっぱりね。これは特訓してもらわない。……まどかちゃんは、何で勉強を教えて欲しいと思ったの？」
「それは……あの……」
まどかはちょっと戸惑った。
まだ今の状況で話すのは、恥ずかしかった。

「どうしよう……」
「話しづらかったらいいのよ。良ければ聞きたいと思ったの」
まどかは誠と視線があった。静かな、落ち着いた視線を受け止めて、何となく決心がついた。
「私、医者になりたいんです」
「医者？　それはまた……」
「はい、口にするのも恥ずかしいぐらいの成績なので、まだ誰にも言ったことがないのですが……」
まどかはちょっと頬を赤くして呟いた。
「ご両親が医師とか？」
「いえ、食品関係で働いているサラリーマンです」
「じゃあ、なんで？」
まどかは少し考えた後に、語り始めた。

まどかの夢

まどかには、祖母がいた。同居していて高齢ながらも元気な人で、よく二人で出かけたりもしていた。おばあちゃん子と言ってもいいぐらいに、仲良くしていた。

しかし、そんな大事な祖母が癌になった。

手術を受けて一時は元気になったが、数ヶ月後に再発・転移をしていることが解り、祖母は抗癌剤を拒否して、自宅で最期を迎えたいと家族に伝えた。

家族は大いに悩んだが、本人の意志が強く、結局それを尊重する形になった。

しばらくは元気に変わらずに過ごしていたが、しだいに身体が痩せてきて、食欲も落ちてきた。

「大丈夫?」

と聞くと、祖母は決まって笑いながら、

「身体が軽くなって、元気なほどだよ」

と心配をかけまいとしてくれた。

ほどなくして、ベッド上での時間が長くなり、かかりつけの医師が往診してくれるようになった。

医師が来ると、祖母は安心したように身を任せ、「よろしくお願いいたします」と言った。

まどかはそれが、「私の命を」よろしくお願いしているのだと気づいた。
医師もそれがわかっているようにうなずき、血圧を測ったり、声をかけていた。

しだいに命の火が消えてきていることを、まどかも感じていた。
心のどこかで、死ぬと言うことが信じられずにいたが、何とも言えない不安が心の中に広がり始めていた。

ほとんど食べなくなり、まどかがスプーンで口元に運ぶお粥数口が喉をやっと通る程度だった。
それでも、本人はそれほど苦しそうな様子を示さなかった。
時折、「ありがとう」と言われると、まどかも泣いてしまった。

あるとき、医師が「そろそろ覚悟をして下さい」、と言ってきた。
聞いていた家族のみんなに衝撃が走った。わかっていたが、胸が苦しくなるのをまどかも感じた。
祖母はもうほとんど反応がなかった。少し、息が苦しそうだった。

次の日、家族みんなが見守る中、祖母は息を引き取った。
医師が亡くなったことを確認すると、

「有り難うございました……」

と父が細い声でつぶやいて、泣き出すと、まどかも涙が止まらなくなった。

「皆さんも、よく頑張って下さいました。本当に、ご苦労様でした」

そう話した医師の目が赤くなっているのを、まどかも気づいた。

葬儀が済み、しだいに落ち着いた心の中で、まとがは思った。
今までは、自分のためだけに生きてばかりいたような気がした。
いつかはあの医師みたいに、誰かのために役に立ち、人と関わりたい、と。
それが、まどかが医師を目指すきっかけだった。

「……なるほど。うん、誠もこのぐらい話しなさいよ」

誠も素直にうなずいていた。
と言うか、ノートに何か書いていた。
何を書いたんだろう……。

「でも、私、それまで医者になるって、すごく大変っていうこと知らなくて。私学だととってもお金がかかるから、国公立しかないけれど、偏差値がとっても高くて……」

「あっ、それで勉強を教えて欲しいけれど、説明するのをためらったんだ」

まどかはうなずいた。

「確かに、難しいからね」

話しながらではあったが、それぞれに夕食はほとんど食べ終わり、誠が入れてくれたお茶をすすっているところだった。

「今の成績で医者になりたいって言っても、笑われそうで」
「でも素敵な夢よ。ぜひあなたみたいな人に医者になって欲しいわ」
「有り難うございます」
「となると……」
まどかが誠を見た。
後片付けをしている誠がびくっとした。
「あなたの責任は重大ね。とは言え、あなた一人で作戦を考えるのは問題がありそうだから、私も協力するわ。……何かちょっと面白くなってきた」
「すみません。ご迷惑をおかけします」
まどかが頭を下げると、真穂が困ったように否定した。
「迷惑じゃないわ。むしろ、願ったりよ。この子にもいい勉強になるし、私も楽しみだわ。まさか、自転車のチェーンからこんな事になるなんて思わなかったけれど」
「私もです」
二人ですこし笑った。
「あの……」
片付けの済んだ誠が、声をかけてきた。
「何？」
真穂がいいところで何よ、とでも言いたそうな表情で誠を見た。

「勉強していいですか？」
「……話は聞いていたの？　……って、いいか。今日からいきなり始めるわけじゃないし。作戦も必要そうだし。いいわよ、どうぞ」
「はい」
誠はそう言った、奥のもう一つの部屋へ入っていった。

麩を開けると、ベランダへと続くガラス扉が一面に広がり、その角に小さな机が見えた。一人用のちゃぶ台というか、本当に机とライトがあるだけの小さな空間だった。
よく見ると、その隣には不釣合なほど大きな本棚が、壁一面に広がっていた。
はっきりとは見えないが、教科書とノートが整然と並べられていた。
ノートの数がすごかった。何百冊とありそうだった。

誠は机の前に正座すると、かばんから今日の授業で使った教科書とノートを取り出した。
上に、鉛筆と消しゴムを並べ、ライトをつけて、居住まいを整えた。

そして、ひとつ深呼吸をして、深々と頭を下げた。

「えっ……？」

まどかはびっくりした。
誠は両手をそろえて床に付け、頭もその手につきそうなぐらいに下げていた。
勉強というよりは、茶道の礼を見ているようだった。

相手を敬うような、真摯な姿勢。
静かな、祈りを捧げているような、不思議な時間が過ぎた。

おもむろに顔を上げ、勉強を始めた。
静かな中に、教科書をめくる音、ノートに書く音が響いた。
強く集中しているのは、後ろから見ていても解った。

「こうなったら、もう横でテレビを見ようが、電話がなろうが気づかないのよね」
「神様を再現できるって、こういう事だったのですね……」

真穂がくすりと笑った。

「あの子は真面目すぎよ」

二人はしばらく誠の背中を見つめていた。

「さて、遅くなってしまったわね。私が家まで送るわ」
「！　いえ、いいですよ。一人で帰れます」
真穂が頭を横にふった。
「このあたりも決して安全ではないわ。あの子と違って私はもうたいしてすることもないし。あなたの親御さんの心配もあるだろうし、ここは私が付いて行ってご挨拶して帰るわ」
まどかは少し戸惑ったが、真穂の言わんとすることは理解できた。
「解りました。よろしくお願いいたします」
「うん。……しかし、あなた本当にいい子ね。可愛くて、素直で、明るくて、元気で」
まどかが顔を赤くして、否定した。
「そんな　。私なんか、よく男の子扱いされていました」
「親しみやすいからじゃないかな。でも、きれいな顔立ちよ。すごい美人になりそう」
まどかはさらに顔を赤くした。
「真穂さんこそ、きれいですよ」
「うん、有り難う。よく言われる」
素直に返答されて、二人で笑った。

誠をおいて、二人は家をでた。
本当に誠は二人が出ていったことに気づいていないようだった。
二人はそれぞれの自転車にまたがり、暗くなった町並みを走り抜けた。
まどかの家までは、それほど距離はなかった。5分程度走ると、まどかの家の前についた。
やや古いたたずまいではあったが、きれいにしている一軒家だった。

扉を開けて、自転車を中に入れると、まどかが玄関から母親を呼んだ。

「ただいま！　お母さんいる？」
「はいはい」

まどかの母親が出てきた。
まどかに似た、可愛らしい顔立ちをしていた。
かけていたエプロンをとって、気づいた真穂に対して頭を下げた。

「まあ、今日はご馳走になってしまったみたいで、すみません」
「一柳真穂と申します。まどかさんのクラスメイトの母親です。今日は私が無理を言ってしまいました」
「いえいえ、こちらこそお世話になりました」
「礼儀正しくて、素直で明るくて、素晴らしいお嬢さんですね」
「そんな、まだまだ未熟者で、ご迷惑をおかけしませんでしたか」
「とんでもありません。おかげで、楽しい時間でした。ありがとうございました」

二人が互いに礼の言葉を二三かわすと、真穂が言葉を続けた。

「それと実は、ひとつお話があります」
「何か？」

真穂さんがちらっとまどかを見てから言葉を続けた。

「ひょんなきっかけですが、まどかさんに今かなえたい夢があることを知りまして」
「夢……ですか？」

まどかが「あっ」と言って、顔を赤くした。
まだ両親に言うのは恥ずかしいことは解っていたが、ここは理解しておいてもらったほうがいいと、真穂は言葉を続けた。

「先日、ご祖母様が亡くなれたときの出来事がきっかけで、まどかさんは医師を目指しているそうです」
「この子が！？」

母親はかなりびっくりしていた。

「かなり真剣な思いのようです。うちの息子、成績はまずまずいいのです。それで勉強を教えることになりまして」
「あら、まあ……」

母親はすこし戸惑っているようだった。

「うちの息子としても人に教えることは、大切な経験と思いまして。男女ではありますが、二人がそれぞれの夢の為に協力しあうのをちゃんと監視しつつも、応援したいのです。よろしいでしょうか」
「はあ……」

突然のことで、まだ十分に理解出来ていないようだ。
ここですぐに了解を得るべきではないのかも知れない。
真穂さんは、まどかに向き直った。

「まどかさん、後は自分からしっかりご両親に説明してね。そして、ちゃんと成績を上げて信頼を得ること。よろしくね」
「あっ、はい！」

真穂さんは、母親に一礼した。

「突然、失礼しました。今日はこれで失礼します」
「あっ、はい。こちらこそ、ご迷惑をおかけしました」
「いえ、とんでもありません。有り難うございました。それでは。」

真穂は自転車にまたがり走ろうとしたが、思い出したように振り返って、まどかに声をかけた。

「あっ、そうだ。あの子、携帯を持っていないから、私とアドレスを交換してくれない？」
「あ、はい、そうですね。よろしくお願いいたします」

互いに携帯を出し合い、赤外線を用いてアドレスを交換した。
誠の母親とアドレス交換をしていることに、何となく不思議な気持ちがした。
ただ、何かが動き出したことを感じて、何となくまた胸の鼓動が早くなった。

「誠と作戦をねっておくから、一週間後あたりで。用意ができたら、連絡するわ」

「はい。よろしくお願いします」

真穂さんは、あらためて母親に顔を向け。

「それでは、夜分に失礼しました。おやすみなさい」

母親も頭を下げ、まどかも手を振って見送った。

真穂も角を曲がるところで、一度振り返り手を振ってくれて、そのまま角へ消えていった。

母親がおもむろに聞いてきた。

「まどか、医者になりたいって本当？」

「あっ、うん……」

「まさか、あなたが……。まあ中に入ってシャワー浴びてらっしゃい。良かったら、ゆっくり話を聞かせて」

「うん」

まどかはうなずいた。

真穂さんに言われたとおり、次は私が頑張らなくては、まどかはそう思った。

両親への告白

シャワーを浴びて着替えると、居間には母親と帰ってきていた父親が座っていた。

向かい合わせに座ると、まどかも緊張した。

いつもは今日あった出来事を交わすぐらいで、こんな緊張したやりとりは無かった。

両親は、まどかが話しだしてくれるを待っている様子だった。

「私、医師を目指してみようと思って……います」

「本気なの？　言ってはなんだけど、まどかはあまり勉強は得意じゃないから……」

「うん……それで恥ずかしくて言えなかったし、今でも実現可能な夢かは解らないのだけれど……」

三人の間に、しばらく沈黙が流れた。

「その、おばあちゃんのことがきっかけって、本当？」

「うん。あの時に、今までは自分のことばかりで生きてきた、っていうことを実感して。あの先生みたいに、誰かのために役に立てる人間になりたい、というか……」

まどかはぽつり、ぽつりと言葉を続けた。

「おばあちゃんが、安心して身を任せていた先生との様子とか、おばあちゃんが亡くなった時のこととか……そのシーンが、とっても心のなかに響いたの。できるかどうかわらないけど……」

「そう……あの時に、そんなことを考えていたのね……」

母親の言葉に、父親も腕を組んでうなずいた。

「それと、今日の方はどんな方？　どうして勉強を教えてもらうことに？」

「一柳誠さんって言って、同級生なんだけど、入学試験で1位だったの。彼の真剣な授業を受ける様子を見て、無理そうな私の夢を叶えてれれるな予感がして」

「1位か。それはすごいな」

「今日、お母さんと知り合いになれたのは本当に偶然なんだけど、思わずお願いしてしまって」

「相手の方も了解してくれた、と」

まどかは少し困ったような顔をした。

「実は、最初は時間がとれないって、断られたのだけれど、あちらのお母様が息子さんのためにもなるから、って説得してくれたの」

「まあ……」

「毎日たくさん勉強されているみたい。だから多分、ときおりお家にお伺いするぐらいだと思うけど」

「塾とか行かれているの？」

「いや、まったく自分一人で勉強はしているみたい」

両親が感心した。

「それで首席というのは凄いな。まどか、そんな人の真似なんかできるのかい？」

「うっ、それは無理かも……私もいまはどうしたらいいのか解らないけれど、解らないまま諦めたくはなくて」

「そうね。確かに」

父親は膝を叩いて言った。

「うん、でもまどかの思いが真剣だということもわかったし、相手の人も真面目そうだ。それに、なんていうか、まどかが大きくなったんだな……って、嬉しいような、寂しいような」

「そうですね。本当に」

母親はそうつぶやいたあと、目が赤くなっていた。

「えっ、どっ、どうしたの？」

母親の目尻から、わずかに涙がこぼれた。

「やんちゃで、わがままで、元気いっぱいの娘が、気づいたら誰かの役に立ちたい、と考えるようになって将来の夢を語るなんて。何か嬉しいうよな、そんなに早く成長してほしくないような寂しさというか……でも、いいことなのよね」

「そうだな。育て方を間違えずに来た、ということだ」

「お母さん、お父さん……」

こんなふうに喜んでもらえたり、思ってくれていたことに、まどかも言われて初めて知った。

愛されていることは、何となく感じていた。

心配されていたと思う。

ただ信頼され、慈しまれていたのは、解らなかった。

まどかも何となく、胸に温かいものを感じた。

「でも、本当にまどかの成績で大丈夫か、心配だけど」

「確かに」

「……」

まどかの感動は薄らいだ。
事実かもしれないが、いま言って欲しい言葉ではなかった。
がっ、頑張るもん。

「とにかく、決めたことなんだから、頑張りなさい。手助けできることだったら言ってね。あと、あまり無理しすぎないで」
「うん、ありがとう……」

まどかは素直に頷いた。
お父さんが、頭をなでてくれた。久しぶりの感覚で、恥ずかしいような、嬉しいような、不思議な感触だった。
うん、この両親のもとに産まれて良かった。

この日は、夜遅くまで昔の話で盛り上がり、温かく包まれるような感触をおぼえながら、まどかは眠りについた。

作戦会議

それから一週間は、まるで何もなかったかのように日々は過ぎた。
誠は相変わらず寡黙で、挨拶もなければ話しかけることもなく、授業に集中しては家事のためにさっさと帰ってしまう。
まどかは、あの日のことは夢だったのかな、と不安になるほどだった。
夕方に一通のメールが届いた。
真穂さんからだった。

『作戦が決まりました。時間があったら、明日の夕方、この前と同じ時間ぐらいに家に来て下さい。また会えるのを楽しみにしています。真穂』

「やった！　ようやく始まるんだ。どんな作戦なんだろう……」

真穂のメールには続きがあった。

『追伸、中学の時の成績表やテストを持ってきてね。現状把握が必要なので。（＊＾―＾＊）』

「あぁぁぁ……」

そうだよね。必要だよね……恥ずかしい。
ちゃんと残っていたかな、とまどかは部屋の探索を始めた。

翌日、部活の帰りに一柳家に向かった。
気持ちがせいて、やや速いペースで駆けつけ、扉の前についたと

きは、まだ息が切れていた。
ちょっとだけ震える手で呼び鈴を鳴らした。

ピンポーン！

「はぁい」

真穂さんの明るい声に、まどかも少し落ち着いた。
扉が開き、真穂が笑顔で招き入れてくれた。

「待っていました。さあ、入って」
「おじゃまします」

台所のテーブルに案内されると、今日は三人分の夕食ができていた。
今日は鰹のタタキだった。

「部活で遅くなるので、いつも夕食の時間で申し訳ないです……」
「いいのよ、私も今回は参加したいし、そうすると仕事の帰りだから同じようなものなのよ。まあ、まずはいただきましょう」

まどかは手だけ洗わせていただいて、今日も素直にいただくことにした。

「「「いただきます」」」

しばらく、もぐもぐと、夕食を黙っていただいていた。
今日もやっぱり美味しかった。
鰹のタタキに、ほんのりにんにくのスパイスとポン酢の酸味。
何か隠し味までありそう。

誠さん、本当に上手だなぁ、とまどかは感心した。
口を開いたのは、真穂さんだった。

「実はね、誠も昔は成績が悪かったのよ」
「……！　そうなんですか?!」
「と言っても、小学生の頃だけどね」
「……はい……」

まどかは、何を言いたいのか解らず、首をかしげた。

「ほら、幼稚園の頃に習い物したり、早期教育を受けていたりする子って、けっこういるじゃない。うちは全くしていなかったから、小学校に入ったときのひらがなでけっこう差がついていてね」
「はい」
「この子は自分のことを勉強ができない子だと、思ってしまったようなのね。といっても、こんな小さなうちから塾や家庭教師をつける必要もないと思ったし……お金もなかったけど……まあ、小さなうちは遊んでいてくれればいいや、と私は思っていたの」

途中で、金銭的な本音も呟いていたけれど、本当に真穂さんは誠さんに勉強を強いたことがなさそうだ。

「ドリルとか問題集とかも無かったから、この子ったら教科書ばかり何回も声を出して読んだり、ノートに書いたりしていたの。そうしたら成績が良くなってきて、先生にほめられたのが嬉しかったみたいで、何回も何回も教科書を読むようになったのよ」
「……私とは根本的に違いそうです」

まどかは外に出て遊んでいた子供だった。
勉強ができなくても、まったく気にした覚えがない。

真穂さんは、まどかの肩をたたいて話を続けた。

「気持ちはわかるから大丈夫。伝えたかったのは別のこと。誠と参戦会議を開いて、話し合って、それに誠に勉強法についていろいろ調べてもらって、いくつかのことが解ったの」

「……？」

「まず一つ目は、遅いスタートを心配することはない、ということ。むしろこの子にとっては、悪い成績から始まったことはいいことだった。人は成長して褒められたときに、本当に嬉しい気持ちが頭に刻まれる。それが続けていく上で、とても大切なの。この子の勉強の原動力の一つは、この経験なのよ」

「はい」

まどかはうなずいた。

「だから、まどかちゃんも遅すぎることを心配することはないの。むしろ、早くからやらされて、成績が落ちた子の方が大変そうだった。やる気が出なかったり、あきらめてしまったりして。遅くからでも、自分から能動的にやろうとした子は、やっぱりのびが凄い。今回、まどかちゃんもこれに当たるから、自信を持って」

「はい。わかりました。ありがとうございます」

まどかは頭を下げて、返事をした。

真穂が指を2本あげた。

「二つ目が、褒めること。誠も最初に褒められたことが凄く大切だった。自信がつくし、勉強が楽しくなった。楽しいからまた勉強するし、そうするとまた褒められる。いい先生についた、と言うのもあるけれど、褒められるのは大切。だから、私たちはまどかちゃんの成績が少しでも上がったら、目一杯褒めることにしたの」

まどかは話を聞いて、嬉しくなった。
実は、厳しい特訓が待っているだろうと、ちょっと気分的に不安になっていた部分があった。
褒めてもらえることはなかなか無かったので、何となく楽しみになってきた。

「三つ目が、繰り返すこと。このあたりは誠に話してもらおうかな」

誠がまどかにノートを広げて、見せてくれた。
そこに六角形ぐらいの変わった図形を描いた。

「頭の中には神経細胞があります」

……はい？

誠は相変わらずの無表情で、とつとつと語り始めた。

「神経細胞からは突起が出ていて、他の神経細胞と突起でつながると、それが理解や記憶になります」

「……はい……」

誠は気にせずに言葉を続けた。
何しろ、ノートばかり見ていて、視線が合わない。

「こうした突起は、刺激を加えると伸び始めて、刺激が無くなると縮んでしまいます。突起を伸ばして神経細胞としっかりとつなげるには、繰り返すのがもっとも効果的です」

「はい」

「昔、エビングハウスという心理学者によって忘却曲線というもの

が発見されました」

そう言って、誠は円の１／４のような曲線を書いた。

「記憶は、憶えてすぐに忘却され始めますが、わずかな記憶は残ります。これを強固な記憶にするには、直後に繰り返し、寝る前に繰り返し、一週間後に繰り返し、一ヶ月後に繰り返し、一年毎に繰り返す、といった反復が効果的です」

「えぇっ！　そんなに繰り返すの？」

「……厳密なデータは出ていないけど、３０回繰り返す、１００回繰り返す、など諸説あります」

まどかはがっくりと肩を落とした。

「師匠……無理です」

「師匠？」

誠が初めて顔を上げて、まどかと視線を合わせた。

あわててまどかが言葉をつなげた。

「あっ、神様と呼ぶのはいくらなんでも、と思って、私にとっては勉強のお師匠様だと思ったので……」

誠は戸惑ったような顔をしたが、しばらくしてまたノートに視線を落とした。

これは了解、という意味かな？

「１回目は３０分かかったとしても、２回目は１０分とかかる時間は短くなるので、思ったほどに心配することはありません。短調になりがちで、飽きてしまうのが心配なぐらい

です」
「なるほど……」
「まあ、誠の説明はやや難しいけれど、繰り返しが大切ということよ」
真穂が笑いながら、まとめてくれた。
まどかもうなずいた。

正しい授業の受け方

「四つ目が教科書が大事ということ。勉強というと、問題集とか参考書というけど、この子は小学生から今にいたるまで教科書ばっかりやっているけど、成績は良いの。もちろん、図書館で調べ物したり、時折は本屋で買ってきたりはしているけれど、教科書が基本。だから、甘く見ないで、教科書をしっかりやりましょう」

「……意外です。きっと分厚い問題集がどんって置かれると思っていました」

これには誠が答えてくれた。

「あたりまえだけど、テストは教科書と授業の内容以外から出てくることはありません。教科書はたくさんの大人が時間をかけて、厳選して作り上げているだけあって、よく出来ています」

「そっか……そうですよね」

言われてみると当たり前だけど、勉強というと難しい参考書や問題集と格闘するイメージがあったまどかには新鮮だった。もしかしたら、勉強そのものに難しいイメージを抱きすぎていたのかも知れない。

「そして最後に、最も大切な集中力」

「えっっ!?　集中力がそんなに大切なんですか?」

真穂がうなずいた。

「まどかちゃんは、陸上部だったよね」

「はい」

「たとえば、だらだらと１００ｍのダッシュを１０本を毎日やっていた場合は、タイムは伸びると思う？」
「……伸びないです。むしろ、落ちるかも知れません」
「集中して全力で１０本毎日やったとしたら、どうかな」
「伸びると思います。……そうか、やるならば集中して負荷をかけないといけないのですね」

真穂はうなずいた。

「正しい方法でやっているか。量をかけているか。集中して負荷をかけているか。ここらが互いに掛け算で関係しあっているの。何事もそうだけど」
「正しい方法……」

まだ十分に理解出来ていないまどかに、真穂が説明を続けてくれた。

「陸上で言えば、正しい方法というのは例えば正しいフォームで走っているか。間違った走り方、癖がついたら、記録が伸びないどころか、体を壊してしまうことがあるよね」
「あっ、はい」

真穂の説明は、解りやすかった。

「量をかけるのは、練習時間のこと。集中して負荷をかけるというのは、さっき話したように自分の力を出し切らないと、なかなか成長には繋がらない、ということ」
「はい」
「例えば成績をあげようと思ったら、みんな勉強時間を増やすことを考える。でもね、正しい方法と集中して負荷をかけることを気づ

いている人が意外に少ない。まどかちゃんがこの三年でみんなを抜かしていくためのポイントはここにあると思うの」

まどかは深くうなずいた。

今まで勉強時間を増やそうとばかりして、何度か挫折したことを思い出した。

時間を増やすことは意外に難しい。

「まどかちゃんは、陸上で賞をもらったことはあるの？」

「あっ、はい。中学で県大会2位になりました」

「素敵！　さすがね。じゃあ、教えて上げれば集中と負荷はすぐにできるようになると思うの」

「うっ、心配です……」

誠のあの集中力を見た後では、まどかも自信ははあまり無かった。

真穂が優しくまどかの頭をなでてくれた。

「大丈夫。大丈夫。さっ、ここまでは基本原則。理解できた？」

「はい……でも、まだどうすればいいかが……」

「うん、具体的な方法に入る前に」

「はい？」

「現状把握の時間です」

「……」

喉元まで『帰らせていただきます』という言葉が出かかった。

その言葉をゆっくりと唾と一緒に飲み込んだ。

夢の為に勇気が必要なことは解っていた。

まどかはそっと通知表とテストを渡した。

真穂が手に取り、ざっと眺めた。

「……うんうん。だいたい予想通りね。……ちょっと数学が寂しいかな」

まどかは顔を真赤にしてうつむいた。
誠は不思議なものを見るような目をして、テストを見ていた。
彼には信じられない点数のようだ。

「……もう、許してください……」
「いやねぇ、責めているわけじゃないのよ。ここから上がっていくのよ。スタート地点の確認」
「そうであればいいのですが……」

まどかの声はどんどん小さくなっていった。
真穂がもう一度、頭をなでてくれた。

「大丈夫よ。頑張るのはまどかちゃんだけど、ちゃんと可能性はあるから。自信を持って」
「……はい」
「さて、ではいよいよ具体的な方法に入ります。誠、よろしく」

誠はノートを切り剥がした紙を、まだ耳まで真っ赤にしたまどかの前に差し出した。
そこには、いくつかの項目が書いてあった。

＞　正しい授業の受け方　＜

・授業の時間中に、すべて理解して憶えてください。

・ノートは見て写すのではなく、理解して、憶えてから、書いてく

ださい。

・ノートには、先生の言葉や自分の思ったことも付け加えたり、線や強調を加えたりして、理解と記憶を深めましょう。

・途中や最後で、それまでの話をまとめたり、具体例を出したりして自分の理解と記憶を確かめましょう。

・教科書をまるごと覚えましょう。記憶のコツは、読んで、聞いて、書くこと、それを繰り返すことです。

・時間内にすべてやろうとすると、かなり負荷がかかります。集中してやりましょう。

・目標は、別の人に対して授業を再現できることです。

「……師匠、無理です」

まどかはがっくり肩を落とした。

「やりましょう」
「自信がありません」
「やりましょう」
「……はい」
「できます。大丈夫」

誠に迫力に押されたが、彼に言われると何となく胸の奥に「出来るかも」といったほのかな期待が生まれた。

「すべての時間でいきなりできるとは思っていません。まずは一番得意な科目でやってみましょう……えーっと、歴史かな」
「……はい、強いて言えば、ですが」
「一日に1コマぐらいのペースでいいです。まずはその日のどの時間か目標を決めてやってみてください」
「まどかちゃん。頑張ってねぇ～」
がっくりと肩を落とすまどかに、真穂が嬉しそうに手を振って応援した。

「確認ですが、黒板を写すとき、見てすぐにノートに写していますね？」
「はい」
「それは禁止します」
「駄目なんですか？！」
「その方法は短期記憶なので、頭に残りません。一度憶える作業を間に入れてください」
「短期記憶……」

またもや、誠から難しい言葉が出てきた。

「短期記憶というのは例えば、電話番号を一瞬だけ憶えるときに使われるものです。口の中で繰り返してつぶやいている間は覚えていますが、電話をかけた直後にはもう忘れています。これは、頭の中に電気信号は通すが、突起が伸びない状況です。電気の流れが無くなると、まったく元の状態に戻ってしまいます」
「……つまり板書するだけでは、まったく記憶に残らないと……」
「まあ、そうです」

がーーん……。

今までの苦労は何だったのだろう……そういえば、授業が終わるとほとんど忘れていたような気がする。

くすん。

「理解出来ないところは、どうしたらよいでしょうか」
「？　……ちゃんと聞いていれば、それほど難しくはないと思うけど……昼休みの時間、図書室にいますので、聞いてください」

「はい」

やっぱり昼は図書室にいたんだ。

縁のない場所だったから、見かけなかったのね。

「なぜ授業の受け方から始まるかというと」

真穂さんが説明を加えてくれた。

「帰ってから1時間勉強をしようとすると大変だけど、学校の授業は1日6時限もある。これをしっかりやらない手はないのよ。先生の教え方の上手下手はあるかも知れないけれど、本当にちゃんと受けている人も多くない。熱心な生徒には先生も熱心に教えてくれたり、面倒をみてくれたりするものよ」

「わかります」

確かに、いきなり学校から帰ってから毎日勉強と言われたら、かなりつらかったかも知れない。それに、あんな誠のように授業を聞いてくれたら、先生だって教えがいがあるというものだろう。

……あの境地までは、とっても到達できそうにないけれど。

軽い確認事項の後、本日の作戦会議は終了した。

先程のノートの切れ端を渡され、また一週間後に報告・確認することになった。

勉強しようとしていた誠さんの首根っこをつかまえて、真穂さんはまどかを送るように言った。

誠は戸惑ったような顔をした。

「誠、帰りが遅くなった女性を家まで送り届けるのは、男性の大切

な義務の一つよ。これも勉強。実技のね」

不平がありそうだが、誠は受け入れた。

「……解りました」

「門の前で帰らず、ちゃんとご両親に挨拶してから帰ってらっしゃいよ」

誠は頷いて、玄関へ向かった。

「あの、ごめんなさい。迷惑ばかりで……」

「いや……あの……いいから……」

誠はちょっと困ったように、視線をおよがせた。

勉強を教えるときは、落ち着いていたが、今はどこか戸惑っているようだった。

二人は駐輪場へ向かうと、それぞれの自転車に乗った。

「それじゃあ、ついてきてもらっていいですか?」

誠は頷いて答えた。

道中、会話はなかった。

まどかも話しかけようかと思ったが、誠が緊張しているのが解って、何となく声をかけづらかった。

家に着くと、まどかは自転車を中に入れた。

「ただいま!」

声をかけると、母親が出てきた。

「お帰りなさい。……あら今日は男の子？」

「うん、前に話した一柳誠さん。送ってもらったの」

「あら、有り難うございます」

母親が頭を下げると、上ずった声で応えた。

「いっ、一柳です……あっ、あの……えっと、帰ります。すみません」

少し顔を赤くしていたようだった。

すぐに自転車にまたがると、そのまま走りだしてしまった。

あっという間に角を曲がり、姿は見えなくなった。

母親はくすっと笑った。

「絵に描いたように真面目で、素朴な子ね」

「勉強の時は、すごく堂々としているんだけど……」

「そうなんでしょうね。まどかと反対」

「……はい。その通りです」

二人で少し笑った。

もうあたりは夜の闇に覆われていたが、ここだけは明るさと暖かな空気で包まれているようだった。

授業と格闘

次の日。
まどかは誠からもらった紙を下敷きにはさみ、ときおり読み返していた。
次の授業は、いよいよ歴史。試してみる予定の時間だった。

『授業なのにテストみたいに緊張する……』

誠をちらっと見ると、相変わらずの無表情のくせに、すでに集中モードになっている様子が解った。

『さすがです、師匠。わーん、私にできるかな……』

先生が教壇に立ち、授業が始まった。
まどかも深呼吸をして、先生の声と黒板に集中した。

えーと、黒板は憶えてからノートに書く……
……憶えようとすると、先生の言葉が聞けないのですが……

…あっ、書く前に消された！　なんて書いてあったんだろう……
あっ、あとで書き足そう。

えーっと、それで結局どうなるんだっけ……あっ、そうか、うんうん。
ノートに書いておこう。

こっ、この中で憶えるのって、本当にできるの？　繰り返すって……

重要そうな単語だけでも、憶えよう。

……。

……。

チャイムが鳴り、授業は終了した。

まどかは机に突っ伏してしまった。

『師匠。尊敬します……こんなに疲れるとは思わなかった……』

昼ごはんだというのに、まどかはピクリとも動けなかった。

「まどか？　……まどか？　寝ているの？　ご飯よ」

お昼を一緒に食べようと曜子が声をかけてきた。

「起きてるよ……疲れたの」

「？　何で？」

「ちょっとね……」

まどかは体を起こして、お弁当を取り出した。

確かにお腹はすいていた。

曜子も首をかしげながら、机をくっつけて弁当を広げた。

まどかと曜子は同じ中学の出身で、何度かクラスも一緒になったことがあった。

高校でも同じクラス、席も近いことがあって、いま一番仲良くしている。

曜子はゆるやかにウェーブのかかった長い髪をして、やや整った顔立ちに眼鏡をかけていた。

細身の身体で見た目は女っぽいが、言動に女らしさが少なく、浮いた話は聞いたことがなかった。

二人で小さなお弁当箱を開くと、いただきます、と手を合わせて言うと、もくもくと食べ始めた。

「まどか……最近なにか私に隠し事してる？」

「うっ……相変わらず、するどいね。でも、ちょっと恥ずかしいから、もう少し待ってね。いつか話すから」

曜子は一瞬の沈黙の後に、まどかに聞いた。

「男？」

まどかは危うくご飯を吹き出しそうになった。

「私を見て、どうしてそんな言葉が出るの？」

まどかの問に、曜子は肩をすくめて答えた。

「まどかは気づいていないようだけど、可愛い一年生がいる、って少し噂になっているのよ」

「……誰が？」

「あなたが」

「……中学では男の子に間違われたことのある私が？」

「鏡をちゃんと見なさい。ここのところ、あなたちゃんと女の子っぽくなっているわよ」

「知らなかった……」

まどかはご飯を口に運びながら、考えてしまった。

確かに先輩に憧れて短かった髪を伸ばしているし、少し身長も伸

びて痩せたかも知れない。
あと恥ずかしいけれど、少しばかり胸も大きくなってきた。
悪いことではないけれど、まどかにとっては微妙な気持ちだった。
今は陸上と勉強でいっぱいいっぱいだし、女友達と遊んでいる方が楽しい。
女の先輩に憧れたことはあっても、まだ男の人を好きになったことはなかった。

「でも、今は男の人を好きになったり、付き合ったりって、まだ考えられないよ」
「そうなんだ……最近、可愛くなっているから、誰か好きな人でもできたのかと思った」
「そういう、曜子は？」
「興味ない。本読んだり、パソコンいじくっている方が楽しい」
「曜子こそ、もてそうなのに」
「モテたことないの知っているでしょ」

それは容姿の問題ではなくて、性格の問題では……と喉元まで出かかったが、やめておいた。
今ひとつ、冗談になりきらない危険性があった。

「私だってモテたことないよ」
「中学ではね」

二人は黙って食べた。
恋話は、二人にとって実りある話題ではなかった。

「ちょっとね。勉強を頑張ってみようかと思って」

まどかが呟いた。

「そうなんだ」
「あまり成績が良くなかったら、言うのが恥ずかしくって」
「気にすることはないよ。まどかはえらい」
「ありがとう」

まだ全ては話せなかったが、深くは聞いてこないでいてくれる友人の心遣いが嬉しかった。
それに、勉強する気持ちをバカにせず、応援してくれたのも嬉しかった。

『いつか、全部話すからね……』

まどかは心のなかだけで呟いた。

復習の大切さ

一週間はあっという間に過ぎた。
毎日、授業は格闘だったが、それでも少しずつは集中して理解・記憶して、ノートに書くことができるようになってきていた。
集中力も何とか1時限続くし、1日に2コマ程度は出来る程度になってきた。
一日に1コマと言われた理由がよくわかった。
本当に集中して授業をうけるのは、かなり疲れる。
まだ慣れていないまどかには、すべての授業を真剣に受けるのは無理だった。
それでも、少しずつやり方に慣れてくると癖のようになってきて、他の授業でもついつい集中する自分がいた。

一週間の様子を真穂さんと誠に報告すると、真穂は頭をなでて褒めてくれた。

「素晴らしい！　伸びてきているね。さすが」

褒められるは素直に嬉しかった。
少し勉強している実感をここのところ感じられるようになってきていた。
しかも続いている。
その変化と実感が、まどかには嬉しかった。

「じゃあ、繰り返すことのステージを進めようか」
「というと？」
「家に帰ってからの復習が次の目標です」

まどかはまたもやがっくりと肩を落とした。

「やっぱり家に帰っても、勉強するのですね。いや、当たり前ですね。頑張ります」

「いやいや、そんなに心配しなくてもいい。最初は３０分、いやいや１５分でもいいの」

「そんなに短くていいんですか？」

「復習だからそんなに時間かからないし、まずは無理なく癖をつけることが大切だから」

まどかはうなずいた。

「今日はすこし、繰り返すことと時間の関係について説明しようか」

「はい」

真穂がちらっと誠を見ると、いつものようにノートを広げて誠が解説してくれた。

「１つの問題集を終えるのに５時間かかったとします。次の問題集にとりかかり、また５時間かかったとします。かかった時間は１０時間。記憶は忘却曲線のように忘れていくので、最初の頃の問題は忘れていきます。両問題集で重なった部分だけはやや強い記憶となり、全体としてはあいまいな理解と記憶が残ります」

「……はい……」

「次に、同じように５時間かけて１冊やった後に、もう一度同じ本をやった場合は、２時間程度でできると思います。さらにもう一度やると、１時間程度でできます。同じ１０時間で３～４回程度の繰り返しができた場合、忘却曲線ではかなり強化が進み、理解と記憶が進みます」

「……なるほど」

真穂さんが説明を付け足した。

「新しい問題を解くと達成感はあるけれど、それだけで理解して覚えたと思うのは危険なの。これだけ頑張ったのに成績が今ひとつ上がらない場合は、こんな誤解から来ていることも少なくないの」

「はい」

「それに、問題集を2冊やっている方が勉強をしている、進んでいると、思って1冊の人は焦ってしまうけれど、不安に思わなくていい。1冊を完ぺきに仕上げた、という実感を積み重ねていくほうが大事」

「でも……私も2冊やった方が安心するタイプです。1冊しかやっていないと、不安になりそう……」

まどかは不安げに呟いた。

真穂がその手を握ってくれた。

「確かにやるべきことは沢山ある。それを前に不安になったり、時間が足りないと感じることもあると思う。でも人はしょせん、階段を一歩一歩しか上れないの。基礎から始めないと駄目だし、しっかり固めた一段じゃないと崩れて上れないのよ」

「……はい」

「うん、いい子。復習の仕方は誠からね」

「理解して憶えるためには、目で見て、声を出して読んで、耳で聞いて、手で書いて、頭の中に絵を描いてみて下さい」

「絵を描くように？」

誠はうなずいて、またノートに書いてくれた。

「記憶は大きく分けると二つあります。一つは物の名前あるいはキーワードといった、1対1のつながりで憶えるべきもの。もう一つはつながりです。それを意識しながら、絵のように、画像のように浮かべて憶えようとすると忘れづらいです」

また真穂さんが補足をつけてくれた。

「歴史で言えば、人の名前がキーワードとして、それを年代の流れの中で何を起こしていくかが、つながり。他のキーワードとつなげて、それぞれあるいは全体を像として思い出せるように……解る？」

「何となく。まずやってみます」

「うん、解らなかったら、また質問して」

誠がノートにまとめて、それを渡してくれた。

本当は、これを自分でやらないといけないよね……とまどかも気づき始めた。

誠に感謝しつつ、その紙をもらった。

今日の作戦会議はこれで終了した。

帰りはまた、誠に送ってもらうことになった。

あたりはもう、だいぶ暗くなっていた。

自転車に乗ろうとする誠に、まどかが声をかけた。

「あの！」

「……？」

「今日は、話しながら行きませんか？」

「……」

誠が戸惑っていると、まどかは自転車を押しながら歩き始めた。

誠もそれについて自転車を押して歩き始めた。
あたりは静かで、二人の足音と自転車のホイールの音が響いていた。

「師匠、いつもありがとうございます」
「いや……いいです……」

まどかは少し笑った。

「師匠、もしかして話をするのが苦手ですか？」
「……！？……はい……」

誠は静かに呟いた。

「家では話ができるのに……教室では一言も話さないなんて、もったいないです」

まどかが誠の横顔を見つめながら言った。
誠は少し顔が赤くなったようだった。

「昔からこうだったから……自分が誰かの会話の中に入る姿なんて、もう想像もできない」
「私とは話をしているじゃないですか」

まどかはくすっと笑った。

「如月さんは僕に合わせてくれるから……他の人たちの会話の中には、入っていく自信がない……」
「そんな、いきなり難しく考えなくても、まず挨拶あたりからどうですか？」

誠は首をかしげた。

「朝、教室に着いたら会った人に『おはようございます』と笑顔で元気よく挨拶です」

誠は目を伏せて、恥ずかしそうに言った。

「そんな、いきなりそんなことをしたら、みんなが変な目で見るよ、きっと……」

まどかはそれに力強く答えた。

「相手がどう思うか、反応を期待したり心配しては駄目です。挨拶をすることに間違いはありません。相手がどう思おうと、どんな反応しようと、まず挨拶をすることが大切なんです」

「……はい」

「私もいつも師匠に挨拶してもらえなくて、寂しいんですよ！」

まどかはにっこり笑った。

誠はびっくりして、しばらくしてうなずいた。

「頑張ってみます」

「はい、ぜひ。まず私や、周りの席の人たちだけでも」

「解りました」

まどかは満足げにうなずいた。

わずかだけれど、初めて二人だけで話した時間は、何となく二人の間の緊張感をほぐしてくれたような気がした。

夜の静けさが、何となく心地よくなっていた。

挨拶と噂

翌朝。

まどかは、教室で誠が来るのをちょっと楽しみに待っていた。

教室に入ってきた友達と、いつもの挨拶を交わしながら、ちらちらと入り口を確認していた。

ＨＲが始まるいくらか前になり、誠が静かに教室に入ってきた。

にぎやかな教室の喧噪にまぎれるように、自分の席へとむかう。

まどかは席を立ち、誠の席へ歩いていった。

誠は席にたどり着くと、バッグを置いて、いつものように座ろうとした。

「おはようございます！」

まどかが元気よく誠に声をかけた。

その声に、一瞬教室が静かになり、視線が二人に集まった。

誠は顔を赤くして、すこし戸惑いながらこたえた。

「おっ、おはようございます……」

眼鏡をなおしながら、うつむいて、そのまま席に着いた。

まどかは、うんっ、と嬉しそうにうなずいて、満足げに自分の席へ戻った。

再び、教室に喧噪が戻った。

ただそれは、接点がないと思っていたまどかと誠が挨拶を交わしたこと、それもまどかの方から近寄っていって、ということと、誠が挨拶をしたのを初めて見た人たちの、戸惑いの喧噪だった。

誠は自分から挨拶することはなかったし、挨拶をしても軽くうなずくだけだったので、そのうち誰も挨拶をする人がいなくなってい

た。

まどかの横の席の桜井宗志がまどかに声をかけた。

「如月さん、一柳と友達なの？」

「えっ、だって、クラスメイトだもん」

にこやかに不思議そうな顔で答えられ、宗志もそれ以上聞けなかった。

クラスメイトと挨拶しただけではない、インパクトを周囲には与えていた。

まどかは自分が喧噪の話題の的になっていることには気づいていなかった。

やがてチャイムが鳴り、教師が教室の中に入ってくると、自然と静かになった。

ただあたりを見渡すと、嬉しそうにしているまどかの様子を見つめる男子生徒が数名いた。

そんな様子を見て、曜子はため息をついていた。

昼休み、曜子はまどかを連れ出し、中庭でお弁当を食べることにした。

「時には、中庭も静かでいいね」

とつぶやくまどかに、曜子がため息をついた。

「なっ、なに？　なんでため息なの？」

「本気で気づいていないの？」

「何が？」

「……この前、可愛いと噂になっている話はしたよね」

まどかはうなずいた。

実感はないのだが。

「一柳さんとどういう仲なの？」

「仲って……、その……、勉強を教えてもらっているの」

曜子はじっとまどかの目を見つめた。

「それだけ？」

「それだけって……他に何か……？」

曜子はしばらくまどかの目を見つめた後、またため息をついた。

「嘘をついている様子はないわね。じゃあ注意しておくけど、今朝の挨拶はあまりにも不自然だった」

「ああ……師匠が挨拶することってないからね」

「師匠？」

「あっ、うん。勉強のお師匠様」

「……えーっとね」

「はい」

曜子はどう説明していいか、頭を抱えていた。

「つまり、あなたに好意を持っている男子生徒が何名かいるみたいなの。そんな中で、あんたがわざわざ近寄っていって、あんな笑顔

で挨拶するから、二人は付き合っているのか、っていう憶測や心配から、またさらに噂が広まっているの」

「……私の？」

「他に誰がいるの」

「挨拶しただけだよ？」

「あなたがしたことに問題があるの」

「師匠のせいではなく？」

「まあ、あいつも数割は問題があるけど。あなたの行動は思っている以上に影響力があるみたい。気をつけなさい」

意外な曜子からの指摘だった。

まどかは戸惑った。

てっきり、挨拶をしない誠が挨拶したことが話題になっているだけだと思っていた。

誠が挨拶をすれば応えてくれる人だと解れば、もっと挨拶をする人が増えるかな、としか考えていなかった。

「そう言われても……」

「何度も言うのも、だんだんむかついてきたけれど、あなたは可愛いの。知らず、話題になってしまうの」

「……はい、気をつけます。でも、挨拶ぐらいはしたいなぁ」

「まあ、なら、噂にされるぐらいは覚悟してね」
「どんな覚悟をすればいいのか解らない……」
「そうね。私も具体的にはどうなるかまでは解らないけれど」
そんな話を交わしていたところに、ひとりの男子生徒が現れた。
二人を見つけると、近寄ってきて声をかけた。
「まどか！」
声に振り向くと、知った顔にまどかも笑顔になった。
幼なじみの武田悠太だった。
「あっ、悠太。久しぶり」
「ちょっと探したよ」
「どうしたの？」
悠太はまどかの横に座った。
「まどかが付き合っている男がいる、って噂を聞いて、本当かと思って」
「……」
「ほらね」
まどかはびっくりして悠太に聞いた。
「えっ、だって悠太のクラスって、隣の隣だよね。なんでそんな噂が伝わっているの？」
「知らないよ。で、本当なの？」

「違うよ」
「やっぱりそうか」
悠太はほっとしたように笑顔になった。
「武田くん、嬉しそうだね」
曜子がにやにやしながら聞いた。
「……っ、そんなことない！　男の噂のないまどかに、とうとう男ができたのかって、幼なじみとして気になっただけだよ」
悠太の頬がわずかに赤くなったのを曜子は見逃さなかった。
ただ、まどかはそのことに気づかなかった。
「どうせ、私にはそんな恋の噂なんてありませんよ」
いーっだ、とまどかは悠太にやってみせた。
その様子が可愛かったのか、悠太はさらに顔を赤くしてうつむいた。
「？　どうしたの？」
「なっ、なんでもない。……でもなんでそんな噂が立ったんだ？」
「今朝、クラスメイトに挨拶しただけなんだけど……」
悠太は振り向いて、驚いた。
「それだけ？」
「それだけ」
「まどかがわざわざ近寄って行って、笑顔で自分から挨拶したから

よ」

悠太が、あー、と言いながら納得した。

「えっ、それで納得できるの？！」

「だって、まどかは挨拶に応えたり、近くの人たちとは挨拶するけれど、自分から近寄って挨拶するのは、基本的に本当に仲のいい女友達だけだろ？」

「……言われてみれば」

「男にしたのは初めてだよね」

「……そうかも知れない」

「だから、噂になったんだよ」

曜子が補足した。

「あんたが気になる男が多いから、噂になって伝わるのよ」

悠太の顔がまた赤くなった。

「そうなの？」

まどかが悠太の顔をのぞき込んで聞こうとすると、悠太は顔を背けて答えた。

「そうじゃないの」

曜子がくっくっと、笑った。

「ちくしょう、神谷め……」

「なに？　どうしたの？」

「いや、なんでもない。……で、その男とは仲いいの？」

まどかはうなずいた。

「勉強を教えてもらっているの」

「勉強なら俺が教えてやるよ」

「そういえば、悠太も頭いいよね」

悠太はそれほど勉強している様子は見せないのに、だいたいいつも上位の成績だったことをまどかも知っていた。

「おまえよりはな」

「あっ、ひどい」

まどかはふくれてみせた。

やっぱりみんな、私にはそんな印象なのね……と落ち込んだ。

「でも、事情があって、しっ……一柳くんじゃないと駄目なんだ」

「事情って？」

「悠太にもそのうち話すよ、今はまだちょっと恥ずかしくって」

悠太は首をかしげた。

「まあ、とにかく付き合っている訳じゃないんだ」

「うん」

「わかった。いつか教えてな」

「うん、ありがとう」

まどかは笑顔で悠太を見つめた。

悠太も笑って、「じゃあ」と言って立ち上がり、行ってしまった。

「……本当に気づいていないの？」
「何が？」
「……まあ、いいや」
「……？」

まどかはにぶいこともあるが、今まで告白されたり恋愛したことがないから、自分に対する好意というのが、まだ信じられないのかも知れない。

このあたりは、本人が気づかないとしょうがない。曜子もあえてつっこまないことにした。

悠太は勉強もできるし、顔だってまずまず。幼なじみだし、お似合いなのだが……と曜子はため息をついた。

まどかはそんな曜子の心配をよそに、嬉しそうにお弁当を食べていた。

その日の夜、寝る前の時間。とはいえ、まどかの就寝時間は１０時と早めだ。いつも朝に走るので起きるのが早いのだ。

教えに従って、復習を始めようとしていた。

しかし、教科書とノートを開くと、反射のように眠気が襲ってきた。

「眠い……これで復習なんて、できるのかしら……」

まどかは思わず呟きながら、眠気覚ましに周囲を見渡すと携帯があり、手に取った。

曜子にメールをしようかと思ったがためらい、悩んだ末に真穂にメールを打った。

『師匠、勉強しようとしているけれど、眠たいです……。まどか』

誠は携帯を持っていないので、真穂にメールした。

迷惑だったかな……もしかして真穂さん夜勤かな……と心配しているなか、メールの返信が届いた。

まどかは急いで、メールを開いた。

『まどかちゃん頑張れ！　誠からの伝言。タイマーを設定してやると効果的です。声に出したり、書いたりすると眠気が来にくいです。だそうよ。真穂』

「タイマーか……」

タイマーらしき物はないので、携帯のアラームを１５分後に設定して、１５分だけは集中してやってみようと決心した。

「よし、よーい、スタート！」

自分でかけ声をかけて、勉強を始めた。確かに、頭で考えていることを声に出したり、手を動かすと眠気が和らいだ。

気持ちの上でも、たった１５分と思うと何となくやる気が出た。

時間は気になってちらちら見てしまうが、１５分で理解して記憶をと思うと、集中はできた。

時間はすぐにきた。何とか慌ただしくはあるが、１教科の復習はできた。

まどかは早速、真穂にメールした。

『師匠、真穂さん！　１５分だけですが、集中してできたと思います。有り難うございました！　まどか』

片付けをして、明日の用意を始めると、メールはすぐに返事が来

た。

『頑張ったね！　その調子。えらい、えらい。おやすみなさい。誠、真穂』

まどかは嬉しくなって、メールを何度か読み返した。

そして、もう一度だけメールを打った。

『有り難うございます！　おやすみなさい。まどか』

それだけを打って部屋の電気を消し、まどかはベッドへ行き、携帯をそばに置いて眠りについた。

たった15分のことだったが、まどかは満足感の中、深い眠りにつくことができた。

挨拶と睡眠

翌朝、まどかは学校で今日も誠が入ってくるのを待っていた。
噂があっても、やましいことはない。
むしろ、勉強の恩返しで、挨拶は教えようと心に決めていた。
そう思っていると、誠が教室に入ってきた。

入り口のところで一歩出ては戻ったりと、いつもとは違う動きをしていた。

「……？」

何度かそうした動きをしていたかと思うと、向きを変えてまどかの元へやってきた。
誠から挨拶しようとしてくれていることに気づいた。
誠の緊張感が伝わってきたのか、まどかまでどきどきした。
誠はまどかの側で立ち止まる。
周囲の数名も思わず、会話をとめて二人の様子を見てしまった。

「……おっ……」

がっ、がんばって！

「おはようございます」

誠が頭を下げた。
まどかは思わず、拍手したい気持ちを抑えて、笑顔で答えた。

「おはようございます！」

誠は軽く頭を下げると、自分の席に戻っていった。
席に着くと、隣の人にも同じように挨拶をした。
挨拶された人は、びっくりして、どもりながら返事をしていた。

まどかは思わず吹き出してしまった。

『師匠も頑張ってる……私も頑張ろう……』

まどかはあらためてそう思い直して、授業にむかった。

４回目となると、すっかり馴染んでしまった一柳家。
家に入るときのどきどきもすっかり無くなってしまった。

「ただいま！」

とまどかも思わずいってしまった。

「おかえり！」

真穂さんも嬉しそうに答えてくれた。
間違っていなかったようだ。
ただ、誠は「こんにちは」と呟いていたが。

「復習、毎日なんとか続けています。最近は３０分ぐらいやっています」

「えらい、えらい。あまり無理はしすぎないでね。充実感や達成感とか、勉強に対してプラスのイメージが大切だから」

真穂はそう言って、いつものように頭をなでてくれた。これが意外に気持ちが良くて嬉しい。

「はい！」

誠が珍しく、勉強について初めから解説をしてくれた。

「今日は、この前のメールで気づいたけれど、睡眠についての注意を話しておきます」

「はい。師匠」

今までの反省から、まどかはノートと筆記用具を取り出した。

さあ、こい。

「成績を上げるためには、よく眠ったほうが良いか、睡眠時間を削って勉強したほうがいいか。どちらだと思いますか？」

まどかが、はいっ、と手を上げて答えた。

「睡眠時間を削って勉強したほうがいいと思います」

「間違いです」

「……私の常識、ことごとく破れています」

真穂さんが笑いながら補足してくれた。

「いつものように陸上に例えてみなさいよ。よく眠ったほうがいいか、睡眠時間を削って練習したほうがいいか」

「……よく眠ったほうがいいです」

「勉強も一緒よ。能力を発揮し、集中してやるためにはやっぱり寝たほうがいいのよ」

誠がノートを広げて見せてくれた。

「まず東大に現役で合格した人の平均睡眠時間ですが、6～8時間程度と比較的しっかりとっている人が多数を占めています。これは、寝ている間に覚えたことが定着する頭の作用があること、集中するためには睡眠が必要なためです」

「意外にしっかりとっているんですね」

誠はうなずいた。

「早寝早起き朝ご飯、という運動が百ます計算で有名な陰山英男先生が提唱していますが、これも大切な言葉です。記憶を定着させるのであれば、寝る前に。理解するもの、考えるものは、朝方のほうが効率的です」

「早寝早起き朝ご飯、は出来ています」

陸上のためにやっていたことが、そのまま頭にもいいなんて意外な事実だった。

「では問題です。試験前はよく眠ったほうがいいでしょうか、徹夜してでも徹底的に勉強したほうが良いでしょうか」

「えっ……あれ？　さっきの話だと眠った方が良さそうだけど、試験前日ってみんな遅くまで勉強しないと間に合わないから……えーっと」

誠は眼鏡を位置を直しながら、即答した。

「寝てください」

「えっ？」

「寝てください」

「それじゃあ、間に合わ……」

「日々の中で勉強してください」

「……はい」

誠の言葉は相変わらず容赦がなかった。

「毎日の睡眠と起床のリズムを、休みの日も試験の日もずらさないことが大切です。その方が試験の時間帯に頭がもっとも動くことができす」

「日曜日の朝はだらだらとしたいのですが……」

「1時間以上はずらさないように。寝溜めしたい場合は、日々の睡

眠時間が足りていない証拠なので、平日の睡眠サイクルを見なおしてください」

睡眠一つで知らないことが沢山だ……とまどかはあらためてノートに書いていった。

・早寝早起き朝ご飯

・休みの日も試験の日も睡眠のサイクルをくずさない

・記憶は寝ている間に定着する、集中力は睡眠が必要

・睡眠時間はしっかり取る

・日々の中で勉強を重ね、試験前日に無理をしない

「あっ、陸上も試合の前日はかるいアップだけにします」

「大事なときに全力を出せるように、前日は休養が必要です。前日にはあまり無理せず、日々の中で勉強を重ねてください」

「……はい」

まどかは肩を落としながらも、誠の言葉に返事をした。

そんな中、真穂が話題を変えて話しかけてきた。

「ねえねえ、まどかちゃん。誠に挨拶を教えているんだって?」

「あっ、はい。勉強のお礼というか、学校でも挨拶してほしいな、って思って」

「ありがとうね」

真穂がまどかの手をとって、感謝の気持ちを伝えてくれた。

「……？」

「家の中では教えられても、学校では誰も言ってくれないからね。大事なことなのに、勉強ができることが免罪符になって、何となくのがれて来ちゃってるのよ」

真穂が誠の頬をつついた。

誠は表情を変えず、つつかれていた。

「良ければ、これからも少しずつ、この子に人とのコミュニケーションについて教えてやってね。びしばしと」

「はい、びしばしと」

そう言って二人は笑った。

誠は困った顔をした。

帰り道も、またまどかと誠は話しながら帰ることにした。

どちらからともなく、そんな流れになった。

少なくとも、誠が会話から逃れようとはしなくなったようだ。

「師匠。今日は朝の挨拶、有り難うございました」

「……緊張しました」

「伝わってきました。頑張っているのが伝わって、挨拶なのに久しぶりに感動しました」

まどかの素直な気持ちだった。

不器用な挨拶なのに、あの時は本当に心から嬉しかった。

それを聞いてほっとした誠が、少しだけほほえんだ。

「あっ、笑った」

「えっ？」

「笑った顔、初めて見たかも知れない」

まどかがまじまじと誠の顔を見ようとして、誠は顔を真赤にしてそむけてしまった。

「師匠、恥ずかしがらないでください。笑顔、素敵でしたよ」

「……！　……！」

誠は言葉にならなかったようだ。耳まで赤くなっていた。

まどかはそんな様子を見て、ちょっだけ声を出して笑った。

からかったわけではない、まどかの素直な気持ちだったけれど、だからこそ誠は照れてしまった。

しばらくは会話もなく二人で夜道を歩いたが、そんな時間もいつか心地よい時間に二人はなっていた。

中間試験とボーリング

ある晩、勉強の合間に、まどかは真穂にメールを打っていた。

『師匠、さっそく中間試験があるのですが、どうすればいいでしょうか　まどか』

いよいよ、高校入学して初めての難関、中間試験が目の前に控えていた。

ここのところ、得意な科目は授業、帰ってからの復習、週末の復習と重ねることができて、今までにない自信のようなものを感じることができた。

ただ、他の科目はまったく手を付けていない。

それに試験前日にはどうしたら良いのか、不安がつのった。

しばらくして返信があった。

『試験範囲と日程を間違えないこと。いつもの生活リズムを変えないこと。新たなことには手をつけず、復習を繰り返すこと。試験と同じように、４５分程度を集中して勉強して１５分休み、別の教科にして４５分集中して勉強することをおすすめします。だらだらとやらないこと。　誠』

真穂さんの携帯なのに、末尾のサインは誠だけだった。

『はい、師匠。苦手な教科はほとんど勉強していないのですが、いいのでしょうか。　まどか』

恥ずかしいながら、まどかは素直に聞いてみた。この返答は少し時間がかかった。

……予想していなかったのかな……とまどかは少し心配になった。

『今回は仕方がないけれど、基本的な方法は同じなので、頑張って！　真穂』

……どうやら誠は答えられなかったようだった。まどかは見えぬ相手に謝った。

こんな弟子でごめんなさい。

しばらくして、追加のメールが届いた。

『試験で解らない問題に時間を取られないように、できる問題を確実にとって。それからゆっくり解らない問題にとりかかって下さい。頭の中にある知識で解けるはずと、自信を持ってください。見直して簡単なミスをしてないかのチェックも大切です。頑張りましょう。誠』

誠の言葉がすこし変わってきたように、まどかに感じられた。相手のことを考えたり、精神的なこと、思いを気遣ってくれた言葉が出てきているように感じた。

「師匠……ありがとう……頑張ります！」

まどかは再び勉強に向かった。

中間試験は数日にかけて行われた。

まどかは誠や真穂の教えをなるべく忠実に守ることを心がけて、試験の数日を過ごした。

多分、今までよりはできたはず。そんな感触と、今までにはない集中した疲れを感じながら、試験は終了した。

最後の試験が終わると、周囲からは安堵の溜息や、喜びの声が上がっていた。
ざわめいた教室の中、曜子が近づいて、まどかに声をかけてきた。
「どうだった？」
「うん、今までよりは少しいいと思う」
「勉強、頑張っていたもんね。えらい。私はまあいつも通りかな」
「そう言いながら、曜子もけっこう成績がいいのよね」
そんな会話をしながら、二人で帰り仕度をしていた。
「ねえ、せっかくだから久しぶりにどこか寄って行かない？」
「あっ、行く行く。何かぱぁっと遊びたい」
隣の席の桜井宗志が、そんな二人に声をかけてきた。
「それなら、他にも声をかけてカラオケかボーリングでも行く？」
「うん、いいよ。だれ誘う？」
まどかの返事に宗志がうなずくと、宗志は周囲に大きな声で叫んだ。
「カラオケかボーリング行くけど、みんな行かないか？！」
宗志の声に教室みんなが振り向くと、驚くほどに反応が良かった。

「あっ、いいね」
「行く行く」
「僕もいいかな」
「私も！」

ぞろぞろと人が集まってきた。
それなら、と人が人を呼び、ほぼ教室全員が参加する状況になってしまった。
仲間はずれを怖がっているのか、それとも思った以上に教室に一体感があるのか。
まどかがびっくりしている視界の端に、誠がひとり教室を出ようとしている姿が見えた。

（あっ、師匠……）

まどかは声をかけようとしたが、それよりも先に誠は教室を出てしまった。

「どうしたの？　まどか」
「あっ、うん……ちょっと」
「？」

戸惑っているまどかに宗志が声をかけてきた。

「何かすごい人数になっちゃったけど、いいよな」
「えっ、うん。多いほうが楽しいし」

「よし、じゃあみんな行こうか。これだけの人数だと駅前のオールラウンドかな」

宗志は教室の中でも、まとめ役、ムードメイカー的な存在でもあるようだ。

うまくみんなを集めて、導いてくれていた。

まどかも曜子も、宗志に任せることにした。

結局、カラオケでばらばらになるよりは、とボーリングでチームを組んで対抗戦となった。優勝したチームは、他のチームに食事をおごってもらうこととして、ボーリングの後にファミレスに行くことになった。

まどかは曜子や宗志と同じチームとなり、他にも伊藤涼や岸谷玲といった男子が二人加わった。

「ようし、優勝を狙うぞ」

円陣を組んで、宗志が声をかけた。

「おーっ！」

なかなかのりの良いチームだった。

宗志は自分で声をかけるだけあって、なかなか上手だった。

曜子は身体が細い分、投球は弱かったが、正確にまっすぐ投げる玉は確実にピンを倒していった。

涼や玲は、それぞれサッカー部とバスケット部と体育会系。力強い球を投げてなかなかの点数を出していた。

そしてまどかの番が来た。

「私、実はあまり経験がなくて……」

「あっ、じゃあ俺が教えるよ」

宗志が立ち上がると、涼と玲も声を上げた。

「あっ、ずるいぞ、俺だって教えられるぞ」

「そうだ、そうだ」

まどかがその展開に戸惑っていると、三人はかってにジャンケンをはじめ、結局宗志が教えてくれることになった。

宗志の説明は分かりやすく、もともと運動神経のいいまどかは、きれいなフォームで投球できた。

結果は7本、3本でスペアだった。

「やった！」

「おっ、凄い」

「さすが！」

まどかが声援ににこやかな笑顔で応えると、男子たちはさらにやる気を出し始めた。

「ようし、ストライク行くぜ」

宗志はそう叫んで、レーンへと向かった。

まどかは曜子の隣に座ると、ふうっと息を吐いた。

そんなまどかに曜子が声をかけてきた。

「あなたの笑顔は破壊力あるわね」

「はっ、破壊力……なにか壊した？」

「……あなたの天然、嫌いじゃないわよ」

まどかは首をかしげた。

曜子はちょっと笑って、まどかに近づいて耳打ちした。

「一柳くんと挨拶した後に、気になってあなたのことを見ていた男子がいたけれど……三人ともそうよ」

「えっと……それはつまり……」

「あなたに気があるんじゃないかな。三人とも。だからチームで一緒になろうとしたんじゃない？」

「……」

まどかは戸惑っていた。

曜子の言葉は、いまだにまどかには実感がなく、それにどう対処すればいいか解らず、まどかを困惑させた。

「まあ、とはいえ告白されたわけでもなし。いつものように接したらいいんじゃない」

曜子がまどかの表情から察してくれたのか、そう助言してくれた。

まどかもうなずいた。

「どうしたの？　二人とも。次、神谷さんの番だよ」

「あっ、ありがとう」

曜子が立ち上がると、その横にいま投げ終わった涼が座った。

涼は髪の短い、見かけは細いが筋肉質で、いかにもサッカー部員といった容姿をしていた。

「何の話をしていたの？」

「えっ……いや……私の笑顔は破壊力があるとか、何とか……」

「あっ、確かに」

「破壊力って……どういう意味？」

「意味って……そのままだけど」

「私、なにか壊したの？」

涼が吹き出した。

「そっ、そうだね……くくっ……壊したかもね。いいから気にしないで」

「……？　うん」

曜子の投球が終わり、まどかの順番が来た。

「よーし、頑張るぞ」

男達からの声援を受けてボウリングを投げたまどかだったが、どうにも先程の曜子の言葉が気になって微妙なズレを生じてしまった。
球は脇にそれ、ガーターだった。

「あれ？」

「ドンマイ、ドンマイ」
「いいよ、いいよ」

まどかの元気のない顔に、みんなが励ましてくれた。

結局、終わってみると、まどかが足をひっぱる形となってしまい、総合で惜しくも2位となった。

「ごめんなさい。私のせいで……」

「いいって、気にしないで」
「一緒にやれて、楽しかったよ。またやろうね」

宗志や涼達がそうなぐさめてくれた。
まどかはうなずいて、感謝の言葉を伝えた。

苦手な数学

そのあとのファミリーレストランは、家で食事が待っているからと幾名かが帰ることになり、結局自由参加になった。

まどかと曜子も、今日は帰ることにした。

それでも、教室全体で行われたボーリング大会はことのほか盛り上がりを見せ、またみんなで企画しようねと、なかなか好評だったようだ。

それぞれに明るい表情の中、ある者はファミレスへ向かい、ある者は家路についた。

まどかと曜子は家も近いので、自転車を押しながら並んで帰った。

曜子は、いまだにまどかの元気がないことが気になっていた。

「まどか、どうしたの。結果のことを気にしているの？　それとも、私が三人の気持ちを伝えたのが重かった？」

「えっ、ああ……ううん。ほとんど全員参加したのに、師匠がいなかったな……ていうのが心残りで……」

「あっ、そういえばそうね」

「試験が終わったら、いつものように静かに帰ってしまっていたから」

「まあ、あまり本人もその気がないのだろうね」

まどかもうなずいた。

確かに、誠は挨拶をするのがやっとで、こうして友達と遊ぶとい

うのはハードルが高いのかもしない。
でも、まどかは何となくそれが残念だった。
勉強の苦楽を共にしている人と、遊びも共有したかった。

「うん、師匠にも少しずつ慣れてもらおう」

そう呟くまどかに、曜子は声なく笑った。
幼なじみに、クラスメイトに、複数の男子から思いを寄せられているまどかなのに、気にしているのは、目立たない勉強だけがとりえの男子という事実に、曜子は笑うしかなかった。
天然なのが、この子のいいところでもあるか……と曜子は思った。

数日後、テストが返却された。
比較的、得意だった歴史や英語は今までの中で一番良い点数だった。
意外だったのは苦手な数学も、それほど悪くなかったことだった。
とはいえ、赤点ギリギリという褒められた数字ではないが、今までがひどかったので、勉強していない割には得点がとれた方だと、まどかは感じた。

その日、さっそく一柳家へ向かった。

「うんうん、成果が出てるじゃない。まどかちゃん。えらい、えらい。特に得意なあたりはもう少しでパーフェクトに近いじゃない。才能があるわよ」

おそらく、ちょっと過剰気味に真穂が褒めてくれ、いつものように頭をなでてくれた。解っていても、まどかは嬉しかった。

「あの……数学とかはひどい点数ですけど、それでも以前よりはいいのが不思議で……」

まどかの疑問に誠が答えてくれた。

「教科はまったく別の存在のように見えて、実はいろいろ重なりあっています。一教科を伸ばすと、他も一緒に上がることはよくあることです」

「そうなんですか……」

「でも、あらためて問題が浮き彫りになったね」

真穂がテストを見ながらそう呟いた。

「……数学のことですか？」

「うん、医学部を目指すのに、数学は必須だからね」

「……はい」

真穂は笑ってまどかの肩を叩いた。

「あまり落ち込まない。大丈夫だから。なんとかなるものよ。さっ、誠。数学について解説をして」

誠がまどかの前にドサっと紙の束を置いた。

よく見ると、ドリルのようだった。しかも、小学一年から中学三年まで。

「数学が苦手な人は間違い無く、基礎のどこかで数学が解らなくなっています。数学は大きく分けると、計算の基礎と公式のパターンの二つで、計算の基礎がしっかり身についていないと、後はいくら頑張っても駄目な場合が多い」

「計算の基礎と公式のパターン……」

「ドリルを解いてみて、どのあたりから怪しくなっているか、調べましょう。と言っても、一枚にあまり時間をかけてはいけません。問題を見て、さっと解けないようであれば、それはまだ十分に身についていない箇所です。このレベルは、手間がかかる部分ができてはいけない難易度です。瞬時に正確に解けるまで、基礎を練習しましょう」

「それでこの量ですか……」

まどかはいつものように肩を落とした。今回は特に避けて通りたい数学だったからなおさらだった。

「大丈夫。最初は小学一年だから、さすがに大丈夫でしょう。しばらくそういった気軽に解けるのが続くはずです。どの辺から時間がかかり始めたか、次の時に教えてください」

「はい、解りました。師匠」

誠がうなずいた。

弟子と師匠の関係が、だんだん板についてきていた。

恒例の帰りの会話は、まどかからの質問から始まった。

「師匠。試験が終わった時、みんなでカラオケかボーリングに行こうという話になったのに帰ってしまったのは……」

誠は苦笑いをしてうなずいた。

「僕には、ちょっと勇気がなかった……というか、楽しめる自信がなかった」

まどかもうなずいた。
誠の気持ちは理解できた。

「そうですよね。黙っているわけにはいかないし、あのノリについていく師匠の姿も想像できません」

「はは……」

誠は笑ってうなずいた。
まどかは少し間を置いて、誠に提案した。

「どうでしょう。師匠。挨拶の次は、私と二人で遊ぶことから始めませんか？」

誠は思わず立ち止まった。

「えっ……？」

「私と二人で遊んでみることから慣らしてみませんか？」

「えーっと……遊ぶ？」

「遊ぶと言っても、鬼ごっこをしたりするのではなく、たとえば買い物に行ったり、食事をしたり、公園で話しをしたり」

あれ、これってデートに誘っているみたい？……まどかが自分で話しながら気づいた。

「あっ、あのデートではなくて、複数の中に入る前に、まず私とで練習してみてはどうかな……と……その」

まどかの方が顔が赤くなり、しだいに声が小さくなってしまった。戸惑っていた誠だったが、まどかが赤くなると逆に落ち着くことができた。

まどかが、自分の為に頑張ってくれようとしていることが、心のなかにすとんと落ちた。

「ありがとう……迷惑をかけますが、お願いします」

まどかは顔を上げた。

「本当ですか？」

「はい」

「やった！　……師匠、頑張りましょうね？」

まどかが笑顔をむけると、誠の顔が赤くなり、視線を逸らした。
……破壊力ってこのこと……？
まどかは言葉を続けた。

「えーっと、では何をしましょうか」

「わっ、解らないのでお願いします」

「そうですよね……あの、師匠はいつも日曜日はどうされているのですか？」

「日曜？　市立図書館です」

「あー……」

以前に聞いた話を思い出した。
誠は家か学校か図書館ばかりだと。休みの日は市立図書館なのか……。

「えっと、では私もご一緒させてください。お昼ごはんを外で食べませんか？」

「あの、いつもはお弁当なのですが」

「じゃあ私もお弁当を作って……」

まどかの言葉が止まった。
誠は首をかしげた後、ああっ、と気づいた。
まどかはお弁当を作ったことがないようだ。

「お弁当、作りましょうか？」

「いや、そんな師匠にそこまで」

「いつも夕食も作っているし」

「……はい、いただいています」

「二つ作るのも、たいして変りないし」

「……はい、お世話になります」

まどかは恥ずかしがった。本来、お弁当を作るのは女性の役目のはずだが、残念ながら現時点では明らかに誠のほうが料理は上手だった。

「これは、教えてもらうお礼ということで」

「……何が教えられるかわかりませんが、有り難うございます。いつか料理も教えてください」

「解りました」

肩を落とすまどかを見て、まことは少し笑った。

誠もすこしずつ、まどかと話をすることが楽しいと感じるようになってきていた。

日曜日、二人は朝の9時半に待ち合わせて、自転車で図書館へ向

かった。
　数駅分の距離はあったが、ゆっくりと時間をかけて開館の１０時少し前にはつくことができた。
　朝の涼しさがあるとはいえ、晴れていたので、二人の肌はやや汗ばんでしまった。
　吹きかける風が心地よかった。

「師匠はいつも図書館でどうされるのですか？」

「調べ物です。教科書や授業の内容は重要ですが浅いところまでしかやってくれません。本当に楽しいのは、そこから先なんです」

「……師匠、あらためて尊敬します」

「如月さんは、何をしますか？」

「あの……良ければ、まどかと呼んで下さい」

　誠の歩みがまた止まり、くるっと顔を向けてきた。

「えっ……」

「友達にはそう呼ばれていますので」

「えっと……まどかさん……」

「はい！」

　まどかが笑顔で返事をすると、またもや誠の顔が赤くなった。

「あの……では……僕のことは誠と……」

「師匠と呼ばせて下さい」

「……」

「お願いします」

「はい……」

師匠と弟子の関係の二人ではあったが、まどかには逆らいきれない誠だった。

図書館での一日

二人は開館と同時に中に入った。
席を確保すると、誠は調べ物のため書架に向かった。
まどかは以前に借りたドリルを開いた。
高校生にもなって開いたのは小学生の算数ドリル。
恥ずかしいが、これが現実。言われたとおり頑張ろうと思った。

ドリルをよく見ると、無数のマルとバツの記号が並んでいた。
おそらく誠が解いて、正解だとマル、間違いだとバツをつけていたのだろう。
それにしても、凄い数だった。
間違えていた問題はさらに凄い回数繰り返されていた。
まどかはその記号を、指でなぞった。

「凄いなあ……」

まどかは、その記号の先に色を変えて自分の結果を書くことにした。

図書館は静かで、涼しい。
確かに家で勉強するよりは、環境が整っている。
まどかもいつものよりも勉強を集中して続けることができた。
それでもドリルばかりだと、疲れてしまう。
ふと顔を見上げると、いつもの集中している誠の姿があった。

彼の勉強の様子は見ていて気持ちがいい。
姿勢がいいのだ。

それに自然体で、凄く楽しそうに集中しているのが伝わってくる。

まどかは、しばらくそんな誠の様子を眺めていた。

この姿を見て、自分も勉強ができるようになれるかな、と思ったのだ。

そして、いま見てもやっぱり、勇気づけられる。

そう思いながら誠のことを見ていたら、誠の手が止まり、顔が上がった。

ばっちりと二人の視線があった。

絶対に誠の集中力が切れることはない、と思っていたまどかは慌てた。

勉強する姿を見られていると思っていなかった誠も慌てた。

二人して顔を真っ赤にして、下を向き、誤魔化すように勉強を再開した。

とは言え、そんな状態で集中できるはずもなく、しばらくしてまどかは勉強の手を止めた。

「あっ、あの……師匠。そろそろお昼です。食事にしませんか？」

「あっ、はい。そうですね。そうしましょう」

誠は下を向いたまま、片付け始めた。

二人はお弁当をもって、図書館に隣接する公園へ歩いていった。

天空高くに輝く太陽のせいで、日なたは汗ばむほどの暑さだった。

しかし、広い公園は背の高い樹木が生い茂り、木陰の下は心地良

い温度に保たれていた。
そよ吹く風がときおり、二人の肌を通り過ぎていた。

木のベンチに二人で座ると、誠がつくってきた弁当を広げた。

「夕食の残りで申し訳ないけれど」

「いえ。いつも夕食、美味しいです」

今日は鶏の唐揚げだった。他にはキャベツの千切り、トマト、ブロッコリー。きゅうりの漬物にご飯、そしてお茶だった。

「いただきます」
「いただきます」

お弁当に可愛らしさはなかったが、やっぱり味は美味しかった。
ほっとするというか、味が濃すぎないというか。
懐かしいような、安心する味だった。

「美味しいです。師匠」

「それは良かった」

誠も笑顔になって、うなずいた。
しばらくは二人は黙って食事をした。

食事をほとんど終え、お茶をゆっくり飲んでいると、まどかが誠に質問をしてきた。

「師匠は……勉強は楽しいですか？」

「楽しいです」

「私には、まだその楽しさがわかりません」

まどかの偽ざる素直な気持ちだった。

誠は前を向いたまま、考えながら語り始めてくれた。

「僕にとって勉強が楽しいと感じたのは、確かに先生に褒められたことが初めてでした。褒められるから勉強する。勉強するとまた褒められる。しばらくはそれが楽しかった」

「……」

「でも、それだけでは長続きしなかった。ある時、図書館で伝記を読みました。エドワード・ジェンナーという人の伝記で、天然痘という感染症に対して、初めてワクチンを発見して有名になった人です。」

誠にしては珍しく、静かに語り続けた。

まどかも黙って耳を傾けた。

「それまで天然痘は、今のインフルエンザどころではない、すごい感染力と致死率を持っていた怖い病気でした。それを彼がワクチンを発見することにより、撲滅することができたのです。ひとつの発見が、何万人、何百万人の命を救った。僕には衝撃だった」

誠はその時の感動を味わうように、一度言葉を区切った。

「僕には勉強ぐらいしか取り柄がなかった。でも、もしかしたら、この勉強の先に彼と同じような研究がつながっていて、新薬を発見することで、誰かの命を救える自分になれるかも知れないと思ったんだ。そう思えてから勉強に対する思いが変わった」

「……そうだったんですね。以前に話してくれた、夢、のことですよね」

誠がうなずいた。

「それから勉強を進めていくうちに、いろいろな発見があった。たとえば英語は、読めるようになったら、世界中の情報を得ることができる。話すことが出来れば、世界で働くことができる。しかも、中学や高校の教科書を１００回読み返してまるごと暗記すれば、その世界が開けることが解った」

「……本当ですか？」

「本当です。海外には行っていませんが、僕だいたい読めて話せます」

「……だって、まだ高校一年なのに……」

「高校三年まで、もう終わりました」

二人の間に沈黙が広がった。

「……今まで師匠を尊敬していました……今は、遠い星の人のようです……」

まどかは遠い目をして誠を見つめた。

「大丈夫。まっ……まどかさんも、出来るようになります」

誠は言い慣れない名前にすこし顔を赤くして答えた。

「本当ですか？」

「本当です」

「そんな日が、本当に来るのかな」

まどかには自信がなかった。

「時間はまだかかると思うけれど、まどかさんには十分に才能があると感じました。信じてください」

「師匠を、ですか？」

「いや、自分自身を、です。もちろん、僕も手助けしますが」

「……」

まだ実感はないが、その可能性を信じて歩き始めたし、誠に対して感じたのだ。

まどかはうなずいた。

「よろしくお願いします」

誠もうなずいた。

「勉強は面白いです。授業の内容でも、しっかりとやると一つ一つが無限の可能性を秘めている知識です。イチロー選手は今でも毎日の素振りを欠かしません。素振りは誰もが知っていて、できる程度のことです。しかし、何万回振ってもまだまだ先があり、その一振りで人を感動させ、偉業を達成させることが出来るようにもなります」

「……」

「時をこえて残っているものには、そんな力があります。飽きずたゆまず繰り返し、あらたな発見を見つけ出し、感じることが出来れば、素晴らしい宝物となります。残念なのは、それに気づいてる学生も先生もけっして多くはない、ということです」

「……師匠……凄すぎます。同い年とは思えません」

「そっ、そうかな」

恥ずかしそうに頭をかく姿は、確かに幼く見えた。

この人はどんな人生を歩んできたのだろう。

同じものを見ても、見えている世界が違うような気がする。

「師匠。楽しかったです。また、ぜひ話を聞かせてください」

「はい。聞いてくれて、僕も嬉しかったです。……他の人に話しても、理解されないか、真面目すぎて馬鹿にされると思っていたので」

「あっ……そうかも知れない」

「まどかさんは、聞いてくれる、受け入れてくれるという安心感がありました。それが嬉しかったです」

まどかの胸が、どきっ、とした。

そして、胸がほわっと熱くなる。

……何となく嬉しかった。

「そう言ってくれると嬉しいです。でも、師匠も自分に自信を持ってください。まだまだたくさんの人が、師匠の話を聞いてくれますよ」

「そうだといいのだけれど……まだ自信がないです」

「師匠が私に可能性を感じてくれたように、私も師匠に可能性を感じます。大丈夫です。自分を信じてあげてください」

まどかがにっこり微笑んだ。

誠も応えるように微笑んだ。

「ありがとう……さっ、戻ろうか」

「はい。……まずは小学の算数からですね」

「馬鹿にできません。算数はすべての知識の始まりです」

「はい」

まどかも誠の言う意味は理解できた。

二人は図書館へ戻り、午後の勉強を再開した。

図書室と繰り返し

「で、なんで私まで連れて行かれているの？」

ある日の昼休み、まどかに手を引っ張られ、曜子は図書室へと連れて行かれるところだった。

二人でいつものように食事をとった後に、「一緒に図書室へ行こ！」と返事を聞く前にまどかが引っ張り始めたのだ。

「師匠に報告があって。曜子ちゃんにもついて来て欲しいんだ」

「……なんだ、二人のラブラブな様子を見せつけられるだけなら帰るぞ」

まどかの足が止まった。

「ラブラブ？」

「違うの？　毎日はにかみながら挨拶を交わし、会えない夜はメールを交わし、週に一回は家に遊びに行き、週末は図書館で二人きりのデートをして、将来の夢を語り合ったんでしょ」

「……言葉だけ聞くとその通りなんだけれど、ニュアンスがだいぶ違うような……」

「しかし、一般的にはそう言うのを『付き合っている』というし、『ラブラブ』というのじゃないかな」

「付き合っていないし、ラブラブじゃないし……師匠と弟子です」

「認めない子だね……」

再び、曜子はまどかに引っ張られ始めた。

図書室に入ると、何名かの生徒が本を読んだり、勉強していたりしていた。

比較的奥の机に、いつものように勉強している誠の姿を見つけて、まどかは近寄っていった。

「師匠！」

まどかの声に誠は顔を上げた。

一瞬柔らかな笑顔になったが、曜子の姿を見つけるとまた元の表情に戻った。

曜子はその一瞬の動きを捉えていたが……まあ、そんなもんだよな……と受け止めて、まどかの為すがままに任せていた。

「報告と質問があってきました。いま少しいいですか？」

「……はい」

「あっ、先に紹介します。私の友人の神谷曜子ちゃんです」

曜子は軽く頭を下げた。

「どうも」

誠は戸惑いながら、頭だけは下げた。

明らかに警戒、あるいは緊張している様子だった。

まどかはこんな固い殻をかぶった人間の心に入り込んだなんて、ある種の才能ね……と曜子は心のなかで呟いた。

「師匠も、私とはもう話ができるので、もう一人増やしてみようかな、と友人を連れてきたのですが……やっぱり緊張しますか？」

「はい……少し……」

少しじゃないだろ……と曜子は心のなかでつっこんだ。

「曜子ちゃんなら大丈夫です。師匠、固すぎです。頑張りましょう」

まどかに爽やかな笑顔を向けられると、誠もちょっと顔を赤くして「はい」とうなずいた。

「相変わらずの破壊力ね」

「またもう……そんなこと言う」

「あっと……心の言葉が出てしまった」

曜子は口をつぐみ、二人は誠の前に座った。

「あの算数のことですが……あの、悲しいことに小学5年でちょっと引っかかりました……」

まどかの表情が一転して、自信なげな表情に変化した。

「あっ、ああ……小学5年あたりは算数から数学への橋渡しになる

から、ちょっと難しくなります」

まどかの持ってきたドリルとノートを開くと誠はうなずいた。

「できているし、理解も悪くないと思います。あとは回数をこなして、瞬時に答えが出るまで繰り返して下さい」

「何回ぐらい繰り返したらいいですか？」

「問題を見ると、答えが口につくぐらいです」

そう言いながら、誠が問題の一ページを指さしながら呟いた。

「たとえば、１５、３２、８、３４、６２、といった具合です」

まどかと曜子の目が見開いた。

えっ、いったい今の……なに……？

「いま、まったく問題を読んだり計算したりする時間もなく答えていましたが……えーっと憶えているのですか？」

「いや、一瞬で計算式と答えが頭に浮かんで口についてくるのです」

「……」「……」

二人で呆然とした。

最初に口を開いたのは曜子の方だった。

「まどかから聞いていたけれど、実際に見ると凄いね。これは、首席どころじゃないわ。日本全国の模試でもいい線いくんじゃない？」

「そっ……そうですか？　受けたことがないので知りませんが……」

曜子との話になると、急に誠の口調が自信のないものに変わった。

「人見知りなのは解っているけど、あまりにも差があるなぁ……うん、私もちょっと興味が出た。私のことを曜子って呼んでもらってかまわない。私は誠って呼ばせてもらうから」

「……神谷さん」

「曜子で」

「……神谷さん」

「曜子」

「……神谷さん」

「……それでいい」

たいした違いはないので、曜子の方が折れた。

誠はほっとしたような表情を浮かべていた。

「ここまで早くなくていいとは思いますが、小学生のレベルの問題は、悩むまもなく口につくレベルまで繰り返した方がいいと思います。そのために……」

誠はドリルの下の方に書いてある数字を指さした。

「一枚にかかった時間を記載するといいと思います。この数字が、だんだん減ってくることで上達を把握するといいでしょう。タイマーと一緒で負荷がかかりと集中力もつきます」

「なるほど……」

まどかはノートに今のことを書いておいた。だんだんノートに書く習慣ががついてきていた。

誠はうなずいて、話を続けた。

「何故そこまでやらないといけないのか、ちょっと説明を加えましょう」

「はい」

「勉強で最も大切な基本的な項目は何か、と言われれば『読み、書き、計算』だと思っています。昔から自分の名前を書き、物を数えるのが最低限の教養と言われてきました。今でもすべての勉強の基礎はこの三つです」

まどかはうなずいた。

曜子は腕を組んで、黙って聞いた。

「読みと書きは普段の生活の中にもあるので、それほどできなくて……という事もないと思うのですが、計算は意識的にやっておかないとなかなか身につきません。しかも、その後の数学だけではなく、物理や化学といった理数系科目にはすべて関わってきます。勉強が嫌いになる一番の原因であり、逆に得意になると自信となる項目です」

「わかります」

誠がうなずいた。

「小学の頃は、音読することと筆写すること、そして計算することだけが徹底的に、しっかりできれば十分だと思っています。これは以前にも話した陰山英男先生も同じことを言っています。１００マス計算が有名になったのは、計算を繰り返すこと、時間を測って負荷をかけて集中させること、といった重要な要素が入っているからだと思います」

曜子もうなずきつつ、誠に質問した。

「確かに君の話は納得できるし、面白い。ただ、誰もが１００マス計算で実力を伸ばせるとは限らない。むしろそれで比較され、取り残され、脱落していく者ができるのではないかな」

曜子の言葉に誠は頷きながら、今度は力強く答えた。

「僕はむしろ、たくさんの人の可能性が潰されていることを危惧しています」

「……」

「あまりにも勉強嫌い、勉強に自信がない人が多い。でも、まどかさんのようにちゃんと伸びる才能をもっていて、やり方によっては成績を上げることが出来る。僕自身も才能があるとすれば、勉強が好きだという才能があるだけです。理解力、記憶力が他人より優っているとは思えません」

曜子は黙って聞いていた。
誠が話を続けた。

「簡単な計算です。障害や病気がある方でなければ、時間をかければいつかは誰でも辿りつける道だと思います。しかも、簡単にできてしまう人より、努力してできた人のほうが喜びも大きく、最終的には簡単にできた人よりも成長することが多い。私は一人でも多く、自分の持っているものを伸ばして欲しいです」

「……なるほど。確かにね……」

「師匠、素敵です」

まどかの言葉に、誠が真っ赤になって頭をかいた。
いきなり歳相応の姿になった。

「まどかが懐いたのも納得できた。悪い奴ではなさそうだし、まあ、大事な友達なので、どうぞこれから宜しくお願いします。」

曜子がそう言って頭を下げると、誠も戸惑いながらもつられて頭を下げた。

「私……いま、何か、嫁に出されたような気分……」

「まあ、似たようなものじゃない？」

そう曜子が呟くと、まどかと誠がふたりで顔を赤くして、下を向いた。

……どこまで、二人は自分の、そしてお互いの気持を理解してい

るのかな……と曜子は考えた。
二人が恋の気持ちに気づくのは、だいぶ先のように曜子は感じていた。

陸上大会

空は雲に覆われていたが、競技者にとってはその方が都合が良かった。

今日、まどかは陸上の大会に参加していた。

高校になってからは初めての大会で、いつものように１００ｍの短距離走にエントリーしていた。

部員は全員参加はしているが、個人競技で時間帯も違う。

コーチの説明の後は、各自のペースに合わせてストレッチやアップを行っていた。

まどかも、走るときの身軽なウェアのうえにジャージを着て、ストレッチを始めていた。

競技が始まるには、まだ少しばかり時間があり、何度か顔を合わせたことのある人と挨拶を交わしたり、　中学で同じ学校だった仲間と「元気にしていた?!」などと懐かしい話に盛り上がったりしていた。

高校初めての大会で緊張していたまどかも、ようやく気持ちが落ち着いてきていた。

記録を気にせず、一本一本ベストを尽くして走ろう……そんなことを考えていた。

「如月さん!」

ふいに声をかけられ、まどかは振り向いた。

そこにいたのは、一番思い出深い、まどかが県で2位になった大会の時の、優勝した彼女だった。

その時、お互いに声をかけあい、知り合いになった。

まどかも名前を呼んで、返事を返した。

「武井さん！　久しぶり」

「久しぶり。良かった、高校でも陸上続けてくれていて。また一緒に走りたかったの」

「私とですか？　……嬉しいです」

まどかは笑顔になって答えた。

武井も嬉しそうに話を続けた。

「優勝したあの時、如月さんと走っていたからあのタイムが出たと思う。私にとって忘れ難い瞬間だったもの」

「武井さんもなんだ……私もです」

「そうなんだ……でも私、如月さんと一緒の高校になるかなっ……てちょっと期待していたのよ」

「一緒の高校って……付属高にですか？」

武井の学校は、スポーツで有名な大学の付属高校だった。

高校でもスポーツ推薦を盛んにとっているが、大学にはオリンピック選手までいる体育で有名な私学高だった。

「うん。スポーツ推薦をとってくるかな、って」

「私はそこまで優秀じゃないから……」

まどかの言葉に、武井は頭を振った。

「私はあなたのフォームが好きなの。私は選手としては小さいから、あなたのような手足の長い、きれいな一歩一歩に本当に憧れていたの」

まどかはびっくりした。

「憧れていたのは私の方です。スタートの正確さ。無駄のないフォーム。私は一回も勝てたことがありません」

「私はあなたに才能を感じた。私では肉体的な限界があるけれど、あなたならきっとまだ伸びるって」

「……」

武井は振り返って、自分チームのメンバーやコーチたちを見た。たくさんの部員。統一されたジャージ。コーチの人数も多く見られた。

「ここは環境が素晴らしかった。目標となる人もいるし、コーチも教え方が上手。陸上をのばすなら、入るべきだと思ったの」

まどかは感じた。

武井は陸上に真剣なのだと。

あなたも同じように真剣で、一生懸命な仲間だよね、と問いかけられているとまどかは感じた。

まどかは言うべきかためらいながら、武井に答えた。

「……武井さん。私は陸上が好きです。走ることが好きです。でも、

夢はべつの所にあるんです……ごめんなさい」

「そうか……そうなんだ……」

武井は残念そうに呟いた。

「私が欲しくてたまらないものを持っているのに……」

武井の言葉に、まどかはどきっとした。
すこし胸が苦しかった。

「ごめん。忘れて。とにかく今日も勝負よ。負けないわ。あとでね！」

武井は笑顔でチームへ戻っていった。
まどかは手を振って見送るしかなかった。

まどかは考えてしまった。
そうまで打ち込んでいるものがあるのか。
真剣になっているか、と。

師匠なら、何て答えてくれるかな……

まどかは空を見上げ、そんなことを考えていた。

まどかはスタートの瞬間が好きだった。

「位置について！」

集中力を高めて、一瞬で動き出す前の緊張感。

「用意！」

呼吸が整っていく。

合図の音が響き渡り、まどかはスタートを切った。

短い時間のあいだに、出来うる限り早くゴールへ着こうと、身体を走らせる。

意識が高まると、自分の動きがスローに感じてくる。

もっと動け、もっと早く！

ゴールラインをきった。

とたんに周りの音と色が戻ってくる。

順位は2位だった。タイムもまずまず。

ただ、ベストタイムでは無かった。

「難しいなぁ……」

さっきのやりとりで、心に迷いがあった。

真剣にやっていると思っていた陸上に、まだまだ甘さがあった。

誠の様子を思い出し、勉強にもまだまだ甘さがあるのも解る。

自分は中途半端だ、そう思ったら不安と迷いが出始めた。

いつもの何も考えずに純粋に走りを楽しんでいたのに、今日はそ

れができなかった。

心は難しい。

まどかは、息を整えながら、次に走る武井の姿を見つめた。

完ぺきなスタートダッシュ。頭ひとつ前に出た。

やや小柄ながらダイナミックなフォームで、前よりもさらに無駄のない走り方になっていた。

他の人とはすでに走る次元が違っていた。

武井はそのまま1位でゴールした。

それでも笑顔はない。もう次を見据えている目だった。

厳しい、と思った。

でも、同時にきれいな走りに心が奪われた。

誠が話していた、「飽きずたゆまず繰り返し、あらたな発見を見つけ出し、感じることが出来れば、素晴らしい宝物となります」という言葉の意味を実感していた。

彼女はきっと走る、という単純な繰り返しを、たゆまずに繰り返してきたに違いない。

それを、少しずつ自らに問いかけて、発見し試行錯誤を続けてき

た。

それが今、まどかを感動させていた。

まどかは思わず、武井に駆け寄っていった。

「武井さん！」

武井も振り返った。

「如月さん……」

「武井さん。走っている姿、見ました。感動しました。……きっと忘れません」

いろんな気持ちを伝えたかったが、言葉にならなかった。

武井も走り終わったばかりで、まだ整わない息を繰り返しながら、うなずいた。

「ありがとう。お互い、がんばろうね」

「はい」

武井はそういって、チームへ戻っていった。

武井はおそらく、まどかの心を察してくれたのだと、感じた。

だから、「お互い、がんばろうね」だったのではないか……と。

まどか武井の後ろ姿を追いながら、そう考えていた。

夜になり、まどかは誠と携帯電話で話をしていた。
もちろん携帯は真穂のものだったが、誠に代わってくれ、今は二人で話をしていた。
まどかはどうしても、今日あった出来事を誠に聞いて欲しかった。
誠なら解るのではないか、という漠然とした期待があった。

ひと通り話を聞いた後、誠はこうまどかに呟いた。

「その武井さんにとっては、陸上しかないのかも知れない」

「……」

「苦しいほどに、それしか自分にはないのかも知れない」

まどかにも何となく誠のいう意味が理解できた。

好きであると同時に、それしかない苦しさ。
それをとってしまったら、何も残らないような怖さ。
だから、それにすがるように一生懸命になってしまう。
苦しいほどに。

「それが本当にいいことかは解らないけれど、しょうがない」

誠はそう呟いた。

「師匠が、勉強が好きだということ、しょうがないことじゃないと思いますよ。だから、武井さんも、大事な一つであって欲しいです」

「うん、そうだね」

誠もうなずいてくれた。

「まどかさんも、それだけ真剣にならなくちゃ……と思い過ぎなくていいと思います」

「そうなんですか？　そこまで一生懸命やらないと辿りつけないのかな……と」

受話器の向こうで、すこし微笑んでくれたような気がした。

「一生懸命しないと辿りつけないこともあります。ただ、人間はあまり強くないとも思っています。苦しいと思ったことは、あまり続かないんじゃないかと」

「……」

「一生懸命やれるものって、苦しくてもどこかで『やっぱり好き』という気持ちがあるからだと思うのです」

「苦しいけど、好き……」

「苦しくてもう嫌だ、と思って離れてみると、やっぱり好きだな、寂しいな、と思えるからこそ、頑張れる。そうしたものだけが、一生懸命になれたり、続けられると思います」

「……はい」

「まどかさんにとって、陸上はそうですよね」

「はい」

「勉強も私たちがそうしてあげますから、楽しみにしていてください」

「……はい！　いつも有り難うございます」

まどかは、すこし冷たくなっていた心が温かくなったような気がした。

やっぱり師匠と話をして良かった。

「ねえ、師匠……師匠も携帯を持ちませんか？」

「えっ……？」

まどかの言葉に、誠が戸惑った。

まどかはそのまま、素直な思いを口にした。

「今日、師匠と電話したかったんです。……また電話させてください」

「……はい……」

電話口で赤くなっている誠の様子が何となく想像できて、まどかは笑った。

静かに、ゆっくりと、夜は過ぎていた。

携帯電話

電話を終えた誠は、手にしていた携帯をじっと見つめていた。

今まで人と話をするのは、緊張したり、苦手な誠だった。

話ができたらいいな、とは思ったが、勉強は楽しかったり、特に話ができなくてもそれほど困ることもなかった。

自分はこのまま大きくなっていくのだと思っていた。

それが、今ではまどかと話をするのを、楽しみにしている自分がいた。

「……」

自分が知っていることを言葉にしただけで、何か生産性があったわけでもない。

でも、何か知識に色がついたような、景色が変わってきたような感触があった。

見つめている携帯も、ただの携帯から、何か温かいものに変わってきていた。

誠は顔を上げ、ずっと息子の様子を見ていた母親に聞いた。

「あの……僕……携帯を……」

話の途中で、真穂が「いいわよ」と答えた。

「えっ……？」

「携帯が欲しいんでしょ。自分のを買っていいわよ。むしろ、いつ

になったら言い出すのかと思ったわ」

「……」

「今は小学生の頃から欲しがると言われているのに、まさか高校生になるまで自分から言わないなんてね……」

真穂が笑っていった。

誠は携帯を手にしながら呆然としていた。

「明日にでも買ってらっしゃい」

「……ありがとう」

誠は真穂に携帯を返しながらお礼を言った。

真穂は、携帯を受け取りながら、にやにやと笑いを浮かべた。

「携帯会社はまどかちゃんと同じでいいわよ。長いこと電話しても、それならば安心だからね」

そう言われて、誠は顔を赤くした。

反論しようとしたが、事実なだけに何も言えなかった。

誠の反応に、真穂は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「まどかちゃん、いい子だからね。私も嬉しいわ」

「……」

真穂は、誠とまどかがこの先に恋をしてくれるといいな、と考えていた。

ふたりともいい子で、いい影響を互いに受けている。
どういう形になるかは解らないが、真穂は二人を温かく見守ろうと決心した。

翌日、学校の昼休み。
図書室にいると、まどかが顔を出してくれた。
最近はよく、曜子もついてきていたが、誠も少しずつ慣れてきていた。

「あの、まどかさん……」

「はい！　なんでしょうか？」

まどかは明るく返事をしたが、誠は次の言葉が言えずに、おろおろしていた。

「？　師匠……どうかしたのですか？」

「愛の告白なら、席をはずすわよ」

曜子の言葉に、誠は急いで訂正した。

「いえ！　……違います。あの……携帯を買いに行きたいのですが、帰りに付き合ってもらえませんか……初めてで良く解らないのです」

まどかは昨日お願いしたことを、誠がすぐに行動に移してくれたことが解って嬉しくなった。

「はい！　喜んで。今日は大会が終わったから、ちょうど部活もな

いですし」

「なんだ愛の告白じゃないのか……」

「曜子ちゃん！」

「おっと、また心の声が……」

誠はほっとした。

曜子が言葉を続けた。

「どうせ、まどかとする電話が一番長くなるから、携帯会社を同じにしたほうがいいんじゃない？」

真穂に言われたことと同じことを言われ、誠は顔を赤くした。

「曜子ちゃん！　……でも確か、私の携帯と真穂さんの携帯は同じ会社だったと思います。大丈夫ですよ」

「……はい」

「いくらかけても通話無料の契約をお互い確認しなさいよ」

「もお！　……でも、私もその方が嬉しいです。師匠」

「まどかさん……」

「いつでも、勉強の質問ができますし」

「……」

誠は微妙な顔をした。
まどかはニコニコしていた。

「誠、まどかの天然は気にしないでくれ。他意はない」

「……はい」

「えっ？　何か？」

誠は少し苦笑いをしたが、ただ自分が勉強以外の話もしたい、という気持ちがあることを自分で発見して戸惑っていた。
初めての気持ちを、誠ももてあましていた。

学校が終わると、まどかと誠は自転車置き場で待ち合わせをして、二人で街へ向かって走り始めた。
場所はまどかがいつも利用している携帯会社の支店だった。
店の前まで来ると、二人は自転車を止めて中に入った。
番号をとって、順番が来るまで展示している携帯を見ながら、機種を二人で検討した。
誠にはまったくこだわりがなかったので、結果的には初期費用のあまりかからないもののなかで、まどかがセンスのいいものを選んだ形になった。

契約になると、誠が事細かに質問し、うなずきながらノートに書きこむので、店員が戸惑っていた。
まどかはその様子を見て笑っていた。

「プランはどれを選んだらいいのでしょう」

誠がまどかに質問した。

「最初は基本使用料のあまりかからないものを選んで、あとで通話料を数カ月分確かめてから適正なプランを選びましょうか」

「なるほど、そうですね。有り難うございます」

「どういたしまして」

まどかはそう言って、誠に微笑んだ。

そんな二人のやりとりに、店員さんが、ふふっ、と笑う。

「素敵な彼女さんですね」

「いえっ、あの……」

店員さんの言葉に、二人は思わず顔を赤くした。

誠はしどろもどろになりながら、

「……友達なんです」

と、つぶやいた。

まどかは誠に改めてそう言われて、何となく嬉しかった。

まどかは誠のことを尊敬する対象として見ていた。

しかし、誠からどう思われているのか、考えたことがなかった。

人付き合いの苦手な誠が、まどかのことを友達と思ってくれていた。

それが何となく嬉しかった。

店員さんは、二人の様子を見て微笑みながら、登録作業を続けてくれた。

契約と登録が終了すると、誠に新しい携帯が渡された。

誠は不思議そうに携帯を眺め回していた。

「電話番号がきまりましたね。お互いに登録しましょう」

まどかが言うと、誠が戸惑った。

「登録……ってどうやるのですか?」

「私の方でやります。師匠なら、多分あとで説明書を熟読されて、すぐに解ると思いますけど」

まどかはそう言いながら、誠の携帯と自分の携帯を相互にいじって登録を行った。

互いに試しに電話をかけあってみて、つながることと登録がされていることを確認した。

「はい、これで完了です」

ただひとつ、まどかの番号だけの入った携帯。

初めての電話もまどかの名前が残っていた。

誠は携帯を受けとって、やっぱり眺め続けていた。

「あとで、メールアドレスが決まったら教えてくださいね。私のア

ドレスは登録しておきましたから」

「メールアドレスって、後から決めるのですか？」

「自分で変更ができるのです。ずっと使う大切なアドレスですからよく考えて決めてくださいね。数字も入れると、変なメールが来にくいとか、フルネームは入れないほうがいいとか言われています」

「……はい。またよく読んで、母にも相談してみます」

「私に電話で相談でもいいですよ。師匠」

「あっ、そうですね。電話はできますからね」

「はい！　これからはいつでも遠慮なく連絡下さい」

まどかの笑顔に、誠も笑顔を浮かべてうなずいた。

夜、誠は真穂とメールアドレスについての検討会を行った。

「ｌｏｖｅ―ｍａｄｏｋａはどう？」

「却下します」

「Ｍａｄｏｋａ－ｍａｋｏｔｏとか」

「……そこから離れてください」

「つまらないなぁ」

「……」

「せっかくまどかちゃんのために買ったのに。ここでアピールしなくてどうするの」

「アピールする必要はないですから。無難でお願いします」

「じゃあ、ｍａｋｏｔｏに今日の日付を加えるというのは」

「……無難ですね。そのあたりで」

「二人の携帯記念日っていうことで。きゃっ！」

「……」

「黙々と登録しない！」

「登録できた」

「じゃあ、さっそくまどかちゃんにテスト送信してみたら」

「そうだね」

誠は初めてのテンキー入力に四苦八苦しながらも、簡単なメールを送信した。

『メールアドレスを決めました。よろしくお願いします。誠』

ほっとして携帯を触っていたら、すぐに返信が届いた。

『登録しました（＊＾―＾＊）　時折、メールもさせてもらいますね。まどか』

あまりに早い返信に驚きながらも、メールをもらうと嬉しいのだな、と何度もメールを読み返していた。

「にやにやしてメールを読まない。何か、いいことでも書いてあったの？」

「……何も。でもなにか嬉しいもんだな、と思って」

真穂は笑って言った。

「今まで楽しんでこなかった分、たくさん楽しみなさい」

誠はうなずきつつ、いつもの勉強机で行き、取扱説明書を勉強し始めた。

「おっ、おっ……お邪魔します」

誠は緊張のあまり、何度もどもってしまった。

「どうぞ、お待ちしていました」

まどかの母親が誠を招き入れた。

いつも一柳家で夕食を御馳走になって申し訳ない、とまどかの母親が誠を招待したのだ。

真穂はたまには自分で作るから行ってらっしゃい、とにこやかに誠を追い出した。

誠の緊張は極度に高まりながら、言われるままに中に上がった。

「師匠、緊張しすぎです」

まどかが誠の様子に笑いながら招き入れた。

居間に案内され、ソファーに座った。

家はいわゆる日本家屋だが、中はややリフォームされていて、居間はソファーやカーペットなど、やや洋風になっていた。壁には昔の家族写真などが飾られ、一方の壁にはテレビが設置されていた。

「喉が乾いたでしょう。お茶をどうぞ」

母親が冷たい麦茶を出してくれた。

「有り難うございます」

誠は深く一礼した。

「もうすぐしたら、夕食が用意できますから、それまでこちらで待っていてくださいね」

「はい」

そう言って母親は台所へ消えて行った。

代わりにまどかが現れて、横のソファーに座った。

「ははっ、何か変な感じですね」

「はっ、はい」

「もう。少しは緊張をといてください。師匠、これも勉強です」

「……はい」

そうは言われたが、誠の緊張はなかなかとれずにいた。

「……いい家ですね」

「そんなことないですよ。もうだいぶ古いです」

「前に話していたお祖母様もここに」

「そうです。ここはもともと祖父母が建てた家なんです」

「そうなんですか」

誠はあらためてあたりを見渡した。
ふと一枚の家族写真が目についた。

「いいですよ、見てもらっても」

まどかの言葉に、誠もうなずいて近くに寄って見てみた。
まどかが10才ぐらいの時の、おそらく旅行先での写真のようだ。
まどかと両親と祖母が一緒に写っていた。

「かわいい……」

幼いまどかの写真に誠が思わずつぶやいた。

「あっ、ありがとう……」

まどかの顔が赤くなると、誠も気づいて顔を赤くした。

「えっ、えっと。旅行の写真ですか？」

「はい。家族で温泉に行ったときの写真だったと思います。なかなか家族全員の写真がないので、これを飾っているようです」

「いい写真ですね」

まどかも笑顔でうなずいてくれた。
誠は、まどかがとても家族に愛され、大事に育てられていることを感じた。
いいご両親なのだろうな、と思った。

「用意できましたよ。さあこちらへどうぞ」

母親が招き入れた。
４人がけの食卓に、誠の分の食器も用意されていた。
「今日、父は遅くなるようなので、先にいただきましょう」
まどかの声に、誠は少しほっとしながら両手を合わせた。
「いただきます」「いただきます」
母親が笑顔で「どうぞ」と答えた。
夕食は肉じゃがだった。
誠は最初にお味噌汁をいただき、
「とっても美味しいです」
とつぶやいた。
「ありがとう。誠さんは家で食事を作られているんですって？」
「はい」
「いつもまどかがお世話になってしまって」
「いえ、大したものを作っていないので、申し訳ないです」
「そんなことないですよ。いつも美味しいです。私は大して作れないので、凄いです」
「母が働いているので、しょうがないです」

「まあ、えらいわ」

まどかの母は、誠のことに興味津々だった。

「入学試験で首席だったとか」

「あっ、はい。入学したときに先生から言われました」

「凄いわね」

「いえ、そんな……」

誠が恐縮して、声をつまらせた。

「どうやって育てられて、勉強ができるようになったのかしら」

「……母は勉強のことはまったく……放置されていました」

「先生に褒められたり、自分で将来の夢を見つけて、勉強するようになったみたいよ」

まどかが代わりに補足した。

「ねえねえ、今日は私も一緒に聞いてもいいかしら」

「えっ、勉強する様子をですか？」

「うん」

「えっ……！」

まどかも誠も驚いたが、母親は真面目なお願いだったようだ。
しばらくして食事がすんで、母親が食器を食洗機に入れる間に、まどかも勉強の用意を整えた。
誠が戸惑っていたが、用意が整い、二人が座って誠の話が始まるのを待ち始めたことで、誠も覚悟を決めた。
一度、大きな深呼吸をすると、誠が話し始めた。

「今日は、国語の話をしようと思います」

「国語？」

「はい。前回、大切なのは読み、書き、計算、と話して計算の勉強をしてもらっています」

「はい」

「今回は、読み、書き、について話をしたいと思います」

「はい！」

元気の良い返事に、誠は一度うなずいてから、言葉を続けた。

「皆さん、国語という授業が何故あるのか、解っていない人が多いと思います。こうして日本語で会話できるのに、何を勉強するのか。平仮名や漢字を覚えて、読むことが出来るようになり、感想文などを書いて文書をかけるようになったら、いいのでは、と」

「正直、私もそう思っています。違うのですか？」

「実は日本語の読む書きにも勉強すべきことがたくさんあります。短時間で理解してもらえるかわかりませんが、実例を用いて話してみます」

「……はい」

「宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』という詩をご存知ですか？」

「雨にも負けず、風にも負けず……というやつですか？」

「はい。一度、全文を読んでみましょう」

そう言って、誠が目を閉じ、暗唱し始めた。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

欲ハナク

決シテ瞋(いか)ラズ

イツモシズカニワラッテヰル

一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲ食ベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ
東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコワガラナクテモイイトイヒ
北ニケンクヮヤソショウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハ
ナリタイ

誠は静かにゆっくりと暗唱し、そして目を開けた。
まどかは全文を暗記していたことも含め、その朗読に感動した。

「師匠、うまく言葉に出来ないのですが、とても良かったです」

誠はうなずいた。

「一つ目は、まず一読したときに受ける言葉の美しさや、内容から来る感動です。これは比較的、理解されやすいところです。次は時を超えて残った文章だけが持つ力です。これを１００回程度音読したり、筆写して暗記してください」

「１００回ですか……」

「おおよその目安です。例えですから、やらなくてもいいですよ」

肩を落としたまどかをなぐさめるように、笑いながら誠は続けた。

「１００回ほど口にしてなじむと、本当の意味で理解が進みます。自分の行動が変わるほどです。そして、時を経てまた読み返すと、また更に違う感触を持って読むことができます。これが良い文章の持つ、強さであり、美しさです。こうして初めて、文が自分のものになったことになり、読み・書きができたことになります」

「……」

まどかは唖然としていた。自分が理解していた国語とはまったく違う次元の話のようだった。

「次に背景についてです。この文書はどのようにして書かれたか。宮沢賢治についてなにかご存知ですか？」

「東北の……確か、石巻に住んでいた人で、注文の多い料理店や銀河鉄道の夜を書いた人、ということぐらいしか」

誠もうなずいた。

「そうですね。もう少し解説を加えましょう。宮沢賢治は比較的裕福な家庭に産まれました。一方で東北は農家が多く、地震や津波などの災害、冷害などの天候不順から、貧しい家が多くあり、宮沢賢治は申し訳ない気持ち、何か人の役に立ちたいうきもちを小さい頃

から強く持っていたようです」

「……はい」

「現在の岩手大学農学部に首席で合格し、卒業後は37才という若さで亡くなる日の前日まで肥料の相談に応じていたと言われています」

「童話を書いて食べていたわけではないのですか？」

「生前には、原稿料はほとんどもらったことは無いようです」

「……」

「強い仏教信仰と相まって、土を愛し、人を愛していました。自らが肺の病気と長くに渡り療養を続け、最後は肺炎で亡くなっています。この詩は、療養生活をしていた亡くなる2年ほど前の手帳に書かれたものです」

「……知りませんでした」

「こうした背景を知って、もう一度、読み返してみてください。また違った思いで読めると思います」

確かに、まどかにも先程の詩がただの言葉ではなく、人の人生、思いの詰まったものに感じられるようになってきた。

そうなると、また一層、美しいと感じられるようになってきた。

「また、あらためて、何となく感動しました」

「宮沢賢治については、グスコーブドリの伝記をお勧めします。これは、ブドリとネリという兄・妹が、冷害のために農家をしていた両親がいなくなってしまい、残された二人も離れ離れになります。兄のブドリは倒れているところを拾われて、働きながら勉強して、火山局に就職します」

「はい」

「そこで、再びあの小さい時にあった冷害が起きます。このままでは、あの時の同じように飢饉が起こり、たくさんの命が落とされてしまいます。ブドリは火山噴火を人工的に起こすことで気温をあげられ、冷害を防げることがわかります。ただ、噴火を起こすためには誰か一人、火山の近くでの作業が必要で、命を落とす可能性が高かった」

「……」

「ブドリは自分がやると名乗りを上げて、無事に噴火させ、冷害を防ぎました」

「ブドリは亡くなったのですか？」

「最後は『ブドリはそしてちょうど、このお話のはじまりのようになるはずの、たくさんのブドリのおとうさんやおかあさんは、たくさんのブドリやネリといっしょに、その冬を暖かいたべものと、明るい薪で楽しく暮らすことができたのでした。』で終わっています。書いていないのです」

「……でも亡くなったのでしょうね」

「おそらく」

「温かいけれど、悲しいお話ですね」

「宮沢賢治自身も妹がいらして、彼よりも先に亡くなっています。」

「……」

「この話は彼の人生と思いが、とてもよく出ている作品なのです。とても良い話です。一度、読んでみてください」

「……はい」

まどかは深くうなずいた。

国語と宮沢賢治（後書き）

宮沢賢治さんの作品は著作権が切れているため、インターネットで全文が読めます。グスコーブドリの伝記もありますので、皆さんよろしければご一読下さい。

国語と父親

「ところが、大学の国語というか現代文の試験は、これとはまったく違います」

誠の言葉に、まどかはびっくりした。

「違うのですか？」

誠はうなずいた。

「試験には曖昧さが入ってはいけません。解答はすべて理論的に説明ができなくてはいけないのです。そうでなくては、テストで公平に評価ができませんから。それゆえ、文書を理論的に読み解く力が必要となります」

「理論的……ですか？」

「はい。たとえば新聞などは、正確に物事を伝えなくてはいけません。読む力があれば、誰もが同じ情報を正確に受け取れなくてはいけない。そのために助詞であるとか、接続詞であるとかが正確に使われ、具体的・要約が適正に行われていなくてはいけません」

「……後半が良く解りませんでした」

誠が笑顔を浮かべた。

「たとえば、『海へ行く』か『海に行く』かで意味が違ってくる。『遠いから行く』なのか『遠いけれど行く』なのか。要約して何が

言いたいかを明確に示しつつ、具体例を用いてわかり易く説明もしないといけない。そういった事を正確に読み、正確に書けることが要求されます」

「むっ、難しそうですね」

「でも、ちゃんと会話をしているのですから、無意識にそのあたりは使っています。それを意識化して、知識として学び直すのです。実は慣れるとそれほど難しいものではありません」

「そうなんですか」

「高校2年か3年あたりで、良書と言われている問題集を2~3冊程度をやりこめば、けっこう点数は取れるようになります。これは、他の教科と比べると意外に負荷が少ない割に効果があります。また他の教科にもいい影響があるので、試験のためにも、今後文書を読んだり書いたりするためにも、ぜひやっておきたい分野です」

「はい、わかりました」

まどかの素直な返事に、誠はにっこり微笑んだ。

「今は、まだ教科書と授業を、こうしたことを意識しつつ、受けていればいいと思います。また時が来たら、よい問題集を探しておきますので、それをやりましょう」

「はい、有り難うございました」

まどかが一礼をして、誠の話は終わった。

それまで黙って聞いていた母親が、感嘆の声を上げた。

「びっくりした。こんなことを教えてもらっているなんて、思ってもいなかったわ。私も勉強になっちゃった。なるほどね……」

我に返った誠が、母親の言葉に緊張して赤面した。

「てっきり、学校で解らないところを教えてもらっている程度かと思っていた。勉強の方法というか、基本・根本ね……うん、良かった」

母親は何度もうなずいた。

まどかは自分のことを褒められたように喜んでいた。

「ねっ、凄いでしょ。いろいろ教えてもらってから、勉強が少しずつだけど理解できるようになってきて、楽しくなりそうなの」

「解る気がする。私も宮沢賢治を読み返したくなったわ」

「本あるの？」

「たぶん納戸の中にあったと思う。昔は読んだのよ。銀河鉄道の夜ぐらいしか記憶はないけど」

母親はそう言って笑った。

「見つけたら貸して。私も読んでみたい」

「一緒に読もう。何か楽しみができたわ。ありがとう、誠さん」

誠は恥ずかしげに頬をかき、うなずいた。
緊張した夕食は、いつしか温かな雰囲気で包まれていた。

「今日はご馳走さまでした」

「遅くまで引き止めてごめんなさい」

途中で父親も帰ってきて、母親がそれまでにあった出来事を興奮して報告し、さらに納戸へ行って宮沢賢治の本を探してきて誠に朗読、解説させたりと、にぎやかに時間が過ぎていた。
父親も、誠の真面目な容姿、謙虚な姿勢におおよそ好意的な印象を持ったようで、歓待をしてくれた。

誠が帰るときは、すっかりあたりは闇に覆われ、静かになっていた。

「それでは」

まどかの家族が見送る中、誠は一礼して自転車で帰っていった。
姿が見えなくなるまで見送り、三人は家の中に戻った。

「想像とはまた違ったけれど、いい子で安心したわ。ガリ勉で勉強ができるだけとも違って、ちゃんと勉強が楽しいということが伝わってきて……今日は楽しかったわ」

「そうだな。勉強ができることにおごっていない姿勢がいいな」

両親の感想に、まどかは嬉しくなった。

「良かった。そう思ってもらって」

「また連れてきてね」

「うん、解った」

母親の言葉に、まどかは嬉しそうにうなずいた。

その夜、まどかは誠に感謝のメールを送った。

『師匠、今日は有り難うございました。両親がとても褒めていて、私まで嬉しくなってしまいました。母がまた来て欲しい、とのことでした。　まどか』

しばらくして誠から返信が届いた。

『緊張していたので、ほっとしました。ありがとう。また行かせてください』

その後に書かれていた言葉を読んで、まどかははっとした。

『僕には父親がいないので、まどかさんの父親のような温かな、どっしりとした人と出会えたのは、僕も嬉しかったです。　誠』

そうだ、事情は聞いていないが、誠には父親の影がなかった。

誠や真穂の話に、父親の話は一度も出てきていない。

何があったのだろう……気になるが、自分から聞くことはできない。

ただ、自分の父親がその代わりとして、誠に父親としての温かさや安心感を与えることができたのであれば、それはまどかにとっても嬉しいことだった。

まどかはカチカチとメールを打ち始めた。

『父もそう思ってもらって、嬉しかったと思います。またぜひ、会ってあげてください。おやすみなさい。　まどか』

まどかは携帯を閉じた。

まどかはごそごそと布団入り、携帯を脇に置きながら、眠りに入った。

期末試験とカラオケ

期末試験は、大きな歓声と共に終わった。
何しろ、学生にとって期末試験の終了は、夏休みのはじまりを意識させる。
気分が浮き足立ってくるのは、仕方がない。

「なあ、また皆んなでどこかいくか？」

前回と同じように、宗志が全員に声をかけた。
反応はおおむね良かった。
前回のボーリング大会をきっかけにして、あの時のグループから仲が良くなった人たちが多数いた。試験の後の開放感もあって皆んなで何かをしたい気持ちがあったようだ。
少数でやりたい数グループ、帰る数人をのぞいて、また多くの人達が参加することになった。

「まどかちゃん達も参加するよね」

「あっ、うん。曜子はどう？」

「暇だし、いいよ」

宗志は嬉しそうにうなずいた。

「そうだなぁ……今回は前回行けなかったカラオケの方にしようか！」

宗志の声に大半が喜びの声を上げた。

不満げにつぶやいた人もいたが、周りに誘われるとほとんどの人が受けてくれた。

まどかは見渡して、誠を探した。

誠は身支度を整えて、ちょうど帰るところだった。

誠も気にしていたのか、まどかと視線が合うと苦笑いをして、ごめん、といったように頭を下げて歩き始めた。

まだ誠には壁が高いらしい。

声をかけようか、まどかも悩んだが、あまり無理には勧められなかった。

まどかも軽く頭を下げて、誠を見送った。

しょうがないとは思いつつ、何となくまどかは残念なような、寂しい気持ちになっていた。

その表情の変化を見ていた人が二人いた。

曜子と宗志だった。

カラオケでは、7人で一部屋に入った。

前回のまどか、曜子の他に、仲良くなった凛という女の子。

それに男は、宗志、涼、玲、それに明が加わった。

凛という女の子は、まどかのすぐ近くの席の女の子で、手芸部に入っている、大人しい印象の子だ。

ぱっちりとして目、肩のあたりで切りそろえたまっすぐの髪、言葉も少なめだが笑顔がとても素敵な子だった。

明は他の男三人と比べると、どちらかと言えば文化系で、眼鏡をかけていてやや痩せ気味。しかし意外に明るくて、三人と仲がいい。

この7名でカラオケが始まった。

元気な男性陣が、競って得意な歌を入れ始めた。
男性ボーカルの元気な歌が多いが、やや狂う音程ぐらいは気にしない元気さが良かった。
曜子は意外だがアニメソングを選んで熱唱しており、共感した男達から熱狂的な声援を受けていた。

「まどかちゃんは何歌う？」

宗志が声をかけてきた。
まどかはまだ何を歌うか考えていたが、好きな女性ボーカルがいたので、その人のレパートリーから一つ選んで入力した。

恋人への愛する気持ちを詩にした歌だった。

まどかが歌うと、男性陣は自分に向けて歌ってくれていると勘違いしたように、喜びをあらわにして声援を送った。
きれいなソプラノの声が部屋の中に響き渡り、それぞれが聞き惚れていた。
歌が終わったときには、大興奮と言っていい様相の男性陣に、まどかは笑顔でお礼を言った。

曜子と凛の間の席に座り、ふぅっ、とため息をついた。

「アイドルとファンクラブのようで、良かったわよ」
と曜子。
「まどかさん、上手ですね。とっても合っていました」
が凛の評価だった。

「アイドルとファンクラブって何よ」

「そのまんまだけどね。まあでも、男性陣は明るくて盛り上げてくれるから、楽しいわ」

凛は、「私は緊張します」と言いながら、順番となって席をたって歌い始めた。

しずかな可愛らしい歌で、これはこれで嬉しそうな男性陣だった。

空いたまどかの横の席に、宗志が座ってきた。

「まどかちゃん、はい飲み物。歌、上手だったよ」

「あっ、ありがとう」

まどかはそう言って、ちょうど喉が乾いていたので、冷たいお茶をゆっくりと飲んだ。

飲み終わって一息ついたのを見て、宗志がまどかに問いかけてきた。

「まどかちゃん、一つお願いがあるんだ」

「なに？」

まどかは宗志を見た。

宗志はにこやかな、しかし困ったような表情をしながら言った。

「実はちょっと服を買わないといけないんだけど、あまり俺センスに自信がなくて、一緒に行って選んで欲しいんだ。夏休みに半日ぐらい時間ないかな」

「えっ？　私が？」

「うん。まどかちゃんがいいんだ。女性から見て、いいと思うものを選びたいんだ。帰りにお昼ご馳走するから」

「うーん……私もそれほどセンスがいいとは言えないけれど……」

「お願い！　助けると思って」

悩んだまどかだったが、困っている姿を見せられると、断ることができない。

「うん、解った。私で良ければ」

「やった！　ありがとう。じゃあ日程と場所はまたメールするね」

「うん」

宗志は嬉しそうにはしゃいでいた。

まどかは何がそんなに嬉しいのだろうと思いながら、「ちょっとトイレ……」と席を立った。

まどかが部屋を出たあと、開いた宗志の隣に曜子が移動してきた。

「桜井くん。あんた、まどかと誠の関係を見て、焦ったな」

曜子が宗志にそう呟くと、宗志は慌てた。

「そっ、そんなこと……」

言葉が続かず、やがてあきらめて息をつくと、曜子につぶやいた。

「そうだよ。その通りだよ」

「まどかの断れない性格を知っていてやるなんて、ちょっと強引だぞ」

「しょうがないだろう。1学期は何も進展できず、このまま夏休みに入ったら一ヶ月以上会えない。その間に何かあったら、と思ったら、居ても立ってもいられないんだ」

宗志はふてくれたようにつぶやいた。

さいわい二人の会話は、カラオケの音で二人以外には聞こえていないようだった。

今は、明がずいぶんと古い歌をうたっていた。

「あの子が受けたものを邪魔はしないけど、もしまどかが悲しむようなことをしたら覚悟しておいてよ」

きれいな顔立ちの曜子が、静かな声でつぶやくと凄みがあった。

宗志もすこしふてくれたようにしながら、うなずいた。

「当たり前だろ。嫌がるようなことなんかして、嫌われたくない。少なくとも仲の良い友達ではいたいんだ」

「まどかは桜井のことも信頼している。よろしく頼むよ」

「ああ」

ちょうど曲が終わり、二人は拍手をして話し合いも終りにした。

まどかが扉を開けて戻ってきて、曜子の隣に座った。

「他の部屋も盛り上がっていて、楽しそうだった。通路でも声をかけられちゃった」

まどかは嬉しそうに曜子に話しかけた。

「そう。それは良かった。楽しんでる？」

「もちろん！」

笑顔のまどかに、曜子は思わず頭をなでた。

「ん？　どうしたの？」

「いや、まどかはかわいいなぁ、と思って」

素の顔で曜子に言われて、まどかは顔を赤くした。

「何か恥ずかしいけれど……嬉しいかな。頭なでられるのも好きだし」

曜子は調子にのって、まどかを引き寄せて抱きしめた。

「うーん、かわいい。いい匂い」

「ちょっ、ちょっと曜子！」

「そこ！　女同士で近づきすぎ！　こっちにも分けてくれ！」

歌っていた宗志がマイク越しに文句を言った。

「やだよーだ。分けてやるもんか。凛ちゃんならいいよ」

そう言うと、嬉しそうに凛が近寄ってきて、反対側からまどかを抱きしめた。

まどかの顔がより一層赤くなった。

「まどかさん、かわいい！　やわらかぁーい」

男性陣が文句の大合唱の中、曜子と凛に抱きしめられ、ちょっと嬉しい気分のまどかだった。

夏休みの課題

終業式の日、通知表とテストを持って、まどかは一柳家をおとずれた。
先に家に帰って母親に見せて、だいぶ上がった成績表に褒められ、まどかもやや上機嫌だった。

もちろん、真穂は盛大に褒めてくれた。

「まどかちゃん、天才！　才能がある！　たった一学期でこんなに点数が上がるなんて。いくら私たちが教えても、勉強するのはまどかちゃんだからね。よく頑張った！」

真穂さんに抱擁されて頭をなでられてて、まどかはとても喜んだ。

「有り難うございます。真穂さん」

「んーっ、かわいい」

真穂も抱きしめているうちに、別の感情になってしまったようだ。
頬まですりすりしてきた。
まどかは笑ってそれを受けていた。

「数学が少し上がってきたのが良かったね」

誠が冷静に、でも笑顔でそう言ってくれた。

「はい。師匠のおかげです。まだドリルは中学1年ですが、それでも計算が少しずつ早くなってきましたし、ちょっとだけ苦手感が和

らいできました」

誠がうなずいた。

「夏休みも、そのドリルを続けてください」

「はい」

「では、夏休みの課題です」

「はい、師匠！」

まどかはいつものように、ノートとシャープを用意した。

「数学のドリルを続けてください。この夏で中学まで仕上げるつもりでいきましょう」

「はい」

「ただ、それだけだと行き詰まってしまうので、楽しみも一つ」

「楽しみ？」

「国語の勉強です。開いた時間に、本を読んでもらおうかと思います。どれも読み始めると、きっと止まらないと思います」

誠が選んだのは三冊だった。

壺井栄『二十四の瞳』、三浦綾子『塩狩峠』、吉野弘詩集。

「少し悲しい話が多いけれど、心に響く作品です。まどかさんの母親なら持っているかもしれません。図書館で借りるか、購入してもいいかもしれません」

「はい」

「読むときは集中して、黙読しながら、頭の中に映像が浮かぶように読んでください。できれば速度は早めに、細切れではなく、なるべく一気に長く読むように。読み過ぎてしまうようであれば、時間を区切ってください」

「はい。解りました」

「そして、読んだらＡ４・１枚分に要約を書いてください」

「要約ですか？」

「そうです。感想文ではなく、この１枚を見れば、誰でも中に書いてあることが解るような要約です。これはキーワードを見付け出す訓練、要約する訓練、表現する訓練になります。また見返すことで、本を一回読み返すような効果もあります」

「なるほど」

「まずは読むこと書くことを楽しんでください。あとは英語です」

「はい」

「英語は中学英語から現在までの教科書を、音読・筆写を繰り返して、頭の中にすり込んでください。毎日、少しずつでいいですから」

まどかは言われるままにノートに書き込んだ。

「あとは学校の宿題もありますし、このぐらいかな。できれば宿題は夏休みに入ったら、なるべくすぐに終わらせてください」

「……今までは夏休みの終わりギリギリにやっていました」

真穂がそれを聞いて笑った。

「私も、私も」

「僕は、一日で日記まで全部やってしまったことがあります」

「それは駄目じゃないですか？」

まどかの指摘に、誠は笑って髪をかいた。

「宿題が楽しくて、つい」

「宿題が楽しいという人を、私、初めて見ました」

まどかの言葉に、誠は恥ずかしそうに笑った。

褒めたわけではなかったが、誠の笑顔に、まどかもつられて笑ってしまった。

帰り道、まどかは誠に問いかけた。

「師匠は夏休み、どうしているのですか？」

「僕はいつもと変わりません。家にいるか、図書館にいると思います。お盆の時は、祖父母の家へ行っているかも知れません」

「遠いのですか？」

「隣の市なのでそう遠くはないのですが、お盆と正月ぐらいですね。行くのは」

「そうですか……私はもう、ここが生まれ育ちで、祖父母も同じ家でしたから……」

めずらしく、誠の方からまどかに質問をしてきた。

「まどかさんは夏休み、どうされているのですか？」

「私は陸上と勉強……かな。お盆の頃に家族旅行があると思いますが。そのぐらいです」

宗志との約束が頭をよぎったが、あえて言うほどのことでもないかな、とすぐに過ぎていった。

「良ければ一日、一緒に出かけませんか？」

誠からの言葉に、まどかはびっくりした。

「師匠からお誘いしてもらえるなんて……私がときおり図書館にお邪魔しようかなと思っていたのですが……」

誠は恥ずかしそうに笑いながら答えた。

「と言っても、勉強の続きなんですが」

「あっ、そうなんですか」

まどかは、やっぱり、と笑った。

「あまり興味はないと思うのですが、科学館に行きませんか」

「……科学館ですか」

まどかは記憶をたどり、小学の頃に行った市立の科学館を思い出した。

けっこうな広さがあって、確かプラネタリウムもあった。

「物理や科学を教える導入としていいかなと、考えたのですが……」

「あっ、なるほど……はい、解りました。喜んで」

まどかがにっこり微笑むと、誠はほっとした。

「高校生の女の子は科学館なんて楽しくないかな、とちょっと心配していたので。でも、けっこう楽しいところですよ」

「昔の記憶しかないのですが、でも、何となく楽しみになってきました」

「では、また電話かメールします」

「はい、いつでも」

まどかの笑顔に誠も安心して、自然と笑顔が浮かんだ。
それを見たまどかもまた、嬉しそうに笑った。

暑さの残るアスファルトの夜道に、二人の足音が軽やかに響いた。

宗志とのデート

日曜日の朝、今日は陸上もなく、まどかは自室で外に出かける身支度をしていた。
宗志と頼まれた洋服を買いに行くことになっていた。
いつもならば、陸上で着慣れたジャージなのだが、さすがにそれではいけないかな、とまどかは夏らしい涼し気なワンピースを選択した。
化粧はもともとしないが、リップクリームと日焼け止めぐらいはしておかないと、夏休みを終える頃には小学生のように黒くなってしまいそうだった。
少し伸びてきた髪を可愛らしいピンでとめて整えて、自分の姿を鏡で確認した。

「こんなところかな」

花模様の小さなバックを手にとって、まどかは家を出ることにした。

「行ってきまーす」

台所から「行ってらっしゃーい」という母親の声が聞こえた。
成績が良かったせいか、それとも陸上と勉強ばかりの生活で信頼されたのか、最近はだいぶ放任されるようになってきていた。
まどかは特に何も聞かれることなく、靴を履いて外に出た。

外は夏の始まりとは言え、もう十分に強い日差しがアスファルトを照らしていた。

今日も熱くなりそうだった。

「ちょっと急がないとだめかな」

まどかは腕時計をちらっとみて、自転車にまたがった。

「あー、ワンピースだと乗りづらい」

スカートがめくられないようにしながら、まどかは自転車を走らせた。

今日は、駅で待ち合わせの予定だった。

まどかはいつものように速度が出し切れないなぁ、とつぶやきつつ、遅れないように先を急いだ。

１０分ほどして、駅についた。待ち合わせは駅の改札口だった。

自転車をとめて階段を上がり、改札口を確認すると、宗志はもう先についていた。

宗志はジーンズにTシャツ姿だったが、それぞれちゃんとおしゃれなものを着ており、髪も整髪剤で整えて、いつもより格好良く見えた。

念のため時間を確認したが、ちゃんと5分前にまどかも到着していた。

「お待たせ！」

宗志もすぐにまどかに気づいて、笑顔で手を上げた。

「間に合っているから、大丈夫だよ」

まどかは宗志のもとへ駆け寄った。

「急がなくてもいいよ。今日は俺のほうがお世話になるんだから」
「待たせたかなって思って。いつから待っていたの？」
「すぐ前だよ。ありがとう。じゃあ切符買っていこうか」
「うん」

二人は目的地までの切符を買って、改札口を通り、ホームへ出た。
電車は間もなく到着するようだった。

宗志は、あらためてまどかの様子を見て、嬉しそうに言った。
「やっぱり私服はいちだんとかわいいね。似合っているよ」

まどかは微笑んで答えた。
「ありがとう。最近は制服かジャージばっかりだったから、ちょっと悩んじゃった」

「あはは、なるほど」

二人が会話をしている間に、電車がホームへ入ってきた。
ドアが開いて、二人は電車に乗り込んだ。
目的地は3駅向こうで、それほど時間はかからない。
まだ朝が早いためか、それほど混み合っていなかったが、二人は扉近くの場所で立っていることにした。

まどかから、宗志に質問した。

「では、今日のコンセプトと予算をお願いします」

笑顔で質問するまどかに、宗志も笑って答えた。

「普段着られる、まどかちゃんが素敵だなと思えるものを。予算は2万円です」

「スボンとシャツ？」

「そうだね。下着や靴はいい」

「了解。でもどんなイメージかな……」

あらためて、宗志を眺めてみた。

細いが筋肉質の体型の割に、顔はやや細く、穏やかな表情をしている。

格好いいというより、優しそうな、という表現のほうが合うかも知れない。

どこか大人っぽさもあって、今日のジーンズとTシャツはよく似合っていた。

「今日の服装もおしゃれだよ。似合ってる」

「ありがとう。まどかちゃんにそう言ってもらえると嬉しいな」

宗志は本当に嬉しそうに笑った。

「私は……そうだね。清潔感があって、オーソドックスな方が安心するかも」

「そうなんだ。いいよ、それでお願いします」

「はい」

まどかも笑顔で答えた。

街に着くと、二人であたりをつけていた店舗をいくつか回った。海外のカジュアルなブランドの店や、センスのよい服を扱っている個人店など、いくつか試着をしながら、あれがいいかな、これなんかどう、と相談していた。

いくつの候補に絞り込み、結局最後は比較的メジャーな海外ブランドの、ややカジュアルだが襟のあるシャツ。そして、シンプルなチノパンとなった。

予算範囲内で、すこしあまりが出たぐらいだった。

成果は上々で、ふたりとも満足気だった。

宗志は服の入った袋を持つと、まどかに声をかけた。

「これで無事に買い物完了。ありがとう、いい物を買えたよ」

「どういたしまして。よく似合っていたよ」

「じゃあ、お礼のお昼を食べに行こう」

「うん。お店はどうしよう」

宗志はちょっと恥ずかしげに頬をかきながら、まどかに言った。

「実は、ひとつ行ってみたい店があって予約してあるんだ」

「あっ、そうなんだ。じゃあ、そこに行こうか」

「ああ。カジュアルなイタリアンレストランなんだけど、釜でピザを焼いてくれて美味しいらしいんだ」

「美味しそう！　楽しみ」

まどかの笑顔に、宗志も嬉しそうだった。

宗志が連れてきてくれた店は、ランチタイムということもあるが満席の状態で、予約がなければ入れなさそうな所だった。

二人でそれぞれパスタやピザとサラダを頼み、分け合いながら美味しく食べることができた。

特に窯焼きのピザは生地がサクサクと軽く、熱々のトマトとチーズが合わさって、予想以上の美味しさだった。

二人は日々の学校のことや、今日の買い物のことなどを話し、食事の時間を楽しく過ごすことができた。

会計は宗志がすませてくれた。

値段は教えてくれなかったが、ランチとは言え、高くなかったかまどかは心配になった。

「ご馳走になっちゃったけど、私も出すよ」

「いいから。今日は俺のお願いで時間をとってもらったんだから。気にしないで」

「うーん……」

「やっぱり、まどかちゃんは可愛いし、明るいし、親しみやすいし……今日は本当に楽しかった。ありがとう。お昼代なんて安いもんだよ」

「……解った。ご馳走さまでした」

「どういたしまして」

宗志は笑顔で、まどかにそう言った。

帰りも同じ電車にのり、駅で別れることになった。
駅からは帰る方向が違うのだ。

帰りぎわ、宗志がまどかに言った。

「今日は本当に楽しかった。またできたら、一緒にどこか行こうな」

その言葉に、まどかは少しだけ困った表情をした。

「ありがとう。でも陸上と勉強があるから、なかなか時間がとれないんだ」

宗志の表情がすこし曇った。

「できたら、でいいんだ」

「うん……解った。でも、桜井くんだったら声をかければ、誰だって付き合ってくれるよ！」

まどかとしての素直な気持ちだったが、宗志にはつらい言葉だった。

しかし、宗志はできるだけ表情には出さないように笑顔を浮かべた。

まどかが宗志の気持ちに気づいていないことは解っていた。

そして、自分に気持ちが向いていないことも解っていた。

今日の時間が、少しでも気持ちをひかせることができたかな、と期待していただけに落胆の気持ちは大きかった。

自分は今まで以上に彼女のことが好きになっていただけに。

「そうか……うん、解った。でも、なにか困ったとき、いつでも力になるから俺のことを思い出して、声をかけてくれよな。今度は代わりに俺がまどかちゃんの助けになりたい」

「うん、ありがとう。桜井くんは優しいね」

まどかの笑顔が眩しいだけに、宗志はつらかった。

「じゃあ、また学校で！」

宗志はそう言うと、反対側へ歩き始めた。

「さよなら！」

まどかも手を振って、しばらく宗志の姿を見ていた。

そうして二人の時間は終わった。

悠太の告白

家に着くと、まどかはシャワーを浴びて、汗を流した。
体を拭いて、楽な部屋着に着替えてしまうと、携帯に着信があることに気づいた。

誰かと思って見てみると、曜子からだった。
まどかはすぐにかけ直した。
電話はすぐに出た。

「曜子ちゃん？　私、まどか。電話くれた？」

「うん、もう帰った頃かな、と思って。それともまだ、桜井くんがいる？」

「！　何で会っていたこと知ってるの？」

「あっ、もういないんだ。だってカラオケの時に私、隣にいて話し聞いてるよ」

「だって、日にちと時間は言っていないような……」

「そこは、桜井に無理やり聞いた」

「……」

「で、どうだった。初デート」

まどかは携帯を肩と顎ではさみながら、台所で冷蔵庫から麦茶を

取り出して、コップにうつして飲んだ。

「デートじゃないし。曜子ちゃんだって聞いていたでしょ？」

「……そうか、桜井は撃沈したか……かわいそうに」

「……何が？」

「いや、こちらの話。あっ、そうそう、私、武田くんに余計なおせっかいをしてしまった」

曜子は急に、まどかの幼なじみの名前を出した。

「余計なおせっかい？　どんな？」

「そのうち解ると思う。先に謝っておく。ごめん」

「？？　解らない……」

「いいから、いいから。要件はそれだけ、じゃあね！」

電話はそれで切れた。

「なんだろう」

まどかは首をかしげながら、自室へ戻った。

窓を開けて網戸にする。

外からは暑いが、心地よい風が吹いてきた。

しばらくその風にあたって涼んでいたら、再び携帯が鳴った。

表示を見ると、悠太、と出ていた。

曜子が話していたら、早速電話がかかってきたようだ。

まどかはその電話に出た。

「もしもし、まどかです」

「俺、悠太」

「うん、どうしたの？」

「今日、桜井とデートしたった本当か？」

このことか……まどかはため息をついた。

「デートじゃないし」

「でも二人きりで出かけたんだろ？」

「そうだけど、頼まれて洋服を選んであげただけだよ」

電話の向こうで舌打ちするような音が聞こえた。

「それをデートっていうんだよ……相変わらずにぶいな」

「あれがデートなら、悠太ともデートしたことになるじゃない」

幼なじみの悠太とは、住んでいる場所が近所ということもあって、よく二人で遊びにでかけたりしていた。部活が忙しくなってからは、機会が減ってきているが。

「だからにぶいって言っているんだ……」

「どういうこと？」

電話の向こうで、質問に応えるべきか悠太は悩んでいるようだった。

「くそっ、電話なんかで言うつもりじゃなかったのに……。俺はずーっとデートのつもりだったの」

「……え？」

「だから、お前のことが昔から好きだったの」

まどかはびっくりして、声が上ずってしまった。

「えっ、いつから……」

「小学校の時からだよ。だから、お前はにぶいって言ってるんだ」

「……全然気づかなかった」

まどかはそのまま床に座り込んでしまった。

「明日は暇か？」

まどかは、悠太の質問の意味が理解できなかった。

「え？」

「だから、明日は暇なのかって、聞いてるんだ」

「えっ……明日は陸上……」

「じゃあ、週末は？」

「週末は大丈夫……」

「よし、じゃあ土曜日。午前9時に迎えに行くから」

「……えっ？！」

「遊園地に二人でデートに行くぞ」

「ええっ！！」

「桜井とは行って、俺とは行けないなんて言わせないぞ」

まどかは、どう答えればいいか解らなかった。

「それじゃあ、約束だからな」

無言を了解と受け取った悠太は、自分から電話を切ってしまった。

まどかは呆然として、しばらく携帯を離せずにいた。

悠太が私のことを好きって……本当？

何かのいたずらじゃなくて？

幼なじみで、友達じゃなかったの？

まどかの頭の中で疑問ばかりがぐるぐると駆け回った。

「……」

まどかは混乱しながら、おぼつかない手で携帯のボタンを押した。
しばらく呼び出し音が続き、そして相手が出た。

「武田くんから電話があった？」

携帯から曜子の声が聞こえた。

「あった。告白された」

「おっと、さすが。桜井のヘタレとはちょっと違うな」

「曜子は知っていたの？」

「見ていれば解るよ」

「私は気付かなかった……」

「本人は気づかないものかもね」

「……もしかして、桜井くんのことも本当なの？」

「そうよ。問いただしたら、まどかのこと好きだって、白状した」

「全然、気づかなかった……」

「まあ、彼は隠していたからね」

まどかは呆然としてしまった。

想像もしていなかった出来事に、頭は混乱していた。

「で、どうするの？」

「……何が？」

「どちらかと付き合うの？」

「……今まで友達としてしか見ていなかったのに、突然そんなこと言われても……」

「このままだとずっと気づいてくれないと思って、二人は行動に出たと思うけれど」

「そうかも知れないけれど……」

だからと言って、まどかは二人の気持ちに応えることはできなかった。

「桜井くんは友達だし、悠太は幼なじみだし。それ以上でも、それ以下でもないよ」

「じゃあ、ちゃんと断らないとね」

「う……ん……」

まどかは迷ったが、曜子には伝えることにした。

「悠太から、遊園地に行こうって、無理やり決められちゃった」

「押しが強いねぇ。それぐらいしないとね。いいじゃない。一度行って、自分の気持ちを確かめてみたら」

「確かめるって言われても……」

「それとも誠のことが好きなの？」

「えっ……？　師匠と弟子だよ……」

二人の間にしばらく沈黙が流れた。

「まっ、そうかもね」

「そうかもね……って」

「じゃあ、なおさら問題ないじゃない。一度、デートと思って体験してみるのも勉強じゃない？」

「そんな気持ちで行っていいの？」

「武田くんは、それでいいって言っていたんでしょ？」

「何も聞かないで、勝手に決められちゃった」

「それは、了解している、ということよ」

「……」

「報告、楽しみにしているわよ」

曜子は、そのまま「じゃあね」と言って電話を切ってしまった。
まどかは電話を切り、しばらく窓から外の景色を眺めた。
まだ外は明るかったが、時間的には夕になってきていた。

まどかの頭はまだ混乱していた。
一つ一つ整理をして、迷いながらも一つの決心をした。
携帯電話を手に、宗志に電話をかけた。
4つほどのコール音の後に、宗志が電話口に出た。

「　桜井です。まどかちゃん？」

「まどかです。今日はありがとう」

「　こちらの方こそ……どうしたの？」

「あの……その……、変なこと聞いてごめんね？　……あの、私のこと……」

電話の向こうで、察したようだ。

「　誰かに聞いたの？」

「……うん。曜子ちゃんに」

「　ちっ……あいつ余計なことを」

「本当なんだ」

「うん。まどかちゃんのこと、好きだよ」

「……」

「大丈夫、気づいていないことも、気がないことも解っているから」

「……ごめん」

「いいよ、こればかりはしょうがない。でも、友達でいてくれよな」

「もちろん！」

「それでいいよ。ありがとう。……それじゃあね」

「うん……それじゃあ」

電話は宗志の方から切れた。

まどかは疲れたように、そのままベッドへもたれかかった。

「曜子ちゃんの言ってたこと、本当だったんだ……」

今まではからかっているだけだと思っていた。

自分が誰かから好きになってもらうなんて、想像もしていなかった。

まどかはただ呆然として、しばらくは何も考えることも出来なかった。

祝婚歌

夕食は疲れたから、と母親に断って、まどかはそのまま部屋にこもっていた。

母親は心配そうにしていたが、まどかが大丈夫と笑顔を浮かべて応えたので、水分だけはとってね、と温かいお茶を置いていった。

また静かな時間がおとずれた。

勉強しないとな……と思ったが、どうしてもその気が起きなかった。

今日はこのまま寝ようと思ったが、まだ時間も早く、頭もだるいくせに冴えていた。

ベッドの上でごろっと寝返りをうつと、近くの棚に本があるのが目についた。

誠に言われて揃えた課題図書だった。

「二十四の瞳」と「塩狩峠」は母親が持っていた。

母親も懐かしがりながら、「いい話よ」とすすめてくれた。

吉野弘詩集はなくて、図書館から借りてきた。

一週間で返却しなくてはいけないから、早めに読まないといけない。

まどかは手を伸ばして、詩集を手にとった。

詩集という割には分厚い文庫本で、何かの物語でも書いてありそうだった。

中をバラバラめくると、たしかに詩がいくつもならんでいた。

現代詩というのかな……。

解りやすい、簡単な言葉で、日々の出来事が書いてある感じだった。

真ん中のあたりで、ページが止まった。
どうも、一番開かれているページのようだった。
題名には「祝婚歌」と書かれていた。
「祝婚歌？」
まどかは何気なく、その詩を読んでみた。

二人が睦まじくいるためには
愚かでいるほうがいい

不思議な出だしだった。
「愚かでいるほうがいい……」
まどかは先を読んだ。

立派過ぎないほうがいい
立派過ぎることは、長持ちしないことだと
気付いているほうがいい

完璧をめざさないほうがいい
完璧なんて不自然なことだと
うそぶいているほうがいい

まどかは何となく、そこまでを何度かつぶやいてみた。
ゆっくりと、はいっていた肩の力が抜けていくのを感じた。

二人のうちどちらかが
ふざけているほうがいい
ずっこけているほうがいい

互いに非難することがあっても
非難できる資格が自分にあったかどうか
あとで
疑わしくなるほうがいい

正しいことを言うときは
少しひかえめにするほうがいい
正しいことを言うときは
相手を傷つけやすいものだと
気付いているほうがいい

立派でありたいとか
　正しくありたいとかいう
無理な緊張には色目を使わず
ゆったり　ゆたかに
光を浴びているほうがいい

健康で　風に吹かれながら
　生きていることのなつかしさに
ふと　胸が熱くなる
そんな日があってもいい

？　？　？
？　？　？
？　？　？

そして
なぜ　胸が熱くなるのか
？　　黙っていても
二人にはわかるのであってほしい

一気に最後まで読みきった。

「二人のうち、どちらかが、ふざけている方がいい……」

まどかはもう一度、読み返していた。
全文を、気になるところを、ゆっくりと、口にしながら。
知らず、幾度か読み返していた。

「……そしてなぜ胸が熱くなるのか、黙っていてもふたりには、わかるのであってほしい……」

まどかの目から涙がこぼれ落ちた。

流れた涙に、まどか自身がびっくりして頬を触った。
涙で濡れたすじが頬についていた。

「……」

ずっと胸が苦しかった。

思いに気づいてあげられなかったこと。
思いに応えられないこと。

元には戻れないこと。
傷つけてしまったこと。

まどかは知らず、自分を責めていた。
責めても、意味が無いことは解っていたが、自分を責めるしかなかった。

そんなまどかに、愚かでいい、立派すぎなくていい、完璧でなくていい……と優しく許してくれたような気がした。

まだ見ぬ誰かの愛に包まれたような。

胸が熱くなる。
そして、それを黙っていても解ってくれ、側にいてくれる。

まどかの目から涙がこぼれ落ちた。
止めようと思っても、涙が落ちていく。

まどかはしばらく、涙を流す感情に身を任せた。

どのぐらい時間がたっただろう。
気づくとまどかは寝てしまっていた。
やっぱり疲れていたのだ。
涙を流して、緊張が和らいで、眠りに落ちていたようだ。
時計を見ると、深夜の2時だった。

まどかはもう一度、詩を読んだ。
今度は涙は出なかったが、代わりにあの温かく包まれる感触がよみがえった。

「……」

まどかは本を持って机に向かった。
スタンドのライトをつけ、シャープを取り出して芯を出した。
ノートを開き、詩を書き写し始めた。

ていねいに一文字ずつ。
憶えるように。
思いをなぞるように。

こんなふうに、人を愛せたら。
こんなふうに、人から愛されたら。

ふとまどかは、誠のことを思い出した。
この本をすすめてくれた誠なら、この詩から受けた感動を解ってくれるような気がした。

早く明日になれ。
メイルでなく、電話でもなく、会って話がしたかった。

まどかはそう思いながら、詩を書いたり、読みなおし続けた。

祝婚歌（後書き）

吉野弘さんの祝婚歌は、本来著作権を有するものです。
しかしご自身が、この作品については「民謡のようなもの」、つまり作者や作曲者が解らず、著作権や版権が発生しない作品のようなもの、としてどうぞご自由にお使いください、とコメントされています。
ここの場は、営利目的ではないため、紹介させていただきました。
この詩を気に入られた方は、ぜひ本もご購入下さい。
私が持っているのは、ハルキ文庫の吉野弘詩集です。
有名な「夕焼け」（小学校の教科書に採用）も入っているすばらしい本です。

思いの共有

翌日、陸上の練習が終わると、まどかは自転車に乗ってすぐに図書館へ向かった。
誠はきっとあの図書館の、いつもの場所に座っているはずだった。
まだ心に残っている気持ちが薄れる前に、誠に会って話がしたかった。

「はっ……はっ……」

陸上の後で疲れた身体で、一生懸命ペダルをこいだ。
風の中を切っていく。
図書館へ続く一本道を、まどかは走り続けた。

図書館についた。
まどかは息をきらしながら、自転車を置いて中へと走りだした。
図書館の中はさすがに走るわけにはいかない。
それに、ひとりジャージ姿のまどかは、目立ってしまった。
息を整えつつ、静かに誠の座る机へと向かった。

誠がいた。
いつもの席で、いつものように勉強していた。

まどかは声をかけようと思ったが、それをやめた。
誠に近寄っていき、すっと向かいの席に座った。

「……」

まどかは誠が勉強をする姿を見るのが好きだった。
視線がとっても優しくて、楽しそうで、ずっと見ていたくなるのだ。
誠はしばらくまどかが来たことに気づかずに、勉強をしている姿を見せてくれていた。
まどかは微笑みを浮かべながら、しばらくその姿を眺めていた。

ふっ……と誠の顔が上がった。
上げた先にまどかの笑顔を認め、誠もにっこりと微笑んだ。

二人は図書館を出て、公園の中のベンチに座った。
汗ばむ陽気だったが、木陰は風も吹いていてだいぶ涼しい。
まどかが誠に語りかけた。

「昨日、読みました。吉野弘さんの詩集……全部読んだわけじゃないんですけど、でもその中にひとつとってもいい詩があって……」

誠がにっこり笑った。

「祝婚歌ですか？」

それを聞いてまどかがびっくりした。

「なんで解ったんですか？！」

「彼の代表的な作品の一つで、僕も大好きなので」

ああ、やっぱり。
まどかはすっかり嬉しくなってしまった。

「私、師匠のように何度も読んで、何度も書いて……といっても、１００回までいきませんでしたけど……でも、師匠の雨にも負けず、の時みたいに憶えたんです」

まどかは誇らしげに言った。

誠はにこやかにうなずいた。

まどかはそんな誠の顔を確認して、目を閉じ、詩を暗唱し始めた。

「二人が睦まじくいるためには、愚かでいるほうがいい……」

まどかはゆっくりと、しすがに詩を朗読し始めた。

そして、途中から誠も一緒になって朗読してくれた。

大気の中を、二人の声が、詩が、音楽のように流れていく。

まどかは嬉しかった。

気持ちのそばに寄り添って、歩いているくれているような安心感に包まれていた。

やっぱり誠は、詩から同じ感動を感じていてくれた、まどかにはそんな気がした。

「そして……なぜ胸が熱くなるのか……黙っていても、二人にはわかるのであってほしい……」

終わるのが惜しいような感触を残し、二人は暗唱を終えて、ゆっくりと目を開いた。

互いに振り向いて、目を合わせ、ふふっ……と笑った。

まどかは安心したように息をはいて、つぶやいた。

「良かった……昨日、詩を読んでから、ずっと師匠と会いたかったんです」

「僕と？」

「はい、あの詩を読んだ時の感動を、解ってくれるのは師匠だけだと思って……思いが消えないうちに会って話がしたかったんです」

「話を？」

「はい。もうできました」

「？」

「一緒に詩を暗唱してくれて、思いを共有できたような気がしました。それで十分です」

「……」

誠は穏やかな表情で、まどかの話を聞いていた。

「私もいつか、あんなふうに愛したり、愛されたりしたいです」

まどかの言葉に誠もうなずいた。

「僕もです」

二人はもう一度、顔を見合わせて、笑顔を浮かべた。

暖かな風が二人を包んで、流れていった。

悠太と遊園地

週末になり、悠太とデートの日がやってきた。
悠太は時間通りにまどかの家にやってきて、インターホンを押した。

「はーい」

まどかの声がして、しばらくして扉が開かれた。
元気そうな、まどかがあらわれた。
その姿を見て、悠太が思わずつぶやいた。

「……何だ、その格好は」

「え？　遊園地っていうから、楽しめるように……いつもの格好でしょ？」

まどかはジーンズにTシャツ姿。
確かに悠太と遊ぶときの格好で、悠太も何度か見たことのある衣装だった。

「……俺の努力はなんだったんだ……」

悠太はこの日のために、精一杯のおしゃれをしてきたつもりだった。
もともとが背が高く、スタイルも良いうえに、まずまず格好いい顔立ち。
髪までしっかり整えていて、今日の悠太は隙がなかった。
街を歩けば女の子が振り返ってもおかしくない。

顔立ちの整ったまどかが横にいたら、どこから見てもお似合いのカップルに見られたことだろう。

それが……。

「だっ、だって……私にとって悠太と遊ぶときは、これが一番らくで楽しいしいんだもん」

悠太は天を仰ぎながら、あきらめたようにため息を付いて、まどかの頭にポンっと手をおいた。

「そうだよな。それがまどからしい。……行こう！」

まどかはうなずいて、悠太と一緒に歩き出した。

遊園地はこの街からはだいぶ離れている。

バスに乗って中心地まで出て、そこから電車で県境近くまで行かないといけない。おおよそ一時間半程度の道のりだった。

その間を、ふたりはほとんど黙って過ごした。

好きと告白したことで、悠太もまどかもどう話していいか戸惑っていたのだ。

悠太は口を開くと、まどかをいじるような、あるいは問い詰めるような言葉が出てきそうで、自制していた。

まどかは、最近のことを話すと誠や宗志のことになってしまいそうで、今は話しづらかった。

しかし、このままで時間が過ぎたくはないと、話し始めたのは悠太の方だった。

「いきなり告白して悪かった」

「あっ、ううん。びっくりしたけれど、私の方こそ、今まで気づいてあげられなくて、ごめん」

「高校に入ったら、まどかの噂をいろいろ聞くようになって……、一番昔から見てきたのは俺だ、まどかを一番知っているのは俺なんだ、って思ったら、だんだん我慢できなくなってきて」

「噂って？」

「一年に可愛い子がいるとか、誰々がお前に気があるとか、付き合い始めたらしいとか」

「本当にあったんだ……そんな噂」

「気づいてた？」

「ううん。ぜんぜん、曜子から聞くまでまったく知らなかった。今でも実感ないし」

それを聞いて、悠太が初めて笑った。

「まあ、小学や中学のまどかを知っていると、その気持も解らないでもないよ。ほとんど男の子だったからな」

まどかもようやくつられて笑った。

「そうそう。本当、悠太とはほとんど男友達だったもんね」

悠太はまどかの言葉に、自嘲気味につぶやいた。

「俺はいつだって、女の子だと思っていたけどね」

「……それ。聞きたいと思った。私の一体どこが女の子に見えたの？」

髪を短くして、いつでもズボンをはいて、男女分け隔てない距離感が、小学生のまま続いていた。

まどかは自分のどこに女らしさを感じていたのか、不思議だった。

「だって女だろ？」

「そりゃあ、性別的には」

「理由なんて俺も解らないよ。気づいたときには、もう好きだったんだから」

「……」

「好きな気持ちで見ていると、どんな姿だって、言葉だって、俺には女の子だったんだ」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

またしばらく二人の間に沈黙が流れた。

電車が走る、かすかな揺れと音だけが響いていた。

「けっこう苦労したんだぜ」

「何が？」

「まどかに気づいてもらうために、好きになってもらうために。勉強ができるようになったのも、運動を頑張っているのも、格好を気にしているのも、ぜんぶお前のせいなのに」

「そっ、そうだったの……。そう言えば悠太、昔からよくもててたもんね」

「誰かさんのせいで、全部断っていたけどね」

「……すみません」

「いいって、俺の勝手なんだから」

「……」

「だから、無理に好きになってもらわなくていい。でも、俺はあきらめないよ」

「……うん」

「これだけずっと好きだったんだ。これから先も好きだと思う。まどかが誰かを好きになっても、多分変わらない」

それだけ強い気持ちで好きになれることが、まどかにはまだ理解できなかった。

告白されて愛されるということを初めて意識して、詩を読んで愛し愛されるというものに感動した。
ただまだ、まどかにとってそれは憧れの存在で、自分で実感のできるものではなかった。

ふたりはまた互いに黙ってしまった。
ただ、先程まであった緊張感は、だいぶ薄れてきていた。

ふたりは遊園地についた。
小さい時に学校のみんなで来たことがあった。
その時は身長制限などで乗れない乗り物もあったが、とっても楽しかった思い出として残っている。
今はふたりで、そして乗れない乗り物もきっとない。

混み合う券売場の列に並んで、一日パスポートを購入した。
代金は悠太が払った。
まどかはお金を払おうとしたが、

「デートで女に払わす男がどこにいる」

と言って怒られてしまった。

ゲートをくぐり、ふたりでどんなアトラクションに行くか、相談した。
まどかはいわゆる絶叫系が大好きだった。
そして、この遊園地はそうしたジェットコースターが多数あることで有名な施設だった。
当然、そうしたところを巡ることになるのだが、悠太はあまり得意ではなかった。

彼女の手前クールを保ちたかったが、実際に乗るとなるとかなり気後れをしていた。

「やっぱり乗るよね……」

「遊園地に来て、何しに来たの？」

「そうだけど……」

「大丈夫だって！　ほら行くよ！」

まどかに引っ張られて、悠太も仕方なくジェットコースターの列に並んだ。

一つ目は、最初に到達する高さが日本で3本の指に入るとのこと。その急激な落下から、いくつものスパイラルをまわっていくのがこのジェットコースターの特徴だった。

順番がやってきて、二人ならんで席に座った。
安全バーが降りてきて、スタートの合図のベルが鳴る。
まどかは楽しそうだった。

「この瞬間がわくわくするね」

「……しないな」

悠太の怖がりように、まどかは笑った。

ジェットコースターは前評判に違わぬ高さと速さだった。
まどかは大喜びで声を上げていたが、悠太はバーをつかんで耐え

るのが精一杯だった。

数分程度のコースだったが、元の場所に戻ったときには、悠太はぐったりしていた。

反対にまどかははしゃぎまくっていた。

「久しぶりで、楽しかったね！」

「……」

悠太はコメントを返せずにいた。

「さっ、次に行こ！　次！」

まどかの問答無用の誘いに、悠太は何とか応えることにした。

速さ自慢のジェットコースターや、急速落下のフリーフォール、回転まですするバイキングなどを乗り回し、さすがに悠太が「ちょっと休もう……」とつぶやいた。

「せっかく来たのに……」

と、まどかは不満げだったが、悠太の様子を見て、しょうがないとあきらめた。

悠太をベンチに座らせ、まどかはジュースを買いに行った。

ほどなくして、ベンチでぐったりしている悠太のもとに、ジュースを両手に持ったまどかが帰ってきた。

「はい、どうぞ」

「悪い……ありがとう」

悠太は一口飲んで、一息ついた。

「悠太がそんなに苦手だと思わなかった」

「まどかがそんなに得意だと思わなかった」

ふたりは互いにそう言って、笑いあった。

「まだ知らないことがあるね」

「そうだな」

しばらく間があった後、悠太がつぶやいた。

「いや、むしろ解らないことだらけかな」

「私が？　単純だと思うけど」

「好きになるとね、不安になるというか、噂に振り回されてどれが本当か自信がなくなるんだ。本当のまどかは変わってなくて、単純なのにな」

最初の言葉ではなく、最後の言葉にまどかはがっくりと肩を落とした。

「……やっぱり単純なんだ……」

悠太は笑って、また頭をポンっと手を置いた。

悠太は昔からよく、こうしてくれた。

「単純な方がいい。その方がまどからしい」

「そうかな」

「そうだよ」

話しながら、悠太の気分もいくらか戻ってきていた。

「さて、では再開するか」

「うん！　じゃあ次は……」

「できれば、優しい奴で」

悠太は思わずお願いした。

お化け屋敷と観覧車

「で、ここなの？」

「この怖さなら大丈夫だから」

悠太が代わりに決めたのはお化け屋敷だった。

廃れた病院跡をイメージされた建物で、最近リニューアルされたと聞いている。

人工的に作り上げたものとは解っていても、まどかの足は進まなかった。

「あの……他にしない？」

「俺がジェットコースターに付き合ったんだ。今度はまどかが付き合う番じゃないのか？」

「そんなぁ！」

「さあ、いくぞ！」

まどかの抵抗もむなしく、悠太に手を引っ張られ、ふたりはお化け屋敷に入っていった。

中に一歩入ると、急に外の喧騒が遠くなり、うす暗く、寒くなった。

人工的とは思えない、コンクリートの廃れ具合が、わずかな明かりで浮かび上がっていた。

ときおり先から、悲鳴が聞こえてきていた。

まどかは悠太の腕をぎゅっとつかみ、ほとんど眼を閉じて歩いていた。

「ど、どうなっているの？」

「目を開けて見ればいいじゃないか」

「できないから聞いているの」

「ああ……病室の跡みたいだな……誰か寝ているようだけど」

「やっ、言わないで！」

「どっちだよ……」

がたっっ！

「きゃぁぁぁ！！」

病室のベッドで寝ていた患者が起きた音に、まどかは悲鳴を上げた。

「大丈夫だって、寝ていた人が起きただけだから」

「だから叫んだの！　……目をつぶっていても、想像で怖い……」

悠太は笑った。

これだけ怖がっているまどかの様子をみるのは初めてで、ジェットコースターの仕返しも含めて、ちょっと楽しくなってきていた。

それに、腕に抱きついてきているのは、役得でしか無かった。

「お、今度は手術室か……あっ、誰か切り刻まれている」

「きゃあ！　やっ、やめて！！」

その後も、首吊り自殺をしていた死体が、急にこちらを向いて笑い出したり、いきなり天井から死体が落ちてきたりと、ありがちな展開ながら、一つ一つにまどかは驚いてくれた。

外に出ても、まどかは悠太の手につかまり、目を閉じたままだった。

「おい、もう外に出たよ」

「ほっ、本当!?」

「本当だよ」

まどかはゆっくりと目を開け、遊園地の光景が広がっているのを見て、そのまま座り込んでしまった。

「おっ、おい」

「怖かった……」

まどかの目には涙が浮かんでいた。

「俺が側にいたのに、怖がりすぎたよ」

「悠太がいなかったら、そもそも入ることもできないよ……」

「まあ、そうか」

悠太は笑いながら、まどかの手をとって引き上げた。

「これでおあいこだな。まあ、あとは静かなのでいくか」

「うん……」

まどかも、悠太の提案にうなずいた。

途中で昼ごはんをとりながらも、ティーカップやメリーゴーランド、ゴーカートなどにのり、施設内のアトラクションをかなり制覇していた。

時間とともに、ふたりの中のわだかまりも消えていき、楽しい時間を過ごすことが出来ていた。

そして最後はやはり、観覧車に乗ることとなった。

あたりは夕暮れとはいかないが、だいぶ深い青に染まり始めている。

人の波はあるが、いくらか落ち着いた様子になっていた。

ふたりはゴンドラに向かい合う形で座った。

ゆっくりとゴンドラは地上から離れていった。

まどかは外の景色をゆっくり見つめていた。

「きれいな景色だね……」

まどかはつぶやいた。

悠太の返答はなかった。

まどかは不思議に思い、悠太を見ると、口に手を当て何かを耐えているようにも見えた。

「悠太……もしかして高いところが怖いの？」

まどかが嬉しそうに聞いた。

悠太は、頭を横に振った。

「じゃあ、なに？　疲れて気分が悪いの？」

悠太はこれにも頭を横に振った。

「……どうしたの？」

悠太は外を向いたまま、口を開いた。いくぶん顔が赤くなっていた。

「……キスしたい気持ちを我慢している」

「えっ……」

まどかは想像していなかった言葉にあわて、混乱した。

悠太が目を伏せ、手を前に出した。

「いいから、解っている。お前にはその気がないことは。無理にしたら傷つけることも解っているから、我慢している。気にしないでくれ」

まどかは何かを言おうと言葉を探したが、見つからなかった。

ただじっと、我慢する悠太を見つめるしか無かった。

確かに今日は楽しい時間だった。しかし、まどかはキスをすることを予想も想像もしていなかった。
そこがふたりの、はっきりとした差だった。
まどかの心のなかで悠太は、大切な幼なじみから出ることはなかった。
それが申し訳なく感じる。
しかしだからといって、同情してキスをすることも、横に座って寄り添うことも、謝罪することも、まどかにはできなかった。

ゴンドラがゆっくりと上にあがり、頂上についた。
ふたりは黙ったまま、互いに違う方向を見ていた。

下を見ると、楽しげに歩く人達がたくさん歩いているのが見える。
遠くを見ると太陽がゆっくりと夕焼けをつくろうとしていた。
そして、その光がちかくの海を照らし、きらきらと輝かせていた。

結局ふたりはその後も何も語らず、観覧車を降りた。

再び見えない何かが二人の間にできてしまい、帰りの電車もバスも、いくつかの会話だけでほとんど話すことはなかった。

悠太はまどかを家の前まで送った。
いずれにせよ、悠太も家もすぐ目と鼻の先ではあったが。

まどかは悠太にお礼を言った。

「悠太、ありがとう。今日は楽しかった」

「……俺の方こそ楽しかった。最後は気まずくしてしまったことは

ゴメン」

「……」

「でも、気持ちは変わっていないから」

悠太ははっきりとまどかに伝えた。
しかし、まどかは返答することができなかった。

「それじゃあな」

悠太はそう言って、歩き始めた。
まどかは悠太の姿が見えなくなるまで、見続けていた。

その夜、まどかはベッドの上で倒れるように横になった。
疲れたのに、まだ睡魔は訪れていなかった。
すこしためらった後、まどかは曜子に電話した。
まるで電話を待っていたかのように、曜子はすぐに出た。

「……どうだった?」

いつもと比べて、曜子の口調は優しかった。

「楽しかった。……でも気持ちに応えることはできなかった」

「そっか……」

ふたりはしばらく沈黙した。

「ぐすっ……」

電話口でまどかはすすり泣いた。

「なっ、泣いてるの？」

「だって……ぐす……気持ちには応えられないし……元に戻りたいし……戻れないし……ぐす」

「そっか……」

まどかが泣き止むまで、曜子はしばらく待ってくれた。

「まどかは悪くないんだよ。気持ちはどうしようもないんだから。武田だって同情で付き合って欲しいとは思っていないだろうし」

「うん。解ってる」

まどかは涙を止めるように、深い溜息をついた。

「恋をするって、どんな気持ちなんだろう」

まどかの素直な今の気持ちだった。

「私に聞かないでくれ。私も二次元の恋しか知らないから」

「二次元？」

「小説の中とか、テレビの中とか」

まどかが少し笑った。

「私よりはすすんでいるかも」

「でも、相談相手としてはどうかと思うよ」

曜子もつられて笑った。

まどかもようやく落ち着いてきた。

「でも曜子が聞いてくれて助かった。一人では抱えきれなかったから」

「どういたしまして。このぐらいなら、いつでもいいよ」

「うん、ありがとう。すこし眠くなってきた。おやすみ」

「おやすみ。お疲れ様」

通話が切れた。

部屋の電気を消し、まどかは温かさの残る携帯を感じながら、ベッドに横になった。

しばらくは、今日の出来事が頭をめぐったが、やがて深い眠りについた。

科学館と理科

しばらくの間、まどかは午前に陸上の練習を行い、午後は図書館へいく日々を過ごした。
自宅にいると、暇な時間にいろいろと考えてしまいそうだった。
とはいえ、図書館に行っても、今ひとつ勉強に集中しきれなかった。
勉強の合間に、ふとため息をついたり、ぼーっとしたりする時間が生じる。
何となく、すっきりしなかった。

これじゃあいけないな、と深いため息をついたとき、ふとまどかは誠の視線に気がついた。
誠はいつの間にか、勉強の手を休めて、まどかの様子を不思議そうに見ていた。
まどかわ慌てて勉強を始めたが、誠の視線が続いているのを感じていた。

「あの……」

誠が話しかけてくると、まどかは緊張してやや大きな声で返事をしてしまった。

「はい！」

周りから、「しーっ」と静かにするように言われてしまい、まどかは慌てて口に手を当てた。
少し落ち着いて、思わずまどかは顔を赤くした。
何をやっているんだろう……まどかは恥ずかしくなった。

「あの、勉強ばかりで疲れましたか？」

「はい？」

「いや、あまり勉強ばっかりだと飽きますよね」

「……」

いえ、ごめんなさい師匠。勉強はあまり出来ていません……。

まどかは心のなかで謝罪した。

それでも、沈黙を良い方にとらえた誠は、この前の話を持ちかけた。

「あの気分転換になるかどうか解りませんが、科学館に行きますか？」

「あっ、以前に言っていた」

「はい。机の上ばかりでは飽きるかと思って」

飽きたわけではないが、集中しきれないのは確かだった。

それをどう解消すれば良いか、まどかも解らずにいた。

何はともあれ、誠の申し出は受けることにした。

誠は理科の勉強のためになる、と言っていたが、そうであればまどかにも必要なことだった。

「はい。行きます」

まどかの返事に、誠はほっとしたような顔をした。

「じゃあ、今日は遅いので明日。午前は陸上の練習ですよね。午後に行きましょう」

「はい、解りました」

まどかはうなずいて返事をした。

科学館へはふたりで自転車で向かった。

前に図書館へ一緒に行ったときにも思ったが、意外に誠は脚力がある。

勉強ばかりかと思っていたが、科学館までの道のりを疲れもせず、かなり速いスピードで駆け抜けた。

まどかは運動が得意なのでついていけたが、何となく意外に感じた。

３０分ほど走り、ふたりは科学館についた。

科学館は銀色に光る5階建ての建物で、確か数年前に改装したはずだった。

建物の一部に、半分に切った大きなボールのようなものがあり、あれがおそらくプラネタリウムだろう。

二人で入館券とプラネタリウムの予約券を買いに、中に入った。

誠を見ると、目を輝かせ、楽しくてたまらないという表情をしていて、まどかは思わず笑ってしまった。

まどかになぜ笑われたか解らなかった誠は、慌ててまどかに聞いた。

「あの、なにか変でした？」

まどかは、笑いをこらえながら答えた。

「いえ、師匠があんまり嬉しそうだったので、つい……ごめんなさい」

「表情に出ていました？」

「はい」

「恥ずかしいな……でも、本当に昔から好きなんです」

「伝わりました」

まどかは笑顔でうなずき、ほっと一息ついた。

久しぶりに笑ったことで、少し心の霧がはれたような気がした。

誠はいくらか恥ずかしそうにしながら、まどかを案内してくれた。

「まどかさんは昔、『なんで？』って言って両親を困らせたことはないですか？」

「……あったような気がします。何となく」

誠はうなずいて言葉を続けた。

「だいたい子供の頃って、何もかもが不思議に思えて、両親に質問する時期があったと思うのです。でも、いつのまにか周りにあることが当たり前に思えてくる」

「はい」

「実は知らないことばかりなのにね。たとえば冷蔵庫はどうやって冷やしているか解りますか？」

誠の質問にちょっと考えてみたが、まったく検討がつかなかった。

「解りません」

「携帯電話はなぜいろんな場所でも通じるか、知っていますか？」

まどかは両手を上げて降参のポーズをとった。

「ぜんぜん解りません」

まどかの様子に、誠は少し笑って答えた。

「国語と数学が勉強の基礎であるならば、理科は応用といっていいでしょう」

「応用？」

「はい。例えば、先程のように身の回りにあるもののほとんどは、理科の発見があって初めて製品化されたり、開発されたりしています。ちなみに僕の進みたい薬学は、有機化学や無機化学が関係していてこのフロアーに。まどかさんの医学は、生命や人体なのでこのフロアーにあります」

誠がそう言って、エントランスにあった建物の案内図を指さした。

確かに指さしたところに、そう書かれたフロアーがあった。

「車を作るのであれば、このモーターと材質のフロアー。津波の研究なら、波に関するフロアーでしょうか」

「……本当だ。理科ってこんなに幅広いなんて知りませんでした」

まどかは思わず案内板を触りながら、ため息をついた。

誠の言葉はいつも、まどかにとって驚きの連続だった。

「学校で習う物理とか化学とか生物が、苦手だったり嫌いになってしまうのは、いくつか理由があると思うのです」

「はい」

「ひとつはあまりに基礎過ぎて、身の回りにどうやって生きているかが実感できにくいこと。次に、公式があったりして数学の要素が入ってくること。そして、なぜこんな原理なのか納得しにくいこと」

誠の説明に、まどかは笑ってしまった。

「そうですね。たしかに」

誠はちょっと考える様子を見せた後、まどかにこう提案した。

「最初はフロアーごとに解説しようかと思ったのですが、解りやすいようにさっきの冷蔵庫の話からいってみましょう」

わくわくして嬉しそうな誠の様子に、まどかも笑顔で「はい！」と返事をした。

「じゃあ、最初はモーターの所へ行きましょう」

「冷蔵庫なのにモーターですか？」

誠は歩きながら解説を始めた。

「冷蔵庫はなぜ中を冷やすことが出来るか。答えは気化熱を利用するからです」

「気化熱？」

「走って暑い時に、身体に水をかけたりしますよね。水そのものの冷たさ以外にも、風が吹いて肌の水が乾くときにも冷っとしますよね」

「はい。それが気化熱ですか？」

誠はうなずいた。

「液体から気体に変わるとき、周囲から熱を奪う性質があります。気化熱という、冷やす原理です」

まどかは持ってきたノートとシャープを取り出して、書きとめ始めた。

「液体から気体に変わるときに熱を奪う、気化熱」

「逆に、気体から液体に変わるときは……」

「熱を出す……ですか？」

「そうです」

誠が嬉しそうに笑った。

「気体に変わりやすい物質をポンプを使って圧縮すると液体に変わる。生じた熱を放散させて循環させる。その液体を噴射させると気化して熱を奪う。……つまり、気体になりやすい物質と循環する回路、圧縮するポンプがあれば、冷蔵庫はできます」

「何となく解ってきました」

「その圧縮するポンプは、モーターからできます」

「それで、モーターからなんですね」

ふたりは話しながら、そのモーターの展示スペースにやってきた。そこには、モーターが輪切りになった展示物と、実際に動くモーターが設置されていた。

その輪切りなったモーターのコイル部分を指さしながら解説を続けた。

「金属にコイルを巻いて電気を通すと、磁石のようになるのは解りますか？」

「はい、何となく」

「ちなみになぜ電気を通すと磁石になるか、はおいておきます。ここが理解しにくいところの一つかも知れないのですが、自然の摂理

だと思ってください」

誠は展示物とノートを用いて、フレミングの左手の法則や右ねじの法則などを解説して、磁力の発生の説明をした。

やや難しいところだったが、誠の説明は以前と比べると解りやすく、理解を待ってくれるのでまどかにもしだいに理解できるようになってきた。

また近くにあった電磁石の展示物に行って見せてくれるなどもしてくれた。

教科書より、たしかに実物を見ることは、理解の助けとなった。

まどかも理解できた事柄をノートに書きこんでいった。

交互に電流が流れる仕組みを作ることで、NとSが引きあってモーターは回ることを説明する。

最初はよく解らなかったまどかも、丁寧にNとSがどうできるかを説明する間に、

「あっ！」

と言って理解してくれた。

誠も満足そうにうなずいた。

「この基本的な原理からモーターがうまれ、モーターが生まれたことで冷蔵庫だけでなく、掃除機から、いまでは車まで出来ています。教科書では、難しい法則がならんでいますが、それを応用して、身の回りのものが出来上がっています」

まどかもようやく理解できたようで、深くうなずいていた。

「解りましたか？」

「はい！」

「では、私に説明してみてください」

「……え？」

「説明できて初めて理解できたことになります」

誠はにっこりと笑顔でそう言った。

……鬼！……まどかは心のなかだけで、そうつぶやいた。

焦りながら、ノートを見ながら、誠に解説する。
足りないところを誠が補足してくれた。
それをまたノートに書き込む。

冷蔵庫について解説が終わる頃には、電流と磁界についてはかなり理解が進んでいた。

理解と記憶のために、やや疲れぎみのまどかに誠は優しく語りかけてくれた。

「よく頑張りましたね。これで高校物理の『電流と磁界』はほとんど終わりました」

まどかが顔を上げた。

「えっ、そうなんですか？」

まどかの質問に、誠はうなずいた。

「学校だと、この基礎法則の説明だけなんです。だから難しいし、意味が分からないし、面白くない、と思うのではないでしょうか」

「はい……確かに、今の師匠の説明は難しかったですけれど、楽しかったです。それぞれが繋がっていて、覚えやすいです」

「良かった。それが伝われば、満足です」

誠はほっとした様子でつぶやいた。

誠は周囲を見渡した。

「物理の基本は難しいですが、本当に身近に生きていて、それぞれの法則が関係しあっています。そこが解って楽しいと感じることが出来れば、物理の世界も広がると思うのです」

まどかは改めて、誠に感心した。

「やっぱり師匠は凄いです」

まどかの言葉に、誠はやっぱり照れて頭をかいた。

照れ隠しの癖らしい。

「次は、せっかくですからまどかさんの関係する、人体や生物に行きましょうか」

「はい！」

誠の提案に、まどかはいつものように元気よく返事をした。

「人体と生物にもいろいろなコーナーがあるけれど……やっぱりこれかな」

誠が連れてきたのは、『脳』のコーナーだった。

脳の模型をぽんっと叩いた。

よく見たことのある模型に、まどかもうんうんとうなずいた。

「脳細胞は全部で約１４０億個あります」

「多いのか少ないのか、解りません」

「それが産まれた時を最大として、毎日１０万個ずつ死んでいきます」

「……えぇぇぇっ！」

誠の言葉に、まどかはワンテンポ遅れて驚いた。

「毎日どんどんと減っているんですか？　増えないんですか？」

「はい。日々減っていきます」

まどかは心配そうな顔をした。

「だって、そうしたらどんどん馬鹿になっちゃう……」

まどかのコメントに誠は思わず笑った。

「人生８０年として、１年は３６５日。毎日１０万個死ぬとして、何個になるか」

「えっ、えっと……」

まどかはノートを取り出して計算しようとした。

誠はそんなことはしなくていもいい、と手で止めて、言葉を続けた。

「こういう場合は、ざっとでいいんです。ケタだけ間違えないように。８ｘ４で３２、１０のケタは万をおいておけば４ケタだから億。３０億弱と言ったところかな」

暗算でざっと計算をした誠に、まどかは感心した。

自分でもできないほどではないが、誠のようには頭が回らなかった。

「なるほど」

「１４０億のうち３０億だから、まだ１１０億残っています。まあ、そう心配することはないかな」

まどかも少し安心したように、ほっと息をついた。

「そうですね……あれ、でも年齢とともにいろいろ学習していきますよね。細胞が死んでいくのに、どうして？」

誠は脳の模型の近くにある、脳神経の絵を指さした。

「脳細胞から出る枝が増えるからです。網の目のように枝が増えて、電気の通りが良くなることで、成長していきます」

「あっ……最初の時に話していたことですね」

「はい」

「これがそうなんだ……本当に枝みたいですね。これがうにょうにょって伸びるんですか？」

まどかの表現に、誠は笑ってうなずいた。

「そう、うにょうにょっと。だからちゃんと記憶になるためには、枝が伸びる時間が必要だし、通りが良くなるためには何度も電気を通す必要があるし、電気が通らなくなった枝は弱っていくから、定期的に電気を通してあげないといけない」

「以前に話していた、記憶の原理ですね」

誠はうなずいた。

「ちなみに、大学受験は突き詰めていくと、ほとんど暗記だと思っています」

「そうなんですか？」

まどかの問いに誠はうなずいた。

「以前に話したように、国語も理論で突き詰められる答えがあり、理論を記憶して使いこなせば点数がとれます」

「数学は？」

「解法のパターンの暗記です」

「理科、社会、英語は……暗記ですね」

誠はうなずいた。

もう一度、脳の模型に手を置いた。

「知識から新たな物を発見することを試されているわけでもなく、多様性のある答えも求めていません。試験範囲も決められています。その試験範囲をどれだけ記憶し、理解しているかを確かめているに過ぎません」

「そうなんですか……」

そう断言されると、まどかも受験勉強という物に対して、何となく希望のようなものを感じた。焦りや不安があったが、何とかなるのではないか、という希望が。

「ただ量は多いですし、使いこなせるようになるまで繰り返すので、とても時間はかかりますが……」

「ですよね……」

結局、時間が必要だし、タイムリミットもある。

やっぱり大変そう……。

まどかはがっくりと肩を落とした。

そんなまどかの頭の上に、誠の手のひらが乗った。
えっ……とまどかは驚いた。
誠の手が、優しく、まどかの頭に触れていた。

「まどかさんなら大丈夫です。これまでの頑張りを見て、そう思いました。自信を持ちましょう」

そう言いながら、誠はすぐに手を引っ込めてしまった。
思わずまどかに触れてしまった自分の手を見つめ、顔を赤くしていた。

まどかの頭に、その手の温かさの感触が残った。
誠がまどかに触れたのは、これが初めてだったと思う。
まどかは少しだけ、胸がどきどきするのを感じた。

そして、誠の言葉と手に勇気をもらえた気がして、まどかは顔を上げ、力強く返事をした。

「はい！　これからも頑張ります。よろしくお願いします、師匠！」

まどかはそう言って、笑った。

いくつかのコーナーを、ある時は身体を使って体験しながら、ある時は誠が解説しながら、ふたりは楽しく時間を過ごした。
そして、予約をした時間となり、ふたりはプラネタリウムへ向かった。

プラネタリウムの中に入ると、中は夕焼けのような明かりに包まれていて、ドームが天高くひろがっていた。

閉鎖された空間なのに、その広さは何となく外に出たような開放感を与えてくれる。
中央には、星を投影する蟻のような形をした機械が置かれていた。

ふたりは人のあまり座っていないあたりを選んで、横に並んで座った。
背もたれに寄りかかると、ぐっと倒れていき、空を見上げるような姿勢でとまった。

「わあ……」

まどかは思わず声を上げた。
今はまだ投影されていないドームの天井が、視界一杯に広がる。
横を見ると、誠も天井を見つめていた。
それがまた、わくわくとして嬉しそうで、まどかは思わず微笑んでしまった。

「プラネタリウム、大好きなんです」

誠はそう呟いた。

「見ていて解ります」

まどかは、ふふっ、と笑った。

「投影が始まってしばらくすると、『これからもっと山奥に入っていきましょう』という解説のあとに、満天の星が広がります。その漆黒の闇の中に、たくさんの星がきらめく瞬間が凄く好きなんです」

「そうなんですか。私も楽しみです」

そう言って、ふたりは始まるまでのひとときを待った。
平日と言うこともあって、席は半分ほど埋まったところで、あたりがすうっと暗くなった。
非常口の案内のアナウンスがあり、投影が開始された。

『皆さん、こんばんは。本日は科学館プラネタリウムにおこしいただき、有り難うございました。今からひととき、夜の空のご案内をさせていただきます』

男性の落ち着いた声のアナウンスが響き、ドームに夕焼けからいくつかの輝く星が見え始めた。

はじめは、夕焼けの時あるいは都会の空でも見られる星の説明があった。
惑星の中でもひときわ光り輝く金星について。
それに、夏の代表的な星座も、都会でも十分に眺められることが説明されていく。

まどかも、ゆったりとした気持ちになって、空の星と落ち着いた声に身をゆだねていた。
そしてアナウンスは、先ほどの誠が言った台詞とほとんど変わらないフレーズを言ったあとに、あたりはいっそう暗くなり、それまでは見えていなかった無数の星が空にきらめきだした。

「わぁ……」

そこかしこから、ため息のような、歓声のような声がもれる。
視界一杯に広がる星の瞬きは、それだけで胸にせまる感動があった。

「すごい……」

まどかは思わずつぶやいた。

「やっぱりこの瞬間が大好きです」

誠も嬉しそうに、そうつぶやいた。

まどかもうなずいた。

天の川が、無数の星のあつめて横たわっていた。

その白いきらめきは、たしかに夜空に広がる川のようだった。

そして、解説員により夏の星座の案内が次々に始まった。

こと座、はくちょう座、わし座。

七夕のベガとアルタイル。

さそり座にいて座。

温かな、胸がしんっとするような感動と、わくわくするような楽しさを与えながら、ふたりの夜の時間は過ぎていった。

「今日は楽しかったです」

科学館を出たところで、まどかは誠に礼を言った。

よどんでいた気持ちが、だいぶすっきりした感じがした。

晴々とした気持ちとなったまどかは、誠に感謝したい気持ちだった。

「良かったです。僕も久しぶりで、すっかり楽しんでしまいました」

そう言った誠も、満足そうな笑顔を浮かべた。

「全部は見切れなかったし、解説も途中でしたね。ぜひ、また連れていって下さい」

そう話すまどかの誘いに、誠は安堵した表情を浮かべた。

「そう言ってもらえて良かった」

誠の言葉に、まどかは不思議そうな顔をした。

「いや、またすっかりいつもの勉強モードになって、一人ではしゃいでいたので、楽しんでもらえたか心配でした」

誠がすまなそうな顔をして、そうつぶやいた。

なんだ、そんなことを心配していたんだ……。

まどかは、並んで歩く誠の背中を軽く叩いた。

「師匠！　自信を持ってください。師匠の楽しさは、人に伝わります。こちらも嬉しい気持ちになるんです」

誠の顔がいくらか赤くなった。

褒められたこと、背中を叩かれたことが、ちょっと恥ずかしかったようだ。

「自信はなかなか持てないですね。でもそう言い続けてもらうと、すこし前向きな気持になります」

「はい」

誠の言葉に、まどかは嬉しそうに返事した。

「それじゃあ、帰りましょう」

「そうですね」

そうしてふたりは自転車に乗って、夕暮れの道をつらなって走りだした。

いくらか涼しくなった風を切りながら、ふたりは家路へと向かっていった。

神様の変化

最近、誠の様子がおかしい。
真穂は勉強する誠の様子を見ながら、そんなことを考えていた。
時折、勉強の手が固まったように止まる。しばらくの時間そうして、また勉強を始める。
それに、勉強をしていない時に何かを思い出して、笑顔を浮かべている時がある。
わずかな変化だったが、真穂は見逃さなかった。
真穂は誠の感情の変化を推理してみた。

まどかちゃんのことを警戒していた最初　↓　まどかちゃんを受け入れるがまだ距離あり　↓　安心感とともに会うことが楽しみになる　↓　いない時にも気になるようになってきた

そうだ、そうに違いない！

ふたりが出会ってから、もう少しで４ヶ月というところか。
あのにぶい誠も、ようやくまどかちゃんの可愛らしさに気づいたか……。
真穂は嬉しくなった。
これはちょっと背中を押してみたい、と思い始めていた。

そんな時に、まどかから思わぬ質問があった。

「真穂さん。恋する気持ちって、どうしたらなれるのですか？」

隣に座っていた誠が、驚いて何度も瞬きをしているのに気づいたが、真穂は放置した。

今日は夏休みもあと数日を残すところとなり、夏休みの勉強の成果を報告に来てもらっているところだった。

まどかはちゃんと学校の課題も、誠が出した宿題もこなしていた。誠と一緒に図書館にもかなり通ったようだ。高校一年生なのに、感心、感心。

ひと通り報告が終わって落ち着いた一時の、まどかからの突然の質問だった。

「あらあら、何かあったの？」

大人らしく冷静を装いながら、真穂はまどかに探りを入れてみた。ここは慌ててはいけない。

「私、恋をしたことがなくて……このまま恋することもないのかな、って少し不安な気持ちもあって……」

まどかがうつむきながら、つぶやいた。

真穂はもう少し質問をしてみることにした。そう思うには何かきっかけがあるはず。

「周りの誰かが恋をしているのかな？」

落ち着いた声の真穂の質問に、まどかはちょっと迷った後に、素直に話してくれた。

「実は、夏休みに入った頃、男の子ふたりから告白されたんです」

「あらまぁ」

隣で誠が小さく吹き出していたが、それも放置した。

ここはしっかり確認をしなくてはいけないところだ。

「それで、ふたりのどちらかとお付き合いすることにしたの？」

真穂の質問に、まどかは頭を横に振った。

ほっ……良かった。真穂は表情には出さず、安堵の息をついた。

「私には恋は解らなくって。でも、彼らはどうしてそんな気持ちになったのか。それはどんな気持ちなのか。最近、ちょっと悩んでしまって……」

「そうなの……」

高校生ならではの悩みね。

懐かしいような気もする。

「恋なんて、知らずにしてしまうものよ。恋をしようと意識しすぎたり、逆に恋をしないように硬い殻をかぶっていなければ、自然とそういう気持ちが芽生えるものよ。本能だから」

真穂は自分なりに感じている恋愛観を、まどかに伝えた。自分もあまり褒められた恋愛はしていないが、だからこそそう思っている。

「本能……ですか」

「そうよ。それがなかったら、人類はこれほど増えないわよ」

真穂は笑いながら、そう言った。

まだ今ひとつ解らずに考えているまどかに、真穂は言葉を続けた。

「意識をし出したということは、準備が整いつつあるのかもね。意外に、心のなかに小さな芽が出ているかもよ」

「芽……ですか？」
「こういったものは、意外と最初は気づかないものよ」
真穂はそう言って微笑んでみせた。
さて、このあたりで、ひとつ策を練らなければ。
真穂は誠の方を見た。

うっとうしいほどに伸びた髪。黒縁の眼鏡。使い古したトレーナーとズボン。

うん、これは格好からだ。
真穂の方針は決まった。

「ねえ、まどかちゃん。明日は暇？」

真穂の突然の問いかけに、まどかは首をかしげた。

「明日ですか？　空いていますけど」
「それは良かった。ちょっと面白いことを思いついたんだけど、まどかちゃん、手伝ってくれない？」
「いいですけど……なんですか？」

真穂は、ふふふっとたくらみの笑顔を浮かべた。

「誠をちょっと格好良くしてみない？」

誠がはっきりと吹き出した。
まどかは最初、意味がわからなかったようにしていたが、やがて「ああっ」とうなずくと真穂に賛同した。

「今のままの師匠もいいと思いますが、確かにちょっと磨いてみるのは興味があります」
「まどかちゃん、いい子」
ちゃんと今の誠も受け入れている発言を忘れないまどかに、真穂は思わず頭をなでた。
まどかはいつものように、嬉しそうにそれを受け入れた。
「この子、私の子だから素材は悪く無いと思うのよ。ただ、嫌がるから放っておいたのだけど。そろそろ必要な年頃よね」
真穂の視線に、誠はぶんぶんと音が出そうなぐらい首を横に振った。
「髪の毛はいつもどうしているのですか？」
まどかの素朴な疑問に真穂が答えてくれた。
「自分で切っているの。お風呂場で。お金がもったいない、時間がもったいない、って言って」
「そうなんですか……」
「よし、決まり。明日は街に繰り出すわよ」
真穂の言葉に、精一杯の拒否を示す誠だったが、まどかが
「師匠。これも大切な勉強ですよ。コミュニケーションの最初は見かけです。見かけで相手にメッセージを送るのです」
と言うと、横に降っていた頭がしだいにゆっくりとなり、やがて止まった。

そして、がっくりとうなだれた。
もともとふたりに抗って、勝てる誠ではなかった。

こうして、夏休みの最後の課題が決まった。

メガネ男子

翌日の朝、まずは髪からと、まどか行きつけの美容院に三人で押しかけた。
誠は、
「美容院は女の人が行くところでしょ？」
と恥ずかしがって抵抗したが、
「いつの時代の話よ」
と真穂が言い、
「いまは男性も多いですよ」
とまどかがフォローすると、誠も観念した。

駅からほど近くにある、外から中の様子がよく見える、おしゃれなお店だった。
誠は椅子に座らされ、店の人と真穂とまどかと三人で、ああでもない、こうでもない、と髪型について議論を重ねていた。

「眼鏡は外せないから、メガネ男子風にするのはどうでしょうか」
「悪くないけど、それだとあまり変化がないから却下」
「コンセプトは、爽やかですか、格好いいですか？」
「まどかちゃんは何がいいと思う？」
「私、爽やかな人、好きです」
「じゃあ、短めかな」
「二宮和也くんとか、松山ケンイチくんとか」
「あまり短くないような気がしますけど」

大体のイメージが決まると、あとはお任せして、真穂とまどかは服を選びに外に出ることにした。

「どんな服がいいかな」
「真穂さん、服の前にぜひ選ぶものが」
「えっ、なに？」？
「メガネです。印象が変わりますよ」

まどかの提案に、真穂は大きくうなずいた。

「なるほど、それだわ。制服でもメガネはいつでも使うものだから大切ね。よしまずはメガネから行こ」

ちょうど店の人が格好いいメガネをしていたので、どこで購入したのかをたずね、その店に行くことにした。
お店近くにある大きなデパートに店舗を構えたメガネ専門店だった。
店に入っても、ふたりの勢いは止まらなかった。

「ねえねえ真穂さん、これなんてどうですか？」
「フチ無しメガネね。いいわね、印象がかなり変わりそう。これはどう？」
「黒で違和感がないけど、柄の部分がおしゃれですね。細かいところのおしゃれって、いいですね」
「丸い縁だと穏やかな感じですね。四角だと格好いいというか」
「どちらが似合うかは、後のお楽しみね。どちらも似合わなかったらどうしよう」

店の女性店員さんも二人のテンションにやや苦笑いしながら、対応してくれていた。

同じデパート内のメンズ衣料品店にもすこし顔を出していると、あっという間に時間になり、ふたりは急いで美容院へ戻った。

「どう、どんな感じになった？」

真穂が店の扉をあけて、ふたりは誠のもとへと急いだ。

誠はだいたいのカットが終わり、整髪剤を使って髪の毛をいじられているところだった。

二人の声に、誠は閉じていた目をうっすらと開け、鏡越しに目があった。

かなり短くなったが、緩やかに波打つ爽やかな髪。

メガネも取られ、眉毛も整えられていた。

顔立ちもこうしてみると、真穂にどことなく似ていて、凛々しくもどこか可愛らしい。

その出来に、思わずふたりは歓声を上げた。

「いいじゃない！　誠。やっぱり私の子ね！」

「師匠！　格好いいです！」

誠はメガネをかけていないせいで、自分の姿がどうなったか、今一つ理解出来ていなかった。

当初は戸惑っていたが、ふたりの感想を聞いて一気に顔を赤くした。

耳まで赤くして、恥ずかしさを耐えるようにうつむいた。

その様子がまた初々しくて、ふたりは店の中であることを忘れて、

「いい感じ！」「かわいい！」と声を上げていた。

思わず他の客まで顔を伸ばして見始めたが、誠の容姿をみて納得してうなずくも人もいた。

「これは幸先がいいわ。ありがとうね、素敵にやってもらって」

「有り難うございます」

カットしてくれた女性も、出来に満足そうだった。

最後にこまかな調整をして、ついた髪の毛を払い、誠にメガネを返した。

誠はメガネを受け取り、初めて自分の姿を見た。

「……誰、これ」

「いやあねぇ、自分に決まっているでしょ。あまりにイケメンで自分でびっくりした？」

「……この姿で、これから生活するの？」

誠はむしろ不安な様子で、どこか落ち込んでさえ見えた。

鏡に写った顔は、今までの自分と違いすぎて、違和感のほうが強かった。

そんな誠の気持ちを察したのか、まどかが顔を近づけてフォローしてくれた。

「この顔をもまた、師匠の姿の一つです。真穂さんに似ていますよ。親から授かったものですから、大切にしましょう！」

頬が触れ合うほどに近づいたまどかに、誠はまた耳まで赤くしながら、こくん、とうなずいた。

その様子に、またふたりで「かわいい！」と喜んび、誠は恥ずかしさのあまり早く出ようとうながした。

真穂がお金を払うと、三人は先程のメガネ店へ向かった。

メガネ店では、誠を見た女性店員さんが色めきだって、先ほど以上に高いテンションで、いろいろなメガネを勧めてくれた。

容姿を邪魔しない、フチ無しの丸めがねが一番似合ったが、「こ

れじゃあ、学校に行けない」と誠の強硬な反対にあって、黒縁の四角いメガネに落ち着いた。
柄の部分が格好良く、これはこれで誠によく似合っていた。

「いい。いいわ。メガネ男子。向井理……？　成宮寛貴……？」
「誰か解らないけれど、たぶん違うと思う」

真穂の感想に、誠はそっけなく答えた。
そのメガネ男子ってなんですか……もともとメガネ男子です。

「師匠、そのメガネもとっても似あっていますよ」

笑顔のまどかの言葉を聞くと、誠は照れて顔を赤くして「ありがとう」とお礼を言った。

「私の時とずいぶん対応が違うわね……まあいいわ」

度の入っていないメガネを店員さんに渡し、視力測定をして、レンズ作成をお願いした。1時間半ほどかかるらしい。
その間に、今度は服を選ぶことにした。

ここまで来ると、だいたいコンセプトが見え始めていた。
凛々しくも可愛いメガネ男子……似合う服は、むしろオーソドックスに真面目な服。イギリス有名校の寮生あたりが着ていそうなものが似合いそうだった。

爽やかなブルーのワイシャツに、クリームベージュのチノツータックパンツ。
シャツは縦のストライプをもう一つ追加し、下着から、靴まで揃えた。

せっかくだからと、そのまま新しい服を着させ、靴も変えさせた。
調度良い時間になってメガネ屋に戻ると、新しいメガネも出来上がっていた。
メガネを変えさせて、あらためてふたりで誠を眺めた。
「いい出来だわ……」
「真穂さん、私ちょっとどきどきしてきました」
誠は恥ずかしそうにうつむいた。
「これは何かの罰ゲームですか……」
「何言っているんですか、似あってます。師匠」
「でも、恥ずかしい」
「何事も慣れです。あっ、写真撮らせてください」
まどかが急いで携帯のカメラを起動させた。
誠はもう抵抗するのをあきらめた。
真穂も自分の携帯を取り出して、写真を撮り始めた。
「まどかちゃんも横に並んで。二人の写真を撮らせて」
「あっ、はい」
まどかは素直に誠の隣に立った。
恥ずかしそうにちょっと距離をおこうとした誠の腕をつかんで、まどかは誠を引き寄せた。
ふたりの腕が触れ合う。
「……！」

誠が耳まで真っ赤にしながらうつむいたところを、真穂に何枚か写真を取られた。
撮った写真を眺め、真穂は満足気にうなずいた。

「うん、いい写真がとれた。よし、じゃあお昼を食べに行こう」
「はい！　ほら、師匠。行きますよ」

まどかに腕を引っ張られ、抵抗もできずに後をついて行った。

街中を歩くと、姿勢のいい誠は容姿や格好もあって、目立っていた。
通り過ぎる女の子がチラチラと誠を見ているのがわかる。
誠は気づかないように、考えないようにと、まっすぐ前だけを見て歩いていた。
そんな様子の誠を見て、真穂とまどかはふたりで笑った。

長かった夏休みも、こうして終わりを告げようとしていた。
明日からは新学期だった。

高校デビュー

新学期の朝は、まだまだ夏の日差しを残していた。
久しぶりに会う仲間たちに、お互いに挨拶をすませ、宿題を確認しあったり、夏休みの出来事を話しあったりしていた。
まどかも明るく挨拶を交わしながら、自分の席についた。

「おはよう」

席について声をかけてくれたのは、宗志だった。
今までと変わらない挨拶の調子だった。

「おはよう！」

まどかはそんな宗志の気遣いが嬉しくて、感謝の気持ちをこめて挨拶をした。
ただその笑顔が宗志には刺激が強かったのか、うっと詰まったような表情をして、ため息をついて席に座り込んでいた。
やっぱり傷は癒えてはいないようだった。
まどかもようやく少し、そうした感情を汲み取ることができるようになって、心のなかだけで、ゴメンなさい、とつぶやいた。

「まどか、おはよう」
「あっ、曜子。おはよう」

曜子とはたびたび電話でやり取りをしていたし、幾度かは一緒に買い物にでかけたりしていた。
ただ、まだ昨日の誠の変身については話していなかった。

そのことを話そうか、と考えていたら、周囲がへんなざわめきを
し始めたことに気づいて、まどかと曜子は確認するためにあたりを
見渡した。
そして、その原因が解った。
クラスの入り口で、立ち尽くしている男子生徒がいた……誠だっ
た。
ただ、クラスのみんなは、それが誰だが解らずにいた。
「あれ、誰？」「クラスにいたか？」「転校生？」
周囲のざわめきはそんな内容だった。
その中に、「ねえ、ちょっと格好良くない？」とか「可愛い……」
というつぶやきも聞こえる。
誠は顔を赤くして、唇を噛み締めていた。

『師匠、頑張って！』……まどかは思わず心のなかでそう叫び、握
った拳に力が入った。

その声が届いたのか、もうすぐＨＲの時間が来るためか、誠は意
を決したように中に入ってきた。
やや早足で、誰とも挨拶をせず、ややうつむきつつ、自分の席へ
向かった。
さいわい誰からも声をかけられず、誠は自分の席に座った。
誠とまどかがほっと息をついたのと反対に、周囲のざわめきはむ
しろ強くなった。
座った席から、誰だかが判明したためだった。

「もしかして、一柳？」「えっえっ、一学期ぜんぜん目立ってなか
った……」「一柳が転校して、新たに来た奴じゃない？」

予想以上の周囲の反応に、まどかも戸惑ってしまった。
まどかの肩に手が置かれ、振り返ると曜子が呆然として立ってい

た。

「あれって、いったい……」

「あの、それはね……」

まどかが説明しようとしたところ、幸か不幸かチャイムが鳴り、まもなくして先生が教室に入ってきた。

ざわめく教室内を、先生が「早く座るように」「静かに」と注意することで、何はともあれ平穏が戻ってきた。

いくつかの通達事項があり、HRが長引いたため、1限目の授業はそのまま引き続き行われた。

問題は、1限目と2限目の授業間の休み時間にやってきた。

一柳の机の周りに、ひとり、ふたり、近づこうとしている人がいた。

しかし、誠からは『何も聞かないで』オーラがはっきりと出ていたため、それほど以前から仲が良かったわけではない人たちは声をかけられずにいた。

その中でひとり、誠の隣りに座る女子生徒が一言だけ質問した。

彼女は一学期の時、隣ということで挨拶だけはしあっていた仲だった。

「一柳くん?」

「……はい」

ただ一言だけの会話だったが、周囲にどよめきが起きた。

「やっぱり一柳だ」「信じられない。こう言うのを高校デビューっていうの?」「頭がいいのに、顔もいいのってあり?」

その隣りの女の子……御庄麻友＞みしょうまゆ＜……はにっこり笑って、誠に言葉をかけた。

「髪型とメガネ、似あってるよ」

誠はふたたび顔を真赤にして黙りこんでしまった。

そのやりとりの様子に一部でどよめきがおきた。

格好いいだけでも稀少価値なのに、初々しいという可愛らしさが加わると、まどかとはまた違った破壊力があったようだ。

その様子に、一部の女の子の間でかなり評価が上がってしまった。

その後も休み時間の度に、声をかける人が現れたが、誠は「ごめん」とか「わかりません」といった言葉だけを繰り返して、話を断っていた。

昼休みになると、誠はかばんを持って逃げるように教室を出てしまった。

曜子が「追いかけるよ」とつぶやいて、まどかの手をとって走りだした。

「ちょっと、ちょっと、お弁当……」

まどかは何とかお弁当をつかんで、曜子に引っ張られるままに、教室を出た。

意外に足の速い誠に、姿を見失いかけたが、曜子にもまどかにも行き先に検討は付いていた。

彼がお昼に落ち着ける場所は一箇所しか無かった。

ふたりはいつもの図書室へ向かった。

図書室に入り奥へと進むと、やっぱり彼はいつもの席にいた。

まどかと曜子が近づくと、誠はびくっとおびえていたが、ふたりの顔を見るとほっと安心したようにため息をついた。

「師匠、大丈夫ですか？」

「……大丈夫じゃないです」

まどかの問いかけに、小さく誠がつぶやいた。

「もしかして、まどかがやったの？」

曜子が事情を察して、そうまどかに質問した。

「私と真穂さんで。真穂さんがそろそろ格好も気にした方がいいって……」

曜子は、はぁ……、とため息をついた。

「真穂さんの気持ちは解かるけれど、良くも悪くも予想以上の出来だったわけだ」

「私も昨日は嬉しいばっかりだったけれど。今日はちょっと責任を感じました」

まどかは、誠に頭を下げた。

「師匠、ごめんなさい」

誠はびっくりして、手を左右に振った。

「そんな、まどかさんが謝ることじゃないです。僕が今まで身なりをあまりにも気にしていなかったせいで、ギャップに周りが驚いて

いるだけですから……」
「……ギャップだけじゃないけどね」

曜子が小さい声で指摘したが、誠とまどかはスルーした。
二人とも、自分の容姿にはあまり自信を持っていない。
「格好いい」とか「可愛い」と言われても実感がないのだ。

「とにかく、人の噂も七十五日といいますし。いずれは周りも僕も慣れるでしょう」
「より大きくなるかも知れないよ？」
「曜子ちゃん！」

まどかが曜子のことを怒ると、「真実なのに……」と曜子は残念そうにつぶやいた。
曜子は、誠にも声をかけてくる女子生徒が現れるだろうな、と予想していた。
特に、隣に座っていた御庄麻友があやしい。
ああいう自分が女である事を十二分に理解していて、男に気軽に声をかける奴は要注意だと思っていた。
誠もまどかも恋に関しては無防備だから、曜子は防波堤にならないといけないかな、と思い始めていた。
今までは、まどかの恋を楽しくからかっていたが、これからはそうもいかなくなるのかも知れない。

「はあ……」

曜子は深い溜息をついた。

塾と家庭教師

とある平日のお昼。
まどかと誠の母親同士で、ランチをしていた。
子供たちが学校に行き始めたのを機会に、互いに時間を合わせて一度お会いしようという話になったのだ。
今まで、会話といえば電話で互いにお礼や連絡を交わすぐらいで、お会いするのも最初の玄関口での短い挨拶だけ。こうしてちゃんと会って話をするのは、ふたりにとって初めてのことだった。

誠の家からほど近く、商店街から一本外れたところに、ケーキが美味しいと評判のお店があり、そこに併設されたカフェでふたりは待ち合わせをした。
先についていたのはまどかの母親だったが、真穂もすぐに店についた。
予約をしていたために、席を案内されることですぐにふたりは出会うことはできた。
互いに立ち上がって、あらためて挨拶を交わした。

「いつも娘がお世話になっております。如月芳子と申します」
「こちらこそ、いつもお世話になっています。一柳真穂と申します」

たがいに席につくと、芳子の方から話を始めた。

「今日はすみません。お仕事をされていて忙しい中にお時間を作っていただいて」
「いえ、今日は休みの日なので大丈夫です。私も一度お会いしたいと思っていました」
「実は、お会いして一度お聞きしたいと思っていたことがありまし

て……」
「……？　なんでしょうか」
顔合わせだけだと思っていた真穂は、芳子からの言葉をやや緊張した面持ちで待った。
「娘が医学部を目指すなんて言うものですから、親として何をしてあげればいいのか、最近悩んでしまって……一度、相談させていただきたいと思っていたのです」
「ああ、そういうことですか」
真穂はほっと胸をなでおろした。
「と言っても、私も誠をほとんど放任していますが」
「そうお聞きしました。でも、それは優秀ですから……うちは今までのことを思うと心配で」
「まどかちゃんは優秀ですよ。ちゃんと真面目に課題をこなしていって、ちゃんと成長しています」
真穂の素直な気持ちだった。
その思いは伝わり、芳子は感謝の気持ちを込めて、頭を下げた。
「はい、有り難うございます。あの子が机に向かったり、図書館へ行ったりして勉強しているのを最近は良く見かけます。一学期も成績が上がっているのを見て、よく頑張っているな、と思います」
「そうですよ。心配することはないです」
真穂は笑いながら、芳子にそう話しかけた。
ふたりは注文を取りに来た店員に、コーヒーとケーキを注文した。
店員は注文をとり終えると、軽く頭を下げて厨房へ戻っていった。

あらためて、芳子が話を続けた。

「あの、誠さんは行かれていないことは解っていますが、塾とか家庭教師とか予備校というのは必要でしょうか？」

芳子の言葉を聞いて真穂はうなずき、ちょっと考える間を置いてから話し始めた。

「私の私見ですがよろしいでしょうか」

「はい、よろしくお願いします」

「それぞれに良し悪しがあると思っています。家ではどうしても勉強できない子、勉強の習慣がない子は、そうしたものを利用したほうがいいと思います。この時間は勉強というメリハリがつきますし、一定のカリキュラムで教えてくれます」

「はい」

「でも良くない点としては、塾は新しい問題、難しい問題を与え、競争心をあおり、本人や家族を不安にさせてしまうところが少なくありません。不安にさせることで、塾への依存を高めたり、勉強をうながしたりしているのでしょうが、私は良いとは思えません」

「……なるほど」

芳子はうなずいた。

「それに塾は、合格した大学名と人数で宣伝をします。ということはどれだけたくさんの塾生を集めるか、優秀な生徒を合格させるか

が問題となるため、優秀ではない生徒にそのしわ寄せが来ているのではないか、と心配もしています」

「では、家庭教師は」

「1対1で見てくれるのは、良いと思います。ただ、その人が教えることのスペシャリストで、情報をたくさん持っているとは思えません。確かに志望校の合格者であれば、明確な目標となりますし、良い部分もあると思いますが」

「はい」

「でも、多くの人はもったいない利用の仕方をしているような気がします」

「……というと」

「家庭教師のいる間だけ勉強していては、無駄な時間が多いです。事前に勉強していて解らないところを聞く、次の課題を設定してもらう、現在の評価をして今後の道筋を示してもらう。といったことに時間を使って欲しいのですが、まあそんな先生も生徒もいないでしょうね」

そもそも事前に勉強してくれる生徒ならば、家庭教師も必要ないのでは……と芳子も思いつつ、真穂の考えにうなずいた。

「良い先生というのは稀少価値で、そうした先生と出会えた生徒はその後の人生に大きな影響を与えると思います。もちろん、合う合わないはあると思いますが」

「そうですね」

「親ができることとしたら、そうした良い先生を探すこと。子供の様子を見て、その子にあっているかどうか、見極めること。先生に任せっぱなしにしないこと、でしょうか」

「あの……親が勉強を見てあげたほうがいいのですか？」

芳子の質問、真穂が少し笑って答えた。

「小学生ぐらいだとそれもいいでしょうが、高校ぐらいになるともう私達では教えられません。それに親からの関わりを避けたがる傾向があるので、すこし放任するほうが良いでしょうね。あと気持ちはわかりますが、『勉強しなさい』は逆効果です」

「やっぱりそう思いますか……うちも不安になることはあったのですが、まあ女の子だし、元気に素直に育っていればそれでいいかと思って、勉強しなさい、とは言わずに来たのですが」

「だからこそ、今伸びているのだと思います。勉強に対する苦手感はあっても、やらされている感触がないのは大切です。これからすごく伸びてくると思います」

「そうだといいのですが……」

芳子は不安そうにつぶやき、運ばれてきたコーヒーを一口飲んだ。

真穂は微笑みながら、しかし大切な話をすることにした。

「残念ながら人にはそれぞれの才能や資質があると思います」

「はい」

「放っておいても勉強する子はしますし、しない子はしないと思います。伸びる子もいれば、伸びない子もいる。残念ながら」
「やっぱりそうですよね」

真穂はうなずいた。

「周りができることは何か、と考えたことがあります」
「はい」

芳子は思わず、居住まいを正した。

「一つは勉強という物を楽しいと思わせること。これは『勉強しなさい』と言わないこと、そして勉強の楽しさを誰かが伝えること、そして褒めてあげること、だと思います」

それが難しいのだが、気づいてみると、誠とまどかはこの条件をみたしているような気がした。何がどう転ぶかはわからないものだな、と芳子は考えた。

「二つ目に環境。自分にあった、でも少し優秀な人達のいる環境があると、それを目標にしたり、ペースメーカーにしたりして勉強するようです。あまりに差があると劣等感ばかりでダメになったりしますが。……進学校の功罪ですね」

進学校に入学することで安心してしまう親子は少なくないが、その中で自信をなくし、勉強が出来なくなる子も少なくない。

本来は運動ができるとか、コミュニケーション能力が高いとか、いろいろな褒めるところがあるはずだが、進学校だと勉強ができるできないで、すべてが判断される怖さがある。

その怖さ故に親子も必死になってしまうのは、正しいことではないと真穂は考えていた。

芳子もうなずいた。

「そして、次が一生懸命です。親が一生懸命生きていること、それが苦しくて嫌なことではなく、自分のためであり他のためであり、充実したものであることを示すこと。そして、その子が何に対してであれ、一生懸命になっていることに対して、寛容であること」

一生懸命であることを笑う人達が多いことは解っている。だからこそ、自分の息子には一生懸命になれること、好きなことは精一杯やらしてあげたかった。

それが例え、勉強でなかったとしても応援するつもりでいた。

真穂も一人で子育てをすることで不安もあった。人に相談することもあった。

ドロシー・ロー・ノルトの「子どもが育つ魔法の言葉」や、千住文子さんの「千住家の教育白書」なども読んだ。

自分の家にそのまま当てはめられるか、行動できるかは別にして、真穂は自分なりの教育方針を固めて、誠を育ててきたつもりだった。

しかし、まどかと知り合った誠を見ていて、人は一人では育たないことを痛感していた。いま誠はゆっくりと、人と関わりというものを憶え、表情が豊かになってきている。

そのことに、真穂は本当にまどかに感謝したい気持ちでいた。

真穂の言葉に、うなずいていた芳子も、やや圧倒されかけていた。ここまでできる親が果たしてどれだけいるだろうか。

「もちろん、家は心が休まるところ。どんな自分でも受け止めてくれる、やすらぎの場所であるべきだとは思います。こうした姿勢や

方向性は、むしろ父親の役目かも知れませんね。……うちにはおりませんが」

芳子にはどう返事をしていいか解らなかったが、深い話を聞けていることは解った。誠の時もそうだったが、当初予想していた以上の話が聞くことができ、驚きが頭の中を占めていた。

「あの……では、うちの娘には、特に何もしないで良いのでしょうか？」

話を聞いている間に、自分がすべきことは何も無いのでは、という気持ちになってきていた。食事を作ったり、休める場所を提供するぐらいしか、自分にはできそうになかった。

「高校三年生になったら、他の人と同じように予備校の試験を受けさせて、自分の立ち位置を確認させることは必要かもしれません。あとは、誠が……うちの息子がやってくれると思いますので、任せてみましょう。もちろん、合格を確約するものではないのですが、変に動くよりかは、まどかさんにとって良いのではないか、と思うのです」

「はい」

芳子は明確な答えをもらって、ほっとした。

本当に一から教えてもらってばかりだ。

「今日は本当にありがとうございました。こんなに教えてもらえるとは思いもしませんでした。忙しい中、お呼び立てしてしまった上に、教えてもらってばかりですみません……」

「いえいえ、出過ぎたこと言ってしまいました。あくまで一意見と

してお聴きください。結局、私も誠のことは何もしていませんし」

真穂はそう言って笑い、その場の雰囲気を和やかにしようとした。

芳子は、誠の時も感じたが、真穂に対しても誠実で真面目な印象を受け、ほっとした。

「お世話をおかけしますが、娘をよろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ。まどかさんのおかげで、少しずつ明るく、人と話すようになってきて、私も助かっています。お礼を言うのは私の方なんですよ」

「そう言っていただけると、ほっとします。誠さんも真穂さんもぜひ、うちにも食事を食べにいらしてください」

「はい、有り難うございます」

ふたりは互いににっこり笑い、残りのケーキを食べながら雑談を始めた。

互いの親がそんな会話をして親交を深めていたことを、まどかも誠も知らずにいた。

体育祭と初恋

新学期が始まってすぐ、まどか達の通う学校では体育祭が行われる。

ソフトボール、サッカー、バレーボール、バスケットといった球技のどこかに参加して、一日を過ごす。

男女混合で、入っている部活の競技には出てはいけない、というルールがあるだけだった。

誠は一番人数が多いので迷惑をかけないのでは、という理由でサッカーを。

まどかは、足が速いのと持久力が役立つかな、という理由でやはりサッカーを選んでいた。

男女が混合だし、交流がメインの目的なためか、真剣というよりは楽しみながら試合をする雰囲気があった。

勝っても負けても総当りのため、何試合かはこなさないといけないし、あいた時間には他の競技の応援に行くことになっていた。

まどかと誠が参加しているためか、サッカーの応援がいつにもましてすごい数になっていた。

どうも、噂を聞いた他のクラスや違う学年も来ているようだった。

「なんか、観客がすごい数になっているね」

まどかが周りを見てつぶやくと、

「たぶん、あなた達のせいだけどね」

と曜子が返した。

「えぇー、そんなこと……」

ない……と思うが、曜子のコメントは当たっていることが多い。えーと……見るほどのものでもないと思うけど……と、まどかは理解できずにいた。

誠にいたっては、自分が当事者の一人とはかけらも感じておらず、いつものように迷惑をかけないように、ひっそりと目立たずにいようとしていた。

ときおり女子生徒からの声援が飛んでいたが、自分に対してとはまったく気づいていない様子だった。

「うーん、これだけ意識をしていない二人というのも、問題があるような……」

曜子は思わずつぶやいたが、まどかも誠も首を傾げるばかりだった。

「まどかさんは綺麗で解りますが、僕は違いますよ」

「なに言っているんですか、私は男みたいな格好で色気もありません。師匠は、いつもより男らしくて素敵ですよ」

「はいはい、ふたりで互いにのろけない。お互いに自覚してください」

曜子のコメントに不満げながら、ふたりは「はぁい」と返事をした。

試合が始まった。

男女混合のためか男子が控えめに動いていることもあり、まどかの活躍が目立った。
フリーになったボールへの一歩の駆け出しが早く、思い切りの良さもあってボールを確保することが多い。

「まどかちゃん、いいぞ！　こちら、こちら！」

宗志が走りこみ、パスを要求した。
慣れないながらも、持ち前のセンスで瞬時にパスを出し、ボールは宗志に通った。

「すげぇ、女の子なのに動きがいい」
「細くて、格好いい！」
「あの子が噂の子？　かわいいなぁ」

観客から、まどかが動くたびにどよめきが生じていた。
まどかは楽しくなってきて、しだいに試合に集中しはじめ、外からの声はまったく耳に入らなくなっていた。
ボールに向かって走りだすと、すっと人の波から一歩出る開放感。
まどかはいつしか笑顔で、ボールを追っていた。
その一方で見ている方は、まどかの伸びやかな走りと、楽しそうなプレーに魅了され、応援はいっそう大きくなっていた。

誠はディフェンスをやっていたが、自分としてはプレッシャーをかけるだけで精一杯だった。
ただ相手としては、誠の身体に立ちふさがれ、突破できずにパスをするしかなく、実はそれなりに役に立っていた。
そこでも女の子から、

「一柳くん、頑張って！」

「立っているだけで、格好いい！」
「背が高い！」
「でも顔立ちは可愛らしいよね」

という声が上がっていたが、これも自分に対してとは本人は気づいていない。

もともと、クラスの仲が良いためかチームプレイも悪くなく、まどかや宗志の突破力もあって、試合は優勢に進めていた。

一瞬の出来事だった。
ディフェンスをしている誠がボールのパスカットをしようと、出した足でバランスを崩し、倒れてしまった。

「いたっ！」

さいわいボールは足に当たって前に出て試合は続いていたが、そのまま立てずにいた誠のことをまどかは見逃さなかった。
誠のもとへ走り寄り、一緒に座って声をかける。

「師匠、大丈夫ですか？」
「まどかさん、大丈夫です……」

そう言いながら誠は立ち上がろうとしたが、はっきりと痛みを我慢している様子が解った。

「足をくじいたのですね。無理に動いちゃ駄目です」

まどかは誠の横に入り込み、誠の腕を自分の肩にかけて、立ち上がる。

痛みでつけない足を保護するように、まどかが誠に肩を貸す形となった。

「えっ……」

「足をつかないで、私に寄りかかってください。保健室に行きましょう」

そう言って、まどかはゆっくりと歩き始める。

誠はようやく状況を把握すると、顔だけでなく耳まで赤くして恥ずかしがった。

まどかも、いつもの調子で男女別け隔てなく身体が動いてしまったが、ここにいたって少し恥ずかしくなってきていた。

頬が赤く、熱くなるのを感じていたが、誠をそのままにしておくことは出来なかった。

チームメイトも、観客も、起こった出来事に呆然としながら、ふたりを見つめている。

ただ時間とともに、ひそひそと小さな声で話し合っているのが聞こえた。

さすがのまどかも、今の状況は理解できたが、誠を心配する気持ちの方が大きい。

「師匠、恥ずかしがらないで。しっかりつかまってください」

まどかは自分にも言い聞かせるように、誠に声をかけた。

「はい」

誠は恥ずかしかったが、まどかの好意を無駄には出来ず、肩に乗

せられた左手でまどかの肩をしっかりつかまらせてもらった。
思っていた以上に華奢な体つきに、つかまった手の力が抜けそうになる。
運動は得意でも、やっぱりまどかは女の子の身体だった。
しかも誠の脇には、まどかの胸があたっていた。
その感じたことのない柔らかな感触に、誠は意識をしてはいけないと思いつつも、意識が集中してしまう。
信じられない柔らかさで、温かくて、華奢な身体の割に大きい、と感じる感触。

うわーーーっっっ！！

心の叫びが、頭の先から飛び出しそうになる。
心臓の動悸もあまりに強くなりすぎて、まどかに聞こえてしまうのではないか、と心配になるほどだった。
高校生男子にはきつすぎる刺激に、誠は保健室までの道のりが果てしなく遠く感じていた。

まどかも、誠の思っていた以上にたくましい体つきと、つかまれた力の強さに、男女の違いを感じて、恥ずかしくなっていた。
今まで誰に対しても男女を意識せずにいたのに、急に感じた違いにまどかも戸惑ってしまう。

うわぁ、胸がドキドキする……。

まどかもまた保健室までの道のりを遠く感じていた。

ようやく着いた保健室に、ふたりは顔を真っ赤にしながら入っていった。

誠は椅子に座りこむと、支えを下ろしたまどかは傍らに立って心配そうに見ている。
保健室の先生が誠のやや腫れた足を見て、「ああ、これは捻挫ね」と言いながら、処置の道具を探し始めた。

「まどかさん、有り難うございました。もう大丈夫です。競技に戻ってください」
「でも、歩けますか？」
「休んでいれば、歩けるようになると思います。迷惑かけました」
「いえ……そんな……」

まどかはどうしようか悩んでいたが、保健室の先生が、

「しばらく休んでもらうから、あなたは競技に戻りなさい。歩けないようなら、また連絡するから」

と言われたので、まどかは「はい」と言ってその場を離れることにした。

「師匠、じゃあ行きます。無理をしないでくだいね」

まどかが最後に心配そうに声をかけた。

「はい。有り難うございます。まどかさんも気をつけて」

まどかは一礼をして、保健室を出て行った。
廊下は歩く音がだんだんと遠くなり、やがて静かになった。
誠はほっとしたような、でもなにか寂しいような気がしていた。
その表情の変化を読み取ったのか、保健室の先生が笑って誠に話

しかけた。

「いて欲しいなら、いて下さいって、素直にいうのも大切よ」

「えっ、あっ……」

言い当てられて顔を赤くした誠の足を取り、先生は慣れた手つきでテーピングを始めた。

誠もしばらくして落ち着いたのか、つぶやくように本音を漏らした。

「迷惑をかけられませんから」

誠の言葉に、先生はくすっと笑った。

「学生のうちはね、迷惑をかけて当たり前。そんなことを気にする前に、素直な気持ちを言えるようにする方が大切よ。あの子も、頼って欲しそうな顔していたわよ」

「……そうなんですか？」

「言わないと解らない気持ち、伝わらない思いがあるものよ。それを伝えられるようにならなくちゃね」

先生はふふっ、と笑ってテーピングを終えた。

いて欲しい、といって相手は困らないだろうか。

もしそう言って、嫌な顔をされたらどうすればいいのだろうか。

誠には、素直な気持ちを言うのは簡単なようで高いハードルだと感じた。

ただ、伝えてもいいのかな、と思えたのは成長だったのかも知れ

ない。

ふと、まどかが触れていた感触を思い出して、誠の顔が赤くなった。

細くて、柔らかい。

今までに感じたことのない感触にびっくりした。

また触ってみたい……と思って、その考えにまたびっくりして頭をブンブンと振った。

先生が氷嚢を作ってくれて、クスクスと笑いながら渡してくれた。

「恋してるのね。いいわね」

「えっ……」

恋？　これが……恋？

えっ、えっ……？

言われて、誠は戸惑った。

頭の中でいろいろな言葉が飛び交って、ショートしそうだった。

でも、言葉にされて、それが恋だということに、納得し始める自分を感じていた。

うわっっっ！　まどかさんに恋っっ！

無理、無理だ。

相手はクラスでも評判の可愛い子で、性格もいい。

自分は勉強を教えているだけの存在で、絶対に釣り合わない。

あちらはまったく、自分のことを男として認識しているとも思えないし……。

始まったばかりの恋だったが、もう誠には結果が見えているよう

な気がして落ち込んだ。
初恋なんて、実らなくて普通か……第一、高校生で初恋って……。

誠の頭の中で、言葉が格闘していた。

「ほらほら固まってないで、氷で足を冷やしてしばらく休んでいなさい。私はちょっと仕事しているから」
「あっ、はい」

誠は部屋に壁際にあるベッドに移動して、足に氷嚢をのせて、横になった。

横になると、よけいにまどかのことを思い出してしまい、その度に胸が苦しくなって、頭を振って忘れようとするが、また思い出してしまう。

何なんだこれは……誠は初めての経験に戸惑っていた。

これで素直な気持ちを伝えるなんて、絶対無理だ。
まどかさんは二人から告白された、って言っていたけど、自分には無理だ……これぱっかりは勉強してもできそうにない……。

誠はひとりで落ち込んでしまった。
いったいどうすればいいのか、解らなかった。
相談できる友達もいないし……。

「はあ……」

思わず大きなため息をついた。
書類を書いていた先生が、それを聞いて声をかけてくれた。

「どうかしたの？」

誠は声をかけられて動転してしまったが、誰もいない部屋なのをいいことに、試しに素直な気持ちを伝えてみることにした。

「あの……素直な気持ちを伝える勇気がありません……」

先生は、誠のその言葉だけで大体の事情を察したようで、ふふっと笑うと書類を書きながら、言葉だけで返答した。

「そのうち、我慢ができなくなって、嫌でも、怖くても、伝える日が来るわよ」

「……そうなんですか？」

「思いが溢れて、どうにも止められない時がね」

「……」

今は無理でも、いつかそんな日が来るのだろうか。

ただ伝えたとしても、報われる気がどうしてもしないが。

誠はもう一度ため息をつきつつ、どうしても浮かんでくる思いをしばらく持て余していた。

そんな様子の誠を見て、先生は楽しそうに笑っていた。

保健室

まどかは競技に戻ったはいいが、誠のこともあって今ひとつ集中できずにいた。
ただ、まどかの前で急に転倒して介抱してもらおうとする男子生徒が続出し、いずれにせよ試合にならなかったので、そう問題はなかった。
転倒した男子生徒達はもちろん、まどかが助けようとする前に、それを阻止するべく他の男子生徒に助けられてしまったのだが。

昼休みの時間になり、まどかは曜子に声をかけて、お弁当を持って保健室へ向かった。

保健室で休んでいた誠は、扉が開くのを見て、まどかが来てくれたのかと思って、ドキッとしていた。
しかし、そこにいたのは誠の隣の席の女の子、御庄麻友だった。

「一柳くん、怪我をしたって聞いたけど、大丈夫？」

笑顔を浮かべて、彼女は誠のもとへ近寄ってきた。
思わぬ人の来訪に、誠は緊張して混乱した。

「あっ、はい……」
「傷？　それとも捻挫かな？　歩ける？」
「捻挫みたいです。歩けると思います……」

誠の声の最後の方は、小さくて消え入りそうだった。
なぜこんなことを聞かれるかが、誠には不可解で、戸惑うばかり

だった。
そんな誠の様子に、自分の置かれた位置を理解したのか、麻友はため息をついた。

「一柳くん、隣の席の女の子が心配して来るのが、そんなに不思議？　それに、私の名前わかってる？」

名前？　あっ……名前……。
挨拶をするのが精一杯で、そう言えば名前を知らなかった。

「……やっぱり知らないんだ。もう。御庄麻友。麻友って呼んで。一柳くんのこと、誠くんって呼んでいい？」

誠は頭が混乱していたが、麻友の迫力に押されてうなずいた。
そのうなずきを確認して、麻友はぱっちりとした大きな目で、誠のことを見つめた。
その視線の強さに、思わず誠は後ずさりたい気持ちを感じた。
まどかが横にいるときの安心感と違って、麻友は獲物を射止めるような緊張感があった。

「近くで見ると、ますます可愛い！　ねえ、歩けなかったら手伝うよ。遠慮しないでね」
「あっ、いえ、大丈夫です……」

可愛いと言われて、誠は恥ずかしくなった。
高校一年で可愛いって。相手は同い年だし。

誠が対応に困っているところに、保健室の扉が開いた。
まどかと曜子の姿が見え、誠ははっきりとほっとした表情を浮かべた。

麻友は誠の表情の変化をしっかりと見ていた。
今は間が悪いと悟った麻友は、誠に声をかけて帰ることにした。

「誠くん。私、帰るね。じゃあ、またね！」

そう言って、まどか曜子に軽く会釈をしながら、麻友は横を通りすぎて行った。
あっという間の出来事に、まどかが呆然としている横で、曜子が舌打ちをした。

「やっぱりあの女、来やがった。『誠くん』だって。油断も隙もない」

まどかより早く、曜子は誠の側に着くと、近くの椅子を引っ張ってきて座った。

「誠、あの女には気をつけな。誠の経験値じゃ太刀打ち出来ない。いいようにやられるよ」
「……えーっと？」

誠は曜子の内容が理解できなかった。

「にぶい奴にははっきり言っておくけど、御庄は誠が気になっている。たぶん、好きになりかけている」
「えっ！」
「えっっ！」
「二人して、驚かない！」

離れたところで先生が笑っていた。
曜子は気にせずに話を続けた。

「あの子は経験豊富そうだから、未経験の誠を転がすなんてお手の物。誠ははっきりと断る、優しさを見せない、厳しい対応を取る。そうしないと、まどかを守れないよ」

よくは解らなかったが、曜子の真剣なまなざしと『まどかを守れない』という言葉に、誠はしっかりとうなずいた。

「私を守れないってどういうこと？」
「あなたはまだしばらく天然のままでいなさい。面倒だから」
「えぇぇー？！」

まどかはぶつぶついいながら、本題に戻ることにした。

「そう言えば師匠、足は大丈夫ですか？」
「あっ、はい……だいぶいいです……」
「？　師匠？　顔が赤いですよ。大丈夫ですか？」

まどかが覗き込むように顔を近づけたので、誠はさらに赤くして固まってしまった。
どうしたのか解らないまどかの横で、曜子はひとりうなずいていた。

「面白い」
「何が？」
「いろいろと」
「……今日の曜子はわからない」

まどかはそう言えば、お弁当を持ってきていることを思い出した。
ちゃんと忘れずに、誠の分も持ってきていた。

まどかは先生のほうを向いて、

「先生、ここでお弁当を食べてもいいですか？」

と聞いた。

「いいわよ。好きにして」

「有り難うございます」

まどかは、誠にもお弁当を渡して、自分の分も用意した。

曜子も自分の分を出した。

「あっ、有り難うございます。助かりました」

「どういたしまして」

まどかはにっこり微笑んだ。

三人は「「「いただきます」」」と声を合わせ、食べ始めた。

もぐもぐとお弁当を口にしながら、まどかは誠に尋ねた。

「午後も競技には出られそうにないですね。帰りますか？」

「そうですね。近くの整形外科にかかったほうがいいかも知れません」

まどかはうなずきつつ、

「帰り、送りましょうか？」

と聞くと、一瞬の間をおいて誠の顔が瞬間湯沸かし器のように赤くなった。

保健室に連れて行かれたときのことを思い出したのは、まどかにも解った。
つられて、まどかも思い出して赤くなる。
ふたりでうつむきながら、ぼそぼそと会話した。

「……ひとりで行きます……」
「……そうですね……ごめんなさい」
「いえ……そんな……嬉しかったです……」
「……あっ……有り難うございます……」

「面白いぞ。ふたりとも」
曜子がご飯を口に入れながら、ふたりの様子を楽しく見ていた。
ふたりはしばらく顔を赤くして、会話にならない会話を交わしていた。

体育祭も無事に終わり、誠の捻挫もそれほどひどくなく、今は簡易な装具を足首に巻いて普通に歩けるようになった。

いつもの勉強会はまどかの母の要望で、如月家で行うこととなったある日。

誠の来訪は、芳子の驚きの声から始まった。

「えっ……えっ？　一柳くん？」

「あっ……はい」

誠は恥ずかしそうにうつむいた。

最近は少し慣れてきたが、今でも周りのこの反応は恥ずかしい。

「いい。いいわ。メガネ男子。向井理……？　成宮寛貴……？」

「誰か解らないですが、たぶん違うと思います」

デジャヴ？　前にもこんな会話があったような。

誠は首をかしげ、今度はその向井理と成宮寛貴を調べてみよう、と考えた。

「もう、お母さん。そのぐらいにして。困っているから」

「あらそうね。御免なさい。さあさあ、中に入って！」

芳子はどこか嬉しそうに誠を中に招き入れる。

前と同じ台所の席に座らせると、食事を並べてふたりに夕食を食べさせてくれた。

食事を食べている間、芳子は嬉しそうに誠の世話をしたり、会話

をしたりしていたのに、食事が終わって、では勉強をしましょうか、となった時、

「まどかの部屋で、ふたりで勉強しなさいよ」

と言った。

「今日は、一緒に聞かないの？」

思わず、まどかの方から聞いてしまった。

「いいのよ、私にもやることがあるから。あとでお茶を持って行くから、ふたりでやってらっしゃい」

となかば押し出すようにして、ふたりをまどかの部屋へ導いた。

「それじゃあ、仲良くね」

という笑顔の芳子に、まどかは不思議そうにしながら、あらためて横にいる誠を見る。

初めて入るまどかの部屋に緊張して、誠は固まっていた。

「師匠、そんなに緊張しないでください。あまり女の子らしい部屋でもありませんので」

確かにまどかが言うように、あまり女の子らしい部屋ではなかった。

窓際に勉強机。

隣に本棚があって、壁際にはベッド。

反対側は姿見の鏡があって、押入れがあるだけだった。

家が古い日本家屋なので、あまり可愛らしくすると違和感があるためかも知れない。
本棚には教科書と漫画、陸上の雑誌。あとは以前、誠が勧めた本が並んでいた。
机はきれいにしていて、ペン立てとライトだけが置いてある。
誠がそんな部屋の様子を眺めていると、まどかが他の部屋から椅子を持ってきて、机の前にふたつの椅子を並べて置いた。
「さっ、師匠。勉強を始めましょうか」
「そうですね。では座りましょう」
勉強と聞いてようやく落ち着いてきた誠は、まどかと一緒に机の前に並べられた椅子に座った。
ぴとっ。
ん……？
一瞬、何が触れているのか、誠も理解できなかった。
横を見ると、ぴったりと並べた椅子のために、予想以上に近くに座るまどかの顔があった。
下を見ると、触れていたのは互いの腕だった。足も一部触れていた。
誠の顔は一気に赤くなった。
「あっ……あっ……ごめんなさい」

まどかも気づいて、顔を赤くして少し離れた。

「いや、私こそ。狭い部屋なので……って、師匠！　倒れないで！」

軽く意識を失いかけた誠の身体を、まどかが引っ張り上げた。

「あっ、ごめん……頭がくらくらする」

「だっ、大丈夫ですか？」

「大丈夫。勉強だよね……そう勉強」

誠は念じるようにして、意識を戻した。

誠は動悸を感じながらも、幾度か深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

まどかが心配そうな顔で、誠を見上げていた。

その顔を見たら負けだ、と誠は自分に言い聞かせ、しばらくしてようやく落ち着くことができた。

「……今日は……社会をやろうかと思っています」

「はい」

まどかはノートを開いて、地理・日本史・世界史の教科書を本棚から取り出した。

「まずは、社会をなぜ勉強するか、から始めましょうか」

「はい」

「社会は生きていくうえで必要な知識の一つです」

「……と言うと？」

「例えば、クラスに一人ぐらい在日韓国人の方がいてもおかしくない時代です。韓国と日本との間にあった歴史をまったく知らないというのは、問題がありそうだと思いませんか？」

「……思います」
「新聞に掲載されている世界の戦争がなぜ起きているのか、知りたいと思いませんか？」
「遠い世界のことのようですが、確かに知りたいです」
「遠い世界のようでいて、戦争が起こることで日本の物価が変動したりします。決して日本も他人ではありえないのです」
「……そうですね」
「確かに知らなくても何とかなります。でも、知っておいたほうが良い知識なんです。社会は」
「そんなに重要な科目とは思っていませんでした」

まどかの言葉に、誠が笑った。

「確かに、縄文時代・弥生時代から始めたら、どこが重要か解らないですよね。実は大学の試験も近代史が多いので、近代史から始めたほうが効率もいいし、重要性も解りやすいのですが」
「そうなんですか」

意外そうに聞くまどかに、誠はうなずいてみせた。

「社会は基本的には暗記科目です。ただ、流れがあります。もう一度、暗記の原理にいて話しましょう」
「暗記の原理？」

誠はうなずいた。

「例えば、無秩序に１０個の物をあげてみましょう」

そう言って、誠は紙の上に、野球、サンドウィッチ、電車、空、鍵、机、国会議事堂、星、うどん、テレビ、と書いた。

「この１０個を、この順番通りに憶えてみてください」
「これをですか？」
「はい」
「えーっと」

まどかは言われるままに、見て、つぶやきながら、暗記にとりかかった。

３０秒ほどして、誠がノートを閉じた。

「では、何が書いてあったか、言えますか？」
「えーっと、野球、サンドウィッチ、電車、空……鍵？　えーっと、うどん。あれ？　あっ、そうだ国会議事堂？」
「思ったより、難しいでしょう」
「はい。あまり関連がないので覚えにくいです」
「では、言葉を変えますので、頭の中にイメージしてください。野球を思い浮かべてください」
「はい」
「その中でバッターがサンドウィッチを食べている姿を想像してください」
「バッターがですか？」
「はい」

不思議な図に、まどかは首をかしげながらイメージした。

「次にサンドウィッチが電車にのっている姿をイメージをしてください」
「はい？」
「サンドウィッチが電車に」
「はい……」

「その電車が高度を上げて、空に飛び立って行くイメージをしてください」
「……はい」

まどかはあきらめて、言われるままにイメージを続けた。
このおかしなイメージは、最後のうどんがテレビから出てくるイメージまで続いた。
誠は再度、ノートを閉じた。

「では、最初から言って見てください」
「えーっと、野球……サンドウィッチ……電車……空……鍵……机……国会議事堂……星……うどん……テレビ。……言えた……」

誠はうなずいた。

「あれ、何で私、記憶できたんですか？」
「脳の記憶の仕方です。一つは頭はイメージに強い。写真のようにイメージをすると、思い出しやすいように出来ています。だから記憶するときは、なるべく頭の中でイメージをすることが大切です」
「あっ、なるほど……」
「次が関連です。それぞれをつなぎ合わせるイメージが大切です。これは神経細胞が枝を伸ばして記憶を作り出すように、記憶と記憶に橋をつなぐのです」
「橋をつなぐ……」
「そう、記憶を一人ぼっちにしないで、つながりを太く、たくさん作ってあげるのです。網目状に。すべては繋がっているのです」

まどかは横に座る誠の瞳をじっと見つめた。

「なっ、何か？」

「やっぱり師匠は凄いですね」

まどかの言葉に、誠は頬が熱くなるのを感じる。

これほど近距離で見つめられて、素直に褒められると、かなり恥ずかしい。

誠は、ごほん、と咳をしてみて、集中を戻すことにした。

「……では、社会に戻ります。これをどう記憶するか。例えば日本史を例にしてみましょう」

「はい」

「まずは絵や写真をふんだんに使った日本史の本……例えば小学生が読むようなものあたりから読んでみるといいと思います」

「そんなのでいいんですか？」

「まずは、視覚的なイメージと大きな流れ……つまりそれぞれの橋作りをするのです」

「あっ、はい」

「教科書はとてもよくまとめられています。しかし、イメージをするには情報量が少なく、全体の流れを理解するには分厚い。さっと気軽に読めて、記憶に残る本から入っていくといいでしょう」

いつもながら、誠の出だしは楽そうでほっとする。

「次はよくまとめられた良書が販売されています。だいたい定番になっていて、ちょっと調べれば名前がわかることが多いと思います。そういった本は、イメージしやすく流れがつかみやすく、覚えやすくなっていながらも情報量をしぼっているので、とても効率的です。これを丸暗記しましょう」

「丸暗記ですか」

「丸暗記です。そらで言えるようになるまで」

まどかはいつものように、がっくり肩を落とした。

「やっぱり楽な道はありませんね」

誠は苦笑した。

「社会の難点は、憶える量がとても多いことです。だから、試験の直前に集中的に、しかも選択科目だけ勉強する、という人も少なくありません。しょうがないことかも知れません」

「……そうですね」

「でも、社会は楽しいし役に立つ学問です。今は細かいところまでは憶えなくとも、イメージと全体の流れをつかむのは、楽しんで出来るのではないかと思います。事実は小説より奇なり、と言って、実際にあったことは小説よりも興味深いものが少なくありません」

「そうなんですか」

まことはうなずいた。

「ＮＨＫの大河ドラマも歴史です。司馬遼太郎さんは有名な歴史小説家です。新選組や忠臣蔵は毎年のようにやっています。巷にも歴史は溢れています」

「そういえば、そうですね」

「そうそう。歴史のつながりは、人、政治、外交、宗教、お金。あたりが軸となります。そう言った関連でつながりを見ていくと覚え易いし、楽しいです」

「はい」

「それと、年代の軸ですね。これははずせない。大雑把でいいですので、日本史と世界史の重要事項の年代を、覚えたほうがいいですね」

「年号が難しいです……」

「今は大雑把な数字でもいいです。キーになる年代をおさえておけると、後が楽です」
「頑張ってみます」
まどかの言葉に、誠も、うん、とうなずいた。

アルバム

調度よいタイミングで、芳子が扉をノックして中に入ってくる。芳子は両手でお盆を持ち、その上にはお茶とアルバムらしきものが乗っていた。

「お邪魔じゃなかったかしら。ちょっと休憩しない？」

「はい、有り難うございます」

「ちょうど区切りがついたところ……って、それ私のアルバム？」

机の上にお茶をふたつ置くと、芳子は乗っていたアルバムを開いてみせた。

「せっかくだから、小さい時のまどかも見てもらおうかな、と思って」

「何か、ちょっと恥ずかしい……」

「まどかさんが小さい時のですか？」

開いたアルバムを見ると、まどかが産まれたときの写真が飾られていた。

産着にくるまれ、まだ目も開いていない。

体重２７６５ｇ、１２月２８日産まれ、と書いてあった。

「えっ、１２月２８日？」

「はい、私は年末に産まれたんです。それが何か？」

「僕も１２月２８日産まれです」

誠の言葉の後に一瞬の沈黙が広がる。

「「えーっ！！」」

まどかと芳子の驚きの声が響いた。

「師匠、私と同じ日に産まれたんですか？　あっ、しかも同じ年」

「そうですね。そうなりますね。……僕もびっくりです」

意外な共通点に、誠もまどかも驚く。

芳子はどこか嬉しそうに、「じゃあ、今度は一緒にお祝いしないとね」、とふたりに言った。

芳子は、誠のことを新たにできた息子のように思ってくれているみたいだった。せっかくの誕生日を、娘と同じように祝ってあげたい気持ちでいるようだ。

誠は、ありがたいな、と考えて、軽く頭をさげた。

写真は、自宅へ戻ってきた様子、目を開けた表情、百日参り、家族で出かけた記念など、ていねいに並べられ、ひとつひとつにコメントが添えられていた。

表情もしだいに豊かになり、今の面影も見え始めてきている。

「かわいいですね」

誠のコメントに、まどかは「有り難うございます」と恥ずかしそうに笑顔で返事をした。

本当に可愛らしい。

確かに、小さいときは髪を短くしていて、活発そうで、どこか男の子っぽい。

しかし、家族の愛に包まれ大事に育てられたきたことを、写真からも感じることが出来る。

まどかの明るさと人懐っこさは、こうして作られてきたのだな、

と誠は納得した。

「ほんとうに良いアルバムですね。……僕には写真らしい写真が残っていないので」

「えっ？」

誠の意外な言葉に、まどかも芳子も驚いて、誠の顔を見てしまう。

「母一人で育ててくれていたので、あまり写真を撮っている余裕がなかったみたいです。旅行した記憶もほとんどありませんし」

「……」

場が静かになり、ふたりが誠の表情をうかがっていることに気付き、誠はあわてて弁解した。

「あっ、でも別にそれが寂しいということではなくて……いつも母は出来る限り側にいてくれましたし、愛してくれているのも感じていましたし。僕には楽しいこともたくさんありましたし」

誠はそうやって笑顔を浮かべた。

誠が勉強を好きになったのは、人に迷惑をかけずにひとりで出来るものを選んだ結果かもしれない。

教科書を読んだり、図書館で本を読むのであれば、ひとりでいることを怪しむ人もいないし、迷惑もかけないし、ほめられることもある。

本の中の世界に空想をふくらませ、将来に希望を持たせることで寂しさを紛らわせ、生きてきたのだろうか。

芳子は思わず、誠の頭をなでた。

「あっ、えっ、何か……」

誠は突然のことに戸惑い、すこしばかり恥ずかしそうに頬を赤く染める。

「一人に慣れなくてもいいのよ。うちの家も、家族だと思って遠慮しないでね」

そう言って、芳子はやさしく誠の頭をなで続けた。

「あっ、ありが……」

あれ？

普通に返事をしようとして、誠は自分の異変に気づいた。

知らずに涙がこぼれていた。

あれ？　あれ？

悲しいわけでもないのに、こぼれた涙に戸惑っていると、今度は涙が止まらなくなってくる。

ぽたぽたと流れる涙を止めようとしたら、今度はしゃくりあげてしまった。

何が起きているのか、自分にも理解が出来ない。

悲しいような、嬉しいような、我慢していた涙があふれるような。

ああ、やっぱり寂しかったのかな……。

誠は漠然とそんなことを理解した。

耐えることが当たり前になっていたので、自分が耐えていることすら意識をしていなかった。
芳子は、そんな誠のことを今度は抱きしめてくれた。
ふわ、っと温かな柔らかな感触に包まれる。
気づくと、まどかまで一緒になって泣いてくれていた。

何でこんな僕のために、抱きしめてくれるのだろう。
何でこんな僕のために、泣いてくれるのだろう。

慣れていない優しさに、誠は戸惑うばかりだった。
ようやく気持ちが落ち着いくると、恥ずかしさが上回り、誠は涙を止めて芳子から離れる。

「すみません。泣いてしまって。……有り難うございました」
「いいのよ。もっと泣いても」
「もう大丈夫です。自分でもびっくりしています」

誠は心配をかけないように意識的に笑顔を作る。
その笑顔を見て、芳子は思わずまた誠を抱きしめた。

「そんなに頑張らなくていいの。あなたは頑張りすぎよ。もっと甘えることも覚えなさい」

優しくそう言われると、誠はまた涙腺が緩んでくるのを感じる。
鼻の奥がツンとしてくる。
泣くのを我慢しようとしたが、またどうしても泣けてきてしまった。
誠は声もなく、静かに涙を流した。

そんな誠を、芳子はいつまでも静かに受け止めてくれた。

神様のノート

その夜、誠はまどかにお礼のメールを送った。

『今日は泣いてしまって御免なさい。でも、何か楽になりました。お母様によろしくお伝え下さい。誠』

誠は自分の勉強机の前で、携帯を触っている。

誠の近くには布団が敷かれ、真穂はすでに眠りについていた。

真穂には今日のことを伝えることは出来なかったが、「いつもありがとう」と言うと、微笑みながら頭をなでてくれた。

この人の子供として産まれてきて良かった……今もそう思っている。

軽やかな電子音が鳴り、まどかからの返信が届く。

『私も泣いてしまいました。母も、師匠のことをいい子だって。息子みたいに感じる、と言っていました。また来てくださいね。まどか』

誠は慣れない手つきで、返信を打っていく。

『そう思ってもらって嬉しいです。まどかさんは、いい家族に囲まれていますね。誠』

アルバムを見て、誠はそう感じた。

愛されて育ったからこその、元気であり、人見知りしない強さであり、愛することを知っている。

自分はやはり不完全だな、と感じずにはいられない。

もちろん、真穂の愛は感じているが。

まどかから、また返信が届いた。

『師匠ももう、その家族の中のひとりですよ。今年は一緒に誕生日のお祝いしましょうね。まどか』

心が温かくなるのと同時に、また少し涙が出そうになる。
今日はずいぶんと涙腺が緩いらしい。
誰に見られているわけでもないが、誠は我慢した。

『私も楽しみにしています。おやすみなさい。誠』

『おやすみなさい。また明日。まどか』

誠は携帯を閉じた。
そして、しばらく目を閉じて、包まれるような感触を思い出していた。
胸のあたりがほっこりと温かくなる。

これでまた頑張れるな。

誠は目を開け、勉強を始めた。

学校は二学期の中間試験を目前に控えていた。
そんなある日の休み時間、麻友が誠に話しかけてきた。

「ねえ、誠くん。数学のノート貸してくれない？」

突然のお願いに、誠は思わず「えっ？」と麻友に聞き返してしま

った。

「ほら私、この前風邪で休んじゃったじゃない？　その分のノートがないの。数学はやばいから、今度の試験が不安で。ねっ、お願い！」

麻友は両手を目の前で合わせてお願いのポーズを取り、さらにウィンクまで織り混ぜてくる。

誠はどうしたら良いか悩んだが、そこまで言われると断ることも出来ない。

こくん、とうなずいて鞄から数学のノートを取り出して麻友に渡した。

「ありがとう！　誠くん。書き写したらちゃんと返すね」

麻友の嬉しそうな笑顔にたじろぎながら、誠はうなずいて了解した。

何をそんなに喜んでいるのだろう……と悩む誠だったが、ふいに視線を感じてあたりを見渡してみる。

誰の視線かはすぐに解った。

なぜか、曜子が不機嫌そうに手招きをしている。

その迫力に、背筋に汗が流れるのを感じながら、誠は曜子の近くへ歩いて行く。

「なっ、何か？」

誠が不安気に問いかけると、曜子はさらに近づくように手招きをする。

どうやら、耳を貸せ、という意味らしい。

誠はこわごわと耳を貸した。

曜子の要件は一言。

「なぜ御庄にノートを貸した」

「えっ？　だって、風邪で休んでノートがないからって……」

「あいつならノートを貸してくれる友達は山といる。おかしいとは思わないか？」

「いや……隣だから、頼みやすかった？」

「誠に頼みやすいのは、まどかしかいない。裏のある行動に簡単に乗るな」

「裏があるの？！」

誠の言葉が思わず大きくなり、曜子は誠の口をふさいだ。

「声が大きい！　誠と関係を深めたいに決まっている。断れない用事を作って近寄ってきている。あれほど注意したのに、簡単に罠にはまるんじゃない」

「そんなこと……はい、あります。御免なさい」

曜子の冷たい視線を受けて、誠は先に謝っておいた。

真面目に怖い。

「これからは、安易にノートを貸さないこと。これから使うだの、他の人に貸す約束をしているだの、何とでも嘘を考えなさい。それも訓練のひとつよ」

「……なぜ、そんなにポンポンと言い訳が思いつくんですか？」

誠は真面目に感心して、曜子に聞いてみた。

「あまり褒められているようには聞こえないけど、これはこれで慣れよ。コミュニケーションには時に嘘が必要なの」

「……勉強になります」
「……ノート取らない。どこから出してきたの」
曜子は呆れて、手だけで『あっち行け』と誠を追い払う。
誠はとぼとぼと自分の席へ戻っていった。

受け入れられた神様

体育祭での、まどかが誠に肩を貸した件は一時期噂になったが、これは比較的すみやかに収まった。

というのも、その後にまどかが他の男子を助けようとしていた行動もあったため、「まどかちゃんは倒れている人を見ると助けてしまう優しい子」という意見で落ち着いたためだった。

そこには、男子生徒の希望的観測が多分に含まれていたが。

しかし、今度は麻友が自分から言いふらして、誠との噂を作るのではないか……曜子はそのあたりを心配していた。

ただ、その心配は杞憂に終わった。

曜子の予想通り、麻友は友達に誠のノートを見せて自慢したのだが、ノートの出来が良すぎた。

黒板の板書だけでなく、細かい解説まで付け加えられていて、誰が見ても理解できるほど丁寧に書かれていた。

重要なところには目立つように色を変えてあり、しかもそのまま問題集としても使えるような工夫もこらしてあった。

十分に理解をした者が書いた、誰にもでも理解できる解説書であり、問題集だった。

見せてもらった友人は、そのノートをコピーしたがり、そのコピーがまた他に人にわたり……結果的にはクラス全員にノートは行き渡る。

噂は「麻友と誠の関係」ではなく「誠のノートが凄い」になっていたのだ。

「なあ、一柳。俺、英語がやばいんだ。ノート貸してくれない？」

誠の席の近くに座る男子生徒が、誠に頼みこむ。
今のところ、出回っているのは数学だけで、彼が不安なのは英語だった。
中間試験間近になり、背に腹は変えられず、彼は誠に直接頼んできた。

「えっ、いや……その……ノートは貸せなくて……」
「えっ……？」

うまく言い訳ができずにモジモジしている誠の頭を、曜子は駆け寄ってきて勢い良く叩く。

「男には貸していいの！」
「えっ、いいの？」
「女に貸して、男に貸さないと、よけい変でしょ！　ほら、貸してあげなさい」
「……はい……」

誠が鞄から英語のノートを取り出し渡した。

「ありがとう！　助かる！」

にこやかに戻る彼のところに、ワラワラと「俺にも貸して」「私にも」と人が群がる。
それを見ながら、曜子は頭をかいた。

「誠。もうこうなったら、ノート全部だしな」
「ええっ！」
「誠はどうせ試験勉強、終わっているんだろ？」
「はい、まあ……でもノートは本来、自分で作ることに意義が……」

「つべこべ言わず」
「……はい……」

誠は素直にすべての教科のノートを曜子に差し出した。
曜子はそのまま、近くに待機していた宗志に渡す。
宗志もうなずいて、それを受け取りみんなに声をかけた。

「えーっ、今から全員分のコピーをするから、ちょっと手伝ってくれ」

宗志の割り振りのもと、それぞれに仕事が分担され、ノートと人は教室から消えて行く。
その素早い展開に、誠もただ呆然と眺めるしか無かった。
曜子は、ぽんっ、と誠の肩を叩く。

「まあ良くも悪くも、これでクラス全員が友達だ。誠から話しかけて、戸惑うような顔をする奴はいなくなると思うよ」

まどかも近寄ってきて、誠の反対の肩に手を置いた。

「師匠、良かったですね。みんなの役に立てて」

誠は戸惑いながら、ふたりにうなずいた。
何が起きているのか解らなかったが、確かにその日から周りの対応が変わった。

教室に入るとみんなが挨拶をしてくれるようになった。
他にも、解らないことがあると、よく質問をされるようになった。
戸惑いのほうが多いが、挨拶と勉強なので誠も何とか対応ができる。

対応すると、相手から笑顔が戻ってくる。
これは誠にとって新鮮な体験で、少しずつだが話すことの緊張感が和らいでいく。
話をしても受け入れてもらえる実感を、誠はゆっくりとだか感じていた。

中間試験はクラス全体が、他のクラスの平均と比べて8点高いという、教師も驚く結果となった。
担任までが、

「一体何が起きたんだ」

とHRで不思議そうに生徒たちに質問をしてきた。

「一柳くんのノートのおかげです！」

教室のあちこちで、そんな声が上がる。
言わなくても良いことなのに、中間試験の良い結果にみんな興奮気味だった。

「一柳の？　ああ、彼はいつも満点だからな。どれ、どんなノートなんだ？」
「えっ……あの……」

いつも満点のところで、クラスが「やっぱり」とか「凄い」とざわめきが広がる。
誠は名指しされて困っていたが、素直にノートを一冊差し出した。
先生はそれを受け取り、ぱらっと開くと、「ほお……」と驚きの表情を浮かべる。

「これは確かにすごいな。解りやすいし、復習しやすい」

先生はしばらく考えこむようにノートを眺めた後、顔を上げて誠に言った。

「私の教科の分を貸してくれないか？」

「はい？」

教室がざわめく。先生は恥ずかしそうに頭をかきながら、素直にもう一度頼んできた。

「授業の進め方の参考になりそうだ。私の担当教科の分だけでもノートを貸してくれないか？」

ようやく先生の言葉の意味を理解した誠は、緊張のあまり頬を赤くしながら、あわててノートを取り出す。

取り出したノートを申し訳なさそうに先生に渡した。

「うん、ありがとう。早めに返すから、ちょっと借りるよ」

「はい」

誠は恥ずかしそうにうなずいた。

パチパチパチ……

周囲から、誰からともなく拍手が起きる。

誠は驚いて、周りを見渡した。

みんなが何となく嬉しそうな顔をして、拍手をしてくれている。

万雷の拍手というものではなく、小さく、密やかに、でも「良か

ったね」と「ありがとう」という言葉が聞こえてきそうだった。

誠は急いで前を向きなおし、顔を伏せた。

まずい、涙が出そう。

誠は必死になって力を込めて、涙を我慢した。
拍手が止んでいき、あたりがいつもの空気に戻っていく。
誠も落ちいてきて、何とか涙を我慢することができた。
ほっ、と安心して息を吐いたときに、一粒だけ涙が机に落ちる。
それをさっと、腕でぬぐい去る。
そして、何事もなかったかのように、誠は顔を上げた。

それを見ていたのは、ほんの数人だった。
誠を見続けていた、ほんのわずかな人たち。

まどかはそれを見て、「師匠、良かったね」と、心のなかでつぶやきながら、もらい泣きをしていた。

麻友はその誠の姿を見て、胸が苦しくなるのを感じた。
ああ、好きになっちゃった……麻友は心のなかでだけ、そうつぶやいた。

それぞれの気持ちの変化を、まだお互いに気づく前の出来事だった。

文化祭の決め事

中間試験が終わると、学校は文化祭一色に染まり始める。
まどか達のクラスでも出し物を何にするかの検討会が、毎日のように開かれていた。
中心となっているのは、文化祭実行委員の男女ふたり……涼と麻友だが、なかなか男子と女子の折り合いがつかずに、決めきれずにいた。

男子はメイド服などのコスチュームを女子に着させて喫茶店を開きたかった。
女子はそれに反対し、ダンスを主体にした舞台はどうか、と提案していた。

平行線のまま交わらないと思われた話し合いは、宗志の一言で決着を見た。

「解った。男子もコスチュームを着る方に参加する、ということで手を打たないか」

しばらくの沈黙の後、宗志の意見は万雷の拍手で迎えられた。
女子は男子の、男子は女子の着替えに期待していたが、自分達がその役目となることは想定していなかった。

問題は、その役に誰がなるかだった。
立候補はいないと思っていた接客係に、曜子が手を上げる。
公然とコスプレが出来ることに、曜子はむしろ喜びを感じている

ことはあえて明言しなかった。
性格に難はあれど、容姿のいい曜子の立候補に、異を唱える人はいなかった。
あとのメンバーは推薦となる。

女子は、まどか、凛、麻友、それに桜、薫子、美緒とクラス内の綺麗どころが選ばれる。
選ばれた女子の何名かは嫌がったが、男子から土下座をして頼まれると、しぶしぶと承諾してくれた。

男子は、宗志、涼、玲、賢治、洋介、そして誠が選ばれる。
彼らに拒否権はなかった。
選ばれた男子は、どんな姿をさせられるかを考え、沈み込んだ。

衣装の作成、教室の準備、食事作成の裏方などは、順調に割り振りがされていく。
接客係は当日頑張ってもらう代わりに、事前の仕事は免除されることになった。
ただし、何を着せられるかは、当日まで解らないというおまけ付きだが。

誠が初めての経験に恐れおののいていると、曜子が、

「後でまどかと二人でうちに来なさい。コスプレがどんなものか教えてあげるから」

と声をかけてきた。
それがいっそう誠の恐怖に輪をかけていたのだが。

中間試験結果の報告とともに、文化祭のお知らせを兼ねて、まどかは一柳家を訪れていた。
試験結果は順調に良くなってきており、順位は出ていないがおそらくクラスでも上位に入り始めている点数となっていた。
真穂はいつものように、激しくまどかのことを褒めてくれる。
頭をなで、抱きしめられが、毎回のことなのにまどかはとても嬉しかった。

そして、文化祭の話になり、まどかも誠も接客係で参加することに、真穂は嬉しそうにうなずく。

「いつもはほとんど参加していないのに、文化祭で誠がそんな係になるなんてね……本当にこの数ヶ月で、誠の環境も変わったわ。あらためて有り難うね、まどかちゃん」
「いえいえ、師匠が頑張ったんです。本当に」

まどかは本当にそう考えていた。
初めての挨拶の時も、髪を切った後も、ノートの時も、本人が頑張らないと何も変わることはない。
自分の勉強もそうだ。
確かに、誠や真穂のアドバイス、学校の先生の授業がなければ、成績は上がらない。
でも結局、勉強をするのは自分なんだ、ということを意識せずにはいられない。
だからこそ真穂はいつも、よく頑張ってるね、と褒めてくれる。
自分を褒めてあげなさい、とも真穂からよく言われていた。
自分を褒めてあげることは、とても大切なのだと、繰り返し教えられた。
大切な事なんだろう、と今はまどかも理解できる。

「どんな衣装を着るのか、当日までわからないの？」

真穂の質問に、あらためて誠が落ち込んだ。

曜子の家で見せられた、コミケでコスプレをする人たちの写真の衝撃を、思い出しているようだった。

今の格好が限界なのに、あんな格好をするなんて……。

はたで見ていて解るほどの落ち込みに、まどかは思わず慰めずにいられなかった。

「師匠、私も一緒ですから。頑張りましょう。たった一日の我慢です」

「でも、クラスの人だけでなく、他のクラスの人も来るんですよね……」

「何いってるの。私だっていくわよ。他校の人も来たりするんじゃない？」

真穂は容赦なく事実を伝える。

まどかの応援むなしく、誠の気持ちは浮上することはなかった。

一柳家からの帰り道も、誠はため息のつきどおしで、せっかくのまどかと二人きりの時間を味わう余裕もなかった。

あまりの落ち込みように、さすがにまどかも誠を不憫に思った。

「最近まで、挨拶するだけで精一杯でしたもんね。いきなりこれは、つらいですよね……」

「はい……」

まどかは優しく、誠に声をかけた。

「師匠、私の方からみんなに説明をして、今回の件はお断りしましょうか」
「えっ……？」

拒否権無し、という前提の取り決めに、誠はそんな選択肢があることを想像していなかった。
しばらく呆然として、そして、まどかの言葉の意味を噛み締めていたが、誠は小さく横に首を振った。

「誰だって、好きで選ばれたわけではありません。それでもちゃんと役目を果たそうとしています。僕だけそれを逃れるわけにはいきません」

そうだ。
これは、やらなくてはいけないことなんだ。
自分のこれからにも決して無駄にはならないはず。
そして、みんなが喜んでくれるのであれば、頑張らなくてはいけない。

誠はあらためて心を強くもとう、と決心した。

まどかの携帯からメールの着信がなり、まどかは携帯を鞄から取り出して、メールをチェックした。
差出人は曜子だった。
内容は……ああ、はい……そうね。
まどかは携帯を閉じて、鞄にしまう。
そして、その内容を誠に伝えるべきか、まどかは悩んだ。
ちらっと横を見ると、誠と視線が合う。
どうしたの？　と、問いかけるような表情の誠に、まどかは申し訳なさそうに伝えた。

「師匠……当日までに慣れておいたほうがいいので、一度試着をしましょう、って曜子ちゃんからです……」

あぁぁぁぁ……。

計測とアドレス

接客係の仕事は当日だけの約束だったが、衣装を作るためには計測をしないといけない。

授業が終わった夕方、コスチューム作成担当の女の子達からの指示のもと、ひとりずつ身体の計測が行われていた。

「はい、まずは桜井宗志からね。上着脱いで、そこに立って」

作成担当リーダーは美術部の美丘楓（みおかかえで）で、美術部のためか男の服を脱がせる口調にためらいがない。

宗志はしぶしぶ指示に従い、学生服を脱いで女の子達の前に立った。

細めだが、しっかりとした筋肉がついている。

脱いでもさまになるのは、さすが宗志だった。

女の子達は上肢を計測する人、下肢を計測する人、写真を撮る人に分かれて迅速にデータが取られていた。

ただそうは言っても、異性を身近にして行う作業に、互いに意識せずにはいられない。

どちらからともなく、声をかけあい始めた。

「桜井君、けっこうお腹まわりあるんじゃない？」

「うるさい。筋肉だっつーの」

「本当？　じゃあ見せてよ」

「お前になんか見せないよ」

そう言って互いにからかいながら、恥ずかしさを誤魔化しているようだった。

誠はどきどきしていた。
宗志のように女の子と気軽に会話する自信が、誠には全くない。
互いに黙々と計測する姿を想像して、気まずさに誠は気持ちが悪くなりそうだった。

涼も玲も手慣れたもので、恥ずかしがる様子もない。
体育会系は、肉体に自信があるからだろうか。
むしろ見せつけるかのような行動に、女子は笑いながら文句を言っていた。

賢治、洋介は落ち着いていて、自然に計測を受けていく。
顔立ちが整っているふたりは、女の子との触れ合いに緊張はありません、と言わんばかりの様子で、女の子への気遣いも忘れない。
女の子達はすこし恥ずかしそうにしながらも、笑顔で計測していった。

そして最後に、誠の番になった。

「はい、一柳くん。前に来て」
「はっ、はい……」

誠は慌てて、前に出た。
恥ずかしいと思いながらも、同じように上の制服を脱ぐ。

誠の身長は１７８ｃｍとやや高い。
筋肉質ではないが、脱いでみるとしっかりと筋肉はあり、男らしい体つきだった。
姿勢も良く、足もまっすぐきれいに伸びている。
顔は凛々しいがどこか可愛らしく、男の子なのだが中性的な魅力

もある。
頬を赤くする様子は、何か妙な色気が感じられた。

誠の緊張が女の子達にも伝わって、無言の緊張した計測が始まった。
胸囲を計られる時に、抱きしめられるように手を回される。
当たり前の動作でさえ、誠は恥ずかしさのあまり逃げたくなっていた。
女の子も、緊張して頬が赤くなっている。
手も足も触られ、何かくすぐったいような、なんとも言えない感情になる。
これだけでも限界に近いのに、当日は大丈夫だろうか……誠は自分のことながら心配になってきた。

「ふーむ」

誠の立っている姿を見ながら、楓はなにか考え込んでいる。
ぶつぶつとつぶやく声は聞こえないが、どうやら衣装の内容を考えているようだ。
誠はあえて聞かないことにした。

「うん。ご協力ありがとう。前日に最終的な調整をするので、その時はまたよろしく頼みます。楽しみにね、ふふっ」

最後の笑いが怖い。
男子一同、やや引きつった笑いをした。

計測業務が終わると、誠は身支度を整え教室を出た。
他の生徒達は部活へ行ったり、まだ教室に残って話をしたりして

いて、誠は「さよなら」と挨拶をしながらひとり下駄箱へ向かった。
中途半端な時間帯だったせいか、下駄箱には誰もいない。
誠は靴を替えて、駐輪場へ向かおうとしたが、突然後ろから声をかけられた。

「誠くん！」

振り返ってみると、麻友が立っていた。
偶然なのか待っていたのかは解らないが、鞄を手に持っていて、帰るところのようだった。

「私も帰るところなの、ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いい？」
「……はい」

一瞬、まどかの笑顔と曜子の怒った顔が浮かんだが、誠には断る言葉が思いつかなかった。
麻友も靴を履き替え、誠の横に並んで歩き始める。

「ねえ、誠くんって携帯持ってる？」
「えっ……あっ……はい……」

誠は嘘もつけず、ためらいながら返事をした。
麻友ははっきりと嬉しそうな笑顔を浮かべる。
可愛らしい顔立ちで、ぱあっと花が開いたような明るさを、誠も感じた。

「ねえ、携帯の番号とアドレス、教えて！」
「えっ……」

誠は慣れないながらも、曜子の指導に従って、頭の中で一生懸命に言い訳を探した。

「あの……メールとか電話とか、ほとんどしていないから……教えてもあまり役に立たないと思う……」

まあまあ気の効いたことを返事ができた、と誠は胸をなでおろす。これであきらめてくれるかな、と誠は淡い期待を抱いたが、麻友はそんな誠の言い訳などものともしなかった。

「如月さんとは電話もメールもしているのに？」

麻友の言葉に誠はびっくりして、思わず麻友の顔を見て質問をした。

「どうしてそれを……？」

麻友はにっこりと笑う。

「やっぱり、そうなんだ。カマをかけてみたけれど、当たったね」

「……」

誠は呆然として、麻友の横顔を見続ける。

「ねっ、誠くん。如月さんには教えて、私には教えてくれない、なんて言わないよね？」

麻友は笑顔で、誠の顔を見上げてくる。

目を見ると、吸い込まれそうな瞳をしていた。

「ねっ、いいでしょ？」

天使のような、悪魔のような笑顔だった。

誠は最後の抵抗を試みた。

「あの僕……自分の携帯の番号やアドレスの出し方が解らないけれど」

本当は取扱説明書を読み込んでいるので、誠に出来ないことはなかった。

懸命に考えた抵抗だったが、やはり麻友には全く効かなかった。

「私がわかるから大丈夫。携帯貸して？」

新たな言い訳を見つけることも出来ず、誠は小さなため息をついて鞄から携帯を取り出した。

「もう、かわいい女の子が、アドレス交換しよ、って言ってるのに、ため息なんかしないで。電話もメールも楽しいよ。勉強の邪魔はしないから」

そう言いながら、麻友は手慣れた手つきで赤外線を用いて、相互にアドレスの交換を行う。

誠はそれを黙って見ているしか無かった。

「はい、ありがとう。文化祭のこともあるし、連絡とかに使わせてね。じゃあね！」

目的をあっさりと果たした麻友は、満足してその場を離れた。

笑顔で手を振り、歩いていく麻友のことを、誠は力なく見ている

ことしか出来なかった。

「御庄さんに負けました……」

誠は家に帰る予定を変更して、曜子の家に寄っていた。
突然の誠ひとりの来訪にも曜子はたいして驚いた様子もなく、上がるように声をかけた。
曜子は誠を部屋に通すと、自分の席に座り、誠が話し始めるのを待った。
誠は正座をしてうなだれながら、つぶやいたのがこの言葉だった。

「だから、誠の経験値ではかなわないって忠告したのに……で、何があったの？」
「はい……携帯電話番号とメールアドレスを教えてしまいました」

曜子は天を仰いだ。

「まあ、予想していたけどね。行動が早いわ」
「抵抗はしたのですが、まったく歯が立ちませんでした」
「教科書には載っていない知識だからね」
「……はい」

言葉のやりとりの方法を書いた本があるのならば真剣に勉強したい、と誠は本気で考えていた。

「まあ、たぶん。これからメールや電話がかかってくると思うけれど、返信をしないか、はっきりと断らないと、いつまでも続くよ」
「断るって、どうやって……」
「僕は如月まどかが好きなので、メールを貰っても迷惑です。とか」

率直な曜子の言葉に、誠の顔がぼっと赤くなる。

「いや、そんな、えっ、その」

「まあ、無理か……」

「……はい」

二人でため息をついていたら、誠の携帯にメールの着信音が流れる。

確認すると、麻友からだった。

「麻友です！　誠くんは今、何をしていますか？　このメール、ちゃんと届いていますか？　ちゃんと届いているか確認したいので、返信もらえると嬉しいな。今日はありがとうね。」

誠はがっくりとうなだれて、メールを曜子に見せる。

曜子も思わずうなった。

「うまいな。こんなふうに書かれちゃ、誠も返信しないわけにはいかないか……」

「……どうしたらいいんでしょう」

「私も経験が豊富なわけじゃないから、よく解らないけれど、とにかく自分の本当の気持を、率直に言って断るしかないんじゃないかな」

「……」

誠にも曜子の言うことは解る。

結局、それしか解決の道はないのだろう。

難しそうだが。

「このままずるずる付き合うと、まどかが変にふたりのことを誤解するぞ。『せっかくの師匠の恋。ちゃんと成就させなくちゃ』とか思われたら最悪だぞ」

誠の胸が苦しくなって、緊張のあまり頭にじっとりと汗が出てくる。

まどかのことだから本当にありそうで、誠は怖くなってきた。

何故こんなことになってしまったのだろうか。

まどかしか友達がいなかったとき、日々は穏やかで、温かで、嬉しくて……。

曜子と話ができるようになったり、教室のみんなから認められるようになったことも嬉しい出来事だった。

しかし、麻友のことは想定外で、誠もただ困惑するばかりだ。

生まれて初めての異性から好意……しかも、彼女は接客係に推薦されるぐらい容姿も可愛らしい。

本来は喜ばしい出来事なのに、誠はただため息をつくしか無かった。

何とかしなくては。

本当に。

誠は日曜日、いつもの図書館で調べ物をした。

テーマは、恋、愛、それにコミュニケーション。

誠にとって、今もっとも勉強が必要なテーマだった。

ただ、なかなか望んだものが見つからない。

恋愛小説は、自分には高度過ぎてまったく合わない。

こんな会話、こんな対応ができるわけがない。
キスをするシーンを読むだけで、誠は顔を真赤にしてうずくまってしまった。
誠は今までに感じたことのない高い壁を感じていた。

愛に関するものは哲学的なものが多かった。
なるほどと納得はできても、解決に至るものではなかった。

なぜ、これほどまでに身近な悩みなのに、解答を与えてくれる本がないのだろうか。
それとも、解答は誰でも解っていて、ただそれを行うことが出来ないだけなのだろうか……。

「素直な気持ちを言えるようにする方が大切よ」

保健室で先生に言われた言葉を思い出した。

「とにかく自分の本当の気持を、率直に言って断るしかないんじゃないかな」

曜子の言葉も思い出した。
やはりそれしかないのだろうか……。

コミュニケーションに関しての本も読んでみた。
コミュニケーションは正しい方法、技術があって、それをくり返し練習して自分のものとする必要がある。
その基本原理は勉強と同じで、びっくりした。

素直な気持ちを言うシンプルさ。
練習して体得する技術として難しさ。

まるで相反するような答えのように感じるが、それぞれに正しくも感じる。
そしていま必要なのは、失敗を恐れずに行動することだ、と誠は気持ちを固めつつあった。

メールが届いた。
携帯を開いてみると、麻友からだった。

「今、なにしてるの？　麻友」

ああ、違うなぁ。

受信一覧にならぶメールを眺めて、誠はそう思った。
まどかのメールは、見ているだけで嬉しい。ドキドキする。
しかし、麻友からのメールから、それは感じられない。
好きかどうかで、これほどまでに違う。
それは、はっきりとした差だった。

誠は決心した。
誠は図書館から出ると、麻友に電話をした。
２つほどのコールの後に、麻友はすぐに電話に出た。

「誠くん？　誠くんから電話してくれるなんて嬉しい。どうしたの？」
「あの……その……」

言葉を出さなくちゃ。
気持ちを決めたのだから。

「ごめん。僕、如月さんが好きなんだ」

電話の向こうで、一瞬沈黙が広がる。

そして聞こえてきた答えは意外なものだった。

「知ってるよ」

「え？」

「誠くんが、如月さんのことが好きなことくらい、見ていれば解るよ」

予想していなかった話の展開に戸惑い、そして気持ちがばれていた恥ずかしさで、誠はオロオロした。

「でも、付き合ってないんでしょ？」

「えっ？」

「如月さんから、好き、って言われていないんでしょ？　もし二人が付き合うことなったのなら、私も手を引く。でも、付き合っていないなら、私が誠くんと友達として話をしたり、メールをしたりしてもいいよね？　違う？」

「……」

誠には反論できなかった。

「隣の席の女の子よ。友達になってくれてもいいじゃない。いい話し相手になれると思う」

「……」

誠はどう答えればいいのか解らず、沈黙を続けるしかなかった。

「今日は電話ありがとう。今度は私からも電話するからね。じゃあ

ね」

麻友は返事も聞かずに、電話を切った。

誠の耳には、ツー、ツー、と電子音だけが響いていた。

誠はまた敗北感を感じ、目前の壁の高さに自信をなくしていた。

この壁を乗り越えることが出来るのだろうか……と。

天使の戸惑い

翌日になって、麻友の行動がはっきりと変わってきた。
朝の挨拶に始まり、休み時間にも誠に話しかけ、お昼ごはんも一緒に食べようと机を寄せてくる。
誠は困った顔をして断ろうとするが、麻友の強引さに負け続けていた。
周囲も二人の変化に気づき始めるが、誠に嫌われるとノートを貸してくれないかもと心配し、麻友に嫌われるのは怖いと考え、ふたりのことは温かく見守る姿勢で一致していた。
一部に麻友に心を寄せる男子がいたが、むしろ積極的なのが麻友であることは明らかなだったので、傷心して机に突っ伏すにとどまっていた。

まどかが気づいたのは、昼ごはん、机を寄せて食べているふたりを見た時だった。

「あっ……」

まどかは驚きの声を上げて、黙りこんでしまう。
心のなかに湧き上がる感情に、名前をつけてあげることも出来ずに、立ち尽くしてしまった。
嬉しい？　悲しい？　びっくり？　……なんだろう……。
解らないまま、とにかくその場はそのまま自分の席に座り、いつものように曜子と食べることにした。
曜子はそんなまどかの様子を見て、言葉をかけてくれた。

「誠と御庄のこと、気になる？」

「えっ……うん」
「大丈夫だから。御庄が勝手に言い寄ってきていて、誠は断りきれずにいるだけだから」
「そうなの？」
「当たり前でしょ」
「だってあんなに可愛い子なのに」
「可愛いかどうかが問題じゃないよ。好きかどうかの問題」
「……」

私が男の子だったら、あんな可愛い子に言い寄られたら悪い気はないけれど……まどかはそんなことを考えていた。
誠も麻友のことが好きではないにしろ、悪い気はしていないのじゃないかな。だからああして、机を寄せて食べているのではないか……。

「誠をこちらの席に呼ぼうか」

考えている様子のまどかに、曜子が聞いてくる。
まどかはその問に、首を横に振って答えた。

「ううん。ふたりを邪魔しちゃ悪いよ。このままでいい」
「いいの？」
「うん」
「本当に？」
「……なんで？」
「なんでって言われても……」

曜子は困ったような顔をして、まどかの顔を覗き込む。
まどかの真意をはかるようにじっと目を見つめていたが、はあ、っとため息をつくと曜子はお弁当を食べ始めることにした。

「いや、いい。さっ、食べよう」

まどかは曜子が何を言いたかったのか、解らずにいた。
曜子も、まどかが本当に気になっていないのかどうか、解らずにいた。
ただまどか自身も、自分の心の感情が何を伝えようとしているのか、解らずにいたのだが……。

結局、帰りの駐輪場まで麻友は誠について行ったため、まどか達は一言も声をかけられずにいた。
途中、誠と視線が合うこともあったが、すぐに麻友から声をかけられた誠は視線を戻してしまう。
まどかは何となくメールも電話もしづらくて、言葉を交わさない日がそれから数日続いてしまった。

そんなある日の昼休み、まどかは麻友に声をかけられた。
誠が図書室に行ってしまっていて、麻友はひとりきりでいるようだった。
曜子もちょうど教室から出ていて、まどかもひとりで座っていた。

「如月さん、すこし話をしたいんだけど。今いいかな」
「あっ……うん」
「中庭に行かない？」
「うん、いいよ」

ふたりで歩いて中庭に向かう。
学校の中庭は、校庭とは反対側にあるため、人通りが少ない。
昼ごはんの時間も過ぎると、校舎から声は聞こえるものの、あた

りに目立った人影も見当たらなかった。
麻友は立ち止まって、まどかの方を向く。
女のまどかでもドキッとするような、意志の強そうなぱっちりとした目が向けられる。

「ねえ、如月さんは誠くんのことどう思っているの？」

いきなりの質問に、まどかは戸惑ってうまく言葉が出ずにいた。

「えっ、その……なんで？」
「好きなの？　恋しているの？」
「……そんな恋なんて……」

まどかの言葉に、麻友はたたみかけるように言葉を重ねる。

「じゃあ、私が誠くんと付き合えるように応援してよ」
「えっ……？」
「だって恋してないんでしょ？　友達なんでしょ？　だったらいいじゃない」
「……そう……だけど……」

まどかが言葉を探していると、麻友は笑顔で言った。

「誠くんも、如月さんのこと友達だって言っていたよ」

そう、友達。
携帯を買いに行った時も、店員さんにそう説明していた。
私もそれを聞いて嬉しかったはず……。

「いいよね。如月さん」

強い思いを感じる瞳に押され、まどかはうなずいてしまった。

「……うん……」

返事を聞いた麻友は、にっこりと笑顔を浮かべる。

「良かった。これで安心して誠くんにはっきり『好きだ』って言える」

麻友の「好き」という言葉を聞いて、まどかは胸が痛むのを感じた。

苦しいような、なんとも言えない不快感。

「如月さん、時間をとってくれて有り難う。それじゃあ」

麻友はまどかを残して、教室へ戻っていった。あるいは図書室へ行ったのかも知れない。

まどかは何とも言えない心の重ぐるしさを感じながら、しばらくその場に立ち尽くしていた。

苦しみ

その夜、まどかは自室の机に突っ伏していた。
勉強をする気がどうしても起きない。
携帯をもてあそびながら、頭の中は何も考えられずにいた。

「……」

昼間は、麻友に何も言うことが出来なかった。
確かに、今まで自分も誠との関係を、師匠と弟子と言っていたし、大切な友達だと思っていた。
今もそうだと思っているはずなのに、なんとも言えない淋しさと無気力感が心に広がっている。
その心の理由を、まどかも理解できずにいた。
誠と会ったり、電話をしたり、メールすることが、いつしか当たり前の毎日になっていた。
会おうと思ったらいつだって会えたし、話をしようとしたらメールだって電話だってできた。
それが今は、その一歩が出ない。

「……」

携帯をじっと見た。
まどかは、ぽつっぽつっ、とゆっくりとキーを押して、誠へメールを書いた。

「師匠は御庄さんのこと、気になりますか？　応援したほうがいいですか？　まどか」

ぽつっ、と送信ボタンを押す。
はあっ……とため息をついて、携帯を置いた。
こんなメールでよかったのか解らないけれど、聞いてみたかった。
誠がどんな気持ちでいるのか、まどかにもよく解らなかったから。

しかし、メールの返事はいつまでたっても来なかった。
そんなことは初めてで、まどかは更に気持ちが沈んでいくのを感じる。
もしかしたら、麻友とメールのやりとりをしていて、こちらまで気が回らなかったのかもしれない。
それとも、もうメールも送りたくないとか。

まどかはあきらめて電気を消して、布団にもぐりこんだ。
あんなメール、送らない方が良かったのかな……と悔やみながら。

その頃、誠はまどかのメールを見て、苦しんでいた。
自分がしっかりしないから、曜子が心配したようになってしまった。
そしてそれは、まどかが誠に気がない証拠でもある。
まどかが自分に振り向いてくれないことなんて、解っていたことなのに……それでも、どこかで期待していたのか、胸が苦しい。
期待するから、望んでしまうから、でも現実はそうじゃないと解るから、苦しくなる。
こんなことなら、好きにならなければ良かったのかな。
こんなに苦しいのなら。

でも、と思う。
今まで誰も好きになったことがなかった。
自分はきっとこれからも、人を好きになることなんて無いのだろ

う、と思っていた。
そんな自分が、人を好きになった。
恋をすることができた。
かなわないとしても、人を好きになる心があったことが嬉しかった。
そして、そう思わせてくれたまどかに感謝の気持ちもある。
でも、でも……苦しいな……。

次の日も、麻友が誠に話しかける姿があった。
そして、誠とまどかは一言も言葉を交わせずにいた。
誠もまどかも落ち込んでいて、何かがおかしいことに、曜子は気がついた。
昨日とはまた何か違う。何かがあったに違いない。
曜子は昼休みに、まどかを中庭に連れ出した。

「なに……どうしたの……」

まどかは昨日のことを思い出すこの場所に、何となく気持ちが苛立つ。
落ち込んでいる気持ちと一緒に、表情と言葉にのって曜子へぶつけてしまう。
感情をコントロールできずにいることを申し訳なく思うが、今はどうしようもなかった。

「昨日、何があったの」

「……」
「誠もまどかも、昨日とは違う。何があったの？」
まどかは、はあっ、とため息をついた。
「相変わらず、曜子はするどいね……御庄さんに、師匠とうまくいくように応援して、って言われた」
「……それでまどかはなんて言ったの？」
「……うん……って」
「言ったの！　うん、って言ったの！？」
曜子がまどかの肩をつかんでくる。
その勢いに、まどかがびっくりした。
「どっ、どうしたの？」
「なんで、うん、って言ったの？！　それで本当にいいの？」
「だって、師匠も友達だって……」
「御庄の言葉なんか、まにうけちゃ駄目だって！」
「……」
「どうして……」
「……泣いてるの？」
曜子はにじむ涙を隠すように腕でぬぐう。
「悔しくないの？　私は悔しいよ……いっつも恥ずかしがって顔を赤くして、仲良くしているふたりの幸せそうな姿を見られなくなるなんて……あんな女の言葉ぐらいで……」
曜子は涙を我慢するように目を閉じているのに、ぽとりぽとりと涙がこぼれる。

まどかは呆然として、それを眺めていた。

「……まどか……お願い……気づいて……」

曜子は耐え切れず、まどかから手を離す。
後ろを向き、そのまま教室へ駆け出してしまった。
まどかはひとり、その場で立ち尽くしていた。
頭も心もいっぱいで、まだ、何も考えられずにいた。

ありがとう

授業が終わり、帰る時間になる。
ノートや教科書を鞄にしまい、帰ろうとしていた誠のことを、麻友が呼び止めてきた。

「ねえ、誠くん。伝えたいことがあるんだけど、ちょっと時間いい？」

誠としては早く帰りたいばっかりだった。彼女と話すこともない。

「早く帰りたいんだけど……なに？」
「ここでは話しづらいから、ちょっとついて来て」

返事を言う前に、誠は腕をつかまれて引っ張られる。
教室を出る直前、視界の端にまどかの姿を見つけて、胸が痛くなった。
まどかの元気のない横顔が心配で、どうしたのか心配になる。
でも聞くことが出来ない。
誠は麻友に引かれるまま、教室を後にした。

連れてこられたのは、誰もいない理科室だった。
麻友は勝手に中に入り込み、誠の後ろで扉を閉めた。
喧騒が急に遠くになり、不思議な静けさがあたりを包む。
麻友がくるっと振り返り、ひとつ大きな深呼吸をする。

「誠くん」

はっきりとした口調。
いつもより真剣な表情。
彼女にとって大切な事を伝えようとしていることは、誠にも伝わった。

「あなたのことが好きです」

初めて受けた告白。
少し誠の胸が苦しくなった。

「誠くんが如月さんのことを好きなことは知ってる。でも、如月さんも誠くんのことは友達だって言ってた。だから、私と付き合って欲しい。最初は恋心がなくてもいいから」

麻友はそこまで一気に言って、確かめるようにじっと誠の目を見続ける。
すこしだけ、麻友の手が震えていることに、誠も気づいた。
緊張している。
そうか……彼女も、苦しんで、でも勇気を出しているんだ。
好きじゃないことを知っているのに、思いを伝えている。
震えながら。

「……ありがとう」

誠の言葉に、麻友の顔がぱぁっと笑顔になる。

「付き合ってくれるの……？」

誠は顔を横に振った。

「こんな僕に、そんなに緊張して告白してくれて、ありがとう。相手が自分を好きじゃないって解っていても告白する勇気を教えてくれて、ありがとう」

「……」

「御庄さんとは、友達以上にはなれないと思う。僕は……」

ひとりしかいない。

「まどかさんが好きなんだ」

苦しくても。

麻友はそんな誠のことをじっと見つめていた。

そして、ふぅっ、とため息をつく。

「誠くんなら、そう言うかな……って思ってた。そんな一途なところも好きなんだけどな」

「……ごめん」

「謝らないで、あきらめてないから。今日は思いを伝えたかったの」

「まどかさんが駄目だから、御庄さんと付き合うなんてできないよ」

「私はそれでもいいの」

「……」

「時間が気持ちを変えてくれることってあると思うの」

「……変わらない思いを信じたい」

麻友がクスッと笑う。

「意外にロマンチストだね。知らなかった」

麻友はゆっくりと誠へ向かって歩き出し、そのまま横を通りすぎて行く。

「時間を取らせてごめん。今日はこれで帰るね。誠くん、また明日」

麻友はそう言って、笑顔を残して、ひとり理科室を出て行ってしまった。

ひとり残された誠は、深い溜息をついて、そして家へ帰るため歩き出した。

まどかは、体調がわるいことを部活の顧問の先生に告げた。

先生や先輩達がまどかの顔色が悪いことを心配してくれると、まどかは精一杯の笑顔を浮かべて、「ごめんなさい」と謝って部活を後にした。

あの昼休みのやりとりから、曜子も話をしてくれなくなった。

全部、自分が悪いのかな。

よく解らない……。

動かない頭、重たい体を感じながら、まどかは駐輪場へ向かってとぼとぼと歩いていた。

そして、誠を見つけた。

「……」

まどかは足をとめる。

何となく、胸が苦しくなるのを感じていた。

誠が人の気配に気付き、顔を上げる。

まどかと視線が合い、嬉しそうな、ほっとしたような表情をした。

まどかもいつもの誠の様子を見て、こわばっていた気持ちがほぐれ、すこし嬉しい気持ちになる。

まどかは誠のもとへゆっくりと歩き出した。

「帰るところ？」

「うん。まどかさんも？」

「うん」

誠は、すこし恥ずかしそうにしながら、まどかに言葉をかけた。

「一緒に帰りませんか」

誠の言葉に、まどかも、こくん、とうなずいた。

好きです

ふたり並んで歩くのは、なんだかずいぶん久しぶりな気がする。
ふたりの間に会話はないのに、何故かそれが苦痛ではなくて。
やっと穏やかな時間を手にいれたような、そんな安堵感。

なぜ　胸が熱くなるのか
？　黙っていても
二人にはわかるのであってほしい

まどかは何となく祝婚歌の一文を思い出した。
こうして黙っていても、歩くだけで何となく解るのに、何を気にしていたのだろう。
人の目？　他人の思い？
考えすぎていたのかな……。

「……愚かであるほうがいい……」

まどかのつぶやきに、誠が振り向く。

「祝婚歌の一文かな？」

ほらっ、伝わった。
まどかは笑顔でうなずく。
誠も一緒にうなずいてくれた。

「そうだね……睦まじくいるためには、ね……」
「うん……」

ふたりの歩くすぐ先に、小さな公園があった。
誰も遊んでいなくて、ブランコと鉄棒があるだけの小さな公園。

「ちょっと寄って行きませんか？」

まどかが誠を誘うと、誠も「はい」と答えた。
自転車を置いて、ふたりは公園のなかへ歩いて行った。
どこからかカラスの鳴き声が聞こえる。
空を見上げると、ゆっくりと夕暮れになろうとしている空が、静かにたたずんでいた。
まどかがひとりブランコに座り、小さく揺れる。

「良かった、師匠とこうして歩けて」
「……」
「御庄さんと仲良くしていて、もう一緒に歩けないかと思っていたから……」

誠は胸が苦しくなって、言葉が出なかった。
麻友の名前が出て、穏やかになっていた気持ちがぐっと重くなる。

「たまにでいいですから、また一緒に歩いてくださいね」

まどかはそう言って、すこし悲しそうな笑顔を誠に向ける。
その笑顔が、誠の胸をさらに苦しくする。
胸がいっぱいで、泣きたいような、苦しいような。

自分も一緒に歩きたかった。
歩くだけで、こんなに幸せな気持ちになるなんて思っていなかった。

嬉しくて、苦しくて。

それを伝えたくて。

胸の奥から、思いがあふれはじめてくる。

誠の頬を、一筋の涙がこぼれた。

そして、誠の口から、言葉があふれた。

「……好きです……」

断られるとか、そんなことは考えていられない。

もう、ただ、

「……まどかさんが、好きです……」

涙がとめどなくあふれてくる。

「……好きです……」

勉強していても、こんな言葉しか出てこない。

たくさんの思いを伝えたいのに、たったひとつの言葉しか浮かばない。

「好きです」

男なのに、高校生なのに、泣いてしまって、まるでお母さんが恋

しくて泣く幼稚園生のようだな……頭の片隅で、誠はそんな思いで自分を見ていた。

でも、どうすることもできない。

涙も言葉も、あふれてきて、とめることができない。

ふわっとした感触を、頬と胸に感じる。

まどかが誠の胸に手をあてて、寄り添ってきている。

少し顔をうつむかせ、柔らかな髪が誠の頬をなでる。

「……私も……好きです……」

まどかも泣いていた。

「……誠さんのこと……私も、好きです……」

それだけつぶやいて、まどかは頭を、こつんっと寄せてきた。

胸にあてた手のひらから、寄せる頭から髪からか温かな空気が流れてくるように感じる。

張り詰めていた緊張が、苦しかった胸の痛みが、ゆっくりと溶かされていく。

ゆっくり、ゆっくりと……。

まどかも涙がこぼれながら、気持ちが落ち着いていくのを感じていた。

重かった心が、気持ちが、すこしずつ和らいでいく。

解ってあげられていなかった、自分の思いに気づいてあげられた。

好きです。

手から、頭から感じる温かさに、その気持を確かめるように。

好きです……。

ふたりはそうして、しばらく寄り添い続けた。

どのぐらいの時間が過ぎただろう。
ようやくふたりの涙も止まり、気持ちが落ち着いてくる。
何となく恥ずかしくなって、どちらからともなく離れた。

「……」

恥ずかしくて、お互いに顔を見ることが出来ない。
今頃になって、頬が熱くなるのを感じる。
ふたりは伝えてしまった思いと、とってしまった行動を思い出して、はずかしさのあまりどこか穴にでも入りたい気分だった。
でもその前に、お互いにどうしても確かめておきたいことがある。

「あっ、あの……」
「はい」

誠が先に口を開いた。

「その、僕のこと……好き……って、その……本当ですか？」

まどかが、かぁっ、と耳まで赤くして、こくこく、とうなずいた。

「あっ、あの……私のこと好き……って、その……そういう意味……ですか？」

今度は、誠のほうが耳まで赤くして、うなずいた。

「……」

えーっと。
……両思い？
「……なっ、なんで僕のことを？」
「……私の方こそ、なんで……」
「いや、もう気づいたら好きになっていて……」
「わっ、私もです……気づいたら……」
ふたりはそれきり黙ってしまった。
お互いにまさか両思いになるとは思っていなかったので、どうしていいのか解らずにいたのだ。
「えーっと、……帰りましょうか」
「……そうですね……」
ふたりは、恥ずかしさのあまり目も合わせられず、言葉も交わせないまま、帰り道を歩いて行く。
ふたりの心はどきどきとしていたが、いつしかふたりとも笑顔が浮かべる。
それまでの沈んだ気持ちが嘘のように、心が軽くなっていることをふたりは感じていた。
いつしかあたりは夕暮れになり、ふたりのことを赤く染めていた。
誠は家についても、しばらくぼーっとしていた。
それをいぶかしげに真穂が眺める。
「誠……何かあったの？」
「えっ、いや！　……別に……」

誠は顔を赤くして視線をそらしたが、真穂はその様子をじっと見つめ、何か考え始める。

「隠しきれない嬉しそうな顔……まどかちゃんに愛の告白をして、うまくいったの？」

ずばりの指摘に、誠の顔が瞬間的に真っ赤になり、声がうわずる。

「なっ、なんで……えっ……」

「本当なの？！」

真穂が驚きのあまり椅子から立ち上がる。

「冗談で言ってみただけなのに……ねえ、本当ならとっても大切なことよ。私の目を見て。真剣に答えて」

真穂が誠の頭をぐいっと回し、無理矢理に目と目を合わせる。

誠は恥ずかしさに逃れたい気持ちで一杯だったが、状況的にそれは出来なかった。

「告白して、うまくいったの？！」

誠はすこし目を泳がせて、「うぅっ」とうなった後に、こくりとうなずいた。

「本当に！？」

「……はい……」

真穂は誠を引き寄せて抱きしめた。

そのいきなりの行動に、誠はビックリして、目を見開く。

「良かった！　本当に良かった……。大学の合格よりも、就職よりも嬉しいわ！　よくやった。本当によくやった。よく頑張った……」

真穂が、とんっとんっ、と誠を抱きしめたまま飛びはねる。
その全身で表す嬉しそうな様子に、誠はむしろ戸惑ってしまう。
なぜこんなに嬉しそうなのだろうか。

「まどかちゃんがいい子だから、ふたりが付き合うといいなとは思っていたけど。あんたがヘタレだから心配で」

あー、はい、そうですね。
そこに異論はありません。

「好きになるのも、好きになってもらうのも、大変なことなのよ。それに、とっても、とっても大事なことだから……」

真穂の目にはいつしか、涙が浮かんでいた。

「えっ……あの……涙……」

「……へへっ、あなたのお父さんとのこと、思い出しちゃった」

誠の心がドキッとする。真穂が父親の話をすることは皆無に近い。
誠もあえて聞いてこなかったので、こんなタイミングで話が出るとは思っていなかった。

「あなたのお父さんのことは、またいずれちゃんと話すけど、私も昔は恋したのよ。これでも」

「……ああ……うん」

「わたしの人生にとって、大切な出来事よ。あなたも授かったし……あっ、まどかちゃんがいくら可愛いからって、早まったことしちゃ駄目よ。子供は結婚してからね」

真穂がどさくさに紛れて、凄いこと言う。

誠は思わず「そんなことしません！！」と即座に否定した。

まだ手だって握ったことがないのに……肩は貸してもらったけど。

真穂は抱いた手をはなし、ゆっくりと離れた。

「誠、おめでとう。付き合ってからもいろいろ大変だけど、これもまた大切な勉強よ。しっかりね。その手を離しちゃ駄目よ」

真穂はウィンクして、笑う。

「僕からは離さないよ……離されるかが心配だけど」

「あはは。そうならないように、頑張りなさい」

真穂は誠の肩を、励ますようにとんとんっと叩く。

「いやぁ、めでたい。ビール飲むわよビール。あんたも付き合いなさい」

「未成年にお酒を勧めないでください」

「相変わらず、固いわね。ひとりで飲んでもつまんないの」

？「いつもひとりで飲んでいるでしょ」

「めでたいことは、一緒に祝いたいの……まどかちゃんでも呼んじゃおうかな……」

「……僕で勘弁して下さい」

誠の言葉に真穂は笑った。
一柳家はそうして、久しぶりに明るい夜の時間を過ごしていた。

曜子への報告

まどかはその夜、曜子に電話をしていた。
まだ心は落ち着かなかったが、ふたりを見守ってくれていた曜子にはちゃんと伝えなくては、とまどかは考えていた。

まどかは自室から、曜子へ電話をかけてみる。
夜9時とすこし遅い時間だったが、曜子は数回のコールの後に出てくれた。

「曜子？　まどかです」
「うん。私の方からも電話しなくちゃ、と思っていたから良かった……今日はごめんね」
「……えっ？」

こちらから用件を話す前に曜子に謝られてしまい、まどかはすこし戸惑う。

「びっくりして、感情的になっちゃった……つらいのはまどかの方なのにね」
「ううん。いいの。そんなに私のことなのに心配してくれて、……その……ありがとう」
「いや……うん」

お互いに間があく。
まどかは伝える言葉を探しつつ、気持ちを固めた。

「あのね……曜子ちゃん……その……今日の夕方にね」
「うん」

「師匠にね……」
「うん」
まどかはひとつだけ深呼吸をして、言った。
「……告白されました」
「うん……って、えええぇぇぇ！！」
携帯のスピーカーから大音量の叫び声が響き、まどかは思わず携帯を耳から離してしまう。
「告白って、告白?!　誠に好きって言われたの?!」
「……うん」
電話の向こうで、唾をゴクリと飲む音が聞こえた。
「で……まどかは、どう答えたの?」
「えっ……うん……私も好きです……って……」
「好きって言ったの?」
「……うん」
「いいいやったぁぁぁーーー！！！」
携帯のスピーカーが割れそうになる。
まどかはあまりの曜子の声の大きさに呆然としてしまった。
「良かった！　良かった！　御庄のせいでどうなるかと思ったけど

……ほっとした」

まどかは、くすっと笑う。

「ありがとう。そんなに喜んでくれるとは思わなかった」

「何かね、ふたりを見ていて、私も嬉しかった。恋っていいな、と思っていた」

「……」

「でも、ふたりとも鈍感過ぎて、全然自分の気持も、相手の気持にも気づいていないみたいで、不安だった。このまま上手くいかないかも、と思ったら何か悔しくてね……感情的になっちゃった」

「そうだったんだ……本当に私は気がつかなかった」

まどかの素直な気持ちだった。

誰かが自分を好きになることが、どうしても理解できなかったし、誰かを好きになる自分も想像できない。

ここのところの周りと自分の変化は、まどか自身も驚くばかりだ。

「でも、お互いに気づいて良かった。これで初恋同士、恋人になれたわけだ」

「……えっ？」

一瞬の沈黙。

「えっ、て……初恋同士でしょ？」

「そうね、言われてみれば」

「恋人でしょ？」

「恋人……」

まどかは一気に顔を赤くした。

「……今になって気付きました」
「何が？」
「恋人……」
「……にぶすぎる」
「はい……」

恋人、という慣れない響きに、まどかは恥ずかしくてしょうがない。
お互いに好きであることを確認しただけで精一杯。
これからのことをまったく想像していなかった。

「何をしたらいいんだろう」
「大丈夫。今までやってきたのが、そのまま恋人同士のやりとりだから」
「そうなの？」
「一緒に勉強したり、話したり、電話したり、メールしたり」
「何かこう、恋人って何か他に特別なことしないの？」

曜子がうーんっと考えながら、ぽそっとつぶやく。

「キスとか？」
「……！！」

まどかが言葉にならない声を上げる。
いえ、キスは想定していませんから！

「だって恋人同士でしょ？　手をつないだり、抱き合ったり、キスしたり」

矢継ぎ早の曜子の言葉に、まどかは一気に顔を赤くして、そのまま自分のベッドへぱたりと倒れ込んだ。

「……無理です」
「なんで？」
「恥ずかしくて……」
「恋人同士の楽しみを……もったいない」
「もったいなくありません」

そんなことしたら、恥ずかしさで死ねそうです。
頭の片隅で想像しただけで、動悸で胸が大変なことになりました。
はい。

「まあ、急ぐことはないよ。楽しみにね」

曜子はそう言って、ふふふっ、と笑う。
何かを企んでいそうで、怖い。

「ともあれ、おめでとう。今日はゆっくり眠れそう」
「ありがとう。心配おかけしました」
「どういたしまして。じゃあ、明日ね」
「うん、また明日」

ふたりは互いに電話を切る。
まどかは無事に報告がすみ、曜子の機嫌が治ったことに、安堵の息を漏らす。
でも……。

キスは……無理です……。

麻友とのけじめ

翌日、いつものようにまどかは教室でみんなと朝の挨拶を交わしていた。
曜子が現れると、まどかは嬉しそうに挨拶する。

「曜子、おはよう。昨日はありがとうね」
「まどか、おはよう」

曜子は昨日の喜びをまどかに伝えたい様子だったが、他の人にばれないよう、小さく右手の親指を立てて、まどかの健闘をたたえてくれるだけに抑えた。
まどかも、そのあたりは了解して、嬉しそうにうなずく。

ほっとため息をついて間もなく、まどかは教室に誠が入ってくるのを見つける。
瞬間、まどかは緊張して頬を赤く染めた。
誠もまどかに気付き、同じように身体を固めて、顔を赤くしていた。
やや挙動不審気味にうろうろしていたが、まどかの近くに来ると、誠はどもりながら挨拶をしてきた。

「おっ、おはようございましゅ」
「はっ、はい。おはようございまつ」

ふたりとも、どもっているし、噛んでるぞ……曜子が心のなかだけでつっこむ。
そのふたりの変化にまだ誰も気づいていなかったが、少し離れた席の麻友だけはふたりの様子をじっと眺めていた。

誠のことを目で追っていたことで、自然とそのやりとりを見てしまったのだ。
嫌な予感がして、麻友は胸が痛むのを感じる。
誠が近寄り、隣の席に座る。
麻友は気をとりなおして、

「誠くん、おはよう」

と笑顔で挨拶すると、

「おはようございます」

と、誠はいつもと変わらない挨拶を返してくれた。
先程のことが勘違いだったかと思うほどの変わらなさだったが、一方でまどかと自分とのあいだの差に、麻友の気持ちが落ち込んでいく。
わずかな期待を、黒く塗りつぶすような感触だった。

その予感が確定的になったのは、昼休み時間だった。
麻友は、誠から人気のいない場所へ誘われると、

「如月さんとお付き合いすることになりました……だから……御免なさい」

と言われた。
麻友は胸の痛みを隠すように、ため息をつく。

「わかった。約束だから、これ以上はつきまとわない。でも」
「……」

「はいって言って、自分の気持を変えられるわけじゃないの。私は誠くんを好きでい続ける。迷惑でも、それを無理に変えることは出来ないから」
「……うん。わかった」
麻友は視線を合さずに、
「じゃあ」
と言って、教室へ向かって歩いて行く。
麻友は一度も振り返ることはなかった。
誠は慣れないことに、ふうっとため息をつく。
するとどこからか、パチパチっと拍手の音が聞こえた。
振り返ってみると、近くの校舎の窓から曜子が顔を出し、手を叩いていた。
「えらい。ちゃんと自分でカタをつけたんだ」
よく見ると、その側にはまどかの姿もあった。
まどかは恥ずかしいのか、曜子のそでを引いて隠れようとしている。
どうも、曜子もまどかも心配になって、隠れて誠に付いて来たようだ。
そんなまどかのことを、曜子は手を引っ張って校舎から中庭へみちびき、誠のところへ連れて行く。
曜子に背中を押され、まどかは誠と向かいああう形となった。
「ほら、まどか。ちゃんと頑張った誠に、お礼を言わなくちゃ。ご褒美」

曜子に言われ、恥ずかしそうにまどかはうつむく。

「あの……ちゃんと言ってくれて……ありがとう。安心しました……」

その恥ずかしそうにつぶやく様子が可愛くて、誠は緊張してしまう。

「いや、僕も御庄さんにはっきりしておきたかったから……」

「うん。私が誤解していたこと……納得できました」

曜子が、

「当たり前よ。誠にはまどか以外は必要ないんだから」

と言うと、ふたりはより一層頬を赤く染める。

本当かな……とまどかが上目遣いに誠を見ると、それに気づいた誠は恥ずかしそうに視線をそらし、しばらくして、うん、っとうなずいた。

「うわっ、肯定した。誠、けっこう素直に言えるようになったね……私もすこしは仲間に入れてね」

「あっ、はい。ごめんなさい。もちろんです」

「当たり前よ、いつでも一緒にいてね」

「ただ、キスするときは言ってね、後ろ向くから」

「……！」「……！」

しませんっっ。

文化祭前日

せっかく互いの思いを確かめたふたりではあったが、幸か不幸かゆっくりとした時間を持つことは出来なかった。
文化祭が近くなり、事前の用意を免除されていた接客係も、他の係の手伝いをしないと間に合いそうになく、まどかも誠も忙しい日々が続いていた。

そしてとうとう文化祭の前日。
忙しさに忘れかけていたが、誠達も明日のための試着をしないといけない。
誠達はそれぞれ指定されたクラスメイトの家へ向かった。

「あれ、一柳は俺達とは別なの？」

同じ男子接客係の宗志が、不思議そうに声をかけてくる。
確かに、宗志達が集まる家とは別の家へ、誠は来るように言われていた。

「人数が多いから分けられたとか？」
「ふーん……まあいいや。じゃあ次に会うの当日かな？　お互い、明日は頑張ろうな」

宗志達が笑顔で手を振り、指定の家へ向かう。
誠もそれに手を振り返し、地図に書いてある家へ向かった。

計測の時に中心になっていた美丘楓の家が、誠の集合場所になっていた。
初めて行く、まどか以外の女の子の家に、誠はいくらか緊張する。

そしてそれ以上に、「どんな服を着せられるのだろうか……」と誠は心配していた。

それほど迷うことなく、誠は楓の家についた。
大きな2階建ての一軒家で、玄関からも広い庭がちらっと見える。
インターホンを押すと、しばらくして楓がドアを開けた。

「どうぞ。入って」
「お邪魔します」

誠は礼儀正しく一礼して、玄関をくぐる。
玄関にはいくつもの靴が並んでいて、すでに他のクラスメイトが来ているようだった。
ただ……女の子の靴ばかり……？

誠は一抹の不安と疑問を抱えながら、楓の後について廊下を歩く。
突き当たりの扉を開けると、楓が中にいる人達に声をかけた。

「一柳くんが来たよ」

すると、中から「きゃあ！」と華やかな声が響く。

んっ？　いったい何事っ！？

誠が導かれるままに中に入ると、接客係の女の子達が揃っていた。
その中には、まどかもいる。

「あれ、まどかさん」

誠が不思議そうに声をかけると、まどかは嬉しそうに答えた。

「師匠！　いらっしゃい。頑張りましょうね」
「うん……そうだけど……あれ？」
やっぱり自分、来るところを間違えてない？
頭の中に　？　が並んでいると、楓が誠の肩をたたき、
「こっち」
と別部屋に案内する。
後ろで、女の子達がきゃっきゃっと何か嬉しそうに騒いでいたが、全員が口々に喋っているため、何を言っているのか聞き取れなかった。
楓にすぐ隣の部屋に案内され、中に入る。
楓の部屋なのかベッドや机、本棚が置いてある、けっこう広い空間。
窓はカーテンで閉められ、まだ外は明るいというのに電気がつけてあった。
着替えるために、外から見えないようにしてくれているようだった。
「一柳くん、コンタクトは持ってきてくれた？」
「あっ、はい」
そう、楓が先日、メガネではなくコンタクトを用意して欲しい、と言ってきた。
1日使い捨てのを最小単位で購入すれば、そう高くないから……と言われ、指示のとおり買ってきてあるが、やはり当日は眼鏡なしでいくらしい。

眼鏡がないほうが、もしかしたら自分とバレないかも知れないので、そのことに抵抗はなかった。
誠は鞄からコンタクトを出してみせると、楓はうなずいて、いきなり、

「じゃあ、脱いで」

と言ってきた。

「……えっ？」
「恥ずかしがらないで、早く服を脱いで。試着してもらうけど、着かたがあるから私が手伝うから」

着かた？　手伝う？
脱ぐって……？

「パンツ一枚になってくれる？　そうしたらブラジャーをはめてあげるから。初めてで解らないでしょ？」

えーーっと……聞きなれない言葉が……。

「ええい、めんどくさい。私が脱がせるわよ」

楓が近寄ってきたので、誠はあわてて自分で服を脱ぎ始める。
恥ずかしいが、上を脱ぐのは何とかできる。くつしたもいい。
しかし、ズボン……これも……ですか？

「ズボンも。見慣れてるから、気にしないで。私を男と思ってもらっていかから」

楓はむしろ苛立っているように見えた。
誠はその迫力に押されて、ズボンを脱いだ。
これは、かなり恥ずかしい。

誠は顔を赤くして立ちすくむ。
何となく、手で色々と隠してしまう。それぐらいは許して欲しい。

楓はそんな誠の様子を眺めながら、「うん、うん」とうなずいている。
正直、その視線が怖い。

「よし、じゃあブラジャーからいくよ」

楓はそう言いながら、ブラジャーを取り出し、誠の前に出す。

「ここに手を入れて。後ろで止めるから。胸はパットが入っているから大丈夫」

何が大丈夫かは解らないが、とにかく指示に従った。

「次はこれが下着」

誠はそれが何かは解らなかった。
薄手の可愛らしい下着と、パンツの上からはくと思われる、黒くてタイトなレーサーパンツのような物を渡され、それを指示に従って着替える。

「次はこれね」

真っ白いシャツ。袖を通して、ボタンをしめる。

「はい次。これはちょっと私が手伝うわ」

着慣れないものが出された。

チェックのスカート？

えっ、スカートですか？

にぶい誠も自体を飲み込み始め、さぁーっと血の気が引いた。

「あの……つかぬことをお伺いしますが」

「何？」

「僕は何の姿に……」

「……見れば解るでしょ」

最後のジャケットを広げて見せる。

可愛らしいブレザーの制服。

自分達の高校のものとは違う、どこから仕入れてきたか解らないが、センスの良い可愛らしい制服だった。

しかも、スタート丈が短い。

「……無理です」

「ここまで着ておいて、何言っているの。はい、ジャケット着て。まだこれからなんだから」

これからって……。

楓は、ひと通り着終わった誠を少し離れて眺め回す。

近づいて、袖の長さを確かめたり、胸や腰のあたりを確認する。

ぶつぶついいながらノートに何かを記載して、閉じる。

「はい、じゃあ。また脱いで。次ね」

次って？

誠が戸惑うなか、楓は先ほどのブレザーを持って隣の部屋にノートを渡しながら、修正点を指示している。

誠は短パンTシャツに着替えさせられ、また部屋を移動させられる。

女装

連れて行かれたのは、風呂場だった。
ずいぶんと広い浴室で、くもりガラスの窓からは外の光が明るく入り込んでいた。

「そこに座って」

訳もわからず、浴槽の縁に座る。
楓はスプレーのようなもので泡を出して、誠の足に付け始めた。

「あの……いったい……」
「足は出すから、毛を剃らせてもらうよ」

……選択権は無しですか？

誠の返事も聞かず、楓はさっさと毛を剃り始める。
途中から鼻歌まで歌い始める楓の様子に、誠は抵抗する気持ちが萎えていく。
腕や顔など、見えそうなムダ毛は徹底的に処理されてしまった。

何となくつるつるして、肌寒い。
毛って意外と保温効果があるんだ……と現実逃避のような意味のない考えが、誠の頭の中に浮かんでいた。
最後にお湯でざっと流されて、ムダ毛処理も終わる。

「さっ、次」
「まだ何かあるんですか？」

また元の部屋にもどり、誠を椅子に座らせると、楓は誠の手を握ってきた。

「えっ？」

戸惑う誠に、楓は無言で作業を開始する。

今度は、爪の手入れのようだった。

爪の手入れか……女の子って大変だな……。

誠の心はもはや他人ごとのような、何かあきらめに似た気持ちで満たされていた。

爪はきっちりヤスリをかけられ、マニキュア？　と思われる透明な液体でコーティングされた。

「さて、じゃあこれに着替えて」

先ほどとは違うワイシャツとスカートを、抵抗をする気力もなく誠は着始める。

スカートは若干の修正を受けながら、着替え終わる。

「じゃあ、メガネを外してコンタクトにしてくれる？」

ここでコンタクト？

誠は慣れない手つきで、コンタクトをはめてみる。

入れるときは少し怖いが、装着してみるとメガネよりも視界が広くて思ったより快適。

楓が向かい合わせに座ると、誠の顔に何かし始めた。

あぁ……化粧ですね……はい。

誠は目をつぶって、されるがままに任せた。

ここまで来たら、なるようになるしかない。

化粧にはだいぶ時間がかけられた。

けっして塗りたくられたのではなく、むしろポイントを押さえてメイクはされていた。

ただその下準備として、眉を描かれたり、目のラインに時間がかかっているようだった。

何が起きているのかは鏡がないので解らないが、楓が真剣にていねいにやってくれているのは解る。

ここは信用するしかない……何を信用するかは別にして。

どのぐらいの時間がたったろう。1時間はたっていないと思うが、だいぶ時間はかかったと思う。

ようやく誠の化粧が終了した。

「よし、できた。鏡、見てみる？」

「……遠慮しておきます」

「そう。じゃあ次は立ち振る舞いの練習だから、また移動するよ」

まだあるんですか……。

誠はその格好のまま、リビングへ移動する。

リビングは広い庭が見渡せる、気持ちのよい空間が広がっており、そこにはまどか達が立っていて、なにやら練習をしていた。

誠が部屋に入ると、その中のひとり、桜が喜びの声を上げた。

「きゃぁぁ！　可愛い！」

何がですか……？

他のまどか、麻友、凛、薫子、美緒がその声に気づいて誠を見る。
美緒は桜と一緒に喜び騒ぎ、薫子と凛はあ然として口を開いて立っていた。
まどかはびっくりして、頬を赤く染めていた。
麻友も顔を赤くして、じっとこちらを見ている。

何事ですか！

「はい。じゃあ、一柳くん……というのも変か……まーちゃんも入れて、練習を始めます」

なんですか？　そのまーちゃんというのは？

楓は相変わらずマイペースに進めていた。
よく見ると、部屋の隅に計測の時に来ていた女の子達もいる。
こちらを見て小さい声で何か嬉しそうに話しているが、ここは忘れることにした。

誠は女の子達の中へ一緒に入れられると、近くに来たまどかがそっと耳打ちしてくれた。

「師匠。私よりも可愛くなってますよ。思わず見惚れてしまいました」

……そんなことはありえません！！　……と願いたい……。

反対側の耳に、今度は麻友が話しかけてきた。

「やめてよ。……もっと好きになっちゃったじゃない」

麻友の言葉に、誠はかぁっと頬が熱くなる。

……このまま逃げてもいいですか？

いや……この姿のまま逃げたら、単なる変態だ。

誠は逃げ出したい気持ちをなんとか抑えこんだ。

しかしよく見ると、まどかを初めとして、どの子もかわいい。

麻友は印象的なぱっちりとした目が可愛い子だし、凛も控えめでおとなしい印象だが顔立ちがとても整っている。

桜と美緒は、華やかでオトナっぽい。

薫子はストレートな長い髪が特徴的な、和風美人。

そして、まどかは少し短めの髪が緩やかになびかせ、柔らかな顔立ちに優しげな瞳。

笑顔を浮かべると、薄い唇がなんとも魅力的にうつる。

あらためて、こんな可愛い子たちに囲まれている今の状況に、誠は緊張し始めた……今の格好でなければ……。

まどか達も、どうも同性として誠を見ているフシがある。

肌が触れ合うほど近くにいるのに、まったく気にする様子でもなく、お互いに楽しげに会話をしている。

「はい、じゃあ静かにして。さっき配った紙に書いてある言葉を、順にやっていきます」

楓が手をたたき、皆んなの意識をこちらに向けると、端的に支持を出す。

「じゃあ、桜から。お願いします」

「はい」

桜は、手元に持っていた紙を胸元に抱え、可愛らしく机に歩み寄ると、そこにお客さんがいるかのように一礼する。

「いらっしゃいませ。こちらがメニューです。どれになさいますか？」

それを見ながら、楓が合いの手を入れる。

「それじゃあ、焼きそばと烏龍茶をお願いします」

「はい、焼きそばと烏龍茶ですね。ご注文、有り難うございました。しばらくお待ちください」

何かノートに書く真似をした後、一礼をして元の場所に戻る。

バイトでもしていたかのようなスムーズな動作だった。

「オッケー。だいたいいいね。なるべくお客さんと顔を近づけて、目を見るように心がけてね」

「はぁい」

「じゃあ、次は美緒」

それぞれ順番に接客の練習をこなしていく。

少し恥ずかしがる様子はあるが、その子らしい可愛らしさがあって好感が持てる。

誠はひとつひとつ感心しながら、その様子を見ていた。

「はい、じゃあ最後はまーちゃん」

「はっ、はい！」

名前を呼ばれて思わず声が上ずる。

「といっても、いきなり出来るとは思っていないから」

楓はそう言いながら、近寄ってくる。

「いい、よく聞いて。十何年も女をやっていた人達がうまいのは当たり前。最初はどこか男っぽくなってしまう」

「……」

「でも、忘れないで、心のどこかで男だと思っているあいだは、やっている方も見ている方も恥ずかしい」

そう。楓はここまでずっと真剣に付き合ってくれている。

一度だって笑ったり、茶化したりしていない。

きっと今も見かけは、女の子に見えるように最大限、頑張ってくれたのだろう……それは、それで悲しいが。

「演技だと割りきって、自分は女だと思いなさい。誠だとバレないぐらいに」

「……はい」

楓の真剣さが伝わり、誠はしっかりとうなずいた。

「桜の演技が、背格好からも一番合うかな。ちょっと桜、悪いけれど歩くところからもう一度お願いしていい？」

「いいわよ」

確かに、この中で一番背が高いのは桜で、お手本としても動作が綺麗だった。

桜は嫌がることなく笑顔で答えて、一歩前に出る。

つられて、誠も前に出て横に並んだ。

楓の指導は、予想以上に厳しい。

いきなり立ち姿からのダメ出しに始まり、歩き出しさえままならない。

足を気にしていたら、手が駄目とか、表情が硬いとか、全身に気を回さないといけない。

自分が女の格好をしているとか、人から見られているとか、考えている余裕もないほどだった。

時間がかかりそうと判断した楓は、仕事が残っている人達は仕事を再開するよう指示し、接客係の女の子達には簡単な打ち合わせをして、家に帰るように話した。

桜やまどかも帰ることになり、楓が1対1で指導することになる。

指導は夕食をはさみ、深夜まで及んだ。

途中、使い慣れない筋肉を使ったせいか、足がつったりして中断することもあったが、楓が納得するまで繰り返し練習は続いた。

「まあ、いいでしょう」

楓の許しが出たときは、すでに深夜2時になっていた。

誠はそのまま床に座り込んでしまうほどに疲れきってしまった。

「夜更かしをすると肌に影響が出るから、今日はここまでね。　睡眠時間をなるべく取って欲しいから、　ここで泊まっていって」

「……はい」

誠も帰る体力も気力も尽きかけていた。

楓に手伝ってもらって化粧を落とすと、誠は倒れこむように用意

してもらった布団で眠る。
自分の家以外での初めての宿泊だったが、そのことを気にすることすら出来ず、誠は深い眠りについていた。

そして、とうとう文化祭当日。
誠は楓に朝早くから叩きおこされ、シャワーを浴びて、また丁寧に毛を剃られ、朝食を食べるよう言われる。
深い眠りのおかげか、緊張感のためか、体の調子は悪くなかった。

「朝から女の子の気持ちを忘れずに」

と、食べている時も足を広げずに食べるよう指導を受ける。
言われたように足を直すと、楓もうんっとうなずく。

「まーちゃんは姿勢がいいから、それだけでも女の子に見えてくる。いい感じ」

楓が初めて嬉しそうに笑った。
ようやく合格点がもらえたようで嬉しくもあるが、それは男としてどうなのだろう、と考えると落ち込みそうになる。
……今日は考えるのはよそう。
今日だけは自分のため、クラスのみんなのため、頑張るしかない。

トーストを口に運びながら、誠はあらためて決心を固める。

食事を取り、歯を磨くと、昨日と同じ部屋で着替え始める。
修正してもらったブレザーは体にぴったりと合って、なぜか細く、女の子らしい体つきに見えるようになっていた。
化粧をする前から何となく女の子らしく見える自分の姿に、なん

とも言えない気持ちになるが、これはみんなの努力の結果なのだと自分を無理やり納得させる。

昨日のように丁寧な化粧が始まる。

耳をすませると、隣の部屋が少しずつ騒がしくなっているのを感じる。

おそらく他のメンバーもやってきて用意を始めているのだろう。

時折、

「わあ、美緒ちゃん。身体、ほっそーい！」

とか、

「まどかちゃん、胸おっきー。触らせて！」

とか聞こえるのは、なるべく意識しないようにした。

想像してはいけない。

壁の向こうで、みんなが着替えているなんて想像をしては……。

……ごめんなさい。

……許してください。

どうしても、頭の中に浮かんでしまいます。

ああぁぁぁ……。

誠は顔が赤くなるのを感じつつ、楓に気付かれないように平静を装った。

幸い、楓は化粧に集中していて、気付いていないようだった。

誠はほっとして、一度気持ちを落ち着かせる。

楓はとにかく真剣に、特に目と眉を何かしてくれている。
鏡で姿を見たいような、見たくないような。
昨日の周りの反応では、悪くはないようだけど、それはそれで複雑な気持ちだ。

今日は最後に、髪が足された。
後ろ髪を長く見せるように、地毛に混ぜるように付け足したようだ。
そして落ちないように、何かか飾りのようなものを頭の上につける。
最後に髪を調整して、ひとつ何か前髪を流した横にも飾りをつけて、どうやら終了したようだ。

「ふう……立ってみて」

誠は楓に言われるまま、立ち上がってみせる。

「ちょっと、ぐるっと回ってみて」

その場で、ぐるっと回転する。
何となく女の子っぽく回ってしまう自分に、何とも言えない気持ちになる。

「うん。これでいい」

楓にようやく笑顔が戻ってきた。
どうやら、まずまず満足できる出来らしい。

楓が隣の部屋の扉を開けて、中の様子を確かめる。

「そちらも準備が終わったみたいだね。まーちゃんに入ってもらうよ」

楓がそう言うと、「はぁーい」という明るい声が重なって響く。

「さっ、中に入って」

誠は楓にうながされ、隣の部屋に入った。

「きやゃぁぁ！　かっわいいぃぃぃ！」

入った途端に、桜か美緒かの叫び声に迎えられた。

それ以後も、女の子達の嬉しそうな声が重なり、響きあい、何を言っているのか解らないほどだった。

かなりよい出来だったらしい。

誠は戸惑いつつも、何となく安堵した。

それよりも……。

誠はまどかの姿を見つけて、びっくりした。

かっ、可愛い……。

メイドさんの服……というのか、黒色のふんわりとした短めのスカートに、肩下までのきれいな模様の入った黒い服。

白い小さなエプロンのような前掛けをつけて、きれいな足に黒のソックスをはいていた。

そして何故か、頭に小さなネコ耳。

なぜ、ネコ耳……？

なのに誠には、今まで見た中で一番、まどかが可愛く見えた。
たまらない可愛さだった。

ネコ耳をつけた可愛い笑顔。
ソックスをはいた、細くて長い足。
胸も少し強調されていて、服が大きくふくらんでいる。

誠は正座をして拝みたい衝動にかられたが、それは何とか我慢した。

何か女装したあたりから、自分のネジがひとつはずれたのかな…
…と誠は顔を真っ赤にしてうつむいた。

クラスの衝撃

見渡してみると、それぞれに似合った可愛らしい服を来ている。

凛はまどかと同じような服を来ている。
小さくて、可愛らしい、という言葉が似合う。

桜と美緒は、一種の男装……なのか？　髪を後ろにまとめて、白いワイシャツに黒くて長いパンツ、茶色の前掛けを腰にかけている。
イタリアレストランの格好いいウェイター、といった感じか。
確かに似合っていて、女性ウケしそうだった。

薫子は、秋を感じさせる色合いの着物。
髪を上に纏めあげ、うなじがきれいに見えている。
赤く塗った口紅がとても似合っていた。

麻友は、誠と同じ柄のブレザーだった。
まさかのペア。

それに気づいた麻友が近寄って来て、軽く胸を叩く。

「同じ学校の制服だね。女の子同士仲良くしてね」

そう言って、嬉しそうに笑顔を浮かべる。
麻友はブレザー姿が本当に似合っている。
こう言うのを、小悪魔というのかも知れない。

自分の姿は……割愛しよう。

可愛い……らしい。

みんなで楓の家の車に乗り込んだ。

8人乗りのワンボックスカーだったので、まずは接客係だけが乗ることになった。

運転手は楓のお母さんがやってくれる。

車中の短い時間だが、ほとんど女子会トーク。

あの……ここに男が一人いるのですが……。

「まーちゃんは、好きな彼とかいるの？」とか聞かれても困ります。

学校の表玄関近くに着くと、車を止め、みんなで降りて歩くこととなる。

ちょうど、文化祭のために登校して来た学生たちのなかを、7人で仲良く歩いた。

目立っていた。

汗が出るぐらい、注目をされている。

他の子達が可愛くて、華やかだからしょうがない。

こんな格好した女の子達が6名もまとまって歩いていたら、それは目を引くだろう。

……自分がそのなかでどう映っているのかは、知らないけど。

ただ、楓の「常に胸をはって、前を向いて。恥ずかしげに下を向いたら、本当に恥ずかしくなる。恥ずかしい時ほど胸をはって」という言葉を思い出す。

男の時だって恥ずかしくて、背を丸めていたこともある。
これもひとつの訓練。
前を向いて。

……いやぁ……恥ずかしい。

そんな様子をまどかが気づいてくれた。
そっと横に並んで、手を握ってくれる。

「師匠、大丈夫です。きれいですよ。自信持ってください」

誠はその手のぬくもりに、心が柔らかくなるのを感じた。
すこし、勇気が出る。

「まどかさん、ありがとう。頑張ります」

誠の言葉に、まどかはにっこり笑う。
そして、まどかは耳元に寄って、小さな声でつぶやいた。

「女の私が見ても、どきっ、とします。あとで写真、撮らせてくださいね」

誠はすこし頬が赤くなるのを感じる。
どきっとするのは、まどかの姿のほうだ……あとで写真、撮りたいな……。

7名は教室に着くまでの道のりで、たくさんの視線を集めつつ、無事に時間までにたどり着くことができた。
教室では最後の準備が急ピッチに進められていて、慌ただしく人が動いていた。

7名が教室に入ると、その可愛らしさ、綺麗さに歓声が響いた。

「可愛い！」
「似合う！」
「素敵」

いろんな褒め言葉が、雨のように降り注ぐ。
まどかも桜も、それぞれに嬉しそうに応えていた。
誠は隠れたい気持ちをぐっとこらえて、その側で作り笑いを続けている。

「あれ、この子、うちのクラス？」

誠の存在に気づいた生徒がいた。
誠は笑顔のまま、背中に汗が流れるのを感じる。
そんな時、麻友が腕をからめてきて、嬉しそうに言った。

「私と同じ学校の、まーちゃん。よろしくね！」

その説明に、麻友と同じ中学の子なのか……という空気が広がり始めたが、ひとりの女の子が気づいてしまった。

「もしかして、一柳くん!?」

彼女の一言と、周囲の衝撃を表す言葉が見つからない。

強いて言うなら、

！　！　！　！

と言ったところか。

誠は引きつった笑いのまま、軽く手を振ってみた。

「かっ……」

か？

「可愛い!!」

その声から、クラスが騒然となった。

「嘘だろ。女にしか見えねぇ」

「女の私より可愛いってどういうこと？」

「やばい、彼女にしたい……」

「ちょ、写真、写真……」

誠は一歩、後ずさった。

さっと後ろを向き、逃げようとしたところを、桜と美緒にきれいに脇をとられた。

「はい、逃げない」

「まーちゃん、一緒にがんばろ！」

まーちゃん、言わないでくれ……。

誠は逃げたい気持ちで一杯だったが、ここはあきらめるしかなかった。

今日一日……今日一日、頑張るんだ。

負けるな誠。

そう、自分に言い聞かせる。

「そっか。それで集まる場所が別だったんだ」

宗志の声だった。

振り返ると、宗志は上下のスーツに革靴、それに黒縁の眼鏡をしていた。

……これは、サラリーマンか。

横にいる、玲と涼は武士の姿？　和装を着崩して、荒々しい雰囲気だった。

坂本龍馬をイメージしているのだろうか。

賢治と洋介は、執事か。

黒いスーツに、黒いネクタイ。白いワイシャツが似合っている。

身長もあるので、立ち姿が決まっている。

……そちらのほうが良かった……。

誠はがっくりとうなだれた。

なぜ僕だけこんな姿……。

誠は泣きたい気持ちをぐっとこらえる。

右手の握りこぶしが、悲しげに震えた。

泣いたら、化粧が崩れる……。

そんなことを考える、自分が悲しかったが……。

ハイタッチ

忘れていたけれど、曜子も接客係だった。
一緒にいなかったのは、衣装が自分持ちだったので、自宅で用意をして学校に来たらしい。

ちょっと変わった可愛らしい制服に、髪をオレンジのリボンで結び、全体的にふわっとさせている。
髪の毛をすこし茶色に染めて、肩から少し下ぐらいで切りそろえ、何となくいつもより幼く見える。
よくは解らないが、はるひ、とかいう小説を原作としたアニメのキャクターらしい。

曜子の言葉を借りると、これは大人し目だが、他の人に合わせてこれに落ち着いたとのこと。
可愛らしくて似合っているとは思う。

時間ギリギリまで慌ただしく用意が進み、それぞれの持場につく。
何とか開門の時間までに準備が済んだ。
いよいよ開始だ。

誠は、胸がどきどきするのを感じる。

男だとバレないだろうか。
馬鹿にされないだろうか。
うまくやれるだろうか。

感じたことのない不安で、緊張する。

ふと見ると宗志が手を上げている。
何かと思ってみていると、

「まーちゃん、ほら、ハイタッチ」

ハイタッチ？

つられるままに手を挙げると、

ぱちんっ

と手を合わせてくる。
それに合わせて、ほかの接客係でも互いにハイタッチを始め、誠の手にも手を合わせてくる。

玲、涼、賢治、洋介、曜子、麻友、桜、美緒、凛、薫子、そして、まどか。

ハイタッチを繰り返すたびに、ひとりではないことを実感する。
緊張がゆっくり和らいでいくのを感じた。
宗志が掛け声を上げた。

「よし、いくぜ！」

それに合わせて、みんなで、

「おーっ！」

と声を上げる。

文化祭が始まりを告げた。

呼び込みのおかげか、それとも朝のねり歩きの効果か、始まりとともにお客さんがひとり、ふたりと入ってくる。

「いらっしゃいませ！」

みんなで明るく挨拶をして、近くにいた人から接客を始める。
お客さんも、それぞれの姿を眺めて、楽しそうだ。

文化祭って、こういうものなんだ。
誠は初めて実感した。

今まではどこか面倒で、こなせばいいものとばかり思っていた。
なぜこんなものがあるのだろう、とさえ思っていた時期もあった。

でも、クラスみんなで役割を決めて、仕事を分担して1つのものを作り上げる楽しさ。
来た人を楽しませようとする気持ち。
明るい挨拶ひとつで笑顔になるお客さん。

なにか楽しい、と感じる。

緊張感が少しずつ、楽しいに変わりつつあった。

「まーちゃん！」
「はっ、はい！」

厨房に呼ばれて、びっくりして声が裏返る。

「これ、2番テーブルのカップルに」
「はい」
うわっ、とうとう役目だ。
誠は緊張しつつ、作られた料理と飲み物をトレイに乗せて、お客さんに持って行く。
お客さんは高校生のカップルらしい。
文化祭の案内を見ながら、どこを見ようかと相談している。
「お待たせしました」
楓から、声はいつもより少しだけ高めにすればいい……高過ぎると不自然だが、少し高いぐらいだと意外に自然な声が出るから、と指導された。
そんなのでいいのだろうか、と不安になったが、お客さんは、
「ありがとう」
と誠の顔を見て、笑顔で受け取ってくれる。
誠は一礼をして、元の場所へ戻っていった。
どうやらおかしくはなかったらしい。
カップルもそのまま、案内を見ながら嬉しそうに話し続けている。
緊張する……。
でも、何とかやっていけそうな自信が少し出てきた。

しだいにお客さんも増えて、慌ただしくなる。
緊張するとか、ばれないかと心配する余裕も無くなり始めた。

まどかや凛のメイド姿や、賢治や洋介の執事姿が、人気があった。
今のはやりなのだろうか？
写真を撮る姿も、ときおり見られる。

曜子は、どうも一部の人達に熱狂的に好かれているようだ。
色々とポーズを取らされていて、喫茶店の趣旨から逸脱しつつあった。

薫子の着物姿は、そこだけがゆっくり時間が過ぎているように感じる。
ていねいにお茶を出され、「ごゆっくり」と薫子が笑顔で声をかけると、お客さんがぽーっと薫子の姿を見で追っていることもある。

宗志はちょっと年上の女生徒に大人気だったが、クールに対応する様子がまた受けているようだ。

桜と美緒は、女子ウケが半端じゃない。黄色い歓声が動作の度に上がっている。

玲と涼は汗をかきながら、むしろ働く方に徹している。
その一生懸命な様子が、また好感が持てるが。

誠もなんとか問題なく、接客をしていた。
今のところ、怪しむ人も見られない。
そう言えば、誠が髪を切ってからの姿をよく知っているのは、クラスメイトぐらいだ。
そのクラスメイトでさえ、最初は解らないのだから、短時間なら

バレることもないのだろう。

とはいえ、動作におかしいところはないか、足を開いていないか、手の出し方はおかしくないか、笑顔は作れているか……緊張は続いていた。

そんな時、ときおりみんながハイタッチしてくれる。

みんな優しいな……。

自分もできるだろうか、他の人への気遣いが……。

ひとつ乗り越えたような気がするけれど、人間としてまだまだだな、と思う。

……女装して何を乗り越えたか、自分でも疑問だが。

両親来訪

そんな中、とうとう恐れていた人が来た。
入ってきた途端に誠も気がついた……真穂だ。
いつもより、おしゃれをしてやって来ている。
まどかもすぐに気がついて、手を振りながら駆け寄っていく。
誠は恐る恐る静かに近寄ることにした。

真穂はまどかに案内されて、近くの椅子に座る。

「まどかちゃん、本当に可愛い！　ちょっと写真撮らせて」
「はい、こんな格好でよろしければ」
「なに言ってるの。男達が寄ってきて大変でしょ。こんな可愛くちゃ」

真穂のお世辞に、まどかは笑って返した。

「あはは、他にも可愛い子がたくさんいますから、そんなことないですよ」
「ううん、まどかちゃんがＮｏ．１！　本当に可愛いわ」

そんなことを言いながら、真穂は何枚か携帯で写真を撮り始める。
その出来上がりを確認しながら、ふと思い出したように真穂が聞いてきた。

「……でっ、誠はどこに？」

真穂はあたりを見渡す。

……目の前にいますが……。

誠は作り笑いを続け、どうしたら良いか迷っていた。

まどかが苦笑いをしながら、真穂に手で誠のことを指し示す。

「あの……こちらに……」

「えっ……？」

真穂がじっと顔を見る。

誠の笑顔がすこしだけ引きつった。

数秒の間を置いて、真穂は座ったまま後ずさる。

「まっ……」

まどかがさっと真穂の口を押さえてくれた。

グッジョブ！

あぐあぐと声にならない声を真穂はあげていた。

「さすが、真穂さんと似ていらっしゃっていて、可愛いですよね」

まどかがニッコリと笑って、あるべき話の斜め上の解説をしてくれると、真穂もようやく落ち着いたようだ。

まどかの手をどけて、ふぅっとひとつ大きなため息をついた。

「全然、想像していなかった……」

僕もです……。

「娘を産んだつもりはなかったから……」

そこからですか？

まどかが、くすくすと笑っていた。

「真穂さん、良ければご注文いかがですか？　私がおごりますよ」

真穂は顔を上げ、ようやくペースを取り戻す。

「やだ、私がおごろうと思っていたのに。気にしないで、このぐらいは貢献させて」

「有り難うございます。こちらがメニューです」

真穂は飲み物と焼きそばを注文してくれた。

まどかがそれを厨房に伝えに行くと、真穂と誠はふたりきりになってしまった。

「まあ、でも良かったわ。誠がクラスに馴染んでいるみたいで。安心した」

「母さん……」

「でも、女装が似合い過ぎなのが心配だけど……」

「……」

心配は無用です。

そんな時、今度はまどかの両親がやって来た。

入口のところで、中をうかがっている様子を発見した。

あっ、挨拶をしなくちゃ……と身体を動かしたところで、はたっと気づいた。

こっ、この格好で……まどかさんのご両親にご挨拶っっ！

こんな時、本当に汗が流れることを、誠は実感していた。

額と背中にじっとりと嫌な汗が流れる。

あぁ、化粧が……ハンカチで押して汗を吸い取らなくちゃ……って、そんな場合かっ！

そんな誠をよそに、まどかのご両親にきづいた真穂が声をかけた。

「如月さん、どうも。こちらでご一緒しませんか？」

まずいっ、まずいよ、母さん。

息子が大変なことになっていますよっ！

誠はとりあえず、他人を装った。

「いっ、いらっしゃいませ」

作り笑いだけは楓も合格点を出した。

今回の最大の成果だ。

芳子さんと、今回はちゃんとお父さんも一緒にいらしている。

あぁぁ……、大事な人に久しぶりにお会いしているのに……声も

かけられない……。

まどかがちょうど戻ってきた。

両親の存在に気づいて、嬉しそうに声をかける。

「わあ、来てくれたんだ。有り難う」

「まどかのかわいい姿も見れるらしいし、誠くんも参加しているんでしょ？　一度見ておこうと思って」

芳子の言葉を聞きながら、誠はゆっくりと後ずさった。

今は逃げるしかない。

走りだそうとした瞬間、まどかに手を掴まれた。

まどかさん、今は手をつなぐ時ではないです！

「大丈夫ですよ。心配しないでください」

いや、大丈夫じゃない！

まどかさん、今だけは君の感覚を疑います！

誠は頭を横に振り、何とか気持ちを理解してもらおうと表情で訴えた。

「あら、まどかのお友達？」

芳子がそう声をかけてくる。

「うん……その……」

まどかも大丈夫と言いながら、歯切れが悪い。

真穂も同じように歯切れが悪いが、まどかの代わりに伝えてしまった。

「ええ……まあ……私の息子です……」

まどかのご両親が、ふたりともそのままの形で固まった。

気まずい沈黙が流れ、誠は顔を赤くしてうつむく。

ああ……やっぱり……失敗した……。

誠の気持ちはどん底まで落ち込んでいた。

沈黙を破ったのは、まどかの父親である如月　実（みのる）だった。

「あの、誠くんは、こうした趣味があるのかな……？」

「えっ……？」

当然といえば当然の質問だったが、一瞬だけ誠は理解をするのに時間がかかってしまった。

そして、誠は激しく横に首を振る。

「いえ！　けっして、そんなことは……。僕もこんな格好にさせられるなんて、昨日まで知らなくて……その……」

誠のしどろもどろの説明に、実は、うん、とうなずく。

「前会った時と見た目があまりに違うからびっくりしたが、中身は変わっていないようだ。一生懸命やっているようだし、似合っているし、いいんじゃないかな」

実は、そう言ってくれた。

お父様、度量が大きすぎです……誠は安堵しつつも、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「そうね。新しい息子のような気持ちでいたけれど、ふたり目の娘でも悪く無いわね」

芳子はフォローとも、追い討ちともとれる言葉をかけてくれた。

「私も、いつのまに娘を産んだのかと、真剣に悩みそうでした」

真穂の言葉に、両親三人で、ははははっ、と笑う。

……笑うところなのだろうか……。

まどかが脇を突いてくる。

「良かったですね。師匠」

「心臓が止まるかと思いました……」

「大げさですよ」

まどかが笑って、背中をポンっと叩く。

いや、真面目に寿命が何年かは縮みました。

本当に。

慣れてきたのか、芳子まで誠の写真をいくつか撮ると、両親三人でなにやら歓談しながら、食事と飲み物を注文してくれた。

忙しくなって、あまり席に立ち寄ることが出来なかったが、そんな様子の子供たちをときおり見つめては、嬉しそうにしていたから良いのだろう……多分。

三人でそろって帰ることになり、まどかと誠が揃ってお見送りをする。

誠は見えなくなるまで、何度も頭を下げた。

階段を降りていき姿が見えなくなると、誠はほっとするような、すこし寂しいような気持ちになった。

またきっと、まどかさんのご両親とはゆっくり会って話ができるはず……今度は男の姿で……。

まだまだ仕事はこれからだった。

途中の休憩は、ふたりずつ交互にとることになった。
意図してかどうか、まどかと誠は一緒に休憩を取ることができ、30分という短い時間だが、他のクラスの様子をちらっと見ることにした。

演劇、お化け屋敷、バザー、飲食店……あたりはお祭りの活気と笑顔が溢れていた。
ゆっくりと周りたいところだが、時間があまり無い。
結局、運動場で開いていたクレープの店で、ふたりはチョコバナナのクレープを買って、近くの花壇の縁に座って食べることにした。

「外で食べるのは、美味しいですね。……こんな格好でなければ」

誠は当然、そのままの格好でいる。休憩が終わったら、また仕事が待っていた。
まどかは、くすっ、と笑いながら、誠を慰める。

「でも、外を歩いていても、誰も気づいていないみたいですね。師匠のことを見つめる男性もいましたよ」

「やめて欲しい……。バレた時が怖い……」

「今日は文化祭ですから。いいんですよ、バレてもバレなくても。ご苦労様です」

まどかの笑顔を向けてくれる。それだけでも、疲れが癒されるようだ。

本当にいい子だな、と改めて感じる。

「まどかさんは、恥ずかしく無いですか？」

「私も恥ずかしいですよ。スカートも短いですし」

そう言って、まどかがちらっとスカートめくると、白いきれいな足があらわになり、誠は思わず顔を赤くした。

まどかも慌てて、スカートを元に戻した。

「ごめんなさい、変なものをお見せして」

「いや、変なものじゃないですから……」

ふたりは赤くなって、しばらく黙ってしまった。

「その……師匠と知り合ってから、私も女の子なんだな、と思うことが多くて」

「まどかさんは十分女の子ですよ」

「いえ、その、今まで女の子の自覚があまりなくて、さっきみたいな行動を平気でしていたんです。どうせこんな足なんて、誰も色気を感じていないだろう、と思って……」

それは、とてもまずいような。

「でも、師匠といると、私も女の子なんだって、感じることが多くなってきて。……その、師匠のことも男の人なんだな……って思うことが多くなってきてもいて……」

今は女装していますが……。

「私も初めてのことで、いろいろ戸惑っています」

彼女もそうだったんだ。

彼女のほうがずっと進んでいると思っていたけれど、戸惑っているのは一緒だった。

誠は何となく、気持ちが軽くなるのを感じる。

「僕も、女性を好きになるのも初めてで……クラスの人と仲良くするのも初めてだから、戸惑いっぱなしです」

「ですよね。でも師匠は本当によく頑張っています。たぶんもう、この文化祭でクラスのみんな、師匠のことを友達だと思っていますよ」

「僕はまだみんなの名前、覚えていません……」

「師匠も一躍有名人ですからね」

まどかはそう言って笑った。

まどかも有名人じゃないかな……と誠は考えていたが。

「師匠ならすぐに憶えられますよ。と言っても、もう二学期ももうすぐ終わりですね。三学期は短いから……少し寂しいな。私も良いクラスだったな、と思います」

「僕もそう思います。忘れ難い一年になりそうです」

「そうですね」

年度のはじめには、ほとんどが知らない人たちだったなんて、想像できない。

まどかと誠も、知り合ってまだ半年ほど。多分、お互いにまだ知らないことのほうが多いはず。

それなのにお互いに好きになって、今こうしている。

不思議な出会いだった。

「まだ期末試験に、お互いの誕生日。年越しに、バレンタイン。いろいろありそうです。楽しみですね」
「本当だ。楽しみがたくさんだ」

どんな毎日がやってくるのだろう。
ひとりで歩くのとは、またまったく別のワクワクした楽しさだ。
ふたりというだけで、こんなに違うものなんて、本当に知らなかった。

「そろそろ時間ですね。もうひと踏ん張り、頑張りましょう」
「そうですね。でも、こんな短い時間でも、まどかさんとだと楽しかったです」
「ふふ、嬉しいです。……私もですよ、師匠」

周りから見ると女の子同士で頬を赤くしている、ちょっと不思議な光景ではあったが、ふたりにとっては久しぶりの時間で、何となく胸が熱くなるのを感じる大切なひとときだった。

ふたりは早足で、教室へと戻って行った。

噂の広がり

午前のペースのまま行ってくれるかな、と誠は考えていたが、それは甘かった。

「すごく可愛く女装した男の子がいるらしい」

いのつまにか、学校中にそんな噂が広まっていた。
そのためか、時を追うごとにお客さんが増えてきていた。
最初は、遠巻きにひそひそと指を指しているぐらいだったが、明らかに誠を指名をしてくる人が増えてくる。

呼ばれて行くと、5名ぐらいの女の子の集団がいて、顔を見るなり、

「うっそー！　本当にこの人？」
「きゃあー、かっわいい！」
「噂以上！　信じられない」

と一方的に騒がれて、注文をとることもできない。
途方に暮れて困っていると、桜と麻友がさり気無くフォローしてくれた。

「まーちゃん、あちらでも呼ばれているから、行ってあげて」
「私が代わりにご注文をうかがいます。何になさいますか？」

誠が言われた方向へ行ってみると、別にそちらには用事はなく、ふたりが誠を助けるためにやってくれたことが解った。

誠には、まだまだこうしたやり取りは苦手で、みんなの心遣いが本当に有り難かった。

見ると楓が厨房で手招きしてしていたので、誠は中に入った。厨房は外からは見えづらくなっていて、中では玲と美緒が休んでいた。

楓にうながされるまま、誠はふたりの横に座る。

「ご苦労様、少し休んで。お化粧も直すから」

「はい」

騒ぎの広がり方についていけず、確かに少し休みが欲しかった。化粧も汗ですこし崩れてきていたのだろう。

誠は、すべてを楓に任せることにした。

「まーちゃん、はい水」

「あっ、ありがとう」

美緒が笑顔で冷たい水を持ってきてくれた。

一口飲むと、体中に冷たい刺激が広がる。

ほんとうに美味しい。

「美味しい……」

ほっ、とため息をつくと、美緒がクスクスと笑う。

「お疲れ様。まーちゃん、すごい人気だもんね」

誠はその評価を、苦笑いしながら受け止めた。

何故みんなが見に来るのか、誠にはまったく理解できなかった。

可愛くても、女装した男性より、普通の女性のほうがいいと思う。
そして男は男らしい格好の方がいい。
目の前の、美緒や玲のように。

「美緒さんも、玲さんも、人気でしたよ」

それぞれに綺麗だったり、格好良くて、お客さんも喜んでいた。
いまふたりを見て、誠もそれぞれの格好がとても似合っていると思う。

「ありがとう。まーちゃんは、また特別だよ。楓の力も大きいけどね」

言われた楓は、もくもくと誠の化粧を直していた。
誠はまだ自分の姿をちゃんと確認していないが、確かに楓の技術が凄いのだとは思う。
美術部だからなのか、個人的な能力なのかは解らないけれど。
楓自身はほとんど化粧というものをしていないし、髪も放っている感じがする。
でも、いつでも真剣な表情をしている彼女のことを、誠は信頼していた。

「確かに、ここまで変わるとは思っていなかった」

玲が感心してつぶやく。

……ふたりで、あまりまじまじと見ないで欲しい。

「化粧栄えするのかな？　ちょっとしたアクセントで凄く変るみたい」

「……化粧栄えしても、今後なんの役にもたちません」

誠の言葉に、美緒と玲が笑う。

「多分、毎年の恒例になると思うよ。覚悟してなさい」

「俺もそう思う」

「……それだけは勘弁して欲しい」

誠の素直な感想に、ふたりはやっぱり笑って、すこし慰めてくれた。

何か、普通に話をしている。

ふたりはクラスでも人気者で、話の輪の中心にいるような人達で。

今までは、そんな彼らと話をすることも無かった。

まだ少し緊張もあるが、こうして普通に話が出来ているのが、誠には何か不思議な気分だった。

そして、何となく嬉しい。

女装も悪いことばかりじゃなかったな、と今は少しだけ思うことが出来る。

「よし、できた。あともう少しだから、頑張って」

楓が笑顔でそう言ってくれる。

「まーちゃん、休憩のところ悪い。指名が来て、帰ってくれない。顔を出してあげてくれるか？」

宗志が申し訳なさそうに、声をかけてくる。

どんな形であれ、誰かのために役に立つのは悪くない。

喜んでくれるのであれば、女装でも、女性の仕草でもしてみましょう。

まずは、応援してくれるクラスの人達のために。

誠は笑顔で厨房を出た。

文化祭の終わり

夕方になり、ようやく文化祭も終わりの時間となった。
最後のお客さんをお見送りして、扉を閉めると、誰からともなく

「やったー！」
「おつかれさーん」
「ご苦労様！」

と声を掛け合う。
接客係も、厨房も、呼び込みも、裏方も。
それぞれに本当によく働いた。
互いに、無事に終えた充実感で一杯だった。

売上も順調で、最後は食べ物も飲み物もほとんど無くなってしまった。
大成功と言って良かった。

宗志が真ん中の椅子に立って、声を上げた。

「皆さん、ご苦労さまでした！」

周りから「おぉーっ」と声が上がる。

「まずは、文化祭委員のふたり、ご苦労様でした！」

涼と麻友が、拍手を受け、一礼する。

接客係でもあり、まとめ役でもあり、学校側との交渉役でもあり、大変だったと思う。

「厨房の皆さん、一日中、暑い所でご苦労様でした！」

Tシャツに短パン姿の厨房係が両手を挙げる。

みんなからの拍手が広がる。

「内装係と呼び込みの人達も、有り難うございました！」

各所で声と拍手が広がる。

「衣装作りとメイク係の人達も有り難うございました！」

おとなしい女の子の集団が頭をさげる。

接客係を中心に大きな拍手が広がった。

「そして、接客係もご苦労さまでした」

接客係の面々が手を上げて応えると、ひときわ大きな拍手と声援が上がる。

ひと通り全員が呼ばれた形となり、拍手がしばらく続く。

ゆっくりと静かになると、宗志は言葉を続けた。

「それと今回、大成功に終わることのできた立役者、美丘楓ちゃん、本当に有り難う！」

楓がちょっとびっくりした顔で、自分自身のことを指さす。

周りから「ありがとー」「ご苦労様！」と声をかけられると、楓

も恥ずかしそうに笑って頭を下げた。

「そして、何と言っても、まーちゃん。今日は本当にご苦労様！」

突然の名指しに、誠はびっくりした。

「えっ、僕？」

周りから盛大な拍手を受ける。

「よく頑張った！」「可愛かったよ」「付き合ってー」　いろいろな声が上がる。

誠はそのひとつひとつに頭を下げる。

すこし胸がグッときたが、涙はこらえることができた。

すこしは自分のやったことで、人に役に立てたのだろうか。

ほっとした安堵感と、包まれるような温かさに心が満たされていくのを、誠は感じていた。

余った飲み物や食べ物が出され、ちょっとした打ち上げのようになる。

片付けを始める者もいたが、誠は接客係の人達と一緒に輪になってジュースを飲んだ。

まどかと隣になった誠は、何となく安心感と胸がドキドキするのを感じる。

こんな可愛い子が、自分のことを好きでいるなんて、今でも信じられない。

まどかがコップを差し出してくる。

「師匠、ご苦労様。乾杯」
「有り難う。まどかさんも」

誠もコップを出して、ふたりで小さく乾杯した。
一口飲むと、じわっと甘さが身にしみた。
ふうっと、息を吐く。
見渡すと、周りもそれぞれ隣同士と話しをしている。
これだけ人がいるのに、何となくぽっかりとまどかと二人きりでいるような感覚になった。

「疲れたけれど、何となく寂しいような、終わって欲しくないような……気がします」

誠はいま感じている気持ちを言葉にした。
始めは、あれほど女装を嫌がり、不安に思っていたのに、終わってみたら何となく寂しい。
まどかも、その気持にうなずいてくれた。

「大変だったけど、楽しかったですね」
「うん」

窓の外を見るともう夕暮れになっていて、ちょうど真横から差してくる太陽の光で、教室全体が、人が朱に染まっている。
人の声で騒がしいのに、何となくゆっくりと流れる映画のワンシーンのようだった。

「接客係も、女装も、とっても出来ないと思っていました。でも、やれて良かった。みんなが喜んでくれた顔が忘れられないです」

まどかが、くすっ、と笑う。

「師匠はやっぱりいい人ですね。他の人の笑顔のために頑張れるなんて」

まどかの言葉に、誠はなんとなく恥ずかしがった。

「そんな、いい人なんて……そんなことないです。ただ……」

「ただ？」

「勉強も楽しかったし、将来も夢見ていた。……でもどこかで、自分ひとりぐらいは世の中にいてもいなくてもいいんじゃないか。いなくても、何も変わらないんじゃないか……と心の中で思っていました」

「……」

「でも……」

誠は周りの笑顔を見渡した。

「誰かが喜んでくれたり、誰かの役に立てた、と思えたとき、ここにいてもいいんだ……生きていていいんだ、と思えました」

誠の偽ざる気持ちだった。

勉強はあくまで机上のもので、誠にはどこか実感というものがなかった。

その虚無感は年をとるにつれ、無くなるどころか大きくなるのを感じていた。

それをどうしたら良いか解らず、誠はあえて無視をして心の底に押し込めることにしていた。

だから、教室での拍手の時、さっき名前を呼ばれた時、涙が出そ

うになった。

些細なことなんだけど、生きていていいんだ、そう誠は思うことができた。

生きていることを許してもらえた、そんな愛に包まれたような実感があった。

誠は頬に優しい、温かいものを感じる。

それが何かと見てみると、まどかが指の背で、誠の頬を撫でてくれていた。

細い指の柔らかな感触。

「真穂さんのために、生きていてください」

「……」

「……私のために……生きてください」

まどかは優しく、そう告げてくれた。

あぁ……駄目だ……。

誠は涙が流れるのを止めることが出来なかった。

ぽろぽろと落ちる涙を、まどかがゆっくり拭ってくれた。

周りもひとりふたりと気づいて、誠に声をかけようとしていたが、桜がそれを止めると、周りはふたりを静かに見守ってくれる。

まどかが肩を貸してくれて、誠はそこに顔を寄せながら、しばらく涙を流していた。
そんな誠のことを、まどかはゆっくりと頭を撫でてくれた。
そうして、長い文化祭の一日が終ったのだった。

誕生日会

文化祭が終わると、すぐに期末試験がやって来た。
中間試験から恒例となった誠のノートのコピーの他に、今回はさらに、勉強会まで開催された。
これは試験前になり、誠に質問が殺到したため、ならば黒板を使って全員にむけてやろう、ということで開催が決定した。
誠は緊張しながら教壇に立ち、みんなからの質問を受ける。
そして、それをていねいに、ひとつひとつ誠は解説をしていった。
今回の試験範囲を、全教科にわたり。
勉強会は学校が閉門になる7時まで続いたが、誠がわかり易い解説に気をつけたおかげか、ほとんどの生徒が残って受けてくれた。

そして期末試験は、クラスの平均が他のクラスよりも１０点高いという、職員室で話題になるほどの結果となって終了した。

文化祭が終わってから、誠は「まーちゃん」と呼ばれることが多くなっていたが、そんなことがあってか、この頃から「勉強の神様」というあだ名も加わっていた。

本人はそのことを知らなかったが。

期末試験が終わると、生徒たちは冬休みに入る。

長い休みではないが、それぞれに別れの挨拶をしたり、冬休みに会う約束をしたりして、最後の一日は過ぎていった。

まどかと誠が次に会う日は決まっていた。
二人の誕生日、12月28日をまどかの家で一緒に祝うことになっていたのだ。
真穂も一緒で、家族総勢5人での合同誕生日は、どちらにとっても初めての出来事になる。
そして、その日はあっという間にやって来た。

真穂と誠は夕方頃、如月家のインターホンを鳴らした。
しばらくして扉が開くと、笑顔のまどかが二人のことを招き入れてくれる。
真穂と誠は軽く頭を下げて中に入ると、中の暖かい空気に包まれ、ようやくほっとした。

「外、寒くなかったですか？」
「少し。でも大丈夫です」

まどかの質問に、誠も笑顔になって答える。
そこへ芳子と実がやってきた。

「ようこそ、いらっしゃいました」
「今日はお招きいただき、有り難うございます」

真穂と誠が頭を下げて、お礼を述べる。

「これ、つまらないものですが」

真穂がおみやげの包を芳子に渡した。

「お気になさらなくても良かったのに」
「いえ、大したものではございませんので」
「まあ、とにかく上がってください。お待ちしていました」
実の言葉に、ふたりは「お邪魔します」と言って上がらせてもらう。
食堂に案内されると、テーブルにはすでに料理が置かれていた。クリスマスも近く、誕生日パーティーでもあるためか、料理はピザやフライドチキン、それにサンドイッチ、ポテトサラダに飲み物が並んでいた。
「すみません。大した料理でなくて」
芳子がすまなそうにつぶやくと、誠が頭を横に振って否定する。
「とんでもないです。こんな誕生日らしい食事、初めてで嬉しいです」
芳子が笑って、誠に聞く。
「いつもはどんな誕生日なの？」
「誕生日といえども、夕食はいつもの料理ですね。僕が作っているので。ケーキもふたりなので、それぞれの好きなケーキをツーピースだけです」
「そうなんですか」

芳子が感心するようにうなずくと、真穂が苦笑いする。

「いつも大したことをしてあげられなくて。だから、今日は本当に私も誠も楽しみにしていました」

実が嬉しそうにうなずく。

「それは良かった。私達もお待ちしていましたよ。さあ、座ってください」

大きめのテーブルの周りに並べられた椅子に、それぞれ腰かけた。

「じゃあ、温かいうちに食べてください」

「はい、それでは、いただきます」

それぞれに、食べる物、飲み物を手にとって食事を始める。

食べながら、話しながら、場は穏やかな雰囲気に包まれ始めていた。

そんな時、実が突然、真穂に質問をした。

「あの、真穂さん」

「はい」

「ひとつお聞きしてもよいでしょうか」

「なんでしょう」

真穂は食事の手を止め、実に顔と身体を向ける。

「非常にプライベートなことなので、お答えにならなくてもけっこ

うです。その……」

実が問いかける前に、真穂が察して話し始めた。

「私の夫、誠の父親のことですね」

真穂の言葉に、誠もまどかも驚いた。

こんな話題が上がるとは、思っていなかったのだ。

一方で、真穂は当然そうした質問があると覚悟していたようで、ゆっくりと話し始めた。

「誠にも、大きくなるまではと、ほとんど話さずに来ました。しかし誠にも、皆さんにも一度ちゃんと話しておかなくてはいけない、と思っていました」

「……」

誠は料理を置いて、真穂を見つめる。

誠はすこし自分の手が震えているのに気づいた。

思った以上に緊張をしていた。

そして、それに気づいたまどかが、そっと誠の手を握ってくれる。

誠が驚いてまどかの顔を見ると、まどかはにっこりと微笑んでうなずいてくれた。

大丈夫、一緒ですよ……そう、言ってくれているような笑顔だった。

誠はすこし落ち着くことができた。

真穂は思い出すように、語り始める。

「私は結婚をしていません。結婚出来ない相手と、恋をしたためです。その相手は、私が働いていた病院に勤務する医師でした」

自分の父親が医師であることに、誠は少なからずショックを受ける。

今までまったく想像もつかなかった父親像に、急に形や色が付いてくるような、不思議な感触だった。

「若さゆえの、思いばかりが強い恋でした。ただその恋は、この子を妊娠することで終りを告げました」

「……」

「結婚出来ない相手との子供。私は子供をおろして何もなかったように恋を続けるか、子供を産んで彼の元から消えるか、の二つしか選択肢がありませんでした」

いつもは明るい真穂からからは、想像がつかないような過去だった。

結婚出来ない相手というのは、不倫を意味しているのだろうか？

そこまでは、真穂も解説してくれなかった。

誰も、口をはさむことが出来ず、黙って聞いていた。

「いつまでも恋を続けることが出来ないことも解っていた私は、この子を産むことを決め、彼の前から消えました。この子の父親は、この子の存在を知りません」

いままで漠然といだいていた思いが、確実なものになる。

やはり、父親は自分のことを知らずにいる。

嫌いだから会いにこなかったわけではなかったのだ。

「私はこの街に移り住み、シングルマザーとしてこの子を産み、育ててきました。両親は支えようとしてくれましたが、出来る限り、自分でやろうと頑張ってきました」

真穂は誠の方を向き、いとしげにゆっくりと頭を撫でる。

「お金も時間も思いも、十分かけられずに育てざるを得なかったのですが、まずまず真面目で誠実な子に育ちました」

表情が変わらないまま、真穂の目から一筋、涙がこぼれる。

「健康で、勉強もほどほどにできます。私の自慢の息子です」

真穂は優しく誠の頬を撫でる。

「この子の父親は生きています。いつか会わせてあげたいと思っています」

……やっぱり、そうか。

父親は生きている。会うこともできるんだ。

ほんの少しだけ、会いたいという気持ちがある。

ただその一方で、何を今更、という気持ちが大きい。

今は母親がいる……それだけで十分だった。

父親がいないことを不幸せだと思うことは、ほとんどなかったのだから。

実がうなずき、話し始める。

「話しにくい話をさせてしまい、申し訳ありませんでした。誠くんにも、突然のことで申し訳ないことをした」

実に頭を下げられて、誠はびっくりした。

「そんな……頭を上げてください……。ただ、確かにびっくりしました」

真穂が苦笑いをして、誠に伝える。

「私もいつ伝えようか、悩んだの。最初は大学に入学してからと思ったのだけれど、誠がまどかさんとお付き合いさせてもらっていて、ご両親にも変な心配はかけられない、と思って」

「えっ、お付き合い……？」

実がその部分で驚いた顔をした。

芳子は、真穂から教えてもらっていて知っていたが、実にはまだ誰も知らせていなかった。

慌てたのはまどかだった。

「あっ、あの、その……つい最近から……お付き合いを……」

まどかは顔を真赤にしながら、実に報告をする。
誠もつられて顔を赤くした。

「あの……御免なさい……お、おつ、お付きき……ああいい……」

誠はかなりどもる。
二人の様子を見て、実はようやく落ち着きを取り戻したようだ。

「そうか、まあそうなるかな、とは思っていたが。そうか、おめでとう」

「あっ……有り難うございます」

真穂が咳払いをして、話を続けた。

「すみません、続きです。……それと、誠にも大学を受ける前に話したほうが良いのかも、と思い直して……」

「……なぜ？」

「まどかちゃんが医師を目指したい、と聞いてふと思ったの。誠も、父親と出会ったら、同じ医師の道を進みたいと思うかも知れないって……」

「……」

「誠の夢は昔から変わっていないけれど、もしそうだったら、いらない寄り道をさせてしまうかも知れない、と思って。話すなら今なのかも、と」

「はい……」

実が、うん、とうなずく。

「真穂さんのことも、誠くんのことも、私は信頼します。これからも娘のことをよろしくお願いします。ただふたりとも」

「はい」「はい！」

「私はふたりが、互いに高め合う仲だと感じて交際を許すが、くれぐれも織姫と彦星にならないように」

実の言葉に、誠はぼんっと音が出そうな勢いで顔を赤くした。

一方で、まどかは今一つ理解出来ていないようだった。

「織姫と彦星って……？」

まどかの質問に、答えにくそうに誠が答えた。

「織姫は布を織る仕事を、彦星は牛飼いで、共にとても働き者でした。ですが、ふたりが一緒になってからは、仕事がおろそかになってみんなが困ってしまい、神様がふたりが会えるのを一年に一回……七夕の日だけにした、という話です」

つまり、イチャイチャしてばかりで、勉強が疎かにならないように……ということか。

まどかもようやく理解して、頬を赤くした。

でも、イチャイチャしていません。

その後は、ふたりの付き合い始めの様子などを質問され、しどろもどろになりながら明るく時間が過ぎ、食事は終わった。

テーブルの上が片付けられると、冷蔵庫からケーキが出された。ショートケーキがホールのまま。

ろうそくと共に、チョコレートのボードには、

Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　Ｍａｋｏｔｏ　＆ａｍｐ；Ｍａｄｏｋａ

と書かれていた。

誕生日らしいケーキの登場に、誠は何となく嬉しくなるのを感じる。

誕生日のたびに「別にいいや」と思っていたが、こうしてホールのケーキに名前も書いてあるのを見ると、やっぱり嬉しい。

ケーキは誠とまどかの前に置かれ、ろうそくに火が灯される。

室内の電気が消され、真っ暗な中に、ろうそくの揺らめく明かりが浮かび上がる。

静かに、ろうそくの淡いあたたかな光に照らされ、それぞれの笑顔が並ぶ。

たぶん、この時のシーンは一生忘れない、と誠は感じていた。

胸がじんっと熱くなるのを感じる。

芳子の掛け声とともに、Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙをみんなで歌い始めた。

互いに手拍子を加え、恥ずかしそうに、でも少し大きな声で、歌

いあげる。

名前のところは、Ｍａｋｏｔｏ　＆ａｍｐ；　Ｍａｄｏｋａで呼ばれると、何となく気恥ずかしい気持ちになる。

そして歌が終わり、誠とまどかは一緒になってろうそくの火を消した。

ふたりで息を吹きかけたので、一息ですべてのろうそくの火が消え去った。

拍手とともに、部屋の明かりが戻る。

「じゃあ、切り分けましょう。誠くんには、ちょっと大きめにね」

芳子が嬉しそうに言いながら、ケーキを寄せて切り始めた。

ふたりの挨拶

「誠くんとまどか。一言ずつ、挨拶してもらおうかな」

実の言葉に、えっ、と戸惑いながら、誠とまどかは互いに目配せをする。

そして、ここは自分から、と誠が最初に挨拶をすることにした。

「……今日は、こうした誕生日を一緒に祝っていただいて、本当に有り難うございました。誕生日がこんなに嬉しいものなんて、知らずにいました。」

真穂が苦笑いする様子を横目で見ながら、誠は話を続けた。

「もちろん、母には感謝しています。良くしてもらったと思っています。でも、今日の日は忘れ難いです。僕にとって、会ったことのない父より、お二人のほうがよっぽど自分の両親のようです。本当に……本当に、有り難うございました。」

誠は深く一礼した。

芳子も実も嬉しそうに、うなずく。

「まどかさんと出会えて、僕は勉強を教える以上のものを、教えてもらいました。人と触れ合うことの大切さ。友達を作ること。人を愛すること。母が今まで伝えたかった言葉の意味を、この歳になってようやく理解することが出来ました」

真穂が嬉しそうにうなずいた。

「ただまだそうしたことに、ようやく気づいたばかりで、日々の変化に戸惑う気持ちのほうが大きいです。コミュニケーションもやっぱり勉強と練習なんだな、と思い、頑張っていきたいと思っています。そしてこれからは、誰かのために役に立てる自分でありたい、と考えています。今日は、有り難うございました。」

誠が話を終えて一礼すると、みんなから拍手がおきる。

「良かったよ、誠くん。よし、じゃあ次はまどか」

「はい」

まどかも姿勢をただし、話し始めた。

「真穂さん、誠さん」

まどかは一度言葉を区切り、ふたりを見つめる。

そして、深く一礼する。

「今日はいらしていただき、本当に有り難うございました」

しばらく頭を下げ、ゆっくりともどす。

「私にとっても、今日は特別な誕生日となりました。一つ年をとりプレゼントが貰える、とだけ思っていた今までの誕生日とは、今日ははっきりと違う日でした。……大切に、慈しんで、この日を祝ってもらえていることに。そして、こうして普通に誕生日を祝えることの、大切さを教えてもらいました」

誠はいつもと違って、今日はずっと嬉しそうに笑顔を浮かべていた。

誠の言葉通り、普通の誕生日会を心から喜んでいるのが、まどかにも解った。

こうして誕生日を祝ってもらえることが当たり前ではなかったことを、まどかは初めて知ったのだった。

「誠さんに勉強を教えてもらっています。私は勉強の捉え方が変わっていくのを感じています。勉強の楽しさ、大切さ、やり方。……勉強だけに収まらない、これからの人生にも変化を与えるような基礎を作ってもらっているような気がしています。本当に、感謝しています」

まどかが頭を下げると、誠は恥ずかしそうに頭を下げた。

「なれるかどうか解りませんが、医師になるという夢を実現させて、私も人の役に立てる人間になれれば、と思っています。勉強も頑張りたいと思います。今日は、有り難うございました」

まどかが頭を下げると、みんなが拍手をした。

「うん、まどかの挨拶も今までと変わった。良かったよ。本当にふたりは、いい形で影響を与えているみたいだね。安心したよ」

実が嬉しそうに話し、ふたりはほっとしたように笑顔になった。

「ケーキも切れたわ。さっ、食べましょ！」

芳子が嬉しそうに笑い、切り分けたケーキをそれぞれに配る。

準備よく、紅茶も用意されていた。

「そうだ、プレゼントも用意してある」

そう言って、実は手元から小さな封筒を2つ取り出し、ふたりに渡した。

何だろう、と受け取ったふたりは顔を見合わせる。

「開けてみていいよ」

「はい」

誠とまどかは封筒を開け、中の物を確認した。

中には、図書カードが入っていた。

びっくりしたのは、その金額だった。

2万円分も入っていた。

「えっ！　こんなにたくさん……」

実と真穂が、誠のその言葉にうなずく。

「今年は三人から、ふたりへプレゼントだからね。それに、本や文房具ぐらいは、もっと好きに買わせてあげたい、という親心からかな。誠くんは特に、図書館ですませてしまうと聞いている。まどかも最近は本を読むようになって、お小遣いだけでは足りないだろう。今の時期の読書は大切だ。たくさん読んで欲しい」

「お父さん、真穂さん……有り難うございます」

「有り難うございます」

実も真穂も嬉しそうにうなずいた。

「高校生の誕生日プレゼントに図書カードで喜んでくれるなんて。ふたりとも真面目ね。何か信じられないわ」

芳子がため息混じりにつぶやく。

その言葉に、みんなで笑った。

そうして、みんなでケーキを食べた。

ケーキは美味しくて、いつもよりも甘く感じた。

そうして、それぞれにいろんな話で盛り上がり、家族の楽しい会話は夜遅くなるまで途切れることはなかった。

英語

年も明け、新学期が始まる。

誠とまどかは、一柳家で久しぶりの勉強会を開いていた。

もちろん、時間のあるときは互いに勉強を進めていたが、文化祭もあったり、年末年始の行事もあったりと、なかなか勉強会を開く時間がとれずにいたのだ。

そんな久しぶりの勉強会は、誠の謝罪から始まった。

「まどかさん、ごめんなさい。勉強を教える、と言いながらなかなか時間がとれなくて」

「いえ、こうして教えてもらえるだけでも有り難いです」

「半年以上たって、ようやく英語なんて、何か申し訳なくて……」

「あっ、今日は英語なんですね」

「はい」

数学、国語、理解、社会とすんでいたが、確かに英語がまだだった。

以前、誠が英語は3年生まですんでいて、会話ぐらいならばできると聞いたことがあったぐらいか。

今日は、その実践方法を教えてくれるらしい。

「といっても、ある意味、目新しいことはないかも知れません。教科書の英文を完璧に理解して、全文憶えることが目標です」

「はい」

去年のまどかだったら目標を聞いた時点で、「できません……」と肩を落としていたが、少しは自信が付いてきたようだ。
落ち着いた受け答えは、少したくましく見える。

「英語の重要性は、今さら説明することもないですね。世界全国で使われていますし、インターネットを通じて、世界の垣根も無くなってきています。仕事も世界を見なくては出来ない世の中になってきています。英語はもはや必須と言っていいでしょう」

誠の説明に、まどかもしっかりうなずく。
確かに、英語が話せる人はまだまだ少ないが、昔よりも必要性が高くなっていることは感じている。
英語が話せて損なことは一つもない。

「僕はこんなふうにやっています」

誠はそう言いながら、ノートを開いた。

左側に英文が書いてあり、英文の下に文法が書いてあったり、上に矢印が書いてあったり、単語が四角で囲まれたりしていた。

そして、右側には、単語の訳が書いてあったり、熟語が書きだしてあったり、例文が書いてあったりした。

「教科書の文を書き出し、この見開きですべての解説を書き込みます。とにかくここを見れば、すべての情報がのっているようにします。それに憶えにくいものは、強調したり、何度か書いたりします」

「あっ、試験の前に見せていただいたノートですね」

まどかの言葉に、誠はうなずく。

「きれいで解りやすいノートです」
「有り難う。でもきれいに書くことが大切ではないのです」
「そうなんですか？」
「何が一番大事だと思いますか？」
まどかは誠のノートを眺めながら、うーん、と考える。
「記憶しやすいことですか？」
誠は驚いた顔をして、まどかを見た。
「いいところをついています。それはとても大切な事です。画像のようにしたり、関連付けをして網目のようにしたり、重要箇所を強調したり、繰り返したり、解りやすく書いたり……すべて記憶につながるための技法ですね」
「あっ……なるほど。今までの記憶方法をノートにも生かしているのですね。でも、じゃあ一番大切なことって……？」
まどかの質問に、誠はうなずいて答える。
「私は、ここにすべての情報を載せることを大切にしています」
「すべての情報？」
「はい。とにかくここを開けば、この英文については完璧に解る、というものです」
「……それが大切なのですか？」
誠はうなずいた。
「これは完璧なものを積み重ねる、繰り返す、という勉強法のもっ

とも大切なところなのです。実はあとになって読み返しながら、書き足しています」

「ノートを書き足してるんですか?!」

ノートは一度書いたら終わりだと思っていたまどかは、びっくりした。

授業も黒板の板書をしたら、それ以上は書き足さない、綺麗なままの方がいいと思っていたのだが、どうもそうではないらしい。

「新しい知識が加わったとき、もう一度見返して足しています。重要箇所が新たに見えてくることもあります。そうして、その英文について完璧だと自信を持ち、繰り返すことで頭の中に定着させるのです」

「はぁ……深いですね」

「これは、ノートでもいいですし、教科書でもいいです」

「教科書でも?!」

「はい、教科書をきれいに使って、ノートにたくさん書きこむ人もいれば、教科書に付箋や紙を貼り付けて情報を書き足し、とにかく教科書一冊あれば完璧、と何度も繰り返して読んでいる人もいます。どちらも正しいと思います」

はぁ……まどかは、だんだん呆然としてきていた。

「これはどんな本を読むにしても、勉強をするにしても、やってみるとけっこう効果的です。その分、いい教材を選ぶ必要ために十分な時間をかけて検討する必要がありますが。それとノートは完璧なものを書いたら終わりではなく、また別の視点であらたに書きだしてみると、また理解や記憶が深まることもあります」

「何かもう、ノート学、みたいですね」

まどかが思わず、くすりと笑う。

「凝り性ですみません」

誠は恥ずかしそうに、頭をかいた。

「ちなみに……」

「はい」

「単語帳は、僕はあまり好きではありません」

「そうなんですか？」

まどかはまたびっくりした。

単語や歴史の年数などを憶えるのは、あれがもっとも効率的だと思っていた。

「繰り返す、という点ではとても優れた方法なのですが、ふたつ難点があります。ひとつは単語帳を作るという手間がかかる、という点。もう一つが、記憶するには情報を省くより増やしたほうがいい、という点、です」

「省くより、増やしたほうがいいんですか？」

「例えばテレビという単語を憶えるとき、テレビとだけ憶えるより、テレという離れてという言葉と、ビジョンという見るという言葉の合体したもの、離れて見るからテレビジョン……そこからテレビという言葉が生まれた、と情報量が多いほうが忘れづらいのです」

「……初めて知りました。豆知識ですね」

「脳細胞が網目状に知識を増やすことから、たくさんのとっかかりを作った方が記憶しやすい、という基本原理につながります。英単

語であれば、文章と共に覚えてしまったほうがいいのです。最近は、そう言った方法を売りにした英単語の本が出てきていて、人気のようです」

「そうなんですか……」

ここまで話したところで、横で見ていた真穂が呆れたようにつぶやいた。

「……あなた達は真面目ね……。ちゃんと高校生らしいお付き合いしてるの？」

「えっ、いや……」

「うっ……」

真穂の言葉に、ふたりで赤くなる。

確かに、互いに告白してからも、毎日は特に変化していなかった。

「デートの一つぐらいしたって、バチは当たらないと思うの。誠がへたれで、デートのひとつも誘ってないんでしょ？」

「……はい」

まったくの事実に、誠はうなだれるしか無かった。

勉強だと雄弁に語れても、デートはどうしていいか解らないのが現状だった。

「週末にふたりでデートでもしてらっしゃい。遊園地でもどう？」

「あっ、はい、好きです」

まどかが答える、と「あっ、そうなんですか」と誠は初めて知った。

「まどかちゃんが好きなことひとつも知らないなんて……ヘタレすぎる」
「……」
返す言葉もなかった。
これから勉強します。
ふたりは帰り道、恥ずかしそうにしながらも、デートの約束を交わした。

初デート

デート当日。
まどかは自室の鏡の前で、何を着ていこうかと悩んでいた。
動きやすい服がいいが、少しでも可愛く見えて欲しい。
今までこんなふうに考えたことがなかったので、なかなか合う服がない。

悠太、ごめんなさい……今なら気持ち、解ります。

以前に、悠太と行った遊園地の時、彼は格好良く決めていた。
あの時は遊園地で遊ぶのに何で……と思っていたが、今ならば解る。
少しでも相手に良く思って欲しいから。

あの時、あんなラフな格好して悪かったな……。

今日は天気こそ快晴で気持ちがいいが、２月１４日でまだまだ肌寒い。
偶然にも、今日は日曜日でしかもバレンタインデー。
そんな日にデートをする自分が、何となく不思議だった。
チョコレートも事前に用意しておいた。

「よし。これでいこう」

やっぱりスカートにして、風や寒さ対策にダウンを着ることにした。

慣れない化粧も、不自然でない程度にやっていくことにする。

化粧の終わった自分の顔を、鏡で確認する。

少しは可愛らしくなったかな、と思うが、何となく文化祭の時の誠のほうが化粧が似合っていたような気がして、まどかはクスッと笑った。

本当に、あの時の誠はきれいだった。

せめて、あれよりは可愛くありたいな、と思っているが、さて今日はどうだろうか。

最後に、もう一度全身を鏡で確認する。

「うん。いいかな」

どうか、誠がこの姿を気に入ってくれますように。

まどかは、両親に「行ってきます！」と挨拶すると、靴を履いて玄関を出る。

駅で待ち合わせのため、自転車で駅まで向かった。

緊張して朝早くに起きてしまったので、まだ十分に時間はある。

髪や服が乱れないよにう、ゆっくりと駅へ向かうが、それでも待ち合わせの時間よりも３０分も早く着いてしまった。

……が、誠はもうすでに待ち合わせ場所で待っていた。

まどかは慌てて、駐輪場に自転車を止めると、誠のもとへ駆けて行った。

まだ朝早く、駅前と言っても、人はまばらにしかいない。
まどかが走っていくと、誠もすぐにまどかに気づいてくれた。

「お待たせしました」
「いえ、そんな。まだまだ早いですよ」

まどかは、はずむ息を整える。

「そうですよね。まだ30分前ですよね。師匠はいつからいらしたんですか？」
「……もう30分ほど前から」
「この寒い中、1時間も待つつもりだったんですか？」
「……目が醒めてしまって、勉強も手につかなくて……」
「……私もです」

ふたりは、互いに顔を見合わせて笑った。
楽しみで、緊張していたのはお互いに同じだった。

「早いですけど、行きましょうか」
「そうですね」

ふたりは並んで歩き始めた。
切符を買い、改札口を通り、ホームへ降りる。
ホームは寒い風が吹いていたが、さいわいすぐに電車がやってきて、ふたりは中に入った。
日曜日の朝早いためかお客も少なく、ふたりは並んで座ることができた。

「ふう」
「座れて良かったですね」

まどかは嬉しそうにうなずいた。

「楽しみで、今からどきどきしています」
「僕もです。遊園地は初めてなんです」
「そうなんですか？」

まどかは少しびっくりして、誠のことを見る。

「行く機会もなくて。だから楽しみです」
「それは良かったです」
「それと……」

誠が恥ずかしそうに頭をかく。

「実は、いろいろとどうしたら良いか解らなくて、神谷さんに聞きました」
「曜子に？」
「はい」
「何を？」

まどかが聞くと、誠はちらちらとまどかを見つめる。
まどかの足から顔まで、行ったり来たり。
そして、恥ずかしそうに顔を赤くする。

「その……まず会ったら、服を褒めるように……とか」
「あっ……」

まどかはそう言われて、ちょっと背筋を伸ばす。

「どっ、どうでしょう」
「はっ、はい。とても……可愛いです……」
「……有り難うございます。嬉しいです」
誠の言葉に、まどかまで頬を赤くした。
でも、良かった。
女の子らしい格好ができたか自信がなかったから、そう言ってもらえて、ほっとした。
「曜子は他にも何か言っていましたか？」
「はい、いろいろと教えてくれました」
「例えば？」
「その……ふたりとも鈍感だから、何をしたいか、何をして欲しいかは、はっきり言葉すること……とか」
まどかは、ああ、とつぶやきながら大きくうなずく。
「そうですね。確かに。それでいきましょう」
「はい、僕もその方が安心です」
「えーっと、じゃあ、私はジェットコースターとか好きです。師匠は好きですか？」
「乗ったことがないので解らないのです。乗ってみたいです」
「解りました。反対にお化け屋敷とかは苦手なんです」
「はい。では、そこはやめておきましょう」
「それと……」
まどかは恥ずかしそうに、もじもじする。
「はい？」

「歩くときは……手をつなぎたいな……って」
「えっ……？」
少し間を置いて、想像してしまった誠が一気に耳まで赤くなる。
てっ、手をつなぐ、って！
誠は慌て、挙動不審にあちこちを眺めた。
「あの……駄目ですか？」
「いや、その……僕も……つなぎたいです」
それだけ言って、誠はあまりにも恥ずかしくて顔を見られないように背けた。
そんな様子の誠を見て、まどかは嬉しそうに顔を覗き込もうとする。
「気持ちが一緒で嬉しいです。素直に伝えるっていいですね！」
「……はい。心臓が持つか心配です……」
その言葉に、まどかは笑ってしまった。

ジェットコースター

遊園地には開園前に着くことができた。
入園券を買ってもかなり前の方に並ぶことができ、これならば待ち時間なく乗り物にも乗れそうだった。
門の近くから見える、高くうねったジェットコースターを見上げながら、まどかがつぶやく。

「まずは、あれに乗りませんか？」
「この遊園地の一番人気。もっとも高低差のあるジェットコースターですね」

「……もしかして予習を？」
「しました」
「さすが師匠！」

まどかが笑い、誠も恥ずかしそうに笑う。
ふたりは開門と同時に、手をつないでジェットコースターへと向かった。

「さっ、走りましょう！」
「はい！」

頬にあたる風は冷たかったけれど、つないだ手は温かかった。

ジェットコースターには、一番に乗ることができた。
ふたりで一番前に乗り込み、案内に従って安全バーをロックする。

準備は整った。

「初めてなので、どきどきします」

「これがいいんです！」

まどかがそう言いながら、誠の手を握ってくれる。

それはそれで、別の意味でどきどきするが。

ジェットコースターが開始のベルと共に、ゆっくりと動き出す。

ガタッ……ガタン……タッ……タッ…タッ…

急な勾配を、ゆっくりと車両が持ち上げられていく。

カタカタ言う音が、心臓の鼓動に合わせて鳴り響く。

１０ｍ……２０ｍ……

下を見ると、地上がはるか下にあり、人が小さくなっている。

空の中に吸い込まれていくようだ。

やがて、頂上にたどり着くと、ゆっくりと下降を始めた。

「いきますよ！」

まどかの声と共に、急激なＧがかかる。

圧倒的な速さで駆け下りて、そのままループを回っていく。

「きゃぁーー！」

「おぉぉっ！」

まどかが嬉しそうに歓声を上げる。
誠も、迫力に思わず声が上がる。

急な横カーブを曲がり、再度上昇して、ふたたび急降下。
大きなループに、小さなループ。
完全に頭が下に、足が空へ向く。
まどかにつられて、誠も両手を上げる。

「「わぁぁ！！」」

いつまでも続くと思われた加速とカーブは、いくつもの繰り返しの後、ようやく終着点へと向かい始める。
最後のカーブを曲がり、速度ががくんと落ち、ゆっくりとホームへ戻って行く。

ホームへ着いて、安全バーが上がり、ふたりは手をつないだまま車両から降りた。
あたりは他の観客の安堵の息と、新たに乗り込むお客の歓声で賑やかしい。

「どうでした？　初ジェットコースターは」

まどかの質問に誠は興奮気味に答えた。

「興奮しました！　高さのエネルギーが加速度に変換されて、遠心力で落ちないようにするなんて！」

そこですか！！！

誠のコメントに、まどかは声を出して笑ってしまった。

「……変ですか？」
「いえ！　師匠らしくていいです！」

「だって、思わず計算したくなりません？　車両の重量が５００ｋｇぐらいとして、高さも目算できますから、速度やエネルギー量が出ますよ！」

真面目に答える誠に、ツボにはまってしまったまどかは腹を抱えて笑い出した。

「そっ、そんなに可笑しいですか？」
「いやっ、そのっ、ごっごめんなさい」

そう言いながら、まどかは笑いを抑えようとするが、思い出すと噴きだしてしまう。
誠はどこまでいっても誠であることが、まどかには何となく嬉しかった。

「いやぁ、物理の教科書の知識をこんなふうに体感できるなんて……ちょっと感動ものだったので」
「わっ、笑ってごめんなさい。師匠らしくて、嬉しかったんです。本当に」
「嬉しいと笑えるのですか？」
「嬉しすぎると、笑えます」

まどかの今まで見たこともないような笑顔はあまりにも可愛くて、誠は胸がドキッとして、頬がかあっとした。

「そっ、それなら良かったです」

「はい！　とっても良かったです。さっ、次に行きましょう！」

まどかはつないだ手を引っ張り、次のアトラクションへと急ぐ。

まだまだ時間も、アトラクションもたくさん残っていた。

手を繋ぐ

午前中だけで各種の絶叫系アトラクションを乗り倒し、さすがに声を上げすぎ、力を入れすぎで疲れたふたりは、お昼をとることにした。

寒いので屋内のレストランに入り、四人がけの席にふたりで向い合って座ると、知らずに冷えてきていた身体に暖房がここちよく感じた。

メニューを見ながらそれぞれに好きなパスタを頼むと、注文を聞いた店員さんも離れ、ふたたびふたりだけの空間となった。

話し始めたのは誠の方だった。

「遊園地がこんなに楽しいところだったなんて、びっくりしました」

「良かったぁ。師匠が喜んでくれるのは、私もとっても嬉しいです。私も、今まで来た中で一番楽しかったです」

「同じ遊園地なのに？」

まどかは嬉しそうにうなずく。

「女の子同士で来たのも楽しかったのですが、今日はまったく別の楽しさで……」

「……？」

「その……好きな人と……一緒だと、もっと楽しいものなんだな……って」

まどかが恥ずかしそうにつぶやくと、何を伝えたかったか理解した誠はやっぱり顔を赤くした。

「僕も……そう思います」

「師匠もですか？」

「はい。まどかさんが嬉しそうな笑顔を見ると、こちらまで楽しくなってきて……何かこう、どきどきする気持ちが胸の中で膨らんでいくような感じです」

「解ります。それに」

「それに？」

「手を離していると……ちょっと寂しいです」

気づいたら、遊んでいる間はずっと手をつないでいた。

アトラクションに乗っている間も、順番を待っている時も。

こうして向かい合わせに座るために手を離したけれど、相手の感触だけ残した手は、何かを求めているようにも感じる。

「僕もだ……不思議です……今までは繋いでいなかったことが自然だったのに」

「そうですね。最初は手を繋ぐのも、緊張しました」

「まどかさんも？」

「そうですよ。一緒です」

何となく机の上に出して互いの手が、ゆっくりと近づいていく。

緊張するが、触れていたい。

思いは一緒なのだから。

「お待たせしました！」

手が触れるかどうかの瞬間、料理が運び込まれる。

おもわず、ふたりはさっと手を引いて、こわばる笑顔で店員さんにお礼を言う。
店員さんは、見事な営業スマイルでふたりのことを見ると、そのまま一礼して戻って行ってしまった。

「えっ、えっと……食べましょう」
「そっ、そうですね」

恥ずかしいふたりは、思わず黙々とスパゲティを食べ始める。
頬を赤くしながら食べるふたりを、店員さんが微笑ましく眺めていたことを、ふたりは知らない。

午後は比較的おとなしく、メリーゴーランドに乗ったり、ゴーカートで競争したり、ティーカップで回りまくったり。
……それはそれで、アトラクションを満喫したふたりだった。

そして、やっぱり最後は観覧車に乗ることになった。
ただ、観覧車の列に並ぶと、誠の挙動が不審になった。
目が泳いで、落ち着きがない。

「師匠、どうしたのですか？」
「いやっ……その……えーと……」

誠はいつになく落ち着かず、言葉も続かない。

「もしかして……曜子からなにか指示されてます？」

誠の顔の動きがピタっと止まり、うなだれるように頭をさげる。

「……観覧車に乗ったら、どうするように言われたんですか？」
「……」
誠が小さな声でつぶやいたが、小さすぎて近くにいたまどかさえ聞こえない。
「えっ、聞こえない……」
「その……キス……するように……と」
「！！」
前後3組のカップルの動きがぴたっと止まる。
そして、ちらちらと眺めているのが、まどかにも解った。
何かを話しているか内容までは解らない……けれど、想像だけはできて、まどかも顔を赤くした。
観覧車にキスは付きものですかっ！
と言うより、曜子ちゃん、師匠に何を教えてるんですかっ！
まどかは心の中で、曜子に対して突っ込みを入れる。
何となく曜子の笑う声が聞こえてくるようだった。
気まずい二人は黙って順番を待ったが、前後カップルからの視線と話し声が痛かった。
別に悪いことをしようとしているわけではないのだけれど……

…悪いのかな？

キス

あれこれと考えているうちに順番が来て、二人はゴンドラの乗り込んだ。

扉の鍵が閉められ、ゆっくりと浮上していく。

周りの景色がきれいに広がっていくが、ふたりにはそれを眺める余裕はなかった。

次第に高まる緊張に、動悸ばかりが強くなっていく。

「そっ、その……」

「はっ、はい」

「曜子に言われたからではなくて……その……師匠も私なんかと……その、キス……をしてみたい、と言うことでしょうか……」

まどかの問いに、誠の緊張がさらに高まる。

どっ、どう答えたら……えっと、えーっと、そっ、その正直に。

「……はい」

誠の返事に、まどかの身体が一度ぴくっと動いた。

やっぱり、やっぱり、キス、したいんだ……。

えーっと……。

「その……どうぞ……」

……どうぞ、って！　どうぞ、ってっっ！！

どっ、どうしたらいいのか！！

緊張しすぎて、いっ、息が苦しいっ。

「どっ、どうすれば……」

「と……隣に座りますか……」

「……はい……」

誠は訳もわからず、まどかの隣に座った。

でも、肝心のまどかの顔は、反対を向いていて、状況はあまり変わらなかった。

「あの、その……顔が……」

「えっと、その、恥ずかしいのでっ。……師匠に任せます」

任せるって、任せるって！？

えっと、顔をこちらに向かせなくちゃ……いけないよね。

誠がまどかの頬に手を当てると、まどかがびくっと身体を震わす。

まどかも緊張しているのが、手から伝わってくるようだった。

柔らかな頬の感触を手の平に感じながら、ゆっくりと顔をこちらに向ける。

しだいに見えてくる表情に、誠の動悸がさらに高まる。

二重の優しげな目。
頬を赤く染めて、恥ずかしげな表情。
薄めのきれいな唇に、つい視線が向いてしまう。

可愛い……。

そう思った誠の手から、するりとまどかの顔で抜けていく。
誠の手から離れ、まどかが再び顔を背けてしまった。

誠は困惑した。

……やっぱり、嫌か……。

自信をなくし、誠の手がゆっくりと降り、身体が自然と離れていく。

「あっ、あの……！」

顔を背けたまま、まどかが声を上げる。

「はっ、はい！」

「その……嫌じゃないので……」

「……はい？」

「恥ずかしいだけなので……」

「はい」

まどかが耳まで赤くしていることに気づいた。

嫌じゃない。

誠はもう一度、勇気を振り絞って、まどかの頬を触る。

今度は逃げずに、その手に頬をあずけてくれた。

ゆっくりと顔を向かせる。

ふたりの動悸が、今まで感じたことがないぐらいに、早く、強く、鳴り始める。

まどかの顔が、こちらに向く。

うつむきがちな顔をすこし上げると、顔と顔が向かい合わせになる。

初めて、ふたりの視線が重なった。

まどかの目は、いつのまにか潤んでいた。

泣いているのではないが、緊張のために自然にそうなっていたようだった。

庇護欲をかきたてる、何かを我慢するような緊張した表情。

誠の体中がじんっと痺れて、動けなくなる。

あとほんの１５センチが、果てしなく遠く感じる。

指先まで心臓の拍動が届いているようで、手の平からまどかに伝わってしまいそうだった。

まどかが体をこちらに向けてくれた分、ほんの少しだけ顔が近づく。

あと１０センチ。

何となく吐息を感じる。

誠は渾身の力を振り絞って、顔を動かし、まどかに近寄る。

あと５センチ。

互いの目には、もう相手の顔しか映らない。

まどかの唇は、すこし震えているように見えた。

ここに、ここに自分の唇を?!

誠の心臓は、限度を超えそうなぐらいに早く、強く鳴り始める。

体中のしびれが頭に広がり、まどかの顔はきれいに見えているのに、意識がとんでしまいそうだった。

きっ、き……キスを……を……。

誠はそのままへたり込んでしまった。

「……えっ?!」

不意に目の前から顔の気配が消え、まどかが思わず声を上げた。

誠は床に突っ伏していた。

「……無理です……御免なさい……息が……できない……」

誠は過度な緊張で、窒息気味になっていた。

「だっ、大丈夫ですか？」

まどかは安堵したような、残念なような気持ちを抱えつつ、誠の身体を気遣った。

「なっ、何とか……」

そんな時、ゴンドラの中には無常にも、地上へ着いた案内が響き始めていた。

帰り道

ゴンドラから支え合うようにして降りる二人を、スタッフが心配そうに見守ってくれたが、幸いにして声はかけられなかった。

ただ、前後のカップルの、

「あのふたり、キスしたのかな」

「あの様子じゃ、失敗したんじゃない？」

という会話が聞こえてきたのが、少し悲しかった。

キスの壁は、思った以上に高かった。

帰り道、ふたりは声もなく、並んで歩いた。

「まどかさん、御免なさい」

誠が本当に申し訳ない、と言った様子でつぶやいた。

「謝らないでください。今日はとっても楽しかったし、嬉しかったし……その……私にもまだキスは……無理だったかも知れないし……」

まどかの心遣いが、誠には痛かった。

「本当に申し訳ない……」

真穂の「ヘタレ」という言葉が聞こえてくるようだった。
いや、絶対に家で質問されて、そう言われるに違いない。

誠はため息をつきながら、肩を落とした。

ぎゅっ。

まどかが、誠の腕に抱きついてくる。

手を握るのではなく、右の腕全体をまどかが抱きしめるように抱え、頭を寄せてくれていた。

「まどかさん……」

「落ち込まないでください。私は、師匠の笑顔が好きなんです。ねっ？」

「はい」

まどかの優しさが、体に沁みる。
腕からじんわりと温かくなるような気がした。

「そうだ。忘れることろでした」

そう言いながら、まどかは抱えていたバッグから小さな箱を取り

出す。
赤い包みに、金色のリボン。ハートのシールが付いた箱を、誠に差し出した。

「はい、バレンタインデーのチョコです」
「僕にですか？」
「はい！」

誠は箱を手に取り、じっと眺めた。

「嬉しいです。有り難う」
「どういたしまして。今年は父と師匠だけです。買ったもので申し訳ないのですが」
「そんなことないです。初めてだし、本当に嬉しいです」

誠はいま開けて食べたい気持ちを押さえて、大事にコートのポケットにしまった。

バレンタインなんて、気にしたこともなかった。
自分には関係の無いものと、考えてもいなかった。
それが、まどかから貰えるだけで、こんなに嬉しく、大切に物になるなんて、誠は思いもよらなかった。

誠は、心がほっと温かくなるのを感じる。

「それを食べて、元気を出してくださいね！」
「はい」

まどかはようやく笑顔になってきた誠の顔を見てほっとした。

「大丈夫です、師匠。失敗しても次がありますから」
「そうですね、次が……」
と言いながら、ふたりはいま交わした言葉の意味を、同時に理解した。
「いや、その、次というのは……えーっと……」
「……倒れそうです……」
「師匠!?」
ゴンドラの中のことを思い出した誠の身体が本当に傾いて、まどかが必死に引っ張って支えた。
やっぱりふたりには、キスはまだまだ超えられない壁だった。

高校二年生

三学期が終わり、ふたりにとっても心地の良かった一年は終りを告げた。

高校二年生となり新たなクラスが発表になると、誠やまどかを含め、みんなが誰と同じクラスになれたかで、一喜一憂していた。

クラスがそれほど多くないことが幸いしてか、誠とまどかはまた同じクラスになることができた。

曜子もさいわい同じクラスだった。

他には女子では桜と楓が。

男子では、涼と賢治、それにあらたに悠太が同じクラスになった。

かわりに、麻友や宗志は残念ながら別クラスになってしまった。

今まで誠にとって、クラスメイトが誰になるかはまったく問題にしていなかった。

今年は初めて、まどかや曜子と同じクラスになれたことが、本当に嬉しかった。

誠は一緒にいたい人がいる幸せを噛みしめていた。

この学校では、2年生の1学期に修学旅行がある。

行事のつまりがちな秋を避けて、むしろ新たな友達と交流を深める意味もあって、この時期に行われているらしい。

行き先は京都・奈良。

定番とも言える修学旅行先で、生徒によっては小学や中学の修学旅行で行ったこともある人がいたが、どこへ行くかよりも、誰と過ごすかで楽しみの生徒たちにとって、大きな問題ではなかった。

見学時はクラスごとの移動。

部屋の割り振りは、番号順で決められているので楽しみはないが、自由行動の時間があって、そこだけは誰と行くか、どこに行くかで盛り上がっていた。

自由行動のグループを決めるとは、誠はためらいがちにまどかに声をかけたが、まどかはすぐさま笑顔でうなずいてくれた。

もちろん、まどかが曜子も誘うことに、誠も異存はなかった。

そしてもう一人、このグループに入りたいと声をかけてきた人がいた。

悠太だ。

もちろん悠太は友達も多く、彼が声をかければグループも作れるし、声をかけてきた友達もひとりふたりではない。

それらをすべて断って、悠太はまどかに声をかけてきた。

まどかは幼馴染のお願いに、素直に「いいよ」と答えた。

誠は面識は無いので困惑したが、まどかの幼馴染と聞くと安心して了承した。

曜子は、複雑だった。

もちろん、悠太とは仲が良かったが、それぞれの気持ちを知っているだけに、悩んでしまう……とはいえ、まどかと誠が承諾したのだから、それ以上断る理由もないのたが。

曜子は悠太に耳打ちした。

「まどかと誠は付き合っているよ。いいの？」

悠太の返答は意外なものだった。

「知ってる。まどかから聞いた」

「……」

「聞かされたときはショックだったけれど、それで諦められるわけじゃないから」

「……そうだったね。解った。でも応援もできないよ」

「解っている」

悠太はすべて理解していた。

覚悟した上での行動だった。

曜子としては、悠太のことを応援していた時もあったので、どこか複雑な気持ちになる。

悠太は今では学年でも1、2を争うほどの、女子からの人気となっていた。

本当か嘘か、ファンクラブまであるという噂も聞いている。

それなのに、振り向いてほしい人に、振り向いてもらえない。

小さな時から知っていて、ずっと好きだったにもかかわらず、実らなかった恋。

「切ないね」

曜子は思わずつぶやいた。

「……ほっとけ」

悠太はいつもと変わらない。

変わらない表情の裏に、どれほどの思いが隠されているのだろうか。

曜子はふとそんなことを考えた。

修学旅行

修学旅行、当日。
学校に集合し、大型バスに乗り合い、目的地に向かうことになる。
まどかは曜子と隣合わせに座り、ひとりで席に座っていた誠の隣には、なぜか悠太が座って来た。

「隣、いい？」
「はっ、はい」

誠は緊張して体がこわばる。
悠太は相変わらず、自然体で荷物をまとめたりしていた。

意外な組み合わせに、周囲からの視線が集まる。
特に女子は、顔立ちのいいツーショットについつい目線を向けてしまい、嬉しそうに噂を始めていた。

鈍感な誠はそのことに気づかず、慣れている悠太はいつものように流す。
周囲からの注目をよそに、まったく気にしていないように悠太から話し始めた。

「そんなに緊張しないでくれ。あらためて宜しく、武田悠太。悠太でいい」
「……よろしくお願いします。一柳誠です」

緊張しないでくれ、と言われても、誠の緊張は簡単には解けない。
しかし、悠太は気にせず、話を続けた。

「まどかから話は時々聞いている。勉強を教えているんだって？」
「はい……」
「なあ、同い年なんだし、敬語は止められないか？」
「……はい」

いつもと勝手の違うやり取りに、悠太は思わず舌打ちをする。

「なんで、まどかはこんな奴に……」

小さな声で愚痴った悠太の言葉は、誠の耳には届かなかった。

「じゃあ、そのままでいい。こちらも、このままでいかせてもらうけどいいよな？」
「はい」
「よし。じゃあ、お互いに自己紹介だ。俺の方からいくぞ」

自己紹介はさっき終わったのでは……と誠は思ったが、悠太は自分とまどかの過去にいて語り始めた。

「まどかとは幼稚園から一緒だった。家が近かったからな、小さい時から友達だった」
「……」
「小学校も中学も一緒、何度も同じクラスになったこともある。友達というより、親友というか兄妹というか、とにかく仲が良くてふたりで遊びにもよく出かけた」

自己紹介……だよね？

誠は、悠太が何を伝えようとしているのか、測りかねていた。

「海に行ったり、山に行ったり、家族ぐるみで旅行に行ったこともある」

「いいなあ……」

誠がいくら願っても叶えられない、小さな時のまどかとの時間。

それを知っている悠太のことを、誠は羨ましく感じた。

「お前は知らないまどかのことを、俺は知っている」

「……」

「……っ、いらないことを言ったな。その、とにかくまどかとは昔からの付き合いなんだ。お前ほどじゃないけど、俺も勉強は得意だし、バスケットボールで賞もとったことがある」

「……」

「趣味は読書と友達と遊ぶこと。以上、はい、そちらの番」

「……僕？」

悠太がうなずく。

「えーっと……。僕は別の市で産まれたんだけど、すぐにこちらに引っ越して来たみたいで……」

誠はしばらく沈黙する。

「で？」

「何を話せばいいのか解らない」

悠太はこのままでは話が進まないと気付き、自分から質問した。

「趣味は？」
「勉強」
「得意なことは？」
「勉強」
「……思い出は？」
「……勉強」
「お前、それしかないのか？」
「……はい」

言われて、誠も初めて気づいた。
振り返ってみても、勉強以外の思い出がほとんど無い。
あるのかも知れないけれど、記憶に引っかかってこない。
勉強の知識を話すことはできても、何があったかを話すことはできなかった。

「ますます解らない。まどかは何が良くて、お前と付き合ってるんだ？」
「……僕も知りません」
「知りませんって……」

悠太はあきらめたように、ため息をつく。

「ああ、もういい。話を聞けば何か解るかな、と思ったけれど、自分の口からは嫌味しか出てこないし、そちらはそちらで解っていないようだし」
「御免なさい……」
「謝るなって。調子が狂うな……」

悠太は座席を倒して、不貞腐れたようにごろっと横になる。

「俺が悪かった。お前に当たっても仕方が無いのに、気持ちがコントロールしきれない」

「……？」

「いいから、気にするな。旅行中は仲良くやろう。少し寝させてもらう」

「はい」

悠太は目をつぶり、黙ってしまった。

鈍感な誠だったが、何となく悠太の気持ちは理解できた。

まどかとずっと一緒にいたのに、不意に現れた人間に取られとしたら、どれだけ寂しいか。

誠も、いつかまどかが去っていってしまうのでは、と想像するだけで、ちぎれる程に胸が痛くなる。

悠太もそうなのかも知れない、と誠は思うのだ。

そして、誠に小さな不安がよぎる。

こんな自分よりも、悠太とまどかの方がお似合いなのではないか、という不安が。

失う悲しみ

途中で早めの昼食がとった後、最初の目的地についた。
奈良市にある、奈良公園。
天然記念物の鹿が、飼われること無く歩いていることで有名な場所だった。

走るバスの中からも鹿が見える。
檻越しではない鹿の存在で、自然と生徒達のテンションが高くなった。

「かわいい！」とか「すごい！」といった歓声が、そこかしこで上がる。
駐車場にバスが停まって一時間程度の自由時間となり、誠やまどか達はグループで公園の中を歩くことにした。

やはり定番の鹿せんべいを購入してみる。
一番乗り気だったのは、曜子だった。
誠は間近に見る鹿に、いくらかビビリ気味だった。
そんな誠の様子に、まどかが笑って手を引く。

「師匠、怖がらなくても大丈夫ですよ。食べているときはけっこう大人しいです」

そういって、まどかは鹿の鼻のあたりをゆっくりとなでる。
確かに曜子の手から鹿せんべいを食べている間は、じっとして動かない。

誠も恐る恐る、鹿を撫でてみる。

「あっ、温かい」

「でしょ？」

嬉しそうな二人を見て、悠太は落ち着かなかった。

「ほら」

曜子が悠太にせんべいを渡す。

悠太は戸惑いながらも、せんべいを受け取り、近くに寄ってきていた別の鹿に与えた。

「あっ、悠太の鹿も可愛いね！」

まどかが気づいて声をかけてくれる。

悠太は一瞬笑顔になったが、そんな自分が恥ずかしくなったのか、すぐにいつもの表情に戻ってしまう。

それを見て、曜子が悠太に思わず声をかける。

「素直じゃないね」

「うるさい」

悠太は表情を曇らせた。

悠太自身も感情のコントロールが効かない状態を持て余していたので、曜子の一言は耳に痛い。

まどかと誠が自然に仲良くしている様子を見てしまい、なおさら辛い。

悠太はひとつ、大きなため息をついた。

鹿は人の様子など気にせず、もぐもぐとせんべいを食べ続けていた。

奈良公園の次は、同じ奈良市内にある興福寺へ行く。

興福寺といえば、仏頭や阿修羅像が有名なお寺。

とは言え、高校生にそれらの魅力や楽しさが解るはずもなく、ガイドさんの案内を聞くこともなく、よそ見をしたり話をしている生徒ばかりだった。

そんな中、誠は阿修羅像の前で立ち止まった。

そして、ずっとその像の顔を見つ続ける。

まどかはそんな誠の様子を不思議に思い、声をかける。

「師匠、どうしたんですか？」

まどかの質問に答えようとしたが、誠は一瞬声が詰まって言葉が出せなかった。

「……こんな表情をしていたなんて……」

「え？」

他の生徒達が通りすぎていく中、誠とまどかだけが阿修羅像の前に立ち尽くす。

「教科書で見たことはあったのですが、勘違いしていました。阿修

羅というと、鬼神、仏法の守護神。修羅という言葉の通り、怖い表情をしているものだと思い込んでいました。それが……」

「……」

「こんな悲しげな顔をしているなんて」

阿修羅像は思っていたほど大きくはない。

眺めれば、すぐ近くにその表情を見ることができる。

阿修羅の顔は、何かを耐えるような、今にも泣きそうな顔にも見える。

「そうだ」

「……？」

「阿修羅は愛する娘を取られたために、戦い始めた。愛するものを失った悲しみなんだ……」

「そうなんですか……」

阿修羅はもともと良い神だった。

それが、娘を奪われた怒りや悲しみにとらわれ、破れても戦い続けるうちに、悪神と呼ばれるようになってしまったのだ。

愛する娘を失った悲しみは、どれほど強かったのだろう。

誠は自分がまどかを失ってしまった時の悲しみ、悠太が抱えているかも知れない悲しみを、垣間見たような気がした。

愛するものを失いたくない。

誠はまどかの手をとって握りしめた。

まどかは他の生徒が見ていることに気付いて恥ずかしがったが、しっかりその手を握り返してくれた。

どうか、この手のぬくもりが離れていきませんように。
愛する人を守ることが出来ますように。

強く、なりたい。

阿修羅像を眺めながら、誠はそんなことを考えていた。

部屋員

その日は奈良市内の旅館に泊まることになっていた。
６人毎に部屋が割り当てられ、誠は名前の近い、相葉、伊藤、一柳、上田、大鹿、加藤の６名でひとつの部屋となった。
一年で一緒だったような顔も見られるが、誠にとってはどの人も初対面同然で、緊張が取れない。
部屋の片隅で荷物をおろし、今日あったことをノートにでも書こうかと、バッグを開けたところで声をかけられた。

「一柳くん」
「はっ、はい！」

思わぬ声かけに、誠は飛び上がるように振り返った。
声をかけた方がビックリするほどの反応に、部屋中の男子が振り返る。

「席が近いから挨拶はしているけれど、あらためてよろしく。伊藤大成（たいせい）。大成でいいから」
「あっ、あの……一柳誠です」
「うん。知ってる。有名人だから」
「ゆっ、有名人？」

大成は背格好も誠と同じぐらい、メガネをかけているところまで似ている。
顔立ちは優しげな感じで、今は穏やかな笑顔を浮かべていた。

「うん。勉強の神様、女の子よりきれいな女装、如月まどかさんの彼氏」
「えぇぇっっ！！」

いつのまに、そんな噂がっっ！
しかも、有名って？

「ゆ、有名なの？」
「みんな知っているよね？」

大成が他の部屋員達を振り返ってみると、全員がうなずいた。

はっ、はは……。

誠は事態が飲み込めず、乾いた笑いを浮かべる。

「俺も話しかけたかったから、今日は一緒の部屋で嬉しいよ。相葉智（さとし）。智で」
「あっ、じゃあ僕も。上田　隆成（りゅうせい）です。よろしく」
「はいはい。大鹿　真（まこと）。『まこと』同士よろしく」
「加藤　尊（たける）。よろしく」

一度に挨拶され、誠は驚きながらも必死に名前を憶えようとした。

「えーと、大成くん、智くん、隆成くん、真くん、尊くん？」
「そうそう。……なんでノートに書いてるの？」
「あっ、習慣で」
「やっぱり面白いね」

大成がそう言って笑うと、その人懐っこそうな笑みのお陰で、誠の緊張も少しずつ和らいでいった。

「噂が先行していたからどんな人かと思っていたけれど、安心した。これからもよろしく」

「はい……こちらこそ」

ふたりの間に、真が入り込んでくる。

彼は髪を立てたりしていて、この中では一番格好に気を付けているのが解る。

顔立ちも悪くない。やや軽そうではあるが。

「まーちゃんが一緒だと女の子が寄ってきそうで、いい部屋に当たったな、って思ったよ」

「……まーちゃん……」

「えっ？　そう呼ばれているって聞いたけど？」

「あまり良い記憶ではないので」

「いいじゃん！　気にしない、気にしない」

真は馴れ馴れしく、誠の背中を叩いた。

何はともあれ、旅行中に同室になりそうな面々とは仲良くやっていけそうで、誠としてはほっとした。

しかし、有名って……しかも、いつのまにまどかさんとお付き合いしていることが広まっているんだろう……。

ふたりだけの事だと考えていた誠は、どこまで噂が広まっているのだろうかと想像して、身震いした。

注目されることには、慣れていなかった。

戸惑う誠だったが、大成達が一緒になって食事やお風呂に付き合ってくれた。
誠は質問に答えるばかりだったが、話をするに連れて、少しずつどんな人達かが見えてきた。

智は人付き合いのバランスがいい。自己主張しすぎずに、会話を盛り上げてくれる。
顔立ちも男らしくて、清潔感がある。

隆成は男としては背が小さくて、大人しそうな雰囲気がある。
慣れてくるとよく話すが、基本的には聞き役に徹している。

尊はほとんど話をしない。表情も変えないので機嫌が悪いのかと思えば、そうではなく付き合いは悪くない。よく見ていて、ちょっとした気遣いができる。

そんなわけで、遠慮なく聞いてくる真と、見かけよりもリーダーシップのある大成が話しの中心となって、結構盛り上がる。
とは言え、誠がかなり話のネタにされてしまっているが。

食事が終わり、部屋に戻ると就寝時間までまだ時間があり、どうしようかと話していた。

「女子を誘って、ゲームでもしよう」

と真が言い出す。

「悪くないけど、誰が誰を誘うの？」

大成が真に尋ねると、真はさも当然のようにこう答えた。

「そりゃあ、まーちゃんが行けば、誰だって受けてくれるさ」

言われた誠は吹き出しそうになった。

「ぼっ、僕？」

「そうだよ。ここはひとつ、俺達のために頑張ってくれ！　お願い！」

「……無理です。男に対してだって緊張するのに」

「じゃあ、如月さんを呼んでよ」

「拒否します」

「つまんないなぁ」

それ以上には突っ込んでこないようで、誠はほっとした。

しかし、嵐は向こうからやってきた。

ドアがコンコンと叩かれる。

「はい、どうぞ」

大成が応えるとドアが開くと、そこには桜が立っていた。

「はぁーい、まーちゃん！」

「さっ、桜さん！」

部屋員一同がどよめいた。

なにしろ桜といえば女子生徒の中でも抜群のスタイルときれいな顔立ち。

それを鼻にかけない親しみやすい性格から、男女ともに人気が高い。

そんな桜が訪れてきたのだから、驚かないはずがない。

驚きはそれだけではなかった。

「まどかと曜子も連れてきたよ！」

「えぇっっ！」

曜子が「はぁい！」と手を振る。その後ろに、恥ずかしそうにまどかが付いて来ていた。
しかもそれだけではなく、あと3名知らない女子生徒も一緒だった。

部屋があっという間に12名となり、手狭になるかと思ったら、男達が机や椅子や布団をさっと片付け始め、あっという間にスペースを作り出した。

「さっ、どうぞ！」

大成の案内で、互いに開いたスペースに座る。
誠は呆然と立ち尽くしていたが、ひとり立っていることに気づいて、慌てて座った。

「何よ、まーちゃん。せっかく私が連れてきてあげたのに、嬉しくないの？」

桜がふくれっ面で、誠に問いかける。
誠がすぐに答えられずにいると、真のほうが代わりに答える。

「いやいや、有り難うございます。まーちゃんも来て欲しい、って言っていたので」

その言葉に、まどかの頬が赤くなる。

いやいや、拒否します、っていいました！　……会いたかったけど。

「ほらほら、感謝しなさい」

なぜか誠の隣りに座る桜が、誠の頭がガシガシと撫でる。

いつもながら、桜には逆らえない。

「……有り難うございます」

「よろしい」

桜は満足気だ。

どうして……？

話が一段落したところで、大成が話し始めた。

「大体は解るけれど、念のため簡単にそれぞれ自己紹介しませんか？」

「うん、いいね。じゃあ言いだしっぺから時計回りで」

大成と桜。このあたりが、話の引っ張り役のようだ。

誠が解らなかったのは、女の子3名。

同じ部屋の子達らしい。

明るく元気そうな、茜（あかね）。

メガネをかけて大人しそうな、秀子（しゅうこ）。

可愛らしい顔立ちの、音々（ねね）。

三人の名前と様子は、簡単に言うとそんな感じだった。

「まーちゃん、ノートに書かない」

いつものようにノートに書いている誠の頭を、桜が軽くはたく。

「こう言うのは、聞きながら、話しながら憶えるの」

「……はい」

「さて、自己紹介も終わったところで」

桜が嬉しそうに話を続ける。

「修学旅行の夜といえば……」

「夜といえば？」

大成が合いの手を入れつつ、桜の言葉を待つ。

「怖い話でしょ！」

「そうなんですか？！」

「いやいや、違うでしょ」

「いや、いいかも」

桜の発言に波紋が広がるが、結局桜の意見に反対を言うことのできる人がおらず、順番で怖い話をすることになった。

怖い話の苦手なまどかは曜子にしがみつき、音々も茜の袖を握っていた。

一番手は大成だった。

「これは僕がタイに家族旅行で行ったときの事なんだけど」

そう、彼は話し始めた。

彼は、海岸近くのホテル宿泊していた。
きれいなところで、暑い日差しに澄んだ空気が広がる、開放的な空間だった。

昼はプールで家族とともに遊び、夕食をいっぱい食べて楽しい一日を過ごし、夜は二人部屋を兄弟で使って、シャワーを浴びて眠りについた。

疲れていた大成はベッドで早々と眠りについたのだが、夜中に不思議な音で目が醒めてしまった。

ざっ　ざっ　ざっ　ざっ

何の音だろう、と身体を起こして耳をすませてみる。
壁の向こうから、その音は聞こえてきているようだった。

おかしい。
壁の向こうは両親の部屋で、聞こえている音は、砂利道を歩くたくさんの足音に聞こえる。
外からの音が反響して聞こえているのかと思ったが、窓は閉じているし、他は静かだった。

ざっ　ざっ　ざっ　ざっ

音はしだいに大きくなってくる。
すぐ近くまで来ている音だ。
どことなく気配まで感じて、大成は怖くなってベッドにもぐり混んだ。

ざっ！

足音がとまる。
壁のすぐ横で止まったような気配がする。

音は無くなったくせに、気配だけが目をつぶっている大成にも、嫌というほど感じる。

いる、何かがいる。

壁の向こう……じゃない……ベッドの下だ。
下から見られている。

やめてくれよ……。

大成は泣きたい気持ちで、布団にくるまった。
しかし、気配はいつまでたっても無くならない。

寝よう！　とにかく朝になれば。

と思うが、目が冴えてしまって、1秒が1分にも1時間にも感じる。

ええい、もう。霊なんかいない！　気配も気のせいだ。

耐え切れなくなった、大成はベッドの下を覗いて、何も無いことを確認することにした。

下を見るのは、勇気がいる。
何もないに決まっているが、気配だけは感じる。
何かが息を潜めているような気配が。

えぇい！　見てしまえ！

大成は思い切って布団をはがし、ベッドの下を覗き込む。

……ベッドの下にはなぜか、包帯をまとった日本兵が横たわっていた。

しかも、ばっちり目があってしまった。

「うわぁぁぁ！」

大成は思わず叫び声を上げてしまった。
その声にすぐに近くにいた弟も起きてきて、「どうした！」と声をかけてくる。

「べ、ベッドの下に、誰か人が……」
「えっ……？」

弟は半信半疑で、ベッドの下を覗き込む。
しばらく覗き込んでいたが、頭をかしげながら顔を上げた。

「なんで人が寝てるの？」

「うわぁぁ！」

大成は弟の手をとって、隣の両親の部屋に逃げ込んだ。

びっくりした両親は、大成から事情を聞くと、何はともあれ今夜はこのままここで寝なさい、と一緒の布団で眠るように言われた。

恐怖ですぐには眠れなかったが、やがて疲れからか強い眠気が襲ってきて、深い眠りにつくことができた。

翌日にホテルの人に事情を話したら、どうもこのあたりの海岸は昔戦場になったこともあったようで、時折そうした霊を見たという人がいるらしい。

これればかりはどうしようもない、とホテルの人も困っている様子で、何はともあれ部屋を変えてくれることは対応してくれた。

さいわいそれ以後は霊を見かけなかったが、大成はしばらくひとりで眠るのが怖くなってしまったのだった。

「怖いよ」
「話し方が地味に怖い」

大成のずっと冷静に話す口調と、その眼に浮かぶような内容に、一同はかなり怖い思いをした。
まどかは曜子にしがみついて、軽く失神寸前だ。
誠は相変わらず、何かをノートに書き込んでいたが。

桜は満足そうに「はい、次」と指示を出す。

次と言われたのは、誠だった。
ノートを書いていて気付かなかったが誠だが、桜に小突かれて顔を上げる。

「えっ、僕？」
「そう、まーちゃん」

えっと……怖い話？

「……」
「無いの？」

誠は今までに、霊とやらにお会いしたことはない。

「あの……怖い話ではないのかも知れないのですが、霊と死後の世

界について少し……」
「霊と死後の世界なのに怖くないの？」
「以前、霊を科学的に解明しようとする研究がありまして」
「……そんな研究があったの？」

何名かが驚く。

「亡くなりそうな方を体重計に乗せ、亡くなった直後に体重が変化するかを計測したらしいのです」
「つまり、霊というか、命の体重を測ろうっていうこと？」
「はい」
「……で、変わったの？」
「数グラムの変化が出たそうです」

何とも言えない微妙な空気が流れる。
感心すべきか、誤差範囲というか。

「死後の世界についてですが」
「霊の話は、それで終わり！？」
「死ぬ瞬間について、沢山の事例を元に体系化したことで有名になった、エリザベス・キュブラー・ロスという精神科医がいまして、その方が次に臨死体験を経験した人に話を聞いて回ったそうなんです」
「臨死体験……それで死後の世界ね」
「そうしたら、臨死体験をした人の経験がかなり類似をしていたと発表しています」

ここまでは、興味がそそられる。

「まさか三途の川とか？」

「海外なので……。お花畑とか、何かとてもきれいなところで、神様の愛に包まれる経験をするそうです」
「……」
「とても幸せな体験で、死は全く怖くなかった、と口々に臨死体験者は語った、とのことでした」
やっぱり微妙な空気が流れる。
「ただこの結果は、死の恐怖をくつがえし自殺者を助長すると言われ、だいぶ叩かれたようですが」
「そっ、そうなんだ」
さすがの桜も、どう反応して良いか、解らないようだ。
まどかはなるほど、と感心してうなずいていた。
「……次に行こうか」
桜の指示で、桜を飛ばして真や茜、尊と続く。
それなりに怖かったが、どうも誠の空気が影響して、微妙に盛り上がりにかけてしまった。
そこに突然、まどかを探して訪ねてきた悠太が現れ、さらに女の子達が多数押しかけてしまい、部屋の中は大変な数の人になってしまった。
結局、まとまりがつかなくなったところに先生がやってきて、それぞれの部屋に戻されてしまった。
平穏を取り戻した部屋で、誠達はあきらめて布団を敷き直し、その日は眠ることにした。

「やっぱり人が集まったね」

横になる準備をしながら大成がつぶやくと、何名かがうなずく。

「まーちゃん、有り難う」

真が布団の中からお礼を言ったので、誠が驚いた。

「僕？」

「そうそう」

「なんで？」

「自覚ないの？」

「……」

「まあ、その方がいいけど」

怖い話ひとつできずに、盛り上げることも出来なかった。

話も聞かれたことに答えるばかりで、自分から話を作ることもできなかった。

反省ばかりで、ノートは他の人の勉強になる話し方で埋まったというのに。

飽きられないように、明日はもう少し頑張ろう。

そう決心し、誠は眠りについた。

自信

翌日は京都へ移動。
京都といえば、清水寺。

広い舞台の上に、たくさんの生徒が集まっていた。
これほどの広い空間と、たくさんの人を集めて乗せることのできる舞台は、京都でも他に見当たらない。
歴史のある文化遺産ではあるが、生徒達は高い景色から見える京都の町並みと、「清水の舞台から飛び降りる」という言葉を思い出して下を眺めようとするぐらいで、その価値はなかなか解りそうになかった。

そんななか、まどかは誠に質問をしてみた。

「清水寺について、何か面白い話はありますか？」
「面白い話ですか？」

まどかは笑顔でうなずいた。

「そうですね……例えば、これだけの人が乗ってもびくともしませんが、この清水の舞台は４００年近く前に建てられていて、しかも釘が使われていません。最近の建物が耐震強度の問題で数十年程度で建てかえられているというのに、木だけで作られたとは信じられない、すごい技術だと思います」

「本当ですね……あと、清水の舞台から飛び降りる、という言葉が

ありますが、本当に飛び降りた人はいるのですか？」

「けっこういるそうです。最近はもちろんいませんが」

「そうなんですか」

まどかはそう言って笑った。

「本当に、何でも答えらますね」

「何でも、というわけでは……」

「でも、昨日の話も、私には面白かったです」

ふたりは並んで歩き始めた。

舞台からゆっくりと下へ降りて行く。

「でも怖い話は知りません」

誠のつぶやきに、まどかは笑った。

「師匠は師匠のままでいいのです」

「僕のままで……？」

昨日の夜も同じことを言われたのだが、誠にはよく理解できなかった。

「だって、話を盛り上げることも、楽しませることも出来なかったのに」

落ち込んでいる誠とは反対に、まどかは嬉しそうに笑う。

「部屋の人達と仲良くされていましたね」

「はい、いろいろと声をかけてもらえて」
「たくさんの人が部屋にやって来てくれましたね」
「みんな優しいですね」
「そうじゃなくて」

誠の反応に、まどかは思わず苦笑いする。

清水の舞台の下にある、水が流れ落ちる音羽の滝を共に歩く。
水が滴り落ちる音が、耳に心地良く響いた。

「師匠とみんな友達になりたいんです。怖い話が出来なくても、盛り上げられなくても」

誠はびっくりしてしまった。
何しろ、今までは友達になりたいという人もいなかった。
いつも一人だったのに、どうして……。

「見かけが変わったからですか？」
「それも一つだと思います」
「まどかさんと一緒だからですか？」
「それは、どうでしょう」

誠にはやはり解らない。
思わず、首をかしげた。

「見かけはきっかけだと思います。そのままの師匠が、いろいろな人の目に入るようになって、興味を持たれているのです。前にも言いましたよね、自信を持ってください」

「……自信は……持てないですよ。なかなか……」

16年近く過ぎていたものを、この1年の変えるのは難しい。

「そうですよね……、でも持って欲しいんです」

境内の石畳を歩く。

他の生徒達も、互いにグループを組んで互いに話しをしながら歩いていた。

「自信を持つべきなんですか？」

「あの……最近感じたのですが、勉強でも自信が持つことがとても大切と、言っていたような気がするんです」

「ああ、確かに。自信を持つと、理解も記憶も点数も変わってきます」

「人と接するときも、自信を持つことが大切なんです」

「そうなんですか？」

まどかはうなずく。

「自己評価が低いと、人の思いを受け取り間違えたり、不安になったり、不安にさせたりしてしまうことがあります」

誠はどきっ、とした。

思い当たることがある。

それを伝えるべきかどうかは解らなかったが、誠は伝えることにした。

自分はコミュニケーションについては初心者で、今は恥ずかしがるよりも、聞くべきだと考えたのだ。

「その、実は不安があります」

「何に対してですか？」

まどかに問われて、ぐっと息が詰まる。

決心はしたが、恥ずかしくてなかなか口から出てこない。

「……その……僕には、まどかさんは相応しくないんじゃないか、いつかまどかさんが離れてしまうのじゃないか」

「……」

「悠太さんの方が似合うんじゃないか……と」

言ってしまった……。

言ってから、ここまで言ってしまって本当に良かったのだろうか、と誠は後悔した。

こんな話をしたことで、まどかの気持ちが離れるかも知れない。

不安がよぎり、誠の胸がきゅっと苦しくなった。

そんな誠の手を、まどかは優しく握ってくれた。

振り向くと、まどかは少し怒ったような、真剣な顔をしていた。

「私を信じてください」

「……」

「自分を信じてあげてください」

「……はい」

まどかは握った手を振りながら、恥ずかしそうに言葉を続けた。

「でも、実は私も不安になったことがあります」

「まどかさんが？」

「麻友さんの時とか」

「ああ……」

「他にも、接客係の中でもけっこう人気だったんですよ」

誠はびっくりした。

「そうなんですか？　……女の子扱いでしたが……」

「そうでしたね」

まどかはようやく笑ってくれた。

誠も、やっぱりまどかの笑顔が好きだった。

ふたりは砂利道をゆっくりと歩く。

もう少しで、バスが見えてくるはずだった。

「だから、同じ気持なんだって解って嬉しかったです。私は……師匠がいいんです……他の人では駄目なんです」

「僕も……まどかさんじゃないと……」

誠は思わず、手を強く握り返した。

不安がゆっくりと消えていき、代わりに胸がどきどきとしてくる。

「あーもう、早くキスしちゃいなさいよ」

突然聞こえてきた声に、まどかと誠はびっくりして、急いで後ろに振り向く。

そこには曜子がひとり、ふたりのすぐ後ろを歩いていた。

「「……！！」」

「ここまで話が盛り上がって、そのままバスに乗るつもり？　ほら、あそこの小道あたりが良さそうよ。ちょっとキスしてきなさいよ。……誰にも言わないから」

まどかと誠は一気に顔を赤くした。

「どっ、どこから聞いてた？」

まどかがどもりながら、曜子に尋ねる。

「ん？　誠が、まどかが悠太に取られるんじゃないかって、不安に思っているあたりから」

ほぼ全部、聞かれていた……。

「誠もいらない心配をしてるわね。はたから見て、ふたりはラブラブよ。入る隙間もありゃしない」

「いっ、いや、その、誤解です。曜子さん、いつでもお入りください……」

「いやよ、ふたりのいいところを邪魔するのは。はい、先にバスに乗ってるから。ふたりはそっち、そっち」

「あっ、あの……僕は手を握るのが精一杯なので……バスに乗ります」
「私も……」
「あれだけいちゃついてて、キスもまだなの？」
いやっ、そのっ……。
「曜子っ！」
「はいはい。言い過ぎました。でも、大切な事よ」
曜子はそうつぶやきながら、ひとりバスに乗り込んだ。
ふたりは思わず顔を見合わせる。
恥ずかしいことと思っていたキスが、大切なこと……。
「あの、早く入ってくれない？」
悠太が不機嫌な様子で、ふたりに声をかける。
「あああぁぁぁぁ、ごっ、ごめんなさい」
「さっ、さあ、師匠。入りましょ」
二人が急いで中に入りこんだ。
悠太はひとり、ため息をつきながら、後に続いてバスに入ってい

った。

一目惚れ

清水寺の次は、金閣寺。
質素な銀閣寺と比べて、金箔を使用している金閣寺はやはり迫力がある。
ガイドさんがていねいに説明しているがそれを聞かずに、金閣寺とその金箔を見てはしゃいでいるのが大方の生徒の様子だった。
悠太はまどかを誘って、ふたり並んで歩いていた。

「なあ、やっぱり俺は解らない」
「……？　なにが？」

悠太の突然の言葉に、まどかは首をかしげた。

「まどかが、あいつのことを好きな理由」
「あぁ……」

誠のこと。

「どこがいいの」
「どこって……」

あらためて言われると、まどかもどう答えたらいいのか。
良い所はたくさんあるけれど、どこを好きになったかと言われると……。

「……笑顔……かな？」
「笑顔ぉ！？　そんなところに！？」
「いや、その……」

自分でもどう答えていいのか。
ただ、誠の笑顔を思い浮かべたら、ちょっとキュンと来たというか……その……。

「あいつの笑い顔なんて、見たこともない」
「あはは、そうかも」

誠は緊張してなかなか笑わない。
笑い顔が素敵なのを知っているのは、まどかのちょっとした優越感だ。

ふたりは砂利道を踏みしめながら、ゆっくりと歩く。
木々の緑が明るく照らされ、心地よい風に揺れていた。

「勉強ぐらいしかないじゃないか」
「そうなんだけど、その勉強に対してがとても尊敬できるし、前向きだし、楽しそうだし」

一緒にいると、こちらまで楽しくなってしまう。

「俺もそうだと思うんだけど」
「そうかもね」
「話も方もうまいし」
「うん」
「話していて、気楽だろ？」
「確かに」

悠太は降参と言ったように、両手を上げる。
「じゃあ、どうして俺じゃなくてあいつなの？」
「それは……」
まどかは立ち止まり、その理由を考えた。
どこで恋に落ちたのだろう。
公園の時は好きだった。
麻友との時も好きだったと思う。
体育祭、科学館……もう気になってる。
携帯電話、図書館……あれ……好きだったかも知れない。
えっ、いつの間に？　どこで……？
まどかはふと、初めて誠を見た日。
午後の穏やかな教室のなか、窓からの陽光に照らされた勉強する誠のことを思い出した。
ああ、あの時、私はすでに恋におちていたんだ……。
勉強を教えて欲しいと思った気持ちは本当だけど、彼じゃなければいけない、と感じた理由を、その時は説明できなかった。
直感を信じようと思っただけだ。
それが、まさか一目惚れだったなんて……。
一目惚れから半年近くたって、しかも告白されてから自覚するなんて。
曜子が言っていた意味が今になって解った。

まどかは恥ずかしくなって、顔を赤くした。

「あの……一目惚れだったみたい……」

「はぁ？」

「……」

「もしかして、今気づいたってこと？」

まどかは顔を赤くしたまま、こくん、とうなずく。

悠太は間をおいて、大きくため息をついた。

「なんだ結局、惚気けられただけか。初めから勝ち目がないのか」

「……ごめん」

「あやまるな。まだあきらめていない」

「……」

「これであきらめられるような、そんな甘い気持ちじゃないんだ」

悠太は厳しい表情を浮かべ、ふう、と息を吐く。

「ふたりに付け入る隙ができたら、入り込むからな。それにお前が困っていたら、俺はいつだってお前を助ける。今までそうしてきたように」

「……有り難う」

「どういたしまして」

こんなに自分のことを思ってくれる、頼りがいのある幼馴染がいることを、まどかは本当に心から感謝している。

そして、その気持に応えられないことに、あらためて胸が痛んだ。

同情で好きになって欲しいわけでも、愛して欲しいわけでもないことは解っていたが。

まばらになっていた生徒の数がだんだんと増えてくる。
バスが近いことを意味していた。

ふと見ると、誠の姿が見えた。
同じ部屋の男の子達と歩いている。

あっ、笑った。

たわいもない話をしているのか、他の人につられて誠も笑っていた。
その誠の笑顔を見ると、まどかもふわっと幸せな気持ち包まれる。
やっぱり好きなんだな……と、まどかはあらためて感じた。

悠太もそのまどかの表情の変化を見ていた。
それはかつて向けられたことのない笑顔で、選ばれたのは自分ではないことを嫌でも感じる。

「俺は先に行くからな」

悠太は辛くなって、ひとり先にバスへ向かった。

途中で誠とすれ違い、悠太は軽く誠の頭をはたき、そのままバスに乗り込んでしまった。
誠はなんで叩かれたか解らず戸惑って頭をさすり、大成達が心配をして誠に声をかける。

まどかはそんな様子を見て、くすっと笑った。

誠もまどかの存在に気付き、手を振ってきた。

「まどかさーん！」

まどかは「はーい！」と返事をして、誠のもとへと駆けて行った。

一目惚れでした、という思いは秘密にして。

ハグ

一日の見学が終り、宿に戻る。
騒がしい夕食のあとの自由時間、誠とまどかは付きまとう部屋員たちを何とかまいて、ふたりで旅館の外の小道を歩いていた。
遠くに行くほどの時間はないが、かといって誰かに見られるのも恥ずかしい。
ちょっと道をまがり、風情の残る町並みをふたりで並びながら、ゆっくりと歩くことにした。

「師匠と話がしたいな、と思ってもなかなかふたりになれませんね」
「有り難いことなのかも知れませんが」
「そうですね」

ふたりでみんなの顔を思い浮かべて笑った。

「何の話をしたいと思ったのですか？」

誠がまどかに聞くと、まどかはもじもじと話しづらそうに恥ずかしがる。

「？」
「その……」
「はい」
「昼間に曜子が言った……」

まどかの言葉を聞いて、誠は昼間のことを思い出してみる。
今日、曜子が言っていたのは……。

思い出して、まどかが恥ずかしがる理由が分かり、誠も顔を赤くした。

キスのことだ。

「その、大切なこと、って言われて、そうなんだって……」

「そっ、そうですね」

ふたりはお互いに顔を見ることも出来ず、しばらく黙って歩き続ける。

どことなく古い家屋が並び、ときおり自然にお寺があらわれる。京都らしい、どこか懐かしい街並み。

どこからか、下駄の乾いた歩く音が聞こえてきた。

沈黙を破ったのは、誠の方だった。

「実は遊園地の後、いろいろと調べました」？

「いろいろと？」

「その……キスの仕方というか……」

やっぱり勉強していたんだ、とまどかは不思議な尊敬の念を誠に抱いた。

「それで、何か書いてありました？」

「その、キスの仕方の本は、どうキスをするか技巧的なことしか書いてなくて。僕の参考にはなりませんでした」

まどかはいわゆる、キスの仕方が書いてある雑誌などを思い出して、なるほど、とうなずいた。

「緊張を抑える方法、恥ずかしい気持ちを乗り越える方法を調べてみたら、いろいろな本がありました。緊張克服法とか、赤面症の治し方とか」

「はい」

「読んでみると、いろいろ参考になることはありますが、総じて言えば慣れというか、思い込みというか」

「思い込み……ですか？」

「はい、少しずつ試してみて、大丈夫だと自分に自己暗示をかけていくのです。そこで駄目だと思う思考回路を、別の思考回路へまわす訓練をするのです」

「なるほど、少しずつ慣らす」

まどかは妙に納得した様子で、何度もうなずいていた。

「じゃあ、唇にキスはおいて……頬はどうですか？」

まどかの申し出に、誠は一気に耳まで赤くした。

「ほら、海外では挨拶に頬にキスしたりするじゃないですか」

「そっ、そうですね」

「はい」

ふたりの間に、また沈黙が広がる。

「その……練習しますか？」

?「れっ、練習ですか？」
「はい……」

言ったまどかも恥ずかしそうにして、戸惑っていた。
立ち止まってみたものの、ふたりともどうしていいか解らず、動けずにいた。

まどかが何かに気付き、急に手をぽんっと叩く。

「そうだ、その前にハグはどうでしょう？」
「ハグ？」
「はい」

手をつないだことはあるので、次はハグ。
確かに、頬にキスよりも抵抗は少ない気が、誠にもした。

「はい、どうぞ！」

まどかがくるっと誠の方に身体を向け、さあこいっ、と言わんばかりに両手を広げてくれる。
どうやら、まどかにとってハグはそれほど恥ずかしいことでは無いらしい。

誠もそれならば、と思ったほどに緊張せず、まどかに近寄り……。

ぎゅっ。

抱きしめるというよりは、ハグ。
親愛のしるし。

……のはずが、誠はどんどん恥ずかしくなってきていた。
向かい合わせになってハグをすると、当然まどかの胸が身体に当たるわけで。
しかも抱きしめるためにしっかりと押し付けられ、柔らかいふたつの膨らみがつぶれて、胸いっぱいに広がっているのを感じる。
大きくて、柔らかくて、温かくて。

無意識に、男としての反応が出てきたのを感じて、誠は恥ずかしさのあまり、まどかからパッと離れて、うずくまってしまった。

「どっ、どうしました？」
「いや、その……気持ちが良くて……」

胸が、とはとても言えなかったが。

それを聞いて、まどかも嬉しそうに答えた。

「私もです！　何ていうか、優しく包まれるみたいで、温かくて幸せな気持ちになれました」

邪気の無い顔で微笑まれると、誠は申し訳ない気持ちで一杯になる。
胸に触りたくなりました、何て言えるわけがない。
手で触ったらどんな感じなのだろうか、と一瞬頭をよぎるがすぐにそれを追い払った。

誠は何とか気持ちを鎮め、気付かれないように立ち上がる。

まどかはそんな誠の気もしらず、腕に腕をからめてきた。

「また、ハグしましょうね」
「はっ、はい」

誠は気づかれようにため息をついた。

恥ずかしさで倒れるか、理性を抑えられなくなるか。
誠はやっぱり自信を持つことは出来ず、帰途につくことになった。

一歩進んだのか、停滞したのか。
なかなか壁は高い。

学問の神様

翌日は、一日自由時間。
まどか、誠、曜子、悠太の４人で京都市内を歩いて回ることになった。

最初の目的地は、北野天満宮。
行きたいと希望したのは誠だった。

「どうして北野天満宮に行きたいのですか？」

まどかが誠に尋ねる。

「学問の神様といえば、誰だと思いますか？」
「えーっと、菅原道真？」

まどかの答えに、誠は笑顔でうなずく。

「ここはその菅原道真公が奉られてあるのです。」
「あっ、なるほど」

まどかも納得して笑顔になった。

「ちょっと早いですが、合格祈願をしましょう」
「はい！」

電車を乗り継ぎ、４人は北野天満宮にたどり着いた。

荘厳な木造の門をくぐり、境内の石畳を歩いていく。
まだいくらか時間が早いせいか人もまばらで、ゆっくりとあたりの様子を見ながら歩くことができた。

「そもそも、なんで菅原道真公が学問の神様と呼ばれるようになったか」
「はい」

まどかは誠の隣にいたが、曜子と悠太も誠の声が聞こえる位置で歩いていた。

「道真公は学者の家に産まれ育ち、５歳で和歌を詠み、１１歳で漢詩を作ったと言われています。いわゆる神童ですね。その後も、その才能からどんどんと出世していき、天皇に次ぐほどの地位を手に入れます」

４人は中門をくぐり、大きな社殿へと向かって歩き続けた。
かたわらには、梅の木が立っていた。

「ところが、彼をよく思わない藤原家と新しい天皇が、彼に罪をきせて太宰府に流してしまいます。そしてその二年後、道真公は息を引きとってしまいます。才能がありながら、最期は恵まれない境遇にあってしまったのです」

社殿にたどり着き、それぞれにお参りをする。
願いは口にしなかったが、心の中に秘めた願いをこめたようだ。

「お守りを買って、絵馬を書きましょう」

社務所によって、合格祈願のお守りを購入して、またもとの道を戻り始めた。

「道真公の死後、敵対していた藤原家や天皇家の人間たちが、たちまち病死したり、落雷により亡くなったりしたのです。そこで、道真公の祟りを鎮めるために建てられたのが、この北野天満宮と言われています」

「そうなんですか。太宰府の天満宮は知っていけれど、北野天満宮は知りませんでした」

「太宰府は亡くなったところですね。鎮魂のためなのでしょう。……あと道真公のお父さんは、今でいう塾の先生をされていて、たくさんの優秀な人材を送り出していたそうです」

「そうなんだ」

曜子も思わず感心して、そう言った。

「バスガイドがいらないな」

誠のことを感心した悠太が、そうつぶやく。

誠は恥ずかしそうに頭をかいた。

「こんな話しか出来ませんが」

誠が自嘲気味につぶやくと、まどかが励ますように手を握ってくれた。

「勉強になりました。有り難うございます」

そんなまどかの心遣いが嬉しくて、誠は「はい」と言って笑顔になった。

４人は絵馬所で絵馬を書い、それぞれに願い事を書いて吊るした。

まどかは、医師になれますように。
誠は、人の役に立てる人になりたい。
曜子は、いい出会いがありますように。
悠太は、恋愛成就。

願いを込めて。

そして、４人は次の目的地に向かった。
今度は悠太の希望で早めのお昼を取ることになった。

京野菜と漬物を美味しく食べさせてくれるお店で、狭い店内だったが多くの人で賑わっていた。
旬の野菜を、京都らしい落ち着く味付けをして料理されていて、漬物とご飯と合わせると、とても美味しい。
女性陣もカロリーの少ない野菜づくしの料理に好評の様子だった。

「ほんとうに美味しいね」

まどかは京野菜の滋味を、舌の上で確認するようにゆっくりと食べていた。

「何杯でも、ご飯がいけそう」

やや量に走りがちな曜子がつぶやいた。

「喜んでくれて良かった」

まどかが喜んでくれて悠太は嬉しそうだったが、感情はやや抑えている様子。

「そうか、こうして料理をするといいんだ……」

誠はブツブツ言いながら、ノートにレシピを書き込んでいた。
家に帰ったら、早速試してみようと考えている様子だった。

そして、次の目的地は曜子の希望。
八坂神社近くの一つのお店に入る。

「これも、ひとつのコスプレよね」

曜子が嬉しそうにそう言ったのは、ここが舞妓姿になることができるお店だったからだ。
着物の着付けに、化粧をしてもらい、即席の舞妓姿を堪能できる。
写真撮影まで入り、やや値段は高いが、曜子をこれを絶対にやってみたいと希望していた。
もちろん、まどかも一緒にやることになっている。

「少しお金を足すと、外の散策もできるんだ」

悠太が料金表を見て、そうつぶやいた。

「そうみたいね。でもけっこうするから」

曜子がすこし残念そうに答える。

悠太はしばらく考えていたが、まどかと曜子に聞いてみることにした。

「その分は俺が出すから、一緒に外を歩かないか？」

「えっ？」

「本当？」

「俺が一緒に歩きたいんだ。出させてくれ」

「……」

まどかは戸惑ったが、曜子は悠太の気持ちを理解して、申し出を受けることにした。

「有り難う。そうさせてもらう」

「曜子……」

「まどかも、一緒に。記念だから」

「……うん。有り難う」

「どういたしまして」

悠太は口元だけで笑った。

任せた

ふたりの着付けと化粧はすこし時間がかかったが、悠太と誠はゆっくりと待つことにした。
悠太は持ってきた小説を読み、誠はノートを読み返しながら勉強していた。

「出来上がりましたよ」

お店の人の声に、悠太と誠は顔を上げた。

扉が開くと、恥ずかしそうにしたまどかと、嬉しそうな曜子があらわれた。

まどかは赤を基調とした着物に、きれいな花びらが舞っていた。
真っ白に化粧されていた綺麗な顔立ちが、いつもよりも女の子らしく見えた。

曜子は藍色に近い、やや落ち着いた色合い。
立ち振る舞いまですっかり舞妓のようで、色気すら感じる。
おそらく気持ちも舞妓に成りきっているのだろう。

「……やっぱり似合うな」

悠太はふたりの姿を見て、素直に褒めてくれた。
誠は顔を真っ赤にして、何か言おうとしていたが、とっさに言葉が出ないようだった。

部屋を変わって写真撮影をした後、４人は近くを散策することにした。

「誠」

曜子が手招きをして誠を呼んだ。

「？」

「たまには、私をエスコートしなさい」

「はっ、はい」

誠は緊張しながらうなずいた。

「お金まで出した悠太の気持ちを汲んでやって、今日は花を持たせてやりなさい」

「……」

そこまで言われて、誠もようやく意味を理解した。

悠太はまどかとふたりで歩きたいのだ。

目の前で悠太はまどかに声をかけ、ふたりは歩き始めた。

誠はすこしだけ不安で胸がいたんだが、曜子の言葉を信じることにした。

「本当に似合っているよ」

悠太はまどかを横目で見ながらそうつぶやくと、まどかはやや恥

ずかしそうな表情を浮かべた。

「いつもがジャージとかだから、なんか恥ずかしい」

「ジャージ姿だって可愛いと思っていた。こんな姿なら、なおさら可愛い」

悠太の恥ずかしげもない褒め言葉に、まどかは化粧をした顔でも解るぐらいに、頬を赤らめた。

「あっ、有り難う……」

「お礼を言いたいのは、こちらの方だ。一緒に歩いてくれて有り難う」

「……」

「こうして京都の街を二人で歩きたかったんだ」

悠太はそれだけ言って、黙ってしまった。

まどかもどう答えて良いか解らず、しばらく沈黙が続いた。

途中で、海外の旅行者と思われる人達から写真をせがまれ、まどかは恥ずかしながらも立ち姿を撮られていた。

悠太もこっそり、携帯でまどかのことを撮っていた。

八坂神社に着くと、砂利や石畳で草履では歩きづらい。

「ほら」

悠太が自然に手を貸し、まどかも「うん」と素直に手をとった。

ふたりで手を握りながら、境内をゆっくりと歩いて行く。

その後ろでは、悠太の自然なエスコートを教材として、曜子が誠に女の子の扱い方を誠に教えていた。
着物だとどういったことが困るか、歩くペースはどのぐらいか、距離はどうしたら良いか……。
誠は熱心にノートに書きこみ、「勉強になります」とつぶやいていた。

悠太は心のなかで、こうして並んで歩くのはもう最後かもしれないな、と思った。

まどかは誠を選んだ。
いま横にいてくれるのは、譲られたからに過ぎない。
それは、悠太もよく解っていた。

まどかは悠太の気持を知っている。
だから、今までの幼馴染として手をつないで歩いたときと、今日はぜんぜん違った。
まどかも笑ったりふざけたりせず、悠太の気持ちを受け入れるように手を握り、静かに側を歩いてくれている。

こうして手をつなげるのは、多分二度とない。
おそらく、一生……。

そう思ったら、悠太の目から涙がこみ上げてきた。

ふいに落ちそうになった涙をぐっと我慢したが、ひとつだけ間に合わずにこぼれて、頬を伝った。

気付かれないように、悠太は表情を変えずにいたが、その涙をすくうようにまどかの指が頬を撫でる。

「……」

ほんの一瞬だけ、悠太は歩みを止める。
まどかはまるで何もなかったかのように指を戻し、前を向いた。

悠太はすこしだけ握った手に力を入れて、また歩き出した。

涙がまた出てきたが、悠太はもう格好をつけないことにした。
声も出さず、表情も変えず。
悠太は涙をながすままに任せ、まどかもそれを拭わなかった。

静かな、ゆっくりとした時だけが流れた。

一時間にも満たない散歩。
あれからふたりは一言も話すこと無くお店に着くと、悠太はただ一言、

「有り難う」

と、まどかに頭を下げた。

まどかは黙って、同じように頭を下げた。

「待って」

曜子が初めて二人に声をかけた。

悠太に近寄り、「携帯、貸して」と曜子が言った。

「？　……はい」

「うん。ふたり並んで」

「あっ……」

悠太も、曜子の言いたいことが解った。

「まどか……いい？」

悠太がまどかに尋ねると、まどかもうなずいてくれた。

ふたりが寄り添う。

「じゃあ撮るよ」

曜子が携帯をかざし、カシャッ、と写真を撮った。

出来上がりを確認してうなずくと、携帯を折りたたんで悠太に返す。

「曜子、有り難う。本当に」

「どういたしまして」

悠太は曜子にも頭を下げ、曜子がにこやかに笑った。

まどかと曜子が着替えるために店に入る。

悠太と誠も続けて店に入り、中で待つことにした。

悠太は何事もになかったかのように、小説を読み始める。
誠もノートを開いて、勉強をしようとした。

その時、悠太が一言、

「任せたぞ」

とつぶやいた。

「え？」

誠は思わず聞き返したが、悠太は何も言わず本を読み続けていた。

任せたぞ……と確かに、誠には聞こえた。
おそらく、まどかのことだろうことは、誠にも理解できた。

どんな気持ちで、この一言を誠に伝えたのだろう。
もし、誠が悠太の立場だとしたら、果たしてこの一言を言えただろうか。

誠は呆然として、悠太のことを眺め続けた。
どう答えていいか解らず、本に視線を落としたままの悠太に軽く頭を下げた。

悠太はまったく表情も変えず、見向きもしなかった。
そして誠もノートを広げ、勉強を始めたのだった。

そして、翌日。
修学旅行から学校へ戻るバスの中。
行きと同じように、ひとり座る誠の隣に、悠太が座ってきた。
きっと、悠太は仲の良い友達と座ると思っていた誠は、びっくりして声を上げそうになった。
悠太はいつものように表情を変えず、独り言のようにつぶやき始めた。
「昨日のことはなしだ」
「……え？」
悠太はすこし気まずそうな表情を浮かべながら、言葉を続けた。
「やっぱり、お前に任せるのは悔しい。あれは無かった事にしてくれ」
「……」
それだけ言って、悠太はイヤホンを耳に入れて、音楽を聞き始める。
誠は呆然としていたが、ようやく悠太の言葉の意味を理解すると、くすっと笑った。
「笑うな」
「……ごめん」
「そんなに簡単にあきらめられるか」
「……解ります」

誠の言葉に、悠太が初めて振り向いて、ふたりは視線を交わした。

「……そうだな」

悠太はふたたび視線を外し、椅子を倒して目をつぶる。
昨晩は眠れなかったのか、すぐに寝息が聞こえ始める。

友達とは違う、こういうのをライバルというのだろうか……誠は不思議な悠太との関係を考えた。

以前の緊張はなくなり、あらたな別の緊張感がふたりの間にできていたが、それはけっして嫌なものではなかった。

この人に負けないよう頑張らないと……誠はあらためて考え、ノートを広げて勉強はじめた。

バスはみんなを乗せ、家路へと向かった。

古文漢文

期末試験が始まる前、一柳家では恒例の勉強会が行われていた。

「科目としては最後になってしまいましたが、今日は古文と漢文です」

「最初に基礎と総論。その後は科目ごとに別れて、これで最後ですね」

「いや実は、まだ数学や国語は応用がありますし、テスト対策というか技術的、精神的なコツみたいなものもあります」

「奥が深いですね」

まどかが思わず笑ってしまった。

誠のは、勉強法を超えて勉強道のようだ。

ためにはなるが。

「ただ、古文や漢文が何の役に立つかと言われると、難しくて」

「そうなんですか？」

「古き日本を知ることは、日本人の教養として必要かもしれません。絵画や音楽と同じで、時として生きていく力になったり、軸になったりもしますが、古文、特に漢文は……その……」

「生きて行く上で、そう困らない」

「語弊があるかも知れませんが……。ただ、漢文は素晴らしい文化がありますし、今でも勉強になる内容もあります。ひらがなや漢字も漢文から来ていますから、大切ではあるのですが」

「はい」

「今回はテストの点を取る技術的なことだけ。本当の古文や漢文の楽しさを語ると、いくら時間があっても足りませんので」

誠はそう言いながら、教科書を開いた。

「原則は英語と同じです。意味を理解すること、文法を理解すること。そのために、完璧なノートか教科書を作成して、何度も音読したり、書いたりするのが一番です」

「はい」

「古文や漢文は、センター試験や大学受験を含め、それほど難しい問題は出ません。一度しっかり勉強をしておくのは、点数をとる上ではとても大切です。良いと言われる参考書や問題集をひとつ完璧にするだけでもかなり違うので、やっておくといいでしょう」

「なるほど」

まどかも誠の言うことをノートに書くことがすっかり定着した。

それに、前ほど「無理」と思ったり、「できない」とあきらめることも無くなった。

成績も、今はクラスの中でも5位以内に入りつつある。

自分でもまさかこれ程に成績が上がるとは思っていなかった。

ただ、医学部に合格するためには、学年で5位以内に入らないといけないらしい。

この先の壁を、まどかは厚く感じていた。

「少し古文の楽しさの話をしますと、例えば徒然草」

「はい」

「これは文がとても綺麗なのです。無駄がないというか、音楽のようなというか。とにかく丸暗記をして口ずさんでみると、とても調子が良く口につくことが解ります。素晴らしい文です」
「そうなんですか」
「一説では、大麻のような草を焼いて軽くトリップした状態で聞くと、たまらない文章らしくて、吉田兼好もそうして書いたから徒然草という名前にした、という噂もあります」
「……初耳です」
「あくまで噂ですが。ただ何となく納得できます。それだけ言葉が心地良いのです」
「古文がそんなところで楽しむなんて、知りませんでした」

まどかの言葉に誠が笑い、説明を続けた。

「枕草子は情緒あふれた内容ですし、源氏物語は恋愛物として今でも通用します。いくつかの楽しみ方があるのです」
「なるほど」
「漢文で言えば、私は論語や老子、司馬遷の史記が好きですね。哲学的にも深いですし、歴史物は小説のように楽しいです。三国志などは、今でも日本中で読まれている書物の一つですね。劉備とか諸葛亮とか、日本の昔の偉人よりも知名度は高いと思います」
「そうですね。たしかに」

いくつかの具体的な問題を解いて、今日の勉強会は終了した。

真穂が、そんなふたりにお茶を入れてくれていた。

「ご苦労様。相変わらず、真面目にやっているわね」
「有り難うございます」

「あれから1年経つけど、まどかちゃんもすっかり成長して、頼もしいわ」
「いえ、まだまだです……。でも師匠のお陰で、少しずつ自信がついてきました」
まどかにそう言われると、誠は恥ずかしそうに頭をかいた。
真穂は微笑んだが、すぐに真面目な顔をして誠の方を向いた。
「真面目な話だけど、聞いてくれる？」
「僕に？」
「そう」
「なんでしょう」
誠は、真穂が何を言おうとしているか検討もつかず、首をかしげた。
「夏休みに入ったら、一日、病院を見学してほしいの」
「病院見学？」
「そう」
なぜ病院見学を……と考えたが、誠ははっと気づいた。
「もしかして……」
「そう。あなたの父親が働いている病院よ」
誠とまどかの、息を飲む声がした。
父親に会う、ということだ。
「あの人には、今まで誠の存在は隠していた。だから今回、私が連

絡をとって知らせたことで、最初はすごく混乱させてしまった」
「……」
「でも最後には、誠に会いたい、認知してもいい、と言われた。まだ会いもしないあなたを、あの人は受け入れたの」

誠にはまだ、言葉を受け入れるだけで精一杯だった。
まどかが、誠の手を握ってくれた。
知らないうちに誠の手は震えていたらしい。
まどかが握ってくれて、誠の手の震えはようやく止まった。

「それで相談して、一日あの人の仕事の様子を見学して、夕食をふたりで食べる。という約束をしました。もちろん、誠は拒否もできるわ」
「……」
「どうする？　行く、行かない？」
「……行きます」
「そう」

真穂はほっとしたようにも、残念そうにも見える。

「対外的には、医学部を目指す高校生の一日病院見学ということで、友達の息子さん、ということになっているの。親子だと解っているのは、あの人とあなただけ」
「はい」
「どう受け止めるか。今後をどうするかは、あなたに任せるわ」

誠はうなずいた。

「あの……」

まどかが初めて口を開いた。

「私がこんな話を聞いてよかったのでしょうか」

不安そうにまどかが尋ねる。

真穂はふっと笑うと、まどかの手を握りながら話し始めた。

「これからはね、楽しいことも苦しいことも、ふたりで乗り越えてほしいの。誠にはまどかちゃんが必要なのよ。手の震えを止めることができたようにね」

「はい」

「有り難う。まとがちゃんがいてくれて、本当によかったわ」

真穂はいつものようにまどかの頭を撫で、まどかもそれを気持よさそうに受ける。

いつもの様子に、誠もようやく落ち着くことができた。

「それはいつですか」

「夏休み入ってすぐの月曜日。詳しい場所とか時間は、また紙に書いておくわ」

「はい」

「私は会わないけど、よろしくね」

誠は、ふかくうなずいた。

病院

大きな病院だった。
地下1階、地上8階建てで、病院の前には広い駐車場スペースまで確保されている。
そのあたりでの中核的な総合病院で、３００床のベッドを有し、医師も５０名以上も在籍しているのが入口近くの案内で解った。
内科、外科、整形外科、産科婦人科、小児科、眼科、耳鼻科……多くの科の名前が連なっていた。

今から誠が会おうとしている人は、その病院長だった。

午前8時。外来の受付のためか、すでにまばらながら人が椅子に座っている。
誠は受付の前に立ち、緊張しながら待っていた。

カッ、カッ……。

まだ暗い廊下の奥から足音と共に、白衣を着た人物が歩いてきたのが見える。
近くなるにつれ、しだいにその姿がはっきりとしてきた。

背格好は誠と似ているが、ややがっしりとしている。
白髪が多く混じった髪をていねいに整えてあり、ネクタイに白衣のたたずまいなど、清潔感を感じさせる。
眼鏡をかけていて、すべてを見通すような瞳が見える。
真穂に似ている誠との容貌とは、幸いそれほど似ていない。

これならば他の人にもばれないだろうと、誠はややほっとした。

相手も迷わず誠の元まで歩いてきて、眼の前で立ち止まった。

院長らしい威厳のある顔が、わずかに緩んだ。

「一柳誠くんだね。遠目からでもすぐに解った。真穂さんによく似ている」

低い、落ち着いた声だった。

誠は一礼した。

「一柳誠です。今日は一日お世話になります」

「私は惣島正平といって、ここの院長であり、理事長であり、内科部長を兼任している。よろしく」

惣島は誠に握手を求め、誠もそれに応えた。

握った手は意外に大きく、温かかった。

「うん。じゃあ付いて来てくれ。まずは白衣を渡そう」

「はい」

彼はそう言っていま来た道を歩き始め、誠もそれに付いて歩き出す。

歩きながら、簡単な病院の説明と一日の流れの説明を受けた。

朝の会議、午前外来、午後に病棟回診、委員会に出席して、夕食を外で食べる、ということらしかった。

解ってはいたが、けっこうな過密スケジュールだ。

院長室で白衣を受け取って羽織り、名札を受け取って胸につけた。

白衣は理科の実験のようで、まるで着慣れない。
板についた惣島とはまるで違うが、惣島は目を細めて、
「なかなか似合うじゃないか」
と褒めてくれた。

「さて、では椅子を置いておくから、座ってくれ。これから看護部長や事務長が来て、報告を聞かないといけない」
「はい」

ほどなく、看護師の格好をした５０代の女性がノックと共に入ってきた。
おそらく、看護部長なのだろう。

「失礼します」
「おはよう。家田部長」
「おはようございます」
「紹介する。先日話した、友達の息子さんで一柳誠くん。今日は一日、私について見学をする」

家田と呼ばれた女性は、誠の方を向いて頭を下げた。
誠も慌てて立ち上がり、頭を下げる。

「一柳誠です。よろしくお願いします」

看護部長はわずかに微笑んだが、すぐに惣島の方に向き直り、報告を始めた。

入院患者数、本日の手術の概要、夜間帯の報告、救急車の台数…

…。

誠には理解出来ない数字や、内容が次々に報告されていく。
惣島は軽くうなずきながら、手元の紙に何か書いている。
一通りの報告が終わると、惣島から指示が出た。

「夜間帯に救急車を断った件について、原因をあとで報告してくれ。病床利用率が高すぎる。ワーカーに伝えて調整を。新しい看護職員のオリエンテーションは佐々木くんに頼んで」

矢継ぎ早の指示を、看護部長はメモにまとめ、解らないところを質問して確認する。
一通りの問答がすむと、一礼をして院長室を出ていってしまった。

それと入れ替わりで、今度は事務長が入ってきた。

こうして、各部署や委員会の長が、次々と報告と指示を仰ぎに来る。
ほとんどの問題は即答で指示をだすが、難しい問題は簡単な方向性を示して、もう一度検討してくるように指示する。
明確で、平等で、間違いがないように、誠にも感じた。
やはり惣島は頭がいい。
切れるというか、回転が早い。

「これで全部か。さっ、行こうか」

惣島はそう言って立ち上がり、歩き出す。
向かった先は外来だった。
自分のブースに入り、椅子に座る。
コンピューターに何かを打ちこみ準備を整えると、さっそく看護

師が患者さんを中に招き入れた。

「おはようございます」

「おはようございます、山田さん。痛みはだいぶ和らいだかい？」

「はい、先生。お陰さまで……」

惣島の外来は、誠が想像していた以上に優しく、穏やかなものだった。

院長であるからもっと尊大な態度で患者さんと接するかと思っていたが、どの患者さんにも親身になって耳を傾け、相手にかける言葉も優しい。

どうやら馴染みの患者さんが多いようで、気を使う様子もなく、べたべたと触ってくる人もいる。

そんな時も嫌そうな顔ひとつせず、逆に相手の身体にも必ず手を当てる。

置いたその手で、患者さんが笑顔になったり、落ち着いてくのが見ていて解る。

薬だけではなく、言葉も手もまた治療の一環なんだと、誠は驚きとともにその様子を眺めていた。

そんな惣島を慕う患者さんは多いらしく、外来は昼時間を過ぎる。

途中でサンドウィッチが机に置かれ、惣島は合間につまみながら外来を続けていた。

サンドウィッチは誠のところにも置かれたところを見ると、これが本日のお昼ご飯らしい。

誠もノートに気づいたことを書きこみつつ、迷惑をかけないように素早くサンドウィッチを食べた。

「お大事に」

最後の患者さんを見送ると、時計はずてに午後2時半を過ぎていた。

「さて、では次は回診に行こう」

休む間もなく惣島は立ち上がり、病棟へ向かって歩き始めた。
階段を使って5階まで上がると、ナースステーションに入る。

若い医師から簡単な患者さんのプレゼンテーションを受け、質問に答えながら検査や治療のアドバイスを加える。
医師はそれをメモに書き取り、医師が次々に交代する。

「よし、じゃあ行くか」

回診は惣島とこの病棟の看護師長のふたりで行うようだ。
もっと沢山の医師や看護師を連れて回診をするものだと思っていた誠は、それを意外に思った。

「お具合はいかがですか」

病室をひとつひとつ回り、患者さんに声をかけていく。
やっぱりというか、年老いた方が全体に多い。
５０代で点滴はしているものの元気そうな男性がいるぐらいで、多くは７０から９０代。中には言葉を発することも出来ない、寝たきりの人もいた。
そんな人達にも、惣島は優しく声をかけて、手で触れていく。

院長の回診を待ちわびていた患者さんが、惣島が病室に入るだけ

で嬉しそうに笑顔を浮かべ、２つ３つほどの会話をとても楽しそうに交わす。
そこには、入院している悲壮感はほとんど無く、何の病気で入院しているのか忘れてしまいそうになるほどだった。

その中でひとりだけ、誠と同い年ぐらいの女の子が入院していた。
個室の扉を開けて中に入ると、その女の子は不機嫌そうな顔でベッドに横になっていた。
起き上がる様子もなければ、挨拶に答えることもしない。

見た目にはやや痩せているぐらいで、何の病気かも解らない。
点滴１つしていない。

惣島が、

「痛いかい？」

と一言だけ聞くと、

「痛いに決まってる」

とその女の子は不機嫌そうに、答えた。

「そうだよな。よく耐えている」

惣島が優しく声をかけるが、女の子は不機嫌そうに顔をそらして目をつぶってしまった。
横にいた母親らしい人物が代わりに頭を下げ、惣島も一礼して病室を出てしまった。

同い年ぐらいの、入院をしないといけない、痛みを伴う病気。
何の患者さんが解らないが、誠の印象には強く残った。

総勢５０名近い回診を終わったときには、すでに午後5時を過ぎていた。
それでも休みなく、各種委員会に顔を出し、報告を受けて指示を出している。

どこからその体力と精神力が出ているのか。
どうしてここまで続けて集中し、間違いなく答えを出し続けられるのか。
誠ですら、感心するしか無かった。

そして患者さんとの向かい方。
いつかあんなふうに人と向かい合い、相手に安心と喜びを与えられる人間になれたら、と誠も思わずにいられなかった。

すべての仕事が終わったのは午後6時半。
それでもいつもはここから書類整理があり、家に帰ってからも夜に医学の勉強をしているのだという。
思っていた以上に過酷な仕事だ、と誠は感じた。

夕食会

ふたりはタクシーに乗り、繁華街から一本外れた小道にあるお店をおとずれた。

誠は経験がないが、こういう店を料亭というのだろうか。

古い日本家屋だが、玄関からは何の店かは解らないような目立たない外観。

中に入ると落ち着いた土間で、女将らしき女性が案内をして、部屋まで導いてくれた。

部屋は一面に大きなガラス戸があり、外には落ち着いた日本庭園がライトアップされているのが見えた。

床の間には、落ち着いた花瓶と花が一輪。

墨で描かれた掛け軸もあり、静かな落ちいた雰囲気の個室だった。

ふたりは向かいあわせに座ると、惣島が飲み物を頼む。

「誠くんは未成年だから、お茶でいいかな」

「はい」

「私はビールを」

「かしこまりました」

女将らしき人が一礼して出て行くと、室内はふたりだけになる。

気づくと、惣島がじっと誠を見つめていた。

「……何か？」

「いや、君は本当にお母さんに似ている。懐かしくて、ついつい見

てしまうな。申し訳ない」

惣島はそう言って、恥ずかしそうに笑う。
仕事をしていた時とは別の表情だった。

「君もずっと私の存在を知らされていなかった、と聞いたけど、本当かい？」
「はい。何も」
「初めて聞かされたときはどう思った？」

誠はすぐには答えられず、沈黙が広がる。

「びっくりしました。考えもしていなかったので。僕にとって家族は母だけでした」
「そうか……」

惣島がいくらか寂しそうな顔をしたような気が、誠にはした。

お盆を持った女性が入ってきて、それぞれの飲み物と料理を置いて、また静かに出て行った。

「いただきます」
「うん。好きなだけ食べてくれ」

惣島はビールを飲み、誠は料理をゆっくりと食べ始めた。
緊張のためか、味がよく解らないが。

「君と君のお母さんには、本当に悪いことをしたと思っている。聞かされているか解らないが、私にはその時すでに今の妻がいた」

ああ……やっぱり……。

誠の予想は間違っていなかったが、こうして話を聞いても、意外なほどにショックを受けることはなかった。

まだ恋愛を含め、そうした大人の事情はよく解らないことと、父親がいないことで恨みや辛みを感じたことがなかったからかも知れない。

誠には何か、はるか昔にあった出来事ぐらいにしか感じられなかった。

「妻と離婚することも出来ず、彼女の方から飽きられて離れたものと思っていた。私が馬鹿だった。彼女のお腹には、君がいたんだな」

「……」

「電話で聞かされたときは、ショックだった。私は何も知らずにいた。そして不誠実な行動でふたりには大変な思いをさせてしまった」

惣島はそう言って、深く頭を下げる。

「謝ってすむ問題ではないが、全て私が悪い。申し訳ない」

惣島が頭を下げる姿を、誠は戸惑いながらも、落ち着いて受け取ることができた。

「別に僕も母も、不幸せだったわけではありません。それを責めるつもりもありません」

誠がそう言うと、惣島は頭を上げ、いくらかほっとしたようだった。

「これから償えるのであれば、認知をしてもいいし、金銭的な援助をさせてもらってもいいし、私の家族に紹介してもいい」

「別に……特に望んでいません」

今度は惣島は困ったような表情になる。

病院で見せていた威厳のある、何事にも冷静に対処する惣島では見せなかった表情。

「じゃあ、何をすれば」

「何も望んでいません。今のままでいいです」

「だとしたら、今日はなぜ突然、会うことに？」

惣島の質問は当然かも知れない。

もともとは真穂の案だから、誠もよくは解らないが、真穂の言葉を思い出しながら説明を試みた。

「母がいつかは父のことを話さないといけないと、思っていたようです。最初は成人になってから、と思っていたようですが、進路を決める今の時期に会わせるべきではないか、と考えたようです」

「そうか……なるほど。誠くんは将来、何になりたいのかね？」

「新薬を開発して、多くの人の命を救えたら、と思っています」

惣島は深くうなずいた。

「いい夢だ。聞いたところによると、成績はかなりいいらしいね」

「はい、まあ、それなりに」

「じゃあ、医学部を目指すのもいいかも知れない」

「医学部……ですか？」

誠は意味がよく解らず、頭をかしげる。

「新薬を開発するには、医学の勉強をしないといけない。医学部出

身の研究者は多いし、かつ貴重な存在だ」
「薬学部でなくてもいいのですか」
「医師免許があれば医療行為も研究もできるが、薬剤師の免許ではそれはできない。調剤までだ。出来る範囲や選択肢が広がる、ということだな。何が困っているか、何を必要としているかも解りやすい」

なるほど、とも思う。一方で、あれだけ忙しければ研究も何も無いだろう、とも感じた。

「考えておきます」

誠がそう言うと、惣島は納得したようにうなずいた。

その後、料理が順番に出てくるのを食べながら、あまり語らない誠の代わりに、惣島がいろいろと聞いてきた。
生活のこと、真穂のこと、誠のこと、学校のこと。
特に隠す必要もなく、誠はシンプルに答えていった。

真穂が別れた後もずっと一人であることを確認すると、嬉しそうな、申し訳なさそうな、複雑な表情をしてビールを飲んでいた。
まだ少しは気持ちがあるのだろうか。

「母から、私は会えないからよろしく伝えておいて、と言われています」

誠の言葉に、惣島ははっとしながらも、深くうなずく。

「そうだな……うん、解った。有り難う」

やはり残念そうだ。
でも、惣島には家族があるのだから、その方がいいのだろう、と誠も思った。

「今日の病院見学はどうだった？」

惣島が話題を変えて、誠に振ってきた。

「思っていた以上に大変な仕事だと思いました」
「まあ忙しいことは、忙しいな」
「それに人と関わる職業なんだな、と感じました」
「相手は病気ではなくて、病気を持った人だからね」

惣島は、うんうんとうなずきながら、もうひとつ聞いてきた。

「気になった患者さんとか、質問はないかい？」
「気になった患者さん……」

そう言われて思い出すのは、あの同い年ぐらいの女の子の存在だった。
何故入院しているのか、聞いてみたかった。

「回診の時に個室に入院されていた、同い年ぐらいの女の子」
「うん、年齢が近いから気になったか」
「はい。どんな病気なんですか？」

惣島はしばらく黙り、ビールをゆっくりと飲み干す。
言うべきかどうか、悩んでいるようにも見える。

「……癌だ、とだけ伝えておこう。詳しいことは個人情報でもある。

明日、お母さんに伝えても良いか聞いてみよう」

癌、と聞いて、誠の思考が停止した。
あんなに若いのに、癌？
寝ていはいたが、元気そうにも見える。
治療だって、何もしてないように見えたのに……。

「いや、そこまでしていただなくても。僕が立ち入ることのできる問題ではなさそうですし」

あまりにも大きな問題に、誠は素直にそう答えた。

「いや、重たいだろうが、大切な事だ」
「でも……」
「お母さんの許可が得られなければ、それ以上は言わない。ただもし、許可を貰えたら、知っておきなさい」
「……」
「あの娘が生きた証を、誠くんの中にも残してあげて欲しい」

生きた証。
それは、この先に必ず死が訪れる、という意味なのだろうか。
果たして、自分に受けきることができるのだろうか。

答えが出ないまま、ふたりの食事会は終わった。

「明日、お母さんの許可がもらえたら、電話をするから病院に来て欲しい。主治医か看護師長から病状の説明をさせよう」

そう言って、互いに携帯の電話番号を交換した。

「今日は楽しかった。これからはいつでも連絡をしてくれても構わないから」

「はい、有り難うございました」

惣島は嬉しそうにうなずくと、手を出して握手を求めてきた。

誠も手を出し、握手を交わす。

温かく、力強い手だった。

そうして誠は、手配してもらったタクシーに乗せられ、帰宅したのだった。

報告

自宅に着くと、遅い時間だったが真穂がテレビを見ながら待っていた。

「ただいま」
「お帰り」

真穂はテレビを消して、お茶を用意し始めた。
やはり、様子を聞きたいのだろう。
疲れはしたが、誠はお茶をいただきながら、今日あったことを報告した。
そのひとつひとつに、真穂は真剣な顔でうなずいて聞いていた。

特に最後のところ、誠が父親と今後どうしたいか、が真穂は一番気にしているようだった。

「今まで通り」

と誠が言うと、真穂はびっくりしたように目を見開いた。

「いいの？　それで」
「いいもなにも、今までの生活に何の不満もないから」

真穂のほうが戸惑い始める。

「だって、父親に会いたいと思わないの？」
「別にいまさら」
「お金にも困らないよ、きっと」
「今までだって困った覚えはないよ」
「……」
「十分、幸せだよ。不満はない」

真穂が驚いたように口を開いて、呆然とする。

そして……真穂の目から涙がこぼれた。

「どっ、どうしたの？」

誠はびっくりして、どもってしまった。
何しろ、母親の涙なんて見たこともなかったのだから。

そう言う間にも、真穂の目からはとめどなく涙が溢れてきていた。

「だっ、だって……今まで……うっ……父親がいなくて悪いことを……ひっ……したな、とか……。お金がなくて申し訳なかったな……とか……ぐすっ……思っていたから」
「そんなこと思っていたの？」
「思っていたのよ……それなのに……そんなふうに誠が思ってくれてたなんて……」

真穂ががしがしと誠の頭を撫で回す。
乱暴なほどで、誠は思わず眉をしかめた。

「痛いよ」

そう言うと、真穂はぎゅっと抱きしめてくれた。
久しく感じたことのない抱擁に、誠はびっくりしながら恥ずかしくなってしまった。

「ちょっ、ちょっと」

「あなたはいい子だよ。私にはもったいないぐらい」

「あなたの子以外の何者でもないのですが」

「いいお嫁さんも連れてきたし」

「……まだ嫁ではありません」

「大変だったけど。産んで、育てて、良かった。有り難う」

真穂は誠を抱きしめながら、そうつぶやいた。
誠はあきらめて、そのまましばらく抱かれるままに任せた。
久しぶりだけど、心地のよいものだったから。

ふぅ、と深い溜息をついた後、涙の止まった真穂が離れ、満足そうにいつもの笑顔を浮かべた。

「報告、ご苦労様。だいぶ遅いけど、きっとまどかちゃんも待っているから電話してあげなさい」

「こんな遅くに？」

「待っているわよ。多分」

誠は半信半疑ながらも、部屋を移動して、まどかに電話かけてみ

ることにした。
　3コールで出なかったら切るつもりでいたが、まどかはわずか1コールで出てくれた。

「もしもし」
「まどかさん。夜遅くにごめんなさい」
「ううん。電話してくれて有り難う」
「もしかして待っていてくれた？」
「うん。もう今日はないかも、ってあきらめていたけれど」

　本当に待っていてくれたことに、誠の胸にじわっと温かいような、苦しいような何かが広がった。

「待たせてごめんなさい。食事が長引いて」
「だって初めての対面だもんね。お父様だってもっと会っていたかったと思う」
「そうかな」
「そうですよ、きっと」

　まどかに言われると、何となくそうなのかも、と誠も思えてきた。単純かも知れないけれど。

　誠は真穂に話したように、今日一日あったことを報告した。
　まどかもまた、誠の言葉をひとつひとつ聞いてくれた。

「良かったですね。やっぱりお父様は、師匠のこと好きなんですよ」
「そうかな」
「私はそう感じました」
「そっか」
「そうですよ」

まどかと話をすると、なぜかほっとする。
少しずつ緊張がほぐれていくのを、誠は感じていた。

「でも、その同い年の女の子のことは、ちょっとショックですね」
「癌の女の子？」
「はい」
「うん、確かに」
「私達の年代で、癌がいるなんて初めて知りました」
「僕もです」
「命があるなんて、当たり前だと思っていました」

誠もうなずいた。
生きていることなんて、当然のことで意識すらしていなかった。
死を考えたことはあったが、間近に見せつけられると、その圧倒的な迫力の前に、なんとも浅はかな考えであったことを思い知らされる。
生きているだけでも幸せなことなんだと、嫌でも理解できる。
あの女の子の前で、死にたいとか、死を考えた、とか言えるわけがない。

「また会うのですか？　その女の子に」
「解りません。その子のお母さんの返事次第です」
「そうですか……また教えてくださいね」
「はい。解りました」
「今日は電話してくれて、有り難うございました」
「こちらこそ。聞いてくれて有り難う」
「お疲れ様です。おやすみなさい」
「おやすみなさい」

そうして誠は電話を切った。

ふと静かになった部屋の中、見上げた窓の外には綺麗な月が浮かんでいた。

また明日がある。

誠はすぐに休むため、着替えて布団に潜り込むことにした。

肉腫

誠はいま、ナースステーションにいた。

惣島から、母親の許可がおりたと連絡があったのだ。

誠は悩みつつも、せっかくの好意を無駄にできず、再び病院を訪れることになった。

院長室で白衣と名札を受け取り、ナースステーションに来たところだった。

主治医という30代の先生がやってきて挨拶をすると、電子カルテのところに連れていかれた。

モニターの前にふたりで座ると、主治医はその女の子の説明をしてくれた。

名前は、藤村由香里。17歳。

病名はユーイング肉腫。骨にできる癌だ。

彼女は以前足の痛み気づいたが、バスケットの練習のし過ぎだと思って放置していた。

しかし、痛みがだんだんと耐え切れなくなり、近く整形外科に行ったが、しばらく安静にするように言われて鎮痛剤と湿布が処方される。

それでも痛みが引かなかったため、当院で精査を受けてユーイング肉腫が疑われ、大学病院へ紹介される。

細胞診で診断がつき、摘出手術が考えられたがすでに他の骨への

転移も認められていたため、化学療法と放射線療法が行われた。
しかしこの時、嘔気と倦怠が強く出たため、十分な治療効果が得られなかったことがわかると、患者が今後の治療を拒否し始めた。
家族が必死に本人を説得するが、受け入れてもらえず。
転移をしていて、治療をしてもむしろ生存期間を短くするだけかも知れない、と医師に説明されて、家族も治療中断を受け入れる。
治療することがないため退院して帰宅するが、痛みのために再入院。
鎮痛剤として麻薬が使用されるが、これも吐き気が強く出たため、内服を拒否。
何も治療がないからとやはり退院になるが、家族としても痛がる本人を自宅で見ることができず、大学からの紹介で自宅から近い当院へ入院となる。

というのが、彼女の今までの経緯だった。

つまり、もう治療の方法がなく、状態としても末期。
骨に癌があってとても痛いのに、痛み止めも拒否している。
何もすることがない状態で、死を待つために入院し、ベッドで寝ている、ということだった。

あまりのことに誠は言葉を失った。

「ユーイング肉腫は絶対数は少ないけど、若い世代に多い癌でね。しかも、生存率はとても低い。難しい癌なんだ。これだけ拒否する子も珍しいけれど、治療してもなかなか助からない。残念だけど」

主治医はそう言葉を続けた。

「ほかに何か質問あるかな?」

「いえ……有り難うございました」
「どういたしまして。けっこう病棟にはいるから、いつでも声をかけてくれ。頑張ってね」
医師は疲れた様子ながら、笑顔で優しくそう言ってくれると、白衣をなびかせて行ってしまった。
どうすればいいのか。
経緯は解った。
病気のことも少し解った。
……やはり、お母さんにお礼を言いに行ったほうがいいだろう。
そうは思うが、足が重い。
行って何と言えばいいのか、解らない。
誠は部屋の前で、何度か行ったり来たりと歩きまわる。
時折通る看護師が、不思議そうにその様子を眺めたりしたが、誠はなかなか決心がつかなかった。
帰りたい気持ちは強くあったが、このまま帰るわけにもいかないことは解っている。
誠はとうとう意を決して、病室の扉を開けた。
中は以前と変わらない光景。
女の子がベッドに横たわり、傍らに母親が座っていた。
女の子……由香里は、誠のことを睨むように見つめている。
母親は、軽く頭を下げてくれた。

誠はその視線の強さに心が折れそうになったが、何とか勇気を出して母親のもとへ行った。
母親は顔を上げ、誠のことを見上げ、視線を合わせてくれた。
「あの、その、許可をいただき……有り難うございました……」
何とかそれだけ伝えると、お母さんはまた頭を下げてくれた。
しかし、言葉一つなく、またじっと見つめ返すだけだった。
誠はどうにも落ち着かず、
「失礼しました」
と言って、出て行こうとした。
「待って！」
思わぬ力強い声に、誠の足が止まる。
「行かないで……」
振り向くと、その声はどうやら由香里が出したものらしかった。
「はい……」
誠はどうしていいか解らなかったが、何はともあれ由香里の枕元まで歩いていき、立ち止まった。
よく見ると由香里は息の荒い呼吸をしていて、睨みつけるような視線は、苦しんでいるからだと解った。

「うっ……くっ……」

苦悶の表情を浮かべ、ときおりうめき声を上げて身体をよじる。もはや視線すら合わせられない状況だった。

思わず医師か看護師を呼ばなくてはいけないのじゃないかと、誠はうろたえたが、ふと傍らにいた母親を見ると、そっと椅子を勧めてくれていた。

こんなに苦しんでいるのに、何故……と思ったが、お母さんが椅子を無言で差し出し続けるので、誠は解らないまま、その椅子に座った。

由香里はしばらくそうしてうめき声を上げていたかと思ったら、しだいに静かになり、やがて寝息に変わった。

寝てしまった。

髪の毛が汗で顔に張り付いていたが、その表情は先ほどより落ち着いていて、あきらかに眠っている表情だった。

何か伝えたくて呼び止めたのではないのか……。

そう誠は思ったが、しばらくしても目が覚める様子がない。母親も黙って娘を見ているだけで、何も話しかけてくれない。

「あの……また来ます」

誠がそう言って立ち上がると、母親はうなずいてくれた。

それだけを確認して誠は病室を出た。

ただ座ること

誠はそのまま院長室へ行くと、部屋の中には惣島が座っていた。

誠の姿を認めると、嬉しそうに声をかけてきた。

「よく来たね。どうだった」

誠は白衣を脱ぎながら、どう話せばいいか解らず、しばらく沈黙してしまった。

「何かあったのか？」

「いえ……いや……あの、呼び止められました」

「誰に？　もしかして藤村さんに？」

「はい」

惣島は不思議そうに顎に手を当てる。

「それで彼女はなにか言ったのか？」

「いえ、何も」

「何も？」

「はい。そのまま痛がり始めて、寝てしまいました」

「そうか……」

「どうしていいか解らず、また来ます、と言って出てきてしまいました」

誠は本当にどうすればいいのか解らなかった。

由香里はなぜ呼び止めたのか、自分はこれからどうしたらよいの

か。

「そうだな。また来るといい」
「……そうなんですか？」
「呼び止められたんだろ？」
「はい」
「ならば、また顔を出してあげてくれ」
「でも何をしたらいいのか……」

医学的知識もなく、コミュニケーション能力も低い誠には、本当にどうしたら良いか解らない。

「母親は何していた？」
「母親ですか」
「うん」
「何も……横に座っていました」
「それでいいんじゃないか」
「座っているだけでいいんですか？」
「あのお母さん、以前は主治医にも看護師にも私にも、毎日質問攻めだった。何かできないか、娘にできることはないか。でも今は黙って横に座っている。それが答えじゃないか」

惣島の言葉の意味が、誠には解らなかった。

「また明日……来ます」
「うん、いつでも来てくれ。勝手に着替えていってもらって構わない。師長にも話をしておこう」
「有り難うございます」

誠は一礼して院長室を出た。

また明日、あの扉の向こうへ行かなくてはならないかと思うと、誠の心は沈んだ。

夜、誠はまどかに電話をして、今日あったことを報告した。
まどかはうなずいて聞いてくれたが、重い話のためか、いつもの元気がない。
一通り話を聞き終わると、まどかのため息が聞こえた。

「大変ですね」
「はい」
「また明日、行くのですか？」
「そのつもりです」
「頑張ってくださいね」
「はい」

気は重いが、そうするしかなかった。

「でも、気をつけて下さいね」
「……？　何をですか？」
「その女の子の『行かないで』って言った意味、きっと師匠にいて欲しいんです」
「そうかな？」
「そうですよ。師匠は鈍感です」

誠はくすっと笑った。
鈍感なのはお互い様だ。

「笑いましたね。師匠は思っている以上にもてるんです」
「でも、一度しか会ったことないし」

「時間ではないのです」
「……」
「私も……一目惚れです……」

電話の向こうとこちらで、お互いに顔を赤くした。
何ていうか、誠の胸に嬉しい気持ちが広がっていく。

「有り難うございます」
「気をつけてくださいよ」
「解りました。肝に命じます」
「よろしい」

そう言って、ふたりで笑ってしまう。
このひと時で、疲れが抜けていくようだった。

「じゃあ、おやすみなさい」
「はい、おやすみなさい」

電話を切ると静けさが広がるが、握った携帯がまだほんのりとまどかとのつながりを残しているように、温かく感じた。

？　本当にまどかがいてくれて助かった、と誠は思った。
ひとりで抱えるのとは、大きな違いだ。

誠は疲れた身体を早めに休ませるため、寝床へと向かうことにした。

息を止める

誠は翌日になり、由香里の病室を訪れた。
昨日ほどの戸惑いはなく、扉を開けることはできたが、挨拶をしても母親が頭を下げてくれるだけで、由香里は顔を向けてもくれない。

結局その日は、一度だけ視線があっただけで、やっぱり由香里は苦しんだ後に眠ってしまった。

それは、次の日も、その次の日も同じだった。

あれから由香里とは一言も言葉を交わしていないが、追い出されることもない。
母親も説明してくれる様子もない。
戸惑いつつも、病院に行って側に座ることが誠の日課になった。

ある日、誠は何となく気づいた。
由香里は本当にただ、側にいて欲しいだけなのではないか、ということに。

それまでは誠も何かできないか、少ない医療知識やコミュニケーションを総動員して考えていた。
何か楽しい話をしようかとか、痛いところに手を当てようかとか、解らないなりに考えていた。
しかし、どれも由香里は望んでいないことが、何となく解る。

医学も無力で、人としても何も出来ない。

でも、側にいることが、わずかな救いになっているのであれば。

誠はそう思い、出来うる限り、毎日通い続けることにした。

由香里は起きている時間がだんだんと短くなってきていた。
ほとんど食べていない身体が、だんだんと痩せてきているのが解る。
誠にも嫌でも解る。
その日が近い。

それは、強い日差しが窓から入り込み、病室全体を明るく浮かび上がらせていた日だった。
静かな病室では、ただ由香里の荒い息遣いだけが響いていた。

由香里は昨日から意識がなかった。

そして、いつもは夜と休みにしか来ていない、父親もいた。
優しそうな顔立ちが、今日は疲れているのが解る。
きっと昨日は眠れなかったのだろう。

由香里の息が、ゆっくりと長くなっていく。

苦しげな表情が、しだいに緩んでいくのが解った。

看護師と医師が、静かに病室に入ってきた。

長くなっていた息が、途切れ途切れになる。

両親が、由香里の手をぎゅっと握りしめた。

みんなが見守る中、由香里は静かに息を止めた。

由香里は白い服に着替え、病院の一階にある霊安室に横たわっていたが、いま葬儀会社の人達によってを病院を出ようとしていた。

両親が、医師や看護師に「有り難うございました」とお礼を言って、頭を下げている。
母親は、誠にも一礼してくれた。
誠も深く頭を下げた。

最後まで、かける言葉は見つからなかった。

何も言えぬまま、何も出来ぬまま、誠の視界から由香里を載せた車はゆっくりと遠ざかって行った。

誠は院長室に戻り、白衣を脱ぎ、たたんでいた。
もうこの病院に来ることも、白衣を着ることもないだろう。
最後に名札を白衣の上に乗せ、一礼した。

そこに、惣島が部屋に入ってきた。
誠に近寄ると肩を叩き、「ご苦労様」と声をかけてくる。

「有り難うございました」
「大変だったな。よく最後まで通ってくれた。有り難う」
「いや……何も出来ませんでした」

誠の言葉に、惣島は深くうなずく。

「私たちは、たいしたことは出来ないものさ。それでも救いはあるんだ」

病院の院長とは思えぬ言葉に、誠は黙って惣島を見た。

「いつか、あの娘を救ってあげてくれ」

あの娘を救う。

惣島のつぶやきは、誠の胸に響いた。

いつかあの病気を治すことができる日が来るのだろうか。
そのための研究に、自分が役に立つ日が来るのだろうか。

思っていた以上に、一歩が重い。
それでも歩き続けないといけない。

あの娘から生命の証を受けてしまったのだから。

「……医学部、目指してしみます」

「……そうか。頑張れ」
「はい」
「力になれることがあったら、何でも相談してくれ」
「有り難うございます」

誠は扉のそばまで来ると、もう一度、惣島に一礼した。

惣島も立ち上がって、深く頭を下げてくれた。

誠はそのまま扉を開けて、ひとり院長室を出た。

その夜、誠はまどかに電話をした。
いつものように、まどかはすぐに電話に出てくれた。
恒例の報告会で、まどかも待っていてくれていたようだ。

「もしもし」
「誠です」
「うん。今日はどうでした？」
「今日は……」

由香里が亡くなったこと言わないといけない。
そう思って口を開こうとしたら、誠の目から涙がこぼれた。
亡くなったときも、見送った時も出なかった涙が、今になってこぼれてくる。
涙を止めて、伝えなくちゃと思うが、嗚咽しか出なかった。

「……亡くなられたんですね」
「はい……」
「つらいですね」
「僕は……何も……出来なかった」
「そんなことないです」
「本当に何も」

誠は悔しくてしょうがなかった。
目の前で人が亡くなるのを、見ているしか無かったことが。
助けたかった。
助ける力が欲しかった。
いつかではなく、いま助けることが出来れば。

まどかはそんな誠を、優しく慰めてくれた。

「私、想像してみたんです。もし私が年をとって身体を悪くして、ベッドに横になっていたとして」
「……」
「もうすぐ天国からのお迎えが来るかな。そんな時に、師匠がベッドの側に座って見ていてくれたら、どんな気持ちになるのか」
「……僕は寂しいな」

まどかがくすっと笑った。

「残された方はそうですね。でも、私は幸せな気持ちになりました。死ぬ間際だというのに、満足な気持ちになりました」
「本当？」
「はい。とても安心できたのです。側にいてもらうだけで」
「……」
「由香里さんも両親がいらして、師匠もいて、少しは不安が和らいだんじゃないかな、と思うのです」
「そうだと、いいのだけれど」
「そうですよ、きっと。だから、何も出来なかったわけじゃないと思います」
「はい、有り難うございます」

涙もおさまり、誠は少しだけすっきりすることができた。
そして落ち着いてきたことで、伝えなくてはいけないもう一つのことを思い出した。

「まどかさん。僕も医学部を目指します」
「はい。そうなるかな、と思っていました」
「もっと勉強をして、助けられる人になりたい」
「一緒に頑張りましょうね」
「はい。一緒に行きましょう」
「はい」

まどかが嬉しそうに返事をしてくれた。

まだ言葉にしただけの思い。
かなえるには、まだまだたくさん乗り越えなくてはいけない壁がある。
ただそれでも、歩いて行く道が見えた。
あとは歩き続けるだけだ。

しかも、ひとりではない。

誠の心は悲しみから、ゆっくりと希望が湧いてくるのを感じていた。

旅行

「旅行ですか？」
「はい、海なんですが」

誠とまどかは夏休みの間、一緒に図書館通いを続けていたが、ある日まどかが旅行の提案をしてきた。
図書館近くの木陰のベンチで、ふたり一緒にお昼の弁当を食べながらの話である。

「友達と一緒に一泊で行く予定なんですが、良かったら師匠も誘おうって話になって」
「友達というと？」

誠の当然の質問に、まどかが困ったような顔をした。

「それが……誰と行くかは、師匠には内緒にして欲しいって言われていて……」
「何故ですか？」
「当日のお楽しみ、だそうです」

何故、内緒にしなくてはいけないのか、誠には検討もつかなかった。
少なくとも、まどかの友達であれば、誠も知っている人達であるはずだが。

「一泊くらいなら、大丈夫だと思いますが」
誠の返事に、まどかはぱっと嬉しそうに笑った。
「良かった！　一緒に行きたかったから、嬉しいです」
「海ですか……、泳ぎに行くのは初めてかも知れません」
「師匠は初めてだらけですね」
「高校生になってからは、驚きの毎日です」
誠の言葉に、ふたりで笑った。
まさか高校生になっただけでこんなに変化があるなんて、誠は想像していなかった。
もちろん、喜ばしい変化ではあるが。
「師匠は泳げますか？」
「はい。得意というほどではないですが、普通に。まどかさんは？」
「私もです」
「まどかさんは得意そうだ」
「少し、得意かな？」
「やっぱり」
「えへへ」
まどかのはにかんだ笑いが、眩しく感じる。
由香里のことがあってから、少し張り詰めすぎていた気もする。
真穂の言葉ではないが、せっかくの高校生活なのだから楽しい思い出も作らなくては、と誠も思う。
誠もしだいに旅行のことが楽しみになってきていた。

真穂はまどかが一緒というだけで、大賛成してくれた。
他にもメンバーが居る、という話をしたら、何だ、という顔をする。

……母よ、あなたは何を望んでいるのですか？

「おみやげはいいから、まどかちゃんの水着姿の写真を撮ってきてね！」

という理由の解らないお願いをされつつ、誠は集合場所の駅へと向かった。

予定時間の３０分前についたが、さすがにまだ誰もいない。
改札口前の広い空間で誠はベンチに座り、待っている間は勉強でもしようとノートを開く。

「お待たせしました！」

ノートを開いてすぐに、構内に明るい声が響いた。
聞きなれた心地よい声……まどかだ。

今日は麦わら帽子に、爽やかな色合いのワンピース。
夏らしい出で立ちに、誠も思わず見惚れてしまった。

「やっぱり、いつも早いですね」
「楽しみにしていたので」
「私もです」

まどかも大きめのバッグを横において、誠の隣りに座った。
「まどかさん、せめて何名来るのかだけでも教えてもらえますか？」
今日のメンバーを知らされていない誠が、まどかに尋ねる。
まどかは指折り数えて、答えた。
「私達を入れて８名です」
「けっこうな人数ですね」
「全員集まれてよかったです」
まどかの言葉に、誠がひっかかる。
「全員？」
「はい」
「……全員って？」
「あっ、もう一人来ましたよ！」
まどかが立ち上がって、手を振る。
手を振り返した相手は、凛だった。
まどかの存在を見つけると、凛は小走りに近寄ってきた。
「久しぶりですね！　会えるの、楽しみにしていました！」
「私も！」
ふたりで手を取り合って、きゃっきゃっと騒ぐ。
誠は「えーっと……」と思考を巡らせた。
凛が来るということは、高校１年生のメンバーということか。

そう考えている間に、さらに1名やってきた。

「みなさん、早いですね」

「あっ、薫子さん！」

長い髪をきれいに束ね、日傘を差した、白い肌の薫子が現れた。

誠の頭から血の気が引いた。

このメンバーは、もしかして……。

「あの、まどかさん。もしかして、全員というのは……」

「……ごめんなさい。去年の文化祭の女子接客係メンバーです」

裏切られて欲しかった誠の予想は、残念ながら当たっていた。

誠以外は全員女子。

誠は本気で意識が遠のき、倒れそうになった。

「あの、まどかさん、ごめんなさい。僕、帰ります」

「えっ、師匠……」

ゆっくりと立ち上がった誠だったが、タイミング悪く、更にそこへふたりの女子が現れた。

「まーちゃん！」

「やっほー！　元気？」

麻友と桜だ。

ふたりに両肩をバンバンと叩かれ、誠は悟った。
もう、逃げられない、と。

「ごめんなさい、ちょっと遅れたかしら」

美緒、それに少し遅れて曜子もやって来た。
やはり、あの時の7名だ。
確かにあれ以来、仲の良い付き合いが続いていると聞いていたが。

女の子が7名も集まると、おしゃべりですぐに盛り上がる。
誠はその喧騒にまぎれて、そっと気配を消して帰ろうとした。

「まーちゃん?」

逃げる誠の肩をつかんだのは、やっぱり桜だった。

「逃げたら女装させるわよ」
「……どんな脅し文句ですか」
「私たちはその方が楽しいけれど?」
「……というか、いいんですか? こんな中に男一人」

誠が尋ねると、いつの間にかこちらを見ていたみんなが一様にうなずく。

「凛さんや薫子さんも、いいんですか?」

麻友や桜や曜子は解る。美緒もいいのだろう。
でもこのふたりは、男性に対してむしろ抵抗が強いのでは?

「まーちゃんは大丈夫です。何故か」

「そうですね。私もです」

……何故大丈夫なのか聞いてみたい気もするが、答えを聞くと落ち込みそうなので、誠はそれ以上の質問はしなかった。

「はいはい、疑問はいいから。さあ行くわよ」

「海が私達を呼んでいる！」

抵抗する気力も失った誠は、桜や麻友に引っ張られ、拉致されるように電車に乗り込んだ。

行き先は同じ県内になるが、電車で2時間近くかかる。
2度ほどの乗り継ぎをしながら、7名は話に花を咲かせながら移動時間を楽しんでいた。
まだショックから立ち直っていなかった誠に、隣に座ってきた麻友が声をかけてきた。

「久しぶりね。まーちゃん」
「まーちゃん、言わないで下さい……」
「あれ、私が『誠くん』って呼んでいいのかな?」

麻友の言葉に、一年前のやりとりを思い出して、誠はため息をついた。

「まーちゃんでお願いします」
「でしょ?　これでも気を使っているのよ」

1年経っても、麻友に言葉で勝てる気がしない。
コミュニケーションスキルのレベルが違いすぎる。

「今日は久しぶりに会えたっていうのに、帰ろうとするし」
「普通、帰ろうとしませんか?」
「これだけ美女が揃った中に呼んでもらえて、帰る男がいるの?」
「……僕は少数派ですか?」
「私はそう思うな。まあだからこそ、みんなで呼ぶことにしたんだけど」

麻友の言葉に、ふと誠はある疑問が浮かぶ。

「そういえば、誰から言い出したのですか？　僕を呼ぼうって」

「誰だと思う？」

「麻友さんか、桜さんかと」

「と思うよね。それがね、美緒なの」

意外な名前に、誠は驚いた。

「何故、美緒さんが？」

「さあ？　聞いてみたら？　とにかく提案されて、私や桜がすっかり乗り気になって、まどかにお願いしたのだけれど」

「そうなんですか」

美緒とも確かに、親しくさせてもらっている。

美緒は本当に目鼻立ちの整った可愛い女の子で、ゆっくりとして、どことなくとぼけた感じがするが、実は意外によく気がつく。

ひとりで寂しがっていそうな人に声をかけたり、恥ずかしがっている人をそっと手伝ってあげたり。

誠もいろいろと助けてもらったことがあるし、逆に勉強を教えたりしたこともある。

とても男子からもてているが、誰かと付き合っているという噂は聞いたことがない。

「まだまだ解らないことが多いなあ」

「当たり前でしょ。だからこそ、面白いのよ」

全くその通りだ。

誠は深くうなずいた。

「海ぃー！！」

駅からホテルの送迎用バスに乗り、一行はようやく目的地にたどり着いた。
すぐ目の前に広がる砂浜と青い海を見ると、ついついみんなで声を上げてしまう。
空を見上げると天気も上々で、雲もほとんどない快晴。
照りつける日差しが痛いほどだった。

「何はともあれ、ホテルで荷物を預けましょう」

薫子の冷静な一言に、みんなでうなずきながら移動を開始する。
行動の中心は桜になりやすいが、冷静に導くのは薫子という構図らしい。

ホテルは豪華なものではなかったが綺麗に清掃されていて、スタッフ達の対応がとても感じが良い。
お風呂も広いようで、なかなか良さそうなホテルだった。
フロントのある一階は広い空間になっていて、壁一面の大きなガラスの向こうに大海原が広がっていた。
耳をすませば、波の音がかすかに聞こえる。

フロントでチェックインをするが、まだ部屋に入るには時間が早い。
荷物だけ預けて、着替える場所を聞き、みんなで海に向かうことにした。

「私は服の下に水着を着ているから、別にそのまま海に行けるけど」

桜が言うと、口々に「私も」という声が上がる。

どうも、着替えていなかったのは、誠だけのようだ。

「まーちゃん、私たちは気にしないから、砂浜で着替えたら？」

「……更衣室に行かせていただきます」

桜の提案を、誠は丁重に断らせてもらう。

「バスタオルを巻いて着替えればいいじゃん」

「桜さん。本当にそのバスタオルを取ったりしませんか？」

「まあ、それは不幸な事故ということで」

「……やっぱり更衣室に行きます」

誠はひとり、更衣室で着替えることにした。

女性陣は先に砂浜へ行き、場所を確保しておくことになった。

着替えはすぐにすみ、誠は荷物をまとめて砂浜へ向かう。

あの集団はいろいろな意味でよく目立つ。

みんながどこにいるか、誠にはすぐに解った。

どこからか借りてきたビーチパラソルを立てて、その下にシートをひいたり、荷物をまとめたりしているようだ。

「お待たせしました！」

誠が声をかけながら、小走りに近寄っていく。

その視線の先で、あることが自然に始まった。

麻友が自分のTシャツをめくりあげて脱ぎ出し、その下に隠されていた白い肌と、黒い水着におおわられた胸があらわになった。

「！！」

水着だとは解っていても、目の前で服を脱ぎ始めて下着姿になってしまったように、誠には見えてしまう。

いけないと思いつつも、麻友の腰のくびれと胸のふくらみに目がいってしまった。

その横で、まどかも服の後ろのジッパーをおろしていた。

ゆっくりと服が脱ぎ落とされ、今までに服越しでしか見たことのなかった身体があらわになっていく。

服がゆっくりと落ちるにつれて、きれいな肌の線にそって、ふくよかな胸のふくらみが見えてきた。

水着だけでは覆いきれない、柔らかそうな胸の大きなふくらみ。

胸に光る汗まで見えてしまった。

思考が停止してしまった誠の視線の先で、次々に着替えが始まると、誠は意識を失い、その場に倒れてしまった。

もう一人の天使

誠の意識は、しばらくしてからゆっくりと覚めていった。
目を開けて周りを見渡して、誠はすぐに現状を理解した。

パラソルの木陰にタオルがしかれ、そこで横になっていたらしい。
きっと、みんなで運んでくれたのだろう。

「あっ、目が覚めた？」

ゆっくりとした口調の声が、すぐ側で聞こえた。
振り向いてみると、美緒がすぐに近くに座って、誠のことを見つめている。
どうやら、ひとり残って見ていてくれていたようだ。

「ごっ、ごめんなさい。迷惑をおかけして」
「ううん。私、あまり泳ぎは得意じゃないし、ゆっくりしたかっただけだから」

美緒らしい、人に気を使わせない言い訳を聞きながら、誠はいくらかほっとすることができた。
誠も身体を起こして、座ることにした。
海のほうを見ると、桜やまどか達が楽しそうに泳いでいるのが見えた。

「誠くんも行く？」
「いえ……念のため、もう少し休んでからにします」
「そうね。その方がいいかも」

そう言って、くすくすと笑い出した。
誠も今更になって、倒れた原因の光景を思い出して、顔を赤くした。

「そんなに衝撃的な光景だった？」
「いや、その……」

美緒の問いに答えられず、誠は慌てた。
確かに、人生で最大級の衝撃的光景であったことは確かだが、そんなことは言えるはずもない。
美緒もようやく笑いをおさめて、にこやかに微笑んだ。
天使のような柔らかい笑顔に、思わず誠は視線を海に戻した。

「……」

しばらく沈黙が広がったが、緊張している誠とは違い、美緒は落ち着いていて、どことなく楽しそうにも見える。

何か話題を、と焦った誠は、麻友の言葉を思い出した。
美緒はなぜ、誠を呼んでみては、と提案したのだろうか。

「あの、聞いていいですか？」
「なに？」

美緒が可愛らしく、小首をかしげる。
その仕草がとても似合っている。
性格の良さと女の子らしい可愛い顔立ちで、７人の中でも一番もてているのは美緒だった。
誠もときおり告白されている姿を目撃したことがある。

誠は胸の鼓動が早くなるのを感じながらも、言葉を続けた。
「その、僕を呼ぼうって言い出したのが、美緒さんと聞いて……」
「あれ……？」
美緒が意外そうな顔をした。
「もう、知ってるの？」
？「あの、麻友さんに聞いて」
「麻友ったら、おしゃべりなんだから」
美緒がちょっとふくれたような顔つきでつぶやく。
そして、また沈黙が広がった。
「……」
振った話題が悪かっただろうか、と誠が落ち着かずにいたところ、美緒が海を見つめたまま、いつものゆっくりとした口調で話し始めた。
「私、男の人があまり得意ではなくて」
「そっ、そうなんですか？」
意外な一言だった。
誰からも好かれ、別け隔てなく人に気を使える美緒に、そんな一面があるとは思っていなかった。
「告白されるのは有り難いことなんだけど、相手の思いが強くて、何となく男性に対して苦手意識が出来てしまって……」

そこまで聞いて、誠もようやく少し理解できた。
つまり、もて過ぎの副作用というか、しつこく言い寄られる間に苦手になったということのようだ。
ある意味で、美緒らしい悩みだ。

「誠くんは、ほら、まどかちゃん一筋でしょ？」

するっと、そう言われて、誠はまた一気に顔が赤くなるのを感じた。

？「いや、その……はい……」

「それもあって、話をしたり、勉強を教えてもらったりして誠くんと仲良くなってても、緊張しないというか」
「あっ、なるほど」

好きにならないことが美緒と仲良くする秘訣だと、誰が気付くだろうか。
それで美緒も親しく声をかけてくれていたのだと、誠も納得できた。

「それに」

美緒がまたくすくすと笑い出した。

「まーちゃんだし」

美緒はきっと、女装の時の誠を思い出しているに違いない。
つまり緊張しないのは、男というよりも、女の子として見ている

から、という意味か。

誠は文化祭の時の忘れたい記憶を思い出して、目に見えて落ち込んでしまった。

美緒がそんな誠の様子を見て、いつもの気遣いの気持ちが出たのか、こんなことを言い出した。

「それでね、気づいたら誠くんのこと、ちょっと好きになっていたの」

……なんですと？

今の話から、どう好きにつながるのか解らない誠が、呆然と美緒を見つめてしまった。

見つめられた方の美緒は、ちょっと恥ずかしげにはにかむ。

「あまり気にしないでね。まどかちゃんに一途な誠くんを、という意味だから」

つまり、美緒は誠のことを少し好きだけど、誠は美緒のことを好きにならないで欲しい、という意味か。

誠はすこしだけ落ち着いて、美緒の話の続きを聞いた。

「今まで、こんなに安心して頼れる男の人がいなくて、気になったの。だから、こんな機会にふたりで話をしてみたいな、と思ったん

だけど……いきなりばれたか」

美緒は恥ずかしそうにはにかむ。

ほとんどの男性が、一目見ただけで恋におちてしまいそうな表情。

まどかへの気持ちは変わらぬ誠でさえ、胸がドキドキしてしまった。

「まあ、気にしないで、これからもいろいろと話をしてね」

「はっ、はい」

「あっ、気にしてるな。まどかちゃんに言うぞ」

「そっ、それだけは……」

誠が本気で慌てたので、美緒は声を出して笑った。

「誠くん、尻に敷かれてる？」

「そんなことは……ないと……思うのですが……」

「自信なさそう」

「はい。逆らえないので……」

誠の言葉に、美緒はまた笑った。

それにしても、まどかが言っていた「接客係の中でもけっこう人気だったんですよ」という言葉は、嘘では無かったらしい。

まどかにそう言われたことがあることを伝えると、美緒もうなずいた。

「麻友は、誠くんのこと好きなんだよね？　告白したことがあるって聞いたことがあるし」

……噂がどこまで広がっているのか、誠は心配になってきた。

「桜ちゃんも、誠くんのことお気に入りみたいだし」
「遊べるオモチャぐらいに思われているような気が……」
「ああ、そうかもね」

美緒は笑いながら、誠の言葉を肯定した。

「曜子ちゃんは、好きということではないにしても、男の子の中で一番仲良くしているのは誠くんじゃない？　普通、親友に彼氏ができると離れたりするのに、しょっちゅう3人でいるもんね」

やっぱり、美緒はよく人のことを見ている。
誠も深くうなずいた。

「凛と薫子は、呼ぶのが嫌じゃない、というだけでも凄いことだし」
「そうかも知れません」

ふたりとも、いつも女の子同士で仲良くしていている。
話すことはあまり無いが、それでも勉強を教えた時を含めて、男子の中では彼女たちと話をする方かも知れない。

これ以上好きだと言う人が現れたら、誠としてはどうしていいか解らなくなるところだった。
美緒の告白は意外だったが、あとは想像をこえない範囲であったことで、誠はいくらかほっとした。

美緒はそんな誠の表情の変化を見ていたのか、こう注意することを忘れなかった。

「誠くんもまどかちゃんも、互いに両思いでラブラブだから誰も声

をかけないだけで、ふたりとも凄くもてるんだから、注意してね」

誰よりももてている美緒に言われるのは、何とも言えない説得力と凄みがある。

「注意と言っても……」

「誠くんが言い寄られても、まどかちゃんを不安にさせるような言動をしないこと。まどかちゃんが言い寄られても、信じてあげること」

美緒の言葉だけに、正座をして聞きたい、重みのある言葉だった。

「有り難うございます。忘れないよう、気をつけます」

誠の言葉に、美緒が振り無向いて笑ってくれた。

「それでこそ、私の好きになった誠くんだ」

可愛らしい笑顔と「好き」の言葉に、誠の頭が殴られたような衝撃を感じた。

まどかの存在がなかったら、真面目に危なかった。

人を好きにさせるフェロモンでも出ているのではないか、と誠は真面目に疑いそうになる。

きれいな人はきれいな人なりに、苦労をしているのだな、ということを漠然と誠は理解したのだった。

引いては寄せる波の音が耳に心地良く、海からの風が時折ふたり

の身体の横を通りすぎていった。

見ましたか？

そんな話をしていたら、まどかが気付いたようで、手を振りながら海から出てきた。
砂浜を勢い良く、駆け寄ってくる。

「師匠ぉー！」

まどかの嬉しそうな笑顔と声で、つられて笑顔になった誠が手を振り返した。

まどかは空のような青さの、ビキニタイプの水着を着ていた。
花のような小さな模様が散りばめられていて、とても清潔感があり可愛らしい。
長い手足に、小さな顔。
長くない髪が、風に揺れていた。

綺麗だな……。

誠は思わず見惚れていた。
が、近寄ってくるにつれて、別のことに気付いてしまった。

勢い良く駆けてくるため、大きな胸が上下に揺れている。
その質感と柔らかさを示すように、躍動感を持って動くまどかの胸の様子を見て、誠は一気に顔を赤くした。
本人は気付いていないようだが、誠には倒れそうになるほど刺激的な光景だった。

しかも誠のもとに駆け寄ると、座っている誠に視線を合わせるために、まどかが自然と前かがみになる。
すると、ちょうど誠の目の前に寄せられた大きな二つの胸があらわれて、しかもまどかの荒い呼吸につられてゆっくりと上下に揺れている。
海の水が胸の谷間を通って、胸の先から滴り落ちていた。

誠はあまりの刺激に、一瞬意識が遠のきかけた。

「師匠、大丈夫ですか？」
「はっ、はい」

まどかの声に、何とか意識を取り戻す。
誠の返事を聞いてまどかは嬉しそうに微笑むと、誠の手を取って引っ張り上げた。

「じゃあ、一緒に海に入りましょ！」
「あっ、はい」

誠もつられて立ち上がり、まどかに引っ張られながら海を向かった。
後ろから、美緒の「行ってらっしゃーい」という嬉しそうな声が聞こえて、誠は軽く頭を下げた。

海に行くと、麻友や桜が少し沖で、曜子や薫子が波打ち際で、凛が砂浜で遊んでいた。

まどかは迷わず誠を海の中に誘うと、海の水をすくって誠にかけてくる。

冷たい刺激に、思わず「冷た！」と叫んでしまう。
それを見て、曜子も水をかけてきた。
「ほらほら、せっかく海に来たんだから」
曜子はセパレートタイプで、フリルの付いた意外に可愛らしい水着を着ていた。
思っていた以上に、スレンダーな体型だった。
誠もつられて、水をすくってまどかや曜子にかけると、ふたりとも嬉しそうに逃げまわり、また水の掛け合いになる。
すこし海の冷たさに慣れると、まどかがまた手を引っ張って海に導いてきた。
「もう大丈夫ですよね。泳ぎますよ」
そう言うと、どんどんと海に入っていく。
沖の方の桜と麻友が手を振っていた。
あそこまで行くらしい。
「よーし」
誠も気合を入れなおして、まどかに連れて歩を進め、水が胸の位置まで来ると平泳ぎで泳ぎ始めた。
まどかは、きれいなクロールでどんどん先へ進んでいく。
やっぱりまどかは運動が得意なようだ。
誠も負けないよにう、速度を上げた。

「おーい、まーちゃーん」

桜の声が聞こえてきて、誠も海面から顔を上げた。
麻友は大きな浮輪にお尻を入れる形で、桜は人が横になれる大きさのボード上のものにつかまって海に漂っていた。

まどかと一緒にふたりの近くまで泳いでいくと、桜がニヤニヤしながら聞いてきた。

「まーちゃん、誰の着替えが一番刺激的だった？　まどかちゃん？　それとも私？」
「私の着替えよねー。見ていたの解ってたもん」

麻友がとんでもないことを言い始めた。
あの着替えのタイミングはわざとだったのか。

「そうなんですか？　師匠」

海水並みに冷たい、まどかの声が響いた。
どこかに怒りのポイントがあったらしい。
誠は慌てた。

「いや、見ていません。……いや、見えただけです。意図して見たわけでは……」

まどかが、じとっとした視線で見つめてくる。
今ひとつ信頼されていないらしい。

「いいじゃない、まどかちゃん。見せて減るものでもないし」

「そうじゃなくて……他の人の着替えを見て、どきどきしていたら嫌だな、と思って」

まどかはそう言って、ちょっとふくれた。

どうやら怒っていたポイントはそこらしい。

「じゃあ、まどかちゃんの着替えを見て、どきどきするのは良いってこと？」

桜が意地悪そうに、突っ込んできた。

「いや、それは……その……」

「他の人のを見られるよりはいいでしょ？」

桜が問い詰めると、まどかはうーんと恥ずかしそうに悩みながら、うん、とうなずいた。

それを見て、桜と麻友が嬉しそうにはしゃぐ。

「いや、でも、恥ずかしいです！」

「恥ずかしいけど、まーちゃんなら着替えを見られても許せるでしょ？」

麻友がぷかぷか浮きながら、嬉しそうに聞いてきた。

まどかが麻友を見て、うーっ、とうなり声をあげる。

「やっぱり、否定しないんだ！」

麻友が嬉しそうに叫ぶ。

まどかが、ぷいっと方向を変え、誠の手を引っ張った。

「師匠、行きましょう」
「はっ、はい」

「ごめん、ごめん。待ってー」
桜と麻友の謝る声が聞こえたが、まどかは気にせずに誠の手を引っ張って泳いでいく。

しばらく泳いでふたりきりになると、ようやくまどかも止まってくれた。
後ろ向きだが、耳まで赤くなっているのに気付いた。
まどかも恥ずかしかったのだ。
誠はどう声をかけていいか悩んだ。

「あの、その、水着……とっても似あっていますよ」

まどかが振り向いてくれた。
恥ずかしそうだけど、ちょっと嬉しそうに笑っている。

「曜子とふたりで探しに行ったんです。いつもは競泳用の水着だから、ちょっと恥ずかしいけれど、褒めてもらえたから満足です」

どうやら少し機嫌が治ってくれたらしい。
でも残念ながら、話題を変えることは出来なかった。

「着替え、見ていました？」
「えっ、えっと……」
「私の着替え」

素直に答えるべきか、嘘を付くべきか。
そんな誠の心を見透かしたように、まどかが誠に伝えた。

「私の前では素直でいて欲しいです」

そうだ。
コミュニケーション能力の低い誠、互いに恋愛経験のないふたりの間の約束。

素直に、恥ずかしがらず、嘘をつかずに伝えること。

誠はどう思われるか心配だったが、その約束に従って答えた。

「ごめんなさい。見ました」
「他の人のは？」
「一番最初に着替え始めた麻友さんのは見てしまいました」
「他の人は……」
「まどかさんの後で意識がなくなったので、憶えていません」

誠の答えに、まどかは再び顔を赤くした。

「それってつまり……私の着替えで倒れたってことですか？」
「あっ……はい……」

しばらく、ふたりの間に沈黙が広がった。
まどかの表情を見ると、恥ずかしがっているようにも、悩んでいるようにも見える。
素直に答えたが、あれで良かったのか、誠の心に不安が広がる。

まどかはにっこりと笑ってくれた。

「許します！」

「えっ！？」

「着替えを見たこと、許します」

許すもなにも、砂浜で着替えていたから見えてしまうこともあるわけで……。

誠はそんなことを考えていたが、何はともあれまどかの機嫌が治ったことに、ひと安心した。

「着替えを見られたのは恥ずかしいですが、師匠が女の子として見てくれたことは、なんだか嬉しいです。私の着替えなんか、そんなに色っぽいものとも思えないのに」

まどかもちゃんと素直に気持ちを伝えてくれた。

そんなふうに考えていたなんて、誠には思いもしなかった。

これだけ女の子らしい体型なのに、相変わらずまどかは自分自身のことを男の子のようだと思い込んでいるらしい。

もっと、自信と自覚を持ってもらってもいいのに。

「まどかさんは、女の子です。今日はどきどきしっぱなしです」

今だって。

「良かった……。さあ、もう少し泳ぎましょう」

そう言って、まどかは笑顔で泳ぎ始める。

誠もあとを追って泳ぐことにした。

ほっぺにちゅっ

昼ごはんは海の家で焼きそばを食べ、休憩を入れてもうひと遊びをすることにした。

みんなで交代でビーチバレーをしていると、桜が、

「喉かわいたぁー。まーちゃん、飲み物買ってきてー」

と言ったので、誠は「はい」と答えて、先ほどの海の家に向かって歩き始めた。

ひとりで行くつもりだったが、とっとっとっ、と足音が聞こえ、振り返ってみたら麻友が付いてきていた。

「みんなの分、買うつもりでしょ。一緒に持つよ」

確かに、誠は桜の分だけではなく、みんなの分を買うつもりでいた。

誠は素直に「有り難う」とお礼を言い、ふたりで並んで歩くことにした。

一年前は押しの強さに困ることもあったが、今はそれほど嫌な気持ちがしない。

クラスがかわってから、会うことも少なくなっていたからかも知れない。

「今日は楽しいね」

麻友が笑顔で誠に問いかける。

「はい、みんなで遊ぶのって、こんなに楽しいものだって初めて知りました」

「あっ、そうか。こういったのは初めて？」

「はい」

「そうなんだ」

誠も楽しんでいることが解ると、麻友も嬉しそうに笑った。

海の家で店長らしい親父さんに、８本の冷たい飲み物をお願いする。

冷蔵庫に入っている水やお茶やスポーツドリンクを分けて出してくれる。

誠がお金を払っている間に、麻友が持てるだけ持とうとしていた。

「あっ、僕が持ちます」

「いいよ、大丈夫」

「そんな小さな手で、なに言ってるんですか」

誠はそう言って、６本を両手に挟んで持つ。

麻友は両手に１本ずつ持つだけとなった。

「有り難う。やっぱり優しいね」

「そんなことないです」

「ふふ、小さい手って言われて、何かきゅんとしちゃった」

「えぇっ、そうなんですか？」

麻友の言葉に、誠が驚いた。

「いつも口調がきついせいか、どうも強い女に見られがちだから」

麻友はすこしだけ寂しそうにつぶやいた。

そんな悩みを持っているなんて、誠は考えてもいなくて、またびっくりする。

そんな誠の様子に気づいた麻友が、頬をふくらませてつぶやいた。

「びっくりしたな。これでもか弱い女の子だぞ」

じとっとした視線で、麻友が誠を見上げる。

確かに8人の中でも、凛と麻友が同じぐらいで一番背が低い。

こうして見ると、確かにか弱く見えるかも知れない。

「そうですね。うん、そう思います」

誠は反省もこめて、そううなずく。

麻友もその言葉に嬉しそうに微笑んだ。

「ふふっ。まーちゃん、ちょっと耳貸して」

「はい？」

言われるままに誠は少し屈んで、麻友の顔に耳を近づけた。

麻友が何かを話すかのように、誠の耳元に口を近づけたが、方向がすこし違った。

ちゅっ。

……はい？

麻友が、誠の頬にキスをした。

「有り難う。感謝の気持ち」

「えっ、えぇぇっっ！！」

誠の反応に、麻友の方がびくっとして驚く。

「なっ、なに？　ほっぺにちゅっ、ぐらいいいでしょ？　まどかともキスぐらいしてるんでしょ？」

麻友の言葉に、誠は必死で顔を横に振って否定した。

「……えっ、まだなの？」

麻友がいぶかしげに、誠に問い直す。

誠はまた必死に頭を上下し、麻友の問を肯定した。

「誠……、ちょっとそこに座りなさい」

麻友の口調が変わった。

何かいけない部分に触れたらしい。

あきらかに怒っている。

キスされたのは自分なのに、なぜ麻友が怒っているのかわからなかったが、あまりの迫力に思わず言われるままに正座した。

麻友は仁王立ちして誠の前に立つ。

背中から黒い怒りのオーラが見えてきそうな迫力がある。

「ふたりが付き合い始めて、もうすぐ1年。その間に、キスひとつ

していないと？」
「はっ……はい」
怒りはそこ？
「告白したことのない私が告白し、振られたことのない私が振られ、彼氏の絶えたことのなかった私が、１年間も彼氏も作らずにいたというのに……」
誠の知らない間に、麻友の中には黒いドロドロしたものが溜まっていたらしい。
誠のせいではないと思うが、ここではそうは言ってられない。
「ごっ、ごめんなさい」
誠は思わず頭を下げて謝罪した。
周囲からは、水着の女の子を前に正座して頭を下げている姿がどう映ったのか。
知らないうちに遠巻きに眺める人が増えてきていた。
おそらく痴話喧嘩と勘違いされているのだろう。
麻友はそんな周囲の様子を気にすることもなく、言葉を続けた。
「この私が我慢していたというのに、ふたりは手をつなぐだけで満足して、キスひとつしていないと！？」
なぜキスをしていないことで怒られないといけないのか、誠には解らなかったが、ここは謝るしかない。
誠は何はともあれ、頭を下げ続けた。

「ヘタレかと思っていたけれど、ここまで奥手のふたりとは……誠！！」
「はい！」
麻友の大きな声に、誠は飛び上がるように顔を上げた。
「とにかく今日、まどかにキスしなさい。したいんでしょ！？」
「は、はい」
周囲でどよめきが起きる。
いつの間にかギャラリーが増えている。
「これで今日キスしなかったら悪いけど、まどかから奪うからね。我慢の限界よ」
奪うって……？　我慢の限界って……？
麻友の言葉に意味がわからず戸惑っていると、桜が駆け寄ってきた。
「何してるの、まーちゃん」
「あっ、桜さん」
誠の代わりに、麻友がイライラした様子で説明し始めた。
「ちょっと聞いてよ、桜。まーちゃん、まどかとまだキスひとつしてないんだって。私知らなくて、ついついほっぺにキスしちゃったわよ」
「ほー、ほっぺにね」

桜がニヤニヤ笑っている。
何かいたずらを思いついた顔だ。

「どっちのほっぺ？」
「右よ」
「ふーん」

桜がふいに遠くを見つめ、何かを指さした。

「あっ、まどかちゃん」
「えっ？」

誠が指の方向につられて、顔を向ける。
だが、その指の先にまどかはいなかった。

ちゅっ。

今度は左の頬に、何か柔らかい感触が。

「～～～～！！！」
「左いただき」

桜が美味しいものでもいただいたように、笑顔で唇をなめている。
誠が言葉にならない声で訴えようとするが、桜はどうだ、と言わんばかりに胸をはっている。

「しぃぃしょぉー……」

聞いたことのない地獄の底からの声に、思わず3人が振り向く。

そこには、いつの間にか、まどかが立っていた。
怒っている。
あきらかに怒っている。

誠の背中にいやな汗が流れた。
真夏の昼下がりというのに、急にあたりが涼しくなったように感じる。

さすがの桜もまどかの迫力に押され、弁明をし始めた。

「いやだなぁ、まどか。冗談よ、冗談。麻友が右のほっぺにキスしちゃった、ていうから、バランスが悪いかなと思って」

「……麻友もキスしたんですか？」

矛先が変わり、麻友がびくっとする。
麻友も思わずたじろいでいた。

「いや、その、まさかふたりがキスもしていないなんて知らなくて……ちょっと……感謝の気持ちを込めて……その……つい」

「感謝の気持ちは、言葉だけにしてください」

まどかのもっともな意見に、麻友もうなずくしか無かった。

「はい……」

まどかがくるっと誠の方を向く。
誠も思わずびくっと身体を強ばらせた。

「師匠」
「はいっ！」
「気をつけて下さい、って約束しましたよね」
まどかの目がすわっている。
「はいっ！」
「何でそう簡単に……」
まどかの肩がふるえ始める。
いつになく怒っている……と思っていたら、まどかの目から涙がこぼれていた。
誠は驚いて、思わずまどかに声をかけた。
「まどかさん」
「……」
まどかはうつむいたまま、答えない。
桜と麻友も心配そうにまどかを見つめていた。
「……心配……かけないでください……」
まどかがしぼり出すように、そうつぶやいた。
「あっ……」
誠は美緒の言葉を思い出した。
まどかを不安にさせる言動をしないこと。

誠は恐る恐るまどかに近寄って、うつむいて立ち尽くすまどかをぎゅっと抱きしめた。

こんな素敵な女の子が、自分のことを好きでいてくれる。
こんな自分なのに、不安に思ってくれる。

誠はまどかを、愛しい、と心から思った。

「おぉー！」

周囲のギャラリーから歓声が上がる。

誠もまどかも忘れていたが、麻友とのあたりから周囲からの注目を集めていた。
気づいて見渡すと、どこから集まったのかと言うほどの人だかりになっていて、どこからとも無く拍手がおこり始める。

「まどかさん」

恥ずかしさのあまり誠はまどかの手を引き、その場から離れた。
人垣を通り過ぎるとき、観客から「キス、頑張れよ！」と応援がかかり、誠は耳まで赤くして走り抜けた。

同じ部屋

誠は走り続け、気づけばホテルの前まで来ていた。
誠は少し息が切れたが、気持ちはだいぶ落ち着いてくる。
まどかはまだ黙って誠の手を握り続け、うつむいていた。

「まどかさん、大丈夫ですか?」
「……はい」

ようやく返事をしてくれて、誠はほっとした。
でも、まだまどかの機嫌が治っているようには見えず、どうしたら良いか解らない誠はうろたえた。

「えっと、まどかさん?」

まどかがようやく顔を上げて、視線を合わせてくれた。
すこし怒っているような、何となく悲しそうな表情。
まどかが誠の瞳を見ながら、一言つぶやいた。

「キスしてください」

……はい?

まどかは誠に向かい合うように身体を起こし、すこし顔を上げ、目を閉じた。
あきらかに、キスを待っている様子だ。

誠の胸の動悸が一気に高鳴る。
観覧車の失敗と緊張を思い出したが、ここでそれを繰り返すわけにはいかない。
誠も意を決して、緊張が高まりながらも、そっと顔を近づける。
まどかの肩に手をかけ、誠も眼を閉じた。

「誠ー、まどかー、大丈夫?」

遠くから曜子の声が聞こえて、ふたりは慌てて離れた。

「あぁぁ！　ごめん、邪魔しないって言っていたのに、つい心配になって……」

すぐに事情を察した曜子が近づきながら、申し訳なさそうに謝る。
曜子に続いて、みんなが荷物を持って駆け寄ってきた。
他の人達は気付いていないようだが、ふたりを心配して全員で荷物を引き上げてホテルに戻ってきてくれたようだ。
まどかもそれに気づいて、申し訳なさそうな顔をしたあと、無理に笑顔を作った。

「みんな、ごめんなさい。大丈夫だから。心配かけてごめんね」

まどかが軽く頭を下げると、桜と麻友も申し訳なさそうに頭を下げた。

「ごめんなさい。私達が悪かったです。まーちゃんは全く悪くないからね。まどか」
「私もからかっただけだから。ごめんなさい」
ふたりの謝罪に、まどかは横に首を振って笑顔で答えた。
「大丈夫だから。私も怒ってごめんなさい」
誠もつられて頭を下げた。
「僕もごめんなさい」
「あなたが謝るのは、まどかに対して」
曜子が苦笑いをしながらつっこんだ。
誠も慌ててまどかの方に向きなおし、「ごめんなさい」と頭を下げた。
まどかも困ったな、と言う顔をしながら笑ってくれた。
ようやくまどかの笑顔を見ることが出来て、誠はほっとした。
「さっ、みんなでシャワー浴びて着替えましょ」
薫子が、優しくみんなに声をかけてくれた。
それぞれにうなずいて、ホテルの更衣室へ向かうことにした。
シャワーでざっと海水と砂を流して、服に着替えると、それぞれにフロントに集まった。
時間的にも部屋に入れる頃で、桜がフロントで鍵を受け取ってき

て、それぞれに声をかけて渡し始めた。

「ふたりずつの部屋でーす。凛と薫子」

「はい」「はーい」

薫子が桜からひとつ鍵を受け取る。

「曜子と美緒」

「「はーい」」

近くにいた、美緒が鍵を受け取った。

「麻友は私とね」

「はいはい」

麻友が桜から、鍵を受け取った。

「まどかぁ」

「はーい」

まどかが近寄って鍵を受け取ろうとしたところ、桜がするっととんでもないことを言い出した。

「と、まーちゃん」

「……え？」「はい？」

桜の手元にはひとつの鍵。

その意味するところは。

「もしかして、同じ部屋、ということですか？」
「８人なんだから、ふたりずつ一部屋」

誠の問に、桜がさも当然といった調子で話し始める。
今ひとつ展開に頭がついて行かなかったが、誠は抵抗を試みた。

「いや、でも、それは」

「私からのささやかな謝罪。これで仲良くなって。お願い」

これは謝罪として受け取っていいのだろうか。

誠が困り果てていると、桜がまたとんでもないことを言い出した。

「まどかちゃんとふたりが嫌なら、私とでもいいよ」
「あっ、私でもいーよ」

麻友が隣で手を挙げる。
さっきの反省はどこへやら、いつもの麻友に戻っていた。

「いやいやいや、そういう問題じゃ」

「私が一緒になろうか？」

美緒が天使のような笑顔で、小さく手を上げている。
気遣いの美緒はどこへ。
誠は本気で、この空気を読んで欲しい、と願った。

予想していない展開に誠の方が慌て、うまく言葉が出なかった。

まどかが誠の腕をぐいっと引っ張った。

「師匠は、私と同じ部屋でいいです」

桜や麻友の言葉に反抗してか、まどかがそう宣言した。

「「おーっ！」」

みんなが嬉しそうに歓声を上げる。

まどかも桜にはめられたことは解っていたが、断ったら本当に桜や麻友や美緒が、誠と同じ部屋になりかねない。

まどかもそれは我慢できなかった。

「師匠、行きましょう」

まどかが恥ずかしそうに、そして怒ったように、誠の腕を引っ張っていく。

「はい」

誠は展開についていけず、まどかに引っ張られるままに、歩き出した。

ダブルベッド

部屋まで、ふたりとも黙って歩き続けた。
部屋の鍵を開けて、ふたりで中に入る。

先に入った誠は、部屋の様子を見てがっくりと膝を折った。

「どうしたんですか？　師匠」
「これ……」

誠の指を差した先を見て、まどかもすぐに意味を理解した。

ツインではなく、ダブルベッド。
大きなサイズのベッドがひとつだけ部屋の隅に置かれていた。

「……僕がソファーに寝ますから」

「師匠」

「なんですか？」

「私と同じ部屋は嫌でしたか？」

まどかの意外な質問に、誠は慌てながらも必死に否定した。

「そっ、そんなことありえないです！　ただ、変な噂でも流れたらまどかさんに申し訳なくて……」

「有り難うございます。でも、私は気遣いよりも、一緒の部屋になるのが嬉しい師匠を見たいです」

「まどかさん……」

「いつも私が先走ってばかりで……不安になるんです。気持ちを押し付けているだけじゃないかって」

「そんなことないです。僕もいつも同じ気持ちです」

まどかはじっと誠の目を見てきた。

「じゃあ、ベッドはどうしますか？」

「うっ……」

まどかは何も言わずに、待っている。

正直な気持ちを言って欲しいのは解る。

誠は恥ずかしい気持ちを抑えこみ、何とか本音を伝えることにした。

「その……一緒に……ベッドで寝ませんか？」

誠も耳まで赤くなったが、まどかも同じように赤くなる。

でもその表情はなぜか、嬉しそうに見えた。

「恥ずかしいから駄目です」

「えっ……」

「でも、師匠のことは信頼しています。許可します」

まどかは恥ずかしそうにそうつぶやいた。

まどかの表情に、誠は思いっきり心を鷲掴みされたような感触を覚えた。

その表情だけで、３日間は幸せな気持ちになれそうだ。

誠は思わずまどかを抱きしめ、まどかもそれを嬉しそうに受けてくれた。

抱きしめたまどかから、ほのかなシャンプーの優しい香りがする。

この温かな、柔らかい感触を離したくなかった。

いつまでも抱きしめていたかったが、扉がコンコンとノックされ、扉の向こうから桜の声が聞こえてきた。

「えー、いちゃついてるところ申し訳ありませんが、用意ができたらフロントに集合してください。コンビニに行って花火を買いに行きましょう」

こちらの様子が見えるはずもないのに、そう桜はそう伝えてきた。

「はっ、はい！」

誠がまどかを抱きしめたまま、返事をした。

どこからか見られているんじゃないかとあたりを見渡したが、当然部屋の中には誰もいない。

ふたりはゆっくりと離れた。

「用意して行きましょうか」

すっかり機嫌の治ったまどかが、いつもの笑顔で言った。

「そうですね」

誠も笑顔でうなずく。

「手、つなぎましょうか」

「そうですね」

ふたりは手をぎゅっと握り合った。

こんなことでまどかの笑顔が見られるのであれば、一生だって握っていたい。

誠は心の底から、そう思う。

いつもこの笑顔が横にありますように、と誠は神様に願った。

潮風が香る道を歩いて、みんなで近くのコンビニにやってきた。

桜が「やっぱり海といえば花火でしょう」と言い出したのがきっかけだった。

それぞれに欲しい物もあり、８人で騒がしく店内で買い物をしていた。

桜もお目当ての花火をたくさん見つけて、どれを買おうかと悩んでいる様子だ。

特に買うものもない誠は、先に外に出ることにした。

「誠、ちょっと」

外に出ると、曜子が手招きして誠を呼んでいる。

「なんですか？」

誠は素直に曜子の近くに寄って行くと、曜子はレジ袋を差し出した。

「はい、これ。プレゼント」

「なんですか？　中身は」

レジ袋を受け取ったが、中の物は意外に軽い。

四角い箱だが、何かのお菓子だろうか？

「今あけちゃ駄目」

「何でですか？」

曜子が小さな声で注意してきたので、誠もつられて小さな声で聞き返した。

「コンドームだから」

「……え？」

誠の身体が固まる。

「可愛いまどかと一晩同じ部屋でしょ。何があるか解らないから、持っていなさい」

曜子はいたって真剣な顔つきで、誠に話してくる。

誠はかぁっと顔が赤くなるのが解った。

「いりません！」

誠はレジ袋を曜子に押し返したが、曜子がまたそれを誠に戻す。

「今日は要らないかも知れない。でも、いつかは必要かもしれない。そんな時、まどかに辛い思いをさせたくないの。解る？」

そこまで聞いて、曜子がからかっているのではなく、真剣に心配してくれているのが解った。

万が一、理性の歯止めが効かない日が来たとき、まどかが妊娠してしまうことがないように。

まどかも周りの人も傷つけないように、という曜子なりの心配しての行動のようだ。

それにしても、女子がこれを買うのには勇気が必要だっただろうに。

それも自分が必要なわけでもないのに……。

誠はレジ袋を押し返すことができなくなった。

「解ったみたいね。いくらふたりが奥手だからって、まどかだってもう生理は来ているし、誠だってまどかの水着姿を見てドキドキしたでしょ。ふたりとも準備は出来ているの」

準備ができている。

曜子の言葉に、誠の心臓がどきっと鳴った。

「結婚するまで我慢できるかどうか解らないし、決して悪いことじ

ゃない。ふたりとも両親にも認められているんだし、高校生なら興味を持つのも自然なことだし」

悪いことじゃない、自然なこと。

曜子の言葉がひとつずつ、誠の胸に落ちていく。

「ただ、妊娠はまだ避けたほうがいい。誠はまだ結婚できる年齢でもないし、養うことも出来ない。まだ責任をとれる年齢ではない、ということ」

曜子の言葉に、誠もうなずいた。

まったくその通りだと、誠も思った。

「だから、持っていて。使う日がいつかは解らないけど、私は男の方が持っているべきだと思っているから」

「……解りました。いつも、有り難うございます」

「しかし、私も経験ないのに、何でこんなところまでサポートしなくちゃいけないのか解らないよ」

曜子が苦笑いしながら、そうつぶやく。

「僕にとって、曜子さんは恋愛の師匠です」

「恋愛の経験もないっての」

「でも、いつもアドバイスをいただいています」

「ふたりでいると見えなくなることもあるからね。まあ、まどかと

の付き合いも長いし」

「本当に有り難うございます」

誠が頭を下げると、曜子は笑いながら手をひらひらさせた。

「とにかく今夜、キスぐらいはしなさいよ」

「……はい」

「まどかも待っているから。解ってるよね？」

誠は何度もうなずいた。

「頑張ってね。みんなで二人の恋を応援しているから」

「はい」

コンビニからまどか達が出てきて、ふたりを見つけた。

「あれ、もう出ていたんですか？」

「うん。みんな遅いよ」

「桜が、なかなか花火選びを止めなくて」

見ると、桜が嬉しそうに花火のセットを抱えていた。

満足いく買い物ができたようだ。

「じゃあ、帰りましょうか。そろそろ夕食の時間よ」

「そうだ、お腹すいた！」

「桜。せっかく綺麗でスタイルもいいんだから、もうちょっと女の

子らしい言動しなさいよ」

薫子が困ったように桜にアドバイスをおくると、みんなからさざ波のような笑いが起きた。

「素直な私がいい、っていう人を見つけるからいいの。思ったことを口にしているだけだから直らないって」

「だから、もてないのよ」

薫子の容赦ない一言に、今度はみんながはっきりと笑い声を上げた。

桜は納得行かない顔つきで、ぶつぶつとつぶやいていたが、みんなの笑い声でかき消され、そのつぶやきは誰の耳にも届くことはなかった。

流れ星

夕食は１０人程度が入れる畳の個室で、机の上にはそれぞれの席と料理がすでに置かれていた。
刺身の盛り合わせなど、美味しそうな海産物料理に、思わず歓声が上がる。

「美味しそう！」
「早く食べよう！　お腹すいた」

手早くご飯を盛りつけて並べると、「いただきます」と声を合わせて食べ始めた。

「あっ、美味しい！」
「ねっ」

食べる口に、話す口。
忙しくも慌ただしい夕食になっていく。

「でもさぁ、私だけじゃなくて、彼氏がいるのって、この中でまどかだけでしょ？」

桜は先程の話をまだ根に持っていたらしい。
桜の言葉にみんながうなずくなか、美緒が涼やかな笑顔で答えた。

「確か、凛ちゃんも彼氏がいたと思うけど？」
「えっ！？」

みんなの視線が一気に凛に集中する。
意外すぎて、誰も想像していなかった。
視線の先の凛はお箸を口にしながら、頬を真っ赤に染めていた。

「美緒さん……何で知っているんですか……」

どよめきが走る。

「本当なんだ」
「意外！」

凛は恥ずかしそうに、顔を伏せる。

「誰？　相手は誰なの？」

桜が身を乗り出して凛に質問したが、凛は恥ずかしがって答えそうにもなかった。

「確か、部活の先輩とか」
「美緒さん！」

どうも話しやすい美緒のところには、いろいろな噂が集まっているらしい。
おっとりしているからと言って侮れない。

「ねっ、ねっ、どちらから声をかけてきたの？」

桜が楽しそうに質問を重ねる。
凛も観念したのか、自分から告白し始めた。

「先輩からです」
「何て言って？」
「……付き合って欲しい、って」
「おぉ、シンプル！」

みんなできゃあ、きゃあと騒ぐ。
誠には今ひとつ、こう言った話で盛り上がる女心というものが理解できなかったが、他の人はこうやってお付き合いを始めているんだ、と感心していた。

「で、付き合ってみてどう？」
「あまり、変わらないです。学年も違うし、部活は今までも一緒だったし」
「デートはするんでしょ？」
「あまり。先輩も受験組だから」
「あー、そうかー」

今ひとつ盛り上がりにかけ、桜も質問するのをやめることにした。

「それでもふたりか……。これだけ美人が揃っているというのに」
「告白はされるけどね」

麻友がぽそっとつぶやくと、桜が苦々しい顔をした。

「私は女の子からしか告白されない」
「やっぱりね」
「なにがやっぱりよ」

桜の言葉に、みんなで笑った。

「まーちゃんならいいけど、まどかとラブラブだしなぁ」

桜の爆弾発言に、誠は思わずお味噌汁をかるく吹き出した。

「それは、本当に好きっていう感情なの？　桜、本当に人を好きになったことある？」

麻友が恋の先輩らしい、なかなか鋭いツッコミをかける。

「あるに決まってるじゃない！　……幼稚園の時だけど……」

「それはカウントに入らないわね」

麻友の冷静な言葉に、一同でうなずく。

桜でも本当の恋愛をしていないことに、誠は驚いた。

自分以外はみんな恋愛を経験しているものだと思っていた誠は、思わず桜を見つめてしまった。

誠の視線に気がついた桜が、嬉しそうににやっと笑う。

「なーに、まーちゃん。私が気になる？」

「いえ、そうじゃなくて」

「即答しない！」

また笑いがはじけた。

「桜さん、魅力的なのに」

「そう！　そうでしょう！　さすが私のまーちゃん」

「桜さんのものになった覚えはないのですが……」

夕食はそうして、笑いに包まれながら過ぎていった。

夕食が終わるとみんなで砂浜に出て、先ほど購入した花火をやることにした。
夜の砂浜は心地良い海風が吹いていて、過ごしやすい気温になっていた。

桜が満面の笑みで花火を抱え、ホテルで借りたバケツと水を誠が持って歩く。
まどかや曜子達も、久しぶりの花火に笑顔がこぼれていた。

砂浜に出ると周りの明かりが少なくなり、一段とあたりが暗くなる。
漆黒の海はわずかな光に時折きらめき、夜空には幾千もの星がまたたき始めていた。
出歩く人もまばらで、遠くにカップルらしき二人組が歩いたり、地元の人の散歩とおぼしき影が見えるぐらいだった。

「ここらで始めようか！」

待ち切れない桜が、花火を降ろして袋を開け始める。
子供みたいな桜の様子にみんなで笑いながら、配られた花火を手に取っていく。
ひとつの手持ち花火をライターでつけると、その花火からほとばしる火の流れで互いの花火をつけていった。

「きれい！」
「わあ……」

暗闇に浮かび上がる、いくつもの花火の光に、歓声と感嘆の声が上がる。
白い明るい光から、赤になり、青になり。
シャッーという音をたてるものもあれば、パチパチと弾けるものもある。
煙とともに、火薬の匂いがあたりを漂っていた。

誠は自分でやるよりも、花火を楽しむまどか達を見ていた。
何気ない光景なのに、何故かとても幸せな気持ちに包まれたような感触がして、胸のあたりがくうっと苦しくなる。
この時間がもっと続いて欲しい、と誠は心のなかで祈っていた。

「あっ、流れ星！」

美緒の声が響いた。
誠が見上げた時には消えていたが、しばらくみんなで空を上げていると、またひとつ星が流れた。

「わあ！　また！」

みんなで花火の手を止め、空を見上げる。
花火の光が消えると、夜空の星がよりいっそう浮かび上がってきた。

「先生、夜空の講義して！」

麻友が嬉しそうに提案すると、みんなが手を叩いて喜んだ。
誠は一瞬だけ戸惑ったが、面白い話をしようと構えるのではなく、自分らしく知っている知識をそのまま伝えようと、心を落ち着かせ

て話し始めた。

「そういえば、ペルセウス座流星群の時期ですね」

「ペルセウス座流星群？」

「はい。一年の間にも、流れ星が多くあらわれる時期があって、それぞれに名前がついています。ペルセウス座あたりを中心として流れるのでこの名がついています」

「へえ……」

誠の解説にうなずきながら、みんなで夜空を見上げ続けた。

「ところでみなさん、流れ星って何だと思いますか？」

「何って言うと？」

「なぜ流れ星が起きるのか」

誠が問うと、みんながうーんと悩みだす。

「確か、塵か何かが大気圏に突入して光るとか」

答えたのは曜子だった。

本を読むのが好きな曜子は、誠ほどではないが広い知識を持っているようだ。

「そうですね。数ミリとか数センチ程度の小さな塵……まあ地上に落ちたら隕石ですね……が大気圏に突入して燃えて流れたものが流れ星です。正しくは流星というようですが」

「空のお星様が流れたものじゃないの？」

桜が驚いたように誠に聞いた。

「何光年も先の星が流れたら、あんなに速く流れません。地上からすぐ近くで起きている現象だから、ああして流れるのです」
「あっ、そっか……流れ星なんて見たことがなかったから、本気でそう思っていた……」
「流れ星がたくさん見ることができる時期もありますよ」

誠の説明に、桜がまたびっくりして聞き返してきた。

「本当？　いつ」
「今頃です。先ほど話したペルセウス座流星群の時期が今頃で、うまくすれば1分間に1個は流れますよ」
「そっ、そんなに！？」

そう言っている先に、また大きく星が流れた。

「あっ……」
「きれい」
「本当、一瞬だね」

思いもしなかった天体ショーに、感嘆の息をもらす。
美緒がさらに質問をしてきた。

「ねえ、誠くん。なんでこの時期になるとたくさん見られるの？」

「地球は太陽の周りを1年に1回、ぐるっと回りますよね。その軌道上で流星のもととなる塵がたくさんある所があるのです。そこを通る時期にこうして見ることができます」
「あ、なるほど。いつも塵があるわけじゃないんだ」
「はい。彗星って解りますか？　俗に言う、ほうき星というもので

すが」
「歌で聞いたことある」
美緒が何か鼻歌を歌った。たぶん、そのほうき星と関係のある歌なのだろう。
「惑星の他にも、太陽の周りを回っている小さな天体があるのですが、それが太陽に近づくと一部が燃えて、光の尾を作ります。これが彗星と呼ばれているものです」
だんだんとみんなは静かに空を見つめ、プラネタリウムでナレーターの話を聞くように誠の言葉に耳を傾けた。
「燃えた物が、塵となって軌道上に残ります。その軌道が地球の軌道と重なることがあります。これが流星群となるのです」
「なるほどね……深いわ」
「まーちゃんの話し方は優しくて心地いいけど、夜に聞くと眠くなっちゃう……」
麻友が心地良さそうなあくびをする。
あまり遅くなってもいけないので、みんなで花火の残りをやることにした。
そうして、みんなで大きな打ち上げ花火をやったり、小さな線香花火をしたり。
夏らしい夜をそれぞれに楽しんだのだった。

お風呂

花火が終わった後、みんなで大浴場へ行くことにした。

ホテルの大浴場は内風呂の他に露天風呂もあって、お風呂から海が眺められる。

今は漆黒の海と夜空が広がっているが、夕方や朝方はきれいな景色が広がっているのだろう。

時間がずれたせいか、ほとんどお客のいない脱衣所でそれぞれに服を脱いでいく。

互いに水着姿を見たが、裸になるとやっぱり互いのスタイルが気になってしまうようだ。

特に桜はまるでエロ親父のように、みんなの裸を舐め回すように眺めてくる。

「ちょっと桜さん。恥ずかしいです」

凛が服で胸元を隠しながら、抵抗した。

「いいじゃない。女の子同士。裸の付き合い」

「桜さんぐらいスタイルが良ければいいですけど。私なんて……」

桜はまだいくらか幼さは残るが、数年もすればモデルになるか、ミス・ユニバースあたりに応募できそうなスタイルの良さと美貌を持ち合わせている。

それに対して凛はどちらかというと、容姿・体型ともに幼い印象が強い。

胸もわずかに隆起している程度で、恥ずかしがるのも仕方ないかも知れない。

「凛ちゃん。あんなおっぱいの悩みのない人達のことは放っておこう」

声をかけてきたのは、長身ながら細身で、胸もほとんどない曜子だった。

互いに胸の大きさを確認すると、思わずがっしりと握手した。

同盟が出来上がったようだ。

「じゃあ、私も誰かとおっぱい同盟でも組もうかな」

「なに、その変なネーミング」

「あっ、麻友は仲間ね」

「あまり入りたくないけど」

麻友は身長こそ低めだが、出るところは出ていて、引っ込むところは引っこんでいる。

「何か麻友の裸って、エロっぽいんだよね」

「今夜、襲わないでね」

「本当は襲って欲しいとか？」

「……私も少し、世界を広げてみようかしら」

「……ごめんなさい。私が悪かった」

みんなで笑いながら、浴室に入って行く。

「で、やっぱり一番大きいのはまどかか。美緒も意外にいい勝負なのよね」

桜が相変わらず、おっぱい談義に花を咲かせていた。
言われたまどかは、身体を洗いながら恥ずかしそうに胸を隠した。

「隠されるとよけい触りたくなる」
「桜さん！」
「おっ、やわらかぁーい」

まどかが身体を洗っているのを良い事に、桜は後ろからがしっとまどかの胸をつかむ。
逃げるようにまどかが前屈みになって、胸元を隠そうとするが、すでに差し入れられた桜の手をどけることが出来なかった。
むにむに、と桜は遠慮なくまどかの胸を揉みしだく。
桜の両手でもあふれる膨らみは、心地よい柔らかさだった。

「やめてください！」
「うーん、気持ちいい。満足、満足」

桜はするっと手を抜いて、次の獲物を探し始めた。

「やっぱり次は美緒かな」
「私？」

美緒はすぐ近くで髪を丁寧に洗っているところだった。

「ちょっと胸を触らせて」
「いいわよー、どうぞ」

美緒は桜の方向に身体を向けると、恥ずかしげもなく両方の胸を差し出した。
可愛らしい顔立ちには似つかない、形のよい胸が盛り上がってい

る。
桜は嬉しそうに、両手で美緒の胸を触り始めた。
「おっ、こちらもなかなか」
「どちらのほうが大きい？」
「うーん、甲乙つけがたいけど、まどかかな？」
「あら……残念」
美緒は胸を触られながら、ちょっと残念そうな表情を浮かべる。
「まどかちゃん、陸上やってるのに大きいよね。羨ましい」
美緒がまどかに声をかけると、まどかは恥ずかしそうに自分の胸に手を置いた。
「中学の時は小さかったんです。中学3年の後半ぐらいから大きくなり始めて。今は走るときに痛くて困っています」
「お母さんが大きいのかな？」
「おばあちゃんがとっても大きかったんです。遺伝なんでしょうか」
曜子と凛が小さな声で「羨ましい……」とつぶやいた声は、誰の耳にも届かなった。
ちなみに、薫子は桜と凛の間ぐらいの胸の大きさで、まるで聞こえていないかのように淡々と身体を洗っていた。
一通りおっぱい談義がすむと桜も満足したようで、さっさと身体と頭を洗って、露天風呂へ移動した。
「わあ、いい景色」
「心地いいね」

ホテルの上の階にある露天風呂なので、外から見られる心配もない。
裸のまま思いっきり伸びをして、体全体に心地良く吹きかける海風を感じる。

「たのしい旅行だったなぁ。毎年やりたいぐらい」

桜が独り言のようにつぶやくと、それぞれにうなずく。
気心の知れた友達との旅行で、思っていた以上に楽しめた一日だった。

「まーちゃんの存在も、やっぱり良かったし」
「不思議な人だよね。女の子の中に男ひとりなのに」

桜の言葉に、美緒が付け加える。
誠を誘うことを言い出した人間ではあるが、後になって一抹の不安もあった。
自分がもう少し仲良くなりたいだけで誘ってしまったが、せっかくの旅行を駄目にしないかという思いもあった。
一日が終わろうとしてほっとする心もあり、少し距離を縮められた嬉しさも美緒は感じていた。

「まどかちゃん。夜、頑張ってね」

美緒がぽんっとまどかの肩を叩いて微笑んだ。
とたんに、まどかの顔が真っ赤に染まる。
まどか自身も今の今まで忘れていたが、指摘されて急に緊張してきた。

「そうだ。まだひとつビッグイベントが残されていた！　頑張ってね！」

桜が嬉しそうにまどかに寄りかかってくる。

「まどかが頑張っちゃ駄目でしょう。まーちゃんが頑張らないと。ここで女に頑張らせる男は駄目よ」

露天風呂の縁でゆったりと海を眺める麻友がつぶやく。

麻友の心中は穏やかではないが、一途な誠を応援したい気持ちもあるのが正直なところだった。

「キスぐらいはね」

「そうね、ヘタレでもそれぐらいは」

まどかの周りで勝手に話が進んでいる。

人の彼氏を捕まえてヘタレとは……ともまどかは思ったが、恋については強く否定できない。

お風呂を出てそれぞれの部屋へ向かう途中、みんなが万歳三唱で部屋に戻るまどかを送り出す。

「静かに！」

まどかは怒りながら、顔を真っ赤にして部屋の中へ入って行ったのだった。

ファーストキス　（Ｒ－１５　？）（前書き）

キスシーンがあります。ぎりぎりＲ－１５ではないと思うのですが、年齢的に、あるいは苦手な方は飛ばして下さい。

ファーストキス　（R－15　？）

まどかは部屋に入り、カチッと鍵を閉めた。
中はすでに明るく、誠はもう先にお風呂をすませて帰ってきているようだ。

「お帰りなさい」

何かノートに書いていた誠が笑顔で迎えてくれて、まどかの緊張はいくらか和らいだ。

「ただいま帰りました。……みんなに万歳三唱されてしまいました」

まどかが顔を赤くして言うと、事情を理解した誠も顔を赤くした。
まどかはベッドにすとん、と腰をおろした。

まどかも誠も、ホテルに用意されていた浴衣を着ていた。
そのままで眠ることもできる柔らかい生地のもので、夏用なのか着ていて心地良い。

まどかは半乾きだった髪の毛を、持ってきたドライヤーで乾かすことにした。
歯磨きも終わっているし、これが終われば、あとは眠るだけだ。

互いに意識してしまい、無言のままドライヤーの音だけが部屋に響く。

「……」

まどかも誠も、ゆっくりとした、でも強い自分の心臓の拍動を感じていた。
観覧車の時よりは落ち着いているが、どうしたらいいか解らない不安もある。

まどかはドライヤーを切ると、電源を抜いてバッグにしまった。

「あの……お待たせしました」
「はい……寝ましょうか」

まどかはうなずき、布団の端に恥ずかしそうにもぐりこんだ。
誠は部屋の電気をひとつずつ消していき、真っ暗になったのを確認して、反対の布団の端にもぐりこんだ。

窓から月の光が薄く差しこんでいて、お互いの顔はよく見える。
誠もメガネを取って脇に置いているが、これだけ近ければ、メガネは無くても相手のことはよく見えた。

横になって互いに顔を向かい合わせ、視線を合わせたまま、時が流れる。

誠は緊張しながらも、まどかの綺麗な瞳に見惚れていた。
透き通るような、まっすぐに見つめる瞳から視線が外せない。

言葉もないまま、互いの思いを瞳で確認しあい、ゆっくりと身体を近づけていく。

それほど広くないベッドで、すぐにふたりの距離は詰まった。

鼻と鼻が触れる。

それだけの触れ合いなのに、ふたりの全身に相手の体が触れた感触と、快感が溢れる。

鼻と鼻が触れただけなのに、こんなに気持ちがいいなんて……ふたりは戸惑いながらも、喜びに心が震えるのを感じていた。

キスしたい。

唇と唇で触れてみたい。

強い衝動が、心と体を動かす。

ほんの少し顔を傾けて鼻をずらし、唇を近づける。

ゆっくりと近づき、そしてふたりは、

キスをした。

唇が触れた瞬間に、体全身にじんっとした電気の走るような快感が駆け巡る。

しっかりと唇が合わさると、幸せな気持ちが心から溢れ出すのを感じた。

柔らかくて、あたたかい。

こんなに気持ちがいいなんて。

名残惜しさを残して、そっと唇が離れた。

呼吸をするのも忘れていて、互いにゆっくりと深呼吸をした。

今になって心臓がドキドキしてくる。

ようやくキスが出来てほっとできるかと思っていたが、それ以上に相手を求める気持ちが心臓の鼓動を早める。

もう一度、キスしたい。

もっと触れたい。

誠はもう一度、唇を近づけた。

まどかもそれに応えた。

今度はもっと強いキス。

深く押し付けるような。

相手のことをもっと感じるようなキス。

頭の中が、肌の触れる気持よさに満たされ、ゆっくりと溶けていく。

好き。

大好き。

まどかは誠を思う気持ちがどんどん高まっていくのを感じていた。

涙がこぼれるほどに。

唇の感触が消え、まどかが目を開けると、誠の不安そうな瞳があった。

「涙……」

誠はどうやら、涙を不安や怖さのせいと勘違いをしたみたいだ。

まどかは頭を横に振って、それを否定した。

「嬉しいんです」

「……」

「好きです。大好きです」

まどかの瞳から、また一粒涙がこぼれた。

「僕も大好きです」

もう一度、ふたりは唇を重ねた。
ゆっくりと、何度も。

その度に、快感と満足感が身体を満たしていく。
何度キスしても、尽きないように。

触れていたい　（　Ｒ－１５　）（前書き）

たぶん、ギリギリ大丈夫だと思いますが、保険のためにＲ－１５とさせていただきます。

年齢的、こういった展開がお嫌いな方は飛ばして下さい。

触れていたい　（Ｒ－１５）

誠が唇を離し、じっとまどかの瞳を見つめた。
何かをしようとしているのはまどかも感じたが、それが何か解らず、しばらくそのまま待った。

誠はためらいながらも、相手を求める衝動に突き動かされるように、つぶやいた。

「本に書いてあった……キスをしてもいいですか」

本に書いてあったこと。
それは、今のキスとはまた違うキスをしてみたいということ。
誠が言いたいことをまどかも理解し、こくん、とうなずいた。
まどかも初めての経験だったが、恥ずかしさよりも、もっと触れていたいという気持ちがまさっていた。

誠がゆっくりと唇を近づける。
変わらぬキスの後に、ゆっくりと舌が唇を割ってきた。

まどかの唇の間を、誠の舌が入り込んでくる。

まどかは身体をくねらせた。
舌が入ってくることで、まるで誠と一つになったような一体感に包まれる。
舌が口の中をゆっくりとなぞるのが、とてつもない快感と、一つになっている充足感をまどかに与えていた。

思わず、まどかからも舌をからめてしまう。
互いの舌が触れ合い、確かめ合う。
部屋に、くちゃっ、ぴちゃっ、と舌を確かめ合う音が響いた。

唇を触れ合うよりももっと強い、快感と充足感がふたりを包んでいく。
恥ずかしさはどこかへ消えてしまい、もっとつながっていたい、快感を感じていたい、という気持ちばかりが身体に満ち溢れていた。

口腔内を蹂躙し、舌を絡め合い、相手を求め合う。

何度も舌を求め合い、ようやくふたりは離れた。
舌と舌が離れることを拒むように、糸を引きながら。

「……」

快感が波打つように身体に押し寄せるのを感じながら、ふたりはまた見つめ合う。

まだまだ夜の時間は残されていた。

誠はずっと言葉に出来なかった、でも果たしたい思いを口にした。
恥ずかしさよりも、いまはもっと触れてみたい。

「胸を……触ってもいいですか」

まどかの鼓動が、どくっ、と強く打った。

もっと身体は触れて欲しいと叫んでいるが、まだ恥ずかしさの方が先にたっている。

どう返事をすればいいか迷いはあったが、触れて欲しいという欲求のほうがゆっくりと次第に高まっていく。

まどかは返事をせず、そのまま誠の手が触れてくるのを待った。

誠も胸を触れたい気持ちが強くなり、返事を待たずに右手を伸ばした。

まどかの胸に触れる寸前の、誠の手をふたりで見つめる。

あと少しで触れる。

誠は触れることにためらいがあったが、まどかは思っていた以上に触れられたい気持ちが溢れてきた。

ためらい、動かなかった誠の手に、まどかは自分から胸をあてた。

ふいに感じた柔らかい感触に、誠は鼓動が急激に高鳴る。

まどかの胸は、想像していたよりももっと柔らかく、そして温かかった。

服越しに触れているだけなのに、手から気持よさが伝わってくる。

経験したことのない柔らかさに、誠はもっと直に、両手いっぱいに触れてみたい衝動にかられていた。

まどかは触れるられる恥ずかしさよりも、感動の方が強かったが、服一枚の壁をもどかしく感じていた。
直接触れられるのはとてつもなく恥ずかしいが、キスの時の互いの肌が触れるような快感が押し寄せてこない。
恥ずかしさと、触れて欲しい欲求とで、まどかは思わず身体をよじった。

まどかの変化に誠もそれとなく気づいたが、自分からは「裸になって欲しい」とは言えず、胸に添えた右手をそれ以上動かせずにいた。

気持ちはいいが、もどかしい時間がすぎる。

まどかの方が我慢できずに、提案をしてきた。

「後ろから……抱きしめてくれますか？」

あらわな胸を見せるのは恥ずかしい。
それでももっと、肌と肌を触れ合わせていたい。
まとがは後ろから抱きしめてもらうことで、それを叶えようと考えた。

戸惑う誠の前で、まどかは寝返りをうって背中を向ける。

そして、恥ずかしそうに、ゆっくりと浴衣を脱ぎだした。

「……」

肩があらわになり、まどかが浴衣から手を抜いていく。
浴衣はいつしか腰元まで下ろされ、まどかは上半身が裸の状態になった。

月夜の光の下で、まどかのうなじ、柔らかな背中、引き締まった腰のラインが浮かび上がっていた。

女性らしい白くて透き通る肌が、触れられるのを待っているように光っている。
そして、背中の背骨のラインが艶めかしく波うち、見ているだけで誠の性的な欲求をかきたてる。

誠もまどかの気持ちと同じだった。
もっと肌を触れ合わせていたい。
誠は浴衣を脱いで、上半身を同じように裸にした。

そっとまどかに寄り添う。
誠の胸とまどかの背中が触れ合う。

そして誠は手をまわし、まどかを抱きしめた。
まわした手は、まどかの胸を直に触れていた。

「あっ……」

まどかの口から、悩ましい吐息が漏れる。
体全身が包まれるような感触。
背中が触れ合い、足も絡めあうように触れ合っている。

胸も交差した手があたり、手のひらの温かい感触をまどかは胸いっぱいに感じていた。

キスした時とはまた違う気持よさと、安心感がゆっくりと身体を包んでいく。

愛する人に抱かれる喜びと安心感。

胸が触られている恥ずかしさよりも、いまは包まれる喜びが大きい。

触れられたい欲望と緊張が、しだいに満足感と気持よさに置き換わっていく。

まどかは触れられ、抱かれている喜びの中、一日の疲れのせいか、しだいに眠気が来るのを感じていた。

そしてそのまま、いつしかまどかの意識は眠りの中に落ちていった。

「まどかさん……？」

まどかから寝息が聞こえ始め、誠が思わず問いかけたが、返事はなかった。

本当に寝てしまったようだ。

誠の性的な興奮は、ゆっくりと落ち着いていった。

危なかった……。

確かに、曜子の言っていたことは正しかった。

まどかの意識が続いていたら、どこまで誠の理性が働いたかあやしい。

もっと、もっと……と言う心の欲求に任せていたら、最後まで行っていたかも知れない。

安堵の気持ちとともに、残念な気持ちも、誠の心のなかにはあった。

以前までは全くなかった、もっと触れていたい欲求が心のなかに確かに存在している。

好きな人への強い欲求。

誠はあらためて、まどかをぎゅっと抱きしめた。

触れていたい（R－15）（後書き）

すみません。長引いて。
あともう少しだけ、続きます。

秘密　（Ｒ－１５）（前書き）

この話までＲ－１５としておきます。

秘密　（R－15）

誠にも眠気が襲ってきていたが、まだ眠れない。

何しろ両手に、まどかのたわわな胸が乗っているのだから。

しかも、直に。

まだ触れただけで、揉んでいない。

揉んでみたいが、寝ているまどかにするべきかどうか悩むと、手が動かせない。

とは言え、寝始めたまどかを起こさないように、胸から手を離すこともできない。

……離せないことはないが、正直言えば、離したくない。

揉むべきか、揉まざるべきか。

安らかに眠るまどかの横で、かつてない葛藤に誠は悩まされていた。

まどかはぐっすり眠っている。

それに、ここまで許してくれた。

少し揉むぐらいは……いいよね……。

誰かが許してくれるわけではないが、誠は思わず心の中でそう考えた。

誠はそっと指に力を入れる。
手のひらの中で柔らかな胸が形を変えていく。

「あん……」

まどかの吐息にびっくりして、思わず誠は手を止めた。
起きたのかな、と心配したが、まどかはまだ眠っているようだ。
誠はほっと安堵の息を漏らした。

それにしても、信じられない柔らかさと気持ち良さだった。
ふわふわの、もっふもっふで、心地良い温かさ。
しかも、まどかの胸は、両手でもあふれるほどに大きい。

まどかを起こしてしまうかも知れないのに、誠は衝動を抑えることができなかった。

もう一度、指に力を入れると、たまらない弾力が指から脳へと、快感の刺激として伝わっていく。
胸をすくい上げ、揉みしだく。

「うっ……ん……」

まどかが大きく寝返りをうった。

誠が慌てて身を引いた場所に、まどかが仰向けの形で横たわる。

一糸まとわぬ姿に勘違いしそうな、まどかの裸体。
寝てもなお隆起している胸が、まどかの寝息とともにゆっくり上下している。
その胸の真ん中には小さな、きれいな突起。

「……！！」

あまりに強烈な視覚的刺激と1日疲れのためか、誠はそのまま意識を失った。

朝、太陽の光に目が覚めたまどかは、自分のあられもない姿に気付いて、顔を真っ赤にしながら急いで浴衣をなおした。

胸をしっかり隠したことでようやくほっとし、隣に眠る誠の寝顔を眺めた。

誠の寝顔はいつもよりも幼く、無防備に見える。

それが可愛らしく、まどかには感じられた。

まどかは昨夜の出来事を思い出して、あらためて顔を赤くした。

キスも、

胸に触れられたことも、

抱きしめられたことも、

想像していたよりももっと気持ちが良くて、幸せで、嬉しかった。

身体も頭も気持ちよさと嬉しさで、もっと触れて欲しいと願った。

そんな自分がいるなんて……と、まどかは驚くとともに、自分が恥ずかしくなった。

そんな自分のことを、誠はどう思っただろうか。

でも……。

まどかはあらためて、誠の寝顔を見た。

柔らかそうな唇。

まどかはいけないと思いつつ、いたずら心もあって、寝ている誠にそっとキスをした。

ちゅっ。

唇が触れると、胸がきゅんっとなる。

やっぱり嬉しくて、気持ちがいい。

誠はキスに気づかず、まだ眠っている。

まだ寝ているし……もう1回だけ……。

結局、3回キスしてしまったのは、まどかだけの秘密。

朝食はバイキングだった。
それぞれに好きな物をトレーに乗せて、2つのテーブルをくっつけて8人で座る。
みんな元気で明るい顔の中、ひとり顔色の悪い人が。

「……桜さん、どうしたんですか？」

調子の悪そうな桜に、誠が心配をして声をかけた。

「二日酔い……」
「……飲酒は二十歳になってから」
「解ってる。反省してる。麻友につられて……」

麻友を見てみると、こちらはいたっていつも通りの様子。
誠の視線に、微笑まで返す余裕がある。
どうやらかなりお酒に強いらしい。

「そんなことより、まーちゃんはまどかとキスしたの？」

桜が顔を上げて誠に聞いてきた。
誠とまどかは同時に顔を赤くして、視線を合わせ目で会話する。
ここは、聞かれた誠が答えなくてはいけない。

「はい」

誠ははっきりと返事をし、まどかは恥ずかしそうに下を向いてしまった。
曜子がそんなまどかの頭を撫でていた。

「じゃあみんなで、ふたりのファーストキスに乾杯！」

桜の掛け声で、なぜかミルクとオレンジジュースの乾杯。
周りのお客さんからの視線がすこしばかり痛かった。

「あーあ、私も新しい恋をしよ」

パンをかじりながら、麻友がため息混じりにつぶやく。

「確かに、恋もちょっといいかな、と思った」

サラダをつつきながら、美緒が柔らかな笑顔を浮かべて言った。

「私もちゃんと恋をするぞー！」

桜がトマトジュースを片手に、力強く拳を上げて宣言する。

そんなみんなの様子を眺め、まどかと誠は互いに視線を合わせ、
笑顔を浮かべた。

チェックアウトをすませると、みんなでもう一度だけ砂浜に出た。
今日は風が出ていて、いくらか昨日より涼しい。

「楽しかったね」

桜がうーんと背伸びをしながらつぶやくと、みんなで「うん」と
うなずいて答えた。

「またこのメンバーでどこか行けるといいね」
「山とか？」
「温泉かな？」
「それだ、温泉！　温泉といえば混浴！」
「……混浴は却下させて下さい」

誠が頭を抱える様子を見て、みんなで笑った。

そうしてたった一泊の、深く思い出に残る海旅行は終わった。

生活スタイル

新学期とともにいつもの日常が戻ったのだが、誠もまどかも今までと違う自分に戸惑っていた。
教室にいる時は相手を見つけようとしてしまい、家に帰ると声を聞きたくなってしまう。
勉強をしていても時折、旅行のことを思い出して手が止まる。
身体に触れたくて、キスをしたくて。

1年前まではひとりでいることが普通だったのに、今はひとりだと何か足りない。
勉強にも授業にも集中できない。
ふたりとも、今のままではいけないこと解っていた。
そんな強い感情を持て余したふたりは、まどかの部屋でこれからの相談をすることにした。

「辛いけど、1週間会わないでいる、というのはどうでしょう」

誠がひとつの方法として提案した。

「会わない、ですか？」
「逆療法で、会いたい、という熱を少し冷ますというか」
「う……ん……」

まどかが気の乗らない返事をする。

誠も同じ気持ちだから、よく解る。
やっぱり別の方法を考えようかと誠が思案し、沈黙が広がる。

「……解りました。私も師匠の集中を邪魔する存在にはなりたくないですし、自分の夢も叶えないといけない。やってみます」

まどかが少し残念そうに、でも気持ちを決めた瞳でそう話した。

「まどかさん」
「師匠。頑張ってみましょう。たった1週間です」
「そうですね。1週間」
「そうですよ。1週間」

何度も1週間という言葉を繰り返す。
言葉とは裏腹に、1週間がとても長く感じたからなのかも知れない。

まどかが何かを言いたげに、もじもじし始める。
それが何を意味するかは聞くまでもなかった。
誠も同じ気持ちだから。

誠が顔を寄せると、まどかも恥ずかしそうに、でも嬉しそうに顔を近づけてくる。
1週間会えない分のキス。

旅行の時のような激しいものではないが、それでもふたりの胸に満足感が広がっていく。

唇を離し、互いに幸せの笑みを浮かべると、ぎゅっとハグしあって1週間分の補充をした。

……したはずだったが、３日ほどで枯渇した。

４日目、再びまどかの部屋で会ったふたりは、一緒に落ち込んでいた。

「持ちませんでした……」

「私も……」

１日目は良かった。集中して過ごすことも出来て、これならば１週間は順調に行くものと思った。

２日目に変調をきたした。胸がなぜか苦しくなってきた。

３日目、気を抜くと、すぐにまどかの顔が浮かんでしまう。それに、他の男が寄ってきているのではないか、気持ちが離れてないか、気が気でなくなる。

４日目、我慢の限界を感じて、どちらからともなく声をかけて今に至る。

お互い同じ気持ちだったことが解り、喜んでいいやら、悲しんでいいやら。

ふたりとも自分の気持ちを持て余していた。

「とにかく、作戦変更です」

「はい」

「もうこうなったら、毎日会いましょう」

「そうですね」

まどかもうなずきながら、どこか嬉しそうだ。
提案している誠も、思わず顔が緩んでしまう。

「えっと……、うん、そう。昨日、考えたんです」
「はい」
「僕がまどかさんの家庭教師になります」
「……？　今もそうじゃないんですか？」
「よく考えたんです。なぜ勉強しないといけないのか」
「えっと、医学部に合格するため、ですか？」
「そう。今、勉強している理由はそこですね。で、ここ数年間のセンター試験と入試試験の過去問を解いてみたのです」
「もっ、もう！？」

誠の行動に、まどかは久しぶりにびっくりした。
そして、ごくりとつばを飲み込む。

「それで、結果は」
「はい。ほとんど全部出来ました」
「……本当に、神様ですね」

高校2年の途中で合格圏内て……。
今更ながら、誠にはびっくりさせられる。
そういえば、1年の時に3年生まで英語を終わらせたと言っていたが、おそらく他の教科も終わっていたのだろう。

「まどかさんとふたりで、一緒に合格したい。そのために、私は全面的にまどかさんをサポートしていこうと決めたんです」
「全面的サポート？」

「はい。センター試験と入試試験をやりつくして、傾向と対策を検討し、そのために必要な教科書・参考書・問題集を吟味し、まどかさんの現在の勉強状況と進行具合を考えて計画を立て、効率的に効果的に、そして絶対に合格させようと」

いつにない誠の力強い言葉。

こと勉強のことになると、誠は自信をもって発言してくれる。

まどかはちょっとだけ、ぽーっとなった。

「えっ、でも、そうしたら師匠の勉強時間が」

「教えることで、私も勉強になります。趣味の勉強を減らせばいいだけですから」

「趣味の勉強って……」

「試験には関係のない勉強です。楽しくてやってしまうのですが」

「特技も趣味も、勉強ですね。さすがです」

まどかもやや呆れ気味に誠を褒めたが、誠は嬉しそうに頭をかいた。

「平日はうちでやりましょう。週末は図書館とまどかさんの家でいいですか？」

「はい、いいと思います」

「それで、その……月に1日か2日は……」

「はい？」

「……デートを」

「あっ、はい！！」

勉強ばかりを考えているかなと思ったら、ちゃんとふたりの時間も事も考えてくれていたことに、まどかは感動した。

「デート、嬉しいです！」
「勉強ばかりでは。時には気分転換も大切かな、と」
「そうですね」
「あと、部活のことはどうしたら良いか」

誠はちゃんとまどかの陸上部のことも考えてくれていた。
そのことに嬉しさを感じつつ、まどかはまだ伝えていなかった決意を誠に話した。

「実は次の大会で、部活を辞めようと思っています」
「そうなんですか！？」

初めて聞いた誠がびっくりする。
なにしろ、今までのまどかは部活を何よりも大切にしていた印象が、誠にはあった。

「3年になったら受験に集中するためにも、部活は続けられないと思っていました。そうすると、この次の大会が最後の大会になるんです。その方がきりがいいかな、と思って部活の先生に相談して話してあったんです」
「そうだったんですか……」
「だから、次の大会。師匠にも見に来てほしくって」
「……」
「もしかしたら、人生で最後の大会になるかも知れません」

小学から始めた陸上。
中学は陸上一色と言っても良かった。
その陸上から離れる時が来るなんて。
それも、もうすぐ。

まどかは自分で決めたことだったが、それを思う度に寂しい気持ちになる。
せめて最後の大会ぐらいは、誠にも見て欲しかった。

「はい。行きます。必ず」
「嬉しいです。また日程と場所は教えますね」
「はい」

こうして、これからのおおよその生活スタイルが決まったのだった。

最後の大会

まどかの最後の大会はまだ幾分暑さの残る、よく晴れた日曜に行われた。
誠はほとんど人の座っていない観客席に腰をおろし、まどかの様子を眺めていた。

学校で走っている姿を見たことはあるが、こうして大会で走る姿を見るのは初めてだ。
そして、まどかの言葉を借りれば、これが最後になるかも知れない。
すべてを見逃さないように、誠は真剣にまどかのことを見つめ続けた。

今日のまどかは、いつもより緊張しているように見える。
初めに誠を見つけた時、笑顔で手を振ってきた以外は、いつにない真剣な表情を浮かべている。
まどかはストレッチや、軽いダッシュ練習を重ね、身体の調子を整えていく。

いよいよ、大会が始まった。

誠はもっと歓声があったり、ファンフーレが鳴ったりするものかと思っていたが、簡単な案内放送とスタートの合図の音ぐらいで、競技は静かに始まった。
最初は練習かと思っていたが、すでに大会は始まっていて、順位

がどんどんと決まっていく。
参加人数が沢山いるので一回で決まるわけではなく、何回か勝ち抜いて決めるらしい。
しばらくして、まどかの順番がやってきた。

「頑張って！！」

聞こえないだろうと思いつつ、誠は思わず声を上げた。
一瞬だけまどかの視線が誠に向いて笑顔になり、また視線が元に戻る。

まどかはスタートラインに立ち、合図と共に手をつく。
少し腰が上がり、いつでも走り出せる体勢になる。

パァーン！

合図と共に、まどかが走りだす。
まずまず良いスタートがきれたようだ。
少しだけみんなよりも身体が前に出ている。
長い手足が大きなスライドで伸びていくと、差はそれほどつかなかったが、そのまま1位でゴールを駆け抜けた。

「やった！」

まことは思わず握りしめていた拳を振り上げて喜んだ。
肩で息をするまどかがちらっとこちらを見て、微笑んだように見える。
誠は思わず手を振った。

まどかもやっぱり見ていてくれたようで、嬉しそうに手を振り返してきた。

まどかは結局、準決勝で負けてしまった。
ほんのわずかな差だったが、決勝には進出できなかった。
終わった後、タオルで顔を覆っていたのを見ると、もしかしたら泣いていたのかも知れない。

負けて悔しかったのか。
それとも、陸上部活動が終わることへの寂しさか。
あるいは両方なのかも知れない。

誠はすぐに行って抱きしめたい衝動に駆られたが、まどかはひとりで気持ちを落ち着かせると、他の人達の応援に向かった。

すべての競技が終わり、部員と先生とで集まって何かミーティングが始まる。
その最後、拍手が起きてまどかが頭を下げていた。
何人かの女の子が、まどかを抱きしめて一緒に泣いてくれているようだ。
まどかももらい泣きしている。

その様子を見て、誠もちょっとだけ泣いてしまった。

競技場の入り口でまどかを待っていると、部員たちに囲まれたま

どかが出てきた。
部員の子達も誠を見つけると、嬉しそうにまどかを小突いて、誠の元へ送り出した。
まどかは恥ずかしそうに、そしてちょっと嬉しそうにうなずいて、誠の元へ小走りに駆け寄って来た。
まどかは誠のすぐ前で立ち止まった。

「負けちゃいました」
「うん」
「終わっちゃいました」
「うん」
「でも、頑張りました」
「そうだね」

誠はまどかを抱きしめて、頭を撫でた。

遠くで部員の仲間たちが、わぁっと歓声を上げる。
まだこちらを見ていたようだ。

誠はちょっと恥ずかしかったが、まどかの頭を撫で続けた。

「よく頑張りました」
「はい」

誠の肩のところで、まどかは少し泣いているのかも知れない。
頭を撫でられるままに任せ、まどかはしばらく顔を上げなかった。

慰めるように、誠はまどかの背中をポンポンと叩いた。
そうしてようやく落ち着いたまどかが顔を上げて、ゆっくりと誠

から離れた。

「さっ、帰りましょう」

誠は手を出して、まどかの手を握った。

「はい！」

まどかはようやくいつもの笑顔に戻って、誠の手をぎゅっと握りしめる。

いつの間にか夕暮れ近くなっていた街並みを、ふたりは並んで歩いた。

それ以上のこと

今日は誠の家で勉強をする日なのだが、ひとつ大きな問題が生じていた。

話は夏休み明けに戻り、海旅行から帰ってきた誠に対して、真穂が質問をした時のこと。

「誠、まどかちゃんの水着写真、撮ってきた？」
「僕は撮っていません。撮ってくれた人が後でくれるので、待っていて下さい」
「何だ、楽しみにしていたのに」

真穂はしばらくブツブツと何かをつぶやいていた。

「あっ、それと、ちゃんとキスした？」

真穂の突然の質問に、誠は食べていたご飯を軽く吹いてしまった。

「まさか、一泊してキスもしていないなんて言わさないわよ」

真穂が冷ややかな視線で誠を見つめてくる。

「……した」
「何？　聞こえない」

誠は大きく息を吸い込む。

「キスしました」
「おぉ！」

真穂が誠の背中をバンバンと叩き、また誠はご飯を吹き出した。

「よくやった！　ヘタレなりに頑張った。まさかまどかちゃんの方からキスしてきたわけじゃないわよね」

「なんてことを聞いてくるんですか……僕からです」

若干、周囲に煽られたり、まどかが催促はしてきたが。

「よし！　よし！　で、それ以上は？」

誠の箸がピタリと止まる。

「今、何と？」
「それ以上は？」
「……母親の言うセリフですか」
「母親だから聞くのよ。あんな可愛い子に、高校生にもなって手ひとつ出さないなんて、どこか問題があるんじゃないかと、私なりに心配しているのよ」

誠は、はぁ、とため息をついた。

「息子はヘタレで奥手ですが、正常だと思います」
「つまり、まどかちゃんを見て、その気になることはあると」
「げほっ！」

誠はご飯を思いっきり喉につまらせた。
何回か咳き込み、お茶を飲んでようやく落ち着きを取り戻す。
「なっ、何を言ってるんですか！？」
「だって、正常って言ったら、そういうことでしょう」
「いや、その、だから」
確かにその気になることはあるので、強く否定はできない。
誠は顔を赤くして、言葉を無くした。
「で、それ以上のことしたの？」
「やっぱり聞くんですね」
「聞くわよ。聞かせて」
「してません」
「してないの？」
「はい」
「……ヘタレ」
誠は頭を殴られたような衝撃を感じた。
確かに、機会はあった。でも、まどかが寝てしまったのだから。
いやいや、確かに寝なくても、それ以上行く自信はなかったのだけれども。
……やっぱりヘタレなのか？
「よし、解った。今度、家での勉強会の時に、ちょうど飲み会や食事会が入ったら、遅くまで帰ってこないから！」
「かっ、母さん……」
誠はだんだん母親の暴走についていけず、へたりこんだ。

「その代わり、無理はダメよ！　まどかちゃんが怖がったり、嫌がったら無理しちゃ駄目。時間をかけて、ゆっくりと！」
「何の講義ですか……」
「保健体育よ」

以前に、そんなやり取りがあった。
とは言え、そう真穂も飲み会や食事会があるわけでもなく、誠もそのことを忘れていた。

今日、真穂は遅くまで帰ってこない。

「夜１０時までは絶対に帰ってこないから。解った？　１０時までは大丈夫よ。……と言っても、あまり遅いと親御さんも心配するから、９時までには帰したほうがいいか……。でも学校帰ってきてから９時までだから、十分よね！　それじゃあ、行ってらっしゃい！」

真穂は今朝、出ていく間際の誠に、勝手にそう伝えて玄関の扉を閉めた。

最近は学校から家までふたり一緒に帰るので、家に上がってもいつも真穂はいない。
夕方頃に、真穂が帰ってきて夕食を一緒に食べるのがいつものパターンだった。

だから、今日も家に上がる時に、まどかは特に何も違和感を感じ

ていないようだった。
ただひとつだけ部屋がいつもと違う所があり、それに気付いた誠はがっくりと膝から落ちた。

まどかも意味は解らなかったようだが、違いには気付いたようだ。

「あれ、奥の部屋に布団が敷いてありますね。真穂さん、風邪ですか？」
「……あれは罠です」
「罠？」
「母はとてもまどかさんのことを気に入っています」
「はい」
「私ともっと仲良くなって欲しいようです」
「？」

まどかは布団とこの話がどこで結びつくのか解らず、首を捻った。

「今日、母は仕事場の飲み会で、夜１０時まで帰ってきません」
「あっ、そうなんですか……え？」
「そういうことです」

誠の言おうとしている事を理解したまどかは、一気に顔を赤くした。
よく見ると、布団の横にティッシュまで。

誠が立ち上がり、台所と部屋を分ける襖を閉じた。

「見なかったということで」
「……はい」

二人は沈黙のまま、勉強を始めた。
いつものように復習から入り、誠が問題を出してまどかが答え……。

しかし、互いにいつものように集中してできていないのは、はっきりしていた。
速度が遅なったり、手が止まったり、話を繰り返したりしてしまう。

誠の説明が急に止まり、動かなくなった。

「……師匠？」

まどかが問いかけても、誠が動かない。
どうしたのかと心配になり、まどかが誠の顔を覗き込もうとしたところ、誠はすっと顔を上げてまどか見つめた。

「まどかさん」
「はっ、はい」
「ちょっと話を聞いて下さい」
「はい」

まどかはシャープペンを置き、姿勢を正して誠の言葉を待ったが、誠はなかなか話しだしてくれない。
どうも話すべきかどうか、迷っているようだ。
声を掛けたくなったまどかだったが、何とか誠の言葉を待った。

「あの、正直に話しますけど、嫌いにならないで下さいね」

思いがけない出だしに、まどかがびっくりしてしまう。

「師匠のこと、嫌いになんかなりません。何ですか？　何でも言って下さい」

そう、まどかは誠のことだったら、何でも聞きたかった。
理解したいし、共有したいし、協力したい。
まどかは真剣に誠の言葉を受け取るつもりでいた。

「その、海の旅行から、まどかさんのことを意識してしまって」
「あっ……はい」
「キスしたかったり、抱きしめたかったり、その……触りたかったり」

まどかは黙ってうなずく。

「最近は、それ以上のことも望んでしまう自分がいて、困っています。
その……男は、精巣で毎日1億個の精子が作られるので、定期的に出さないといけないんです。
それこそ、トイレに行くように。
それで、精子がたまると出したい生理的な欲求が起きてきて、そうするとまどかさんのことを考えてしまって、その……したい気持ちになってしまうんです」

最後の方は、消え入りそうなぐらい小さな声で誠はつぶやいた。
誠も恥ずかしいに違いない。
まどかも聞いていて、頬が熱くなるのを感じる。
誠は言葉を続けた。

「そんな自分が嫌なんです。まどかさんを生理的欲求のはけ口にし

たくない。
それに、例え避妊をちゃんとしたとしても１００％ではないから、妊娠してしまうかも知れない。
そうしたら、まだ養うことも結婚もできないから、堕ろしてもらわないといけないかも知れない。
……それが僕は嫌なんです」
誠が悩んで出した結論だった。
したい気持ちがある。体も心の準備もできている。
でも、年齢のこと、責任のこと、受験のこと。
そして、命が授かったとしら、愛し慈しんで育ててあげたい。
それには、まだふたりは若すぎる。
だからこれ以上、今は先に進めない。
まどかは何度もうなずいて、初めて口を開いた。
「師匠が正直に話してくれたので、私も話します。聞いて下さい」
「はい」
今度は、まどかが話し始めた。
「私も旅行の出来事は、忘れられません。キスすること、抱きしめられること、肌が触れることがこんなに気持ちよくて、嬉しくて、幸せなものなんて知りませんでした」
「……」
「でも、女はその男にあるような生理的欲求はあまりないので、時折キスして抱きしめてもらうだけで、けっこう満足できます」
まどかの気持ちを聞いて、誠は深くうなずいた。

聞いてみないとわからない互いの気持ち。
恥ずかしいことだが、お互いに確認できてよかった、と感じていた。

「だから、師匠の考えで、私もいいと思います。ただ……」
「ただ？」
「その、男の人って、我慢ができるものなんですか？」
「いや、その……出してしまえば、しばらくは欲求は抑えられます」
「そうなんですか。その……どのぐらいの頻度で？」

まどかの問に、誠は頬が熱くなる。
誠は顔を下にむけて、小さな声でつぶやいた。

「1日に1度か2度です」
「そんなに！？　……男の人って大変なんですね」
「はい……」
「あの、手伝いましょうか？」
「……はい？」

誠は恥ずかしくなってもじもじしていると、まどかが何かとんでもない提案をしてきていた。

「手伝うって」
「その、私はよく解らないのですが、何か役に立てないかな、と思って」
「いっ、いや！　いいです。大丈夫です！」

誠は想像してみて、あまりの刺激的な光景にめまいがした。
おそらく、まどかはよく解らずに発言しているのだろう。

それに、頭の中でまどかは十分に役に立っています、とは言えなかった。

「私に遠慮しないで下さいね。少しでも役に立ちたいんです」

「有り難うございます。気持ちだけでもう十分です」

まどかがちょっと残念そうな顔をしたのは、どう受け止めればよかったのだろうか。

誠は真剣に悩んでしまった。

手を離さない

「えっと、その。夕食にしましょう」
「はい、あの、私も手伝うので教えて下さい」
「はい、解りました」

ふたりは立ち上がって台所に立ち、買ってきた食材などを調理し始めた。

誠がひとつひとつ切り方や、扱い方を教え、ふたりで料理を作り上げていく。
最近、こうして一緒に料理をつくることが増えてきて、まどかもだんだんと慣れてきた。

今日の料理は、たらこスパゲティとサラダとコーンスープ。
比較的、手間のかからない、作りやすい料理。

互いに向い合って料理を置いて、

「「いただきます」」

と声を合わせ、食べ始めた。

「うん。おいしい」
「本当。まどかさんもだんだん手馴れてきましたね」
「思っていたより、料理ってやればできるんだと自信がついてきました」
「才能があるんですよ」

「いえ、きっと教える方が上手なんです」

そんなたわいもない会話を交わす。

誠もまどかも、こんな時間がとても好きだった。

食後にゆっくりとお茶を飲み、ふたりで後片付けをする。

そしてもう一度、ふたりで勉強を始める。

まどかを家まで送る時間が、あまり遅くなってはいけない。

さっき思いを吐き出して確認しあえたからか、時間的な制約のお陰か、今度は集中して勉強に取り組むことができ、何とか前半戦の遅れを取り戻して、今日の勉強は終了した。

「今日はこれで終わりです」

「有り難うございました」

ふたりで互いに頭を下げる。

何故か恒例になった、ふたりの終了の挨拶。

そして、誰もいない時の、終わった時のご褒美。

まどかが手を広げると、誠は立ち上がってまどかの元へ。

ぎゅっ。

以前はあれほど緊張したハグも、今ではすっかり慣れたもので。

キスも少しずつ、慣れてきた。

それでも、唇が触れた瞬間に身体に広がる気持よさに、いつもふたりは幸せな気持ちに包まれるのだった。

キスの後に、ふたりは互いの肌の温度を確かめ合うように、強く抱きしめあった。

そして、誰も来ない空間ということが、何となくふたりの心を抑えていた扉をわずかに開けてしまった。

「あの」
「はい？」
「旅行の時のキスを……してもいいですか」
「……はい」

誠はキスだけならば、と思った。
まどかも誠が求める気持ちに応えたかった。

そっと唇を合わせた後、ふたりは舌を絡め合った。
ゆっくりと、互いを確かめるように。

今まで押し込めていた思いが吹き出したように、長いキスが続く。

どちらからともなく離れた時、ふたりとも力が抜けたように放心状態になった。

支えあうように、こつん、と額を合わせ、余韻を楽しむように軽いキスを繰り返す。

これで満足できると思っていた誠の心は、あの時と同じようにも

っと触れたいという衝動が沸き上がってきていた。
いけない、という気持ちと、もう少しぐらいは、と言う気持ちが葛藤し始める。
誠は我慢するように、強く、強く、まどかを抱きしめた。
「あっ……師匠？」
キスの余韻に満足していたまどかは、誠の行動にすこし戸惑っていた。
それでも、誠は強く抱きしめ続ける。
まどかは何となく、そんな誠の気持ちが解ってしまった。
「もしかして、したい気持ちを、我慢してくれているんですか？」
誠の身体がびくっと震える。
誠は言葉にしなかったが、それが答えであることは、まどかにも伝わった。
まどかは顔を赤くしながらも、恥ずかしさとは反対に、何となく身体がもぞもぞと疼いた。
身体に起きている変化が何なのか、まどかにも理解できなかったが、誠の触りたい気持ちが伝染したように、触れられたい気持ちが身体に広がっていく。
「……」
まどかが誠の手を取る。
そして、その手を自分の胸の上に置いた。
「！！」

誠は驚いて、まどかの瞳を見つめる。
恥ずかしそうにしているまどかの瞳はすこし赤くなり、何となく潤んでいるように見える。

「胸だけなら……いいですよ」

手の平から、まどかの鼓動が伝わってくる。
少し早くて強く、まどかも緊張しているのが誠にも伝わった。

誠の手に力が入る。
すこし力を入れすぎたのか、まどかの顔が苦痛でゆがむ。
誠ははっとして、手の力を抜いた。

「ごめんなさい」

まどかが頭を横に振った。

「謝らないで下さい。大丈夫です」

まどかはそっとキスをしてくれて、微笑んでくれた。
まどかの優しさに、誠ははっとした。

まどかは多分、いつも誠に世話になってばかりで、何か役に立ちたいと考えている。
何かをしたい、ということが少ない誠が、初めて伝えてしまった欲求……まどかは、それにできるところで応えようとしたのではないか。

恥ずかしさを抑えて。

誠はあらためて、まどかをぎゅっと抱きしめた。

「有り難う。もう、大丈夫です」

「本当ですか？　無理していませんか？」

「はい、落ち着きました。でも、危なかったです」

誠の言葉に、まどかがふふっと笑った。

「私なんかに、そういう気持ちになってくれるなんて、何となく嬉しいです」

誠はびっくりして身体を離し、まどかと視線を合わせる。

「何を言ってるんですか。まどかさんは、凄く魅力的です。気を抜くと、気持ちが暴走しそうで大変です……」

まどかは嬉しそうに笑った。

「私にとって、師匠もそうですよ」

「そうなんですか？」

「私もキスしたいと思ったり、……その、触れて欲しかったりします」

まどかの言葉に、誠がびっくりした表情を浮かべた。

その表情を見て、まどかが困ったような顔をした。

「やっぱり、そんな女の子って、変ですか？」

「いや、そうじゃなくて、その……あの……嬉しいです」

「嬉しい？」

「気持ちが同じなんだって。自分の欲求を満たすだけの行為ならば、したくないと思っているので」
「あっ、そうか……。大丈夫ですよ。いつでも同じです。きっと」
まどかが自慢気にふふっと笑う。
その笑顔が可愛すぎて、誠はまたまどかを強く抱きしめた。
「有り難う。まどかさんを好きになって良かった」
まどかも嬉しそうに、誠を抱きしめた。
「私もです。好きになって良かった」
ふたりは思いを確認するように、軽いキスをした。
「うん。まだまだ一緒にいたいけど、遅くならない間に送ります」
「そうですね。私も一緒にいたいけど、今日はこれで満足しておきます」
お互いに、ふふっと笑う。
真穂が用意した布団を使うことはなかった。
でも十分、二人の絆は強くなった気が、誠はした。
繋いだ手を、決して離さない。
まどかを見つめながら、誠はそう強く思った。

クリスマスイブ

久しぶりのデートに、まどかはすこし緊張していた。
理由は解っている。
今日は12月24日……クリスマスイブ。
今までクリスマスイブと言っても誕生日と近いせいか、何かをやった記憶がまどかにはなかった。
キリスト教ということもないし、あえてこの日の夜に用事が入ることもなかった。それが自然なことで意識をしたこともなかった。
提案してきたのは、誠からだった。

「12月24日の夜、空いていますか？」

冬休みも特に予定など入っていないまどかは、こくん、とうなずいた。

「良ければ、ふたりで外で食事をしませんか」
「はっ、はい！」

今までデートといえば、昼間に映画に行ったり、科学館に行ったり、買い物に付き合ってもらったり。
夜に出歩くことは、ほとんど無かった。

聖夜のデート。
何があるわけでもないのだろうけど、何となくまどかは胸がドキドキしていた。

セーターのワンピースの上にコートを羽織り、下はレギンスにブーツを履くことにした。
いつもしない化粧も、今日ぐらいはしていこう。
髪はすこしふわっとさせて、軽くウェーブをかけて。

可愛くなれただろうか……。

まどかは何度も鏡の前で、自分の姿を確かめた。
待ち合わせの時間が近づいてくる。

「よし、行こう」

まどかは家を出て、待ち合わせの店に向かった。
店も誠が選んでくれた。
ふたりの家からそれほど遠くないが、夫婦で営んでいる小さな、それでいてとても雰囲気のいいイタリアンレストラン。
味もとてもいいが値段も安いので、予約をしないとなかなか入れないと聞いたことがある。
まどかはこの店に入るのは初めてで、いつか来てみたいとは思っていた。
その店に、まさか誠とふたりで行くことになるなんて。

「……」

まだ夕方の6時前だがすでにあたりは暗く、店の明かりだけが温かくあたりを照らしていた。
夕飯の時間には少し早いせいか、店の中からはほとんど音が聞こえてこない。

まどかはゆっくりと木製のドアを開けた。

かすかにジャズの落ち着いた音がまどかの耳に入り、ふわっと包むような温かな空気に包まれた。

店の中は間接照明で穏やかに照らし出され、カウンターとわずか３つほどテーブルが見える。

その中のひとつ、中央の席に誠が座っていた。

まどかの姿を見つけて、誠が嬉しそうに手を上げていた。

まどかも思わず笑みがこぼれた。

「遅くなりました」

「お互いいつも早いだけです。遅れていないですよ」

まどかも誠の向かい側の席に座った。

脱いだコートは、店の奥さんと思われる４０歳前後の女性が、笑顔で受け取ってくれた。

「飲み物はどうされますか？」

ふたりはメニューを見せてもらい、ブラッドオレンジジュースを頼むことにした。

食事はコースで決まっているのか、肉と魚のどちらがいいか、苦手なものはないかだけ聞かれて店の人は離れていった。

まどかはあたりを見渡してつぶやいた。

「雰囲気のいい店ですね。一度来てみたかったんです」

「良かった。まどかさん、もしかして来たことがあるかな、ってちょっと心配していました」

「師匠は来たことがあるんですか？」

「いや、初めてです。いろいろ考えて調べて、ここにしようと決めました」
「そうなんですか……有り難うございます」
「でも正直、緊張しています」

誠の正直な感想に、まどかはすこし笑ってしまった。

「初めてとは言わないですが、ほとんど経験がないのでテーブルマナーとか、母に聞いてしまいました」
「真穂さんもお呼びすれば良かったのに」
「『クリスマスイブなんだから、ふたりで行ってきなさい』って断られました」
「真穂さんらしいですね」

まどかにとって真穂は、もう一人のお母さんというか、頼れるお姉さんのような存在となっていた。
家族へ向けるような愛情を、真穂から感じる。
いくら感謝してもしきれない。

ジュースと共に、前菜が置かれる。
サラダとプロシュットが混ざり合い、味付けがほどこされているようだ。
ふたりで乾杯して、前菜を食べ始める。

「美味しい」
「あっ、これは凄い」

今まで食べたことがない味に、ふたりは驚きの声を上げた。
経験が少ないとは言え、十分感動できる味だった。

「何かドキドキします。これからの料理が楽しみです」
「ですね。こんなの初めてです」
「いいお店を選びましたね」
「そう言ってもらえて、嬉しいです」

誠は安堵して、笑顔でほっと息を吐いた。
ふたりはしばらく前菜を食べながら、料理談義に花を咲かせた。

まどかはふと思い出したように、誠に質問をした。

「そう言えばどうして、今月のデートを今夜にしたのですか？」

まどかの質問に、誠は恥ずかしそうに表情を浮かべながら説明してくれた。

「月に1度はデートをしましょう、と提案しておきながら、デートって何をしたらいいのか解らなかったのです」
「ふふ、師匠らしいですね」
「それで、本屋さんに行ってデートに関する本を読んでみました」
「やっぱりそうですか。勉強するのはいいですけど、あんまり本通りではなくていいですからね。ふたりで会えれば、どこでも私は楽しいですから」

まどかは誠が形を気にするあまり、楽しむことを忘れてしまわないか、負担をかけたりしないか、心配になってしまった。
それを誠は笑ってうなずく。

「定番をしてみたいな、と思ったんです」
「定番を？」
「はい。本を読みながら、まどかさんと一緒に過ごしたらと想像し

たら、どのデートコースも楽しそうで。本を読むだけで幸せになってしまって」
「そうなんですか」
誠の嬉しそうな顔を見て、まどかまで幸せな気持ちになってしまった。
そう言えば、映画に行った時も、買い物に付きあわせた時も、誠は嬉しそうだった。
その時はあまり考えなかったが、どうやらデートそのものも楽しんでくれていたようだ。
「まだまだ、こんなにしてみたいことがある。そう思うだけで楽しみで」
「はい。いっぱいしましょうね」
まどかは心が温かくなるのを感じた。
きっとそれは、食べている料理の温かさのためだけではない。
まどかもまだ見ぬ未来が、楽しみに感じてきた。
「その前に受験がありますが、まどかさんなら大丈夫です」
「本当ですか？　まだまだ自信がもてません。ここのところ成長しているのかどうか心配で」
「成長しています。成長って徐々に上がるようなイメージを抱きがちなのですが、どちらかというと階段状というか、波のようなイメージですね」
「階段ですか？」
「しばらく頑張っても横ばいのような感触の後に急に結果が出たり、頑張っているのに時に悪くなったり」
「そうなんですか」

「不思議ですけど、そんな感じですね」

誠はうなずきながら、パスタを口にしていた。

トマト系の海鮮パスタで、時折ピリッと辛味がある。

「それでも、正しい方法で、正しく積み重ねていけば、たどり着けると思います」

「正しい方法」

「そう。目的地が決まっている場合、方向が正しくないとたどり着けませんよね」

「はい」

「不安になるのは、方向が正しいか、量が正しいか、自分が立っている位置が解らなかったり、この先がどれほどあるかが解らないからだと思います」

「そうですね。解ります」

いま言われるままに勉強はしているが、はたしてこれで医学部に合格できるのか、時折不安になることがある。

誠はその位置が見えているのか、いつも「大丈夫ですよ。自信持って」と言ってくれるが、まどかにはまだ実感が無い。

自分の位置や、これからの距離がはっきり解れば、やるべき事がしっかり見えていれば、不安ももっと和らぐだろうと思う。

「そのあたりは、徹底的に調べました。今はもちろんまだ先はありますが、あと1年でたどり着けます」

「そう言えば、あと1年ですね。言われて初めて気がつきました。……ドキドキする……」

1年なんてあっという間だ。

本当に間に合うのだろうか。

不安そうな顔をしたからだろうか、誠が手を伸ばして頭を撫でてくれた。
真穂の手よりも大きくて、何となく温かい。
ゆっくりと緊張感が溶けているのを感じていた。

「たくさんの問題集をやろうと思って焦らなくていい。ひとつひとつの完璧を重ねて、習熟していく方がいい」

誠は何度も大丈夫と言ってくれて、まどかはゆっくりと安心していった。
誠は嘘をつかない。
そのことは信頼している。

指輪

メインの料理が運ばれてきた。
誠は肉料理を、まどかは魚料理を。

気付いたら、周りのテーブルにもお客さんも座っていて、店内はほとんど満員となっていた。
家族連れの人もいれば、恋人同士と思われる男女もいる。
それぞれに幸せそうで、笑顔を浮かべていた。

まどかは改めて、クリスマスイブなんだな、と感じる。
店内の音楽もジャズからいつの間にかクリスマスソングに変わっていた。

料理はやっぱり美味しかった。
塩胡椒とオリーブオイルの味加減が絶妙で、ふたりでいること、会話の楽しさもあって、幸せな気持ちに包まれる。

「美味しくって幸せ」

まどかが柔らかな笑顔を浮かべると、それを見た誠は頬を赤くして、やや落ち着かない動きをし始めた。
何となく慌ただしいというか、何かをしようとしているような。

「師匠、どうしたんですか？」
「いや、その……クリスマスプレゼントを……用意していて」
「あっ！」

まどかはすっかり忘れていた。

クリスマスのプレゼントは子供だけのもの、と思い込んでいて、男女で交換し合うプレゼントなんて考えもしなかった。

まどかは、恥ずかしさに耳まで熱くなるのを感じた。

「まどかさん、気にしないで下さい！　僕があげたかった物があるだけだから。それを受けとってくれたら……喜んでくれたら……それが僕にとってプレゼントなので」

「師匠からのプレゼント、喜ばないはずなんてないです！」

まどかは思わず、すこし大きな声で言ってしまい、あわてて口に手を当てたが少し遅かったようだ。

小さな店内で、さざ波のような笑い声が広がった。

恥ずかしさのあまり、うつむいたまどかの前に、誠が小さな箱を置いた。

水色の小さな箱。

「とっても安い物でごめんなさい」

誠が本当に申し訳なさそうな表情をするが、安いかどうかなんてまどかは気にしていなかった。

誠からの初めてのプレゼント。

胸の動悸を感じながら、まどかは箱を手に取り、そっと蓋を開けた。

「あっ」

中には、指輪が入っていた。

シルバーリングで、よく見ると小さな小さな光る石がひとつ、可愛らしくついている。

「……指輪」

まどかは、その指輪を手に取り、そっと目の前に持ってきた。
光に照らされ、時折きらきらと輝いた。

「きれい……」

「あの、受け取ってもらえますか？」

誠が緊張した面持ちで問いかける。

「もちろんです！　嬉しい！」

まどかはこの日一番の笑顔で、指輪をぐっと握りしめる。

誠は何でそんなに受け取ってくれるか心配しているのだろうか。
こんなプレゼントを断る女性がいるのだろうか。

まどかは喜々として、その指輪をはめようとした。

「どの指に合うかな」

まどかは左手の小指から入れようとして、はっとした。
慌てて顔を上げて、誠の顔を見る。

「これって、もしかして……」

まさか。
いや、そんなことは……。

誠は恥ずかしそうに、頬をかいた。

「いつか、本物を渡します」

「！！」

婚約指輪！？

まどかは呆然として、何が起きているのか、今ひとつ理解できずにいた。

「早すぎるとは思うのですが……」

「はい、びっくりしました」

「ですよね。ごめんなさい」

「でも」

「でも？」

まどかは一度大きく息を吸い込む。

「嬉しいです。受け取らせていただきます」

そういって、まどかは指輪を左手の薬指にはめた。

サイズはわずかにゆるかったが、不自然なく薬指におさまった。

他のテーブルから、かすかな拍手が響いた。

どうやらこちらの様子を聞いていたようだ。

恥ずかしさのあまり、ふたりで顔を真っ赤にしてうつむきながら、かるく周囲に会釈する。

「おめでとう」と言ってくれる人もいたが、頭を下げるだけで精一

杯だった。

店の人が微笑みながら、デザートをふたりの前に置いてくれた。
その中央に、ろうそくのついたケーキがもう1つ。

「お店からのプレゼントです。おめでとうございます」
「あっ、有り難うございます」

誠が頭を下げてお礼を言うと、店の人はニコッと笑って一礼し、戻って行った。

「恥ずかしいけど、嬉しいですね」
「そうですね」
「今日は記念日だ」
「そうであって欲しいです」
「そうなりますよ」
「本当ですか？」
「本当です。自信を持って下さい」

さっきとは反対に、まどかが誠を励ます。
誠は思わず苦笑してしまった。

「有り難う。少し落ち着きました」
「どういたしまして。さあ、食べましょう」

ふたりは、デザートとケーキを分け合いながら、食事のひとときを楽しんだ。

楽しい夕食会は終わると、誠がまどかを家の前まで送った。

道中はそれほど会話はなかったが、それが嫌ではなかった。
言葉が無くてもつながっている感触があるし、会話をしなくちゃという緊張感もない。
ただ、もう少しだけこの時間を一緒に過ごしたかった。

ゆっくりと歩いたつもりだけれど、ふたりはまどかの家の前についてしまった。

まどかがくるりと回り、誠と向かい合わせに立つ。

「今日は本当に有り難うございました。本当に楽しくて、嬉しかったです」
「僕もです。……親が認めてくれているわけでもないですし、本当の婚約指輪というわけではないのですが」
「はい、解ります」
「緊張して、緊張して、大変だったんですが、まどかさんが喜んでくれてほっとしました」
「指輪、大切にします」
「でも、指輪をご両親に見られると……」
「びっくりさせちゃうかも知れませんね。残念だけど、デートの時だけにします」
「そうですね。その方がいいかも」

まどかはさびしそうに指輪を外し、コートから取り出した箱の中にしまった。
そして、誠のことを見上げる。

誠もうなずいてまどかに近寄り、抱きしめた。

「……」

服を通してでも、何か温かな肌のぬくもりが伝わってくるようで、ずっとこうしていたかった。

しっかりと抱きしめ合い、離れる間際に軽いキスをする。

見つめ合うと離れ難さがつのるが、時間が遅くなってはいけない。

「それじゃあ」

「はい。師匠も帰り、気をつけて下さい」

「有り難う」

まどかは手を振りながら、誠から離れ、ゆっくりと家の中に入っていく。

ふたりの心に静か余韻を残しながら。

聖夜は静かにふけていった。

バレンタイン

今年のバレンタインは、誠にとってかつてない経験となった。

誠は今日がバレンタインであることはすっかり忘れていて、いつものように学校へ登校し席についた。

昔とは違って、周りの友達にも挨拶をし、修学旅行で仲良くなった友達と朝の会話も交わす。

まだ慣れるほどはいかないが、誠も何とかやっていっている実感があるし、そうした会話が楽しいと最近は感じている。

異変に気づいたのは、席についた時だった。

「あれ？」

「ん？　どうした？」

隣の席の大成が、誠の様子を見ながら聞いてきた。

「何か入ってる」

机の下に何か箱が入っている。

「ははあ……。さすが誠くん」

大成はすぐにそれが何であるか理解し、冷やかすような声をかける。

しかし誠は、なぜこんな物が入っているのか理解出来ず、中から

取り出して確認しようとした。

「ストップ！　それ以上出しちゃ駄目」
「えっ？　なんで？」
「本当にそれが何か解っていないの？」
「何で大成くんが解るの？　これ入れたの君？」
「そんな訳無いでしょう……気持ち悪い」
「気持ち悪い？！」

誠はますます解らず、すっかり混乱してしまった。
頭の中でいろんな可能性を出しては打ち消し、検討を始める。

「あっ」

誠もようやくひとつの見解にたどり着いた。

「ようやく解った？」
「えっ、でも何で僕に」
「自覚もないのか」

大成が面白そうに笑う。

「自覚って？」
「これだけいつも女の子にも優しく勉強を教えているのに、意識されていないと思っていたの？」
「えぇぇぇ！！　だって、勉強を教えていただけで、別に何も……」
「それを口実に話しかけていた女の子達が可哀そう」
「！！」

誠の頭の中はまたもやパニックになってしまった。
今で話しかけてきた女の子達の顔を浮かべ、可能性を考えてみる……が、解らない。
いったいどの女の子が！？

「まあまあ、いずれにせよこっそり入れて置いた物を外に出しちゃいけない。家に持ち帰ってから確認した方がいいよ」
「……はい」

もう一度だけ、机の下を覗き込む。

ひとつではなかった。
ふたつ入っていた。

叩いたら増えたとか？

いやいやいや。

「悩んでも仕方ないから、まあ後でのお楽しみということで。どちらにせよ、幸せなやつだ」

誠は思わず大成にその箱をあげたくなったが、それではわざわざ用意してくれた女の子に悪い。
何はともあれ、おとなしくそのままに受け取ることにした。

次の異変は昼休みにやってきた。

最近の誠は、周りの男友達と一緒にお弁当を食べている。
今日も、昨日の夕食の残りを詰めた弁当を開け、机を少し寄せた

りしながら食べ始めていた。
それは急にやって来た。
廊下が何やら騒がしいな、と思って顔を向けると、知った顔が並んでいた。
「やっほー、まーちゃん」
「桜さん！　それに、麻友さんに、美緒さんまで」
毎度のことだが、3人揃うとなかなか華やかな光景だ。
見ている分には。
はっきりとこちらに向かって歩いてくる3人を見て、誠の背中に冷や汗が流れた。
誠は嫌な予感がして逃げようとしたが、横にいた大成に服をつかまれた。
「せっかく遊びに来てくれたのに、逃げちゃいけない」
「いや、でも」
「きれいな女の子は共有財産です。我々にも恩恵を」
誠には今ひとつ大成の言葉の意味がわからなかったが、逃げられないことは理解した。
そんなやり取りには気づかず、3人が誠の前までやって来る。
桜が誠の前に手の平ぐらいの四角い箱をおいた。
「はい、本命チョコ。お返し宜しくね！」

本命って……。

誠は崩れ落ちそうになる体勢を、何とか気力で持ちこたえた。

「私も本命よ。愛する気持ちを受け取って」

麻友が同じように箱を置いていく。

いつもの小悪魔笑顔も忘れずに。

「本命チョコ、受け取ってくれる？」

美緒が小首をかしげて、チョコレートの箱を差し出す。

その可愛らしさに、周りの男達は射ぬかれたらしい。

誠は頭痛がし始めてきた。

美緒もにこっと笑って、箱を机の上に置いていった。

「……早く彼氏を作って下さい」

海旅行の最後の言葉は何だったのだ。

誠は呻くようにつぶやいた。

「失礼ね、彼氏ぐらいいるわよ」

麻友が当然と言わんばかりに、胸を張っている。

「では何故、本命チョコ？」

「そのことは理解してもらって上でのお付き合い」

「はい？」

「これも了解済み」

「……」

誠には一生かけても理解出来ない気がしてきた。

「私達がわざわざチョコを上げるって言っているんだから、有り難くもらっておきなさい」

「……有り難うございます」

誠にはもはや抵抗する気力も持ち合わせていなかった。

ここは素直に受け取り、退散してもらうに限る。

「そうそう、初めから素直になればいいのに。じゃあねー」

「ばいばい」

「またねぇー」

嵐のようにやって来た3人は、やっぱり嵐のように帰って行った。

誠は大きくため息をついた。

手作りチョコ

騒ぎはそれだけで終わらなかった。

教室が何となくざわめく。

「ん？」

誠が顔上げてあたりを見渡すが、誰かが現れたわけではなさそうだ。

では何故？

右斜め前の女の子が席を立ち上がり、振り向いた。

「私も本命チョコ。はい」

「え？」

戸惑う誠の机の上に女の子がチョコを置いて、また席に戻ってしまった。

「なっ、何……」

それから、次々と女の子が現れてチョコを机の上に置いていく。

「私も本命」

「私も」

「私は義理だけど、いつもの感謝を込めて」

もはや誰が誰だか誠には解らなかった。
気付いたら、クラス以外の女の子まで中に混じっている。
去年のクラスメイトはまだ解るが、まったく知らない人もいた。

どうやら先ほどのざわめきは、当初は誠にチョコを渡すのを控えていた女の子達が、あの3人組の行動を見て、それならば私もと思ったざわめきだったようだ。
どこまで本命かは解らないが、どうも多くは日頃の勉強を教えたりしている感謝の気持ちらしい……そう信じたい。

机の上にうず高く置かれたチョコを前にして、誠は初めての経験にどうしたら良いか、戸惑っていた。

ちなみに、もう一人のクラスの人気者、悠太はチョコを断っていた。
「甘いものが苦手だから。ごめん」
と言ってみたり。
「好きな人がいるんだ」
と伝えたり、とにかく相手を過度に傷つけずに上手く断っていた。
義理チョコで仲の良い友達からは受け取っているようだし、受け取ってくれるだけでいいと言う女の子からは受け取っていたようだ。
ここは経験の差だろうが、誠がこの対処法を勉強するのは数日たってからのことだった。
まどかからは毎年チョコをもらっていて、今年ももちろん悠太は素直に受け取っていた。

ちなみ、桜は誠以上に女の子から貰っている。

彼女は甘いモノが大好きだから、というのもあるらしい。
嫌がること無く受け取り、時にはキスのプレゼントもあるようで、女の子からは大好評だ。

とにかく、袋もしまうところも解らず途方にくれていた誠の代わりに、大成達が体操袋などを貸してくれて何とか片付けることができた。
「なんでお前ばっかり」
とぶつぶつ文句は言っていたが、怒っている様子はない。
誠はひたすら「ごめんなさい」と頭を下げていた。

結局、帰り道にも何個か渡されて、申し訳ないことにまどかにも持ってもらって何とか家にたどり着くことができた。

「ごめんなさい、まどかさんにまで持ってもらって」
「いいですよ、師匠。モテモテですね」

まどかはかすかに笑顔を浮かべながら、そう言ってくれた。

「怒ってます？」
「怒っていないですよ」
「不安には……」

まどかが、くすっと笑う。

「以前ほどは。クリスマスぐらいから、あまり不安に思うことがなくなってきました」

誠はほっと安堵の溜息を漏らした。

「でも、妬けますけどね」

まどかが、誠の頬をかるくつねる。

「痛！」

「これで許してあげます」

まどかがいつもの笑顔を浮かべてくれる。

誠は頬をさすりながら、嫉妬してくれたことが何となく嬉しく感じていた。

ふたりで箱を1つ1つ開けて、名前と中身をノートに書き写していく。

名前が無いものも、まどかが顔を覚えてくれていて、おおよそ漏れがなくリストを作ることができた。

時折メッセージが入っているが、やっぱり勉強を教えてくれたことへの感謝を綴っているものが多い。

中には「好きな人がいることは知っていますが、私もあなたのことが好きです」と書いてあるものがあって、それを読んで赤くなっているのを、まどかが冷ややかな目で見てくるのには困った。

ちなみに、桜はメッセージなし。麻友は「ふたりで幸せに」。美緒は「また一緒に遊ぼうね」だった。

「このチョコ、どうしますか？」

「食べます。せっかく用意してくれた人達に悪いですから」

「冷やしておけば、長持ちするとは思います」

「冷蔵庫に入り切らない……」

「今なら、冷暗所でも大丈夫だと思いますが」

誠も甘いものは嫌いではない。
ただこれだけあると、さすがに時間がかかりそうだ。

誠がひとつため息をつくと、まどかが少し困ったように聞いてきた。

「あの、もうひとつあるのですが」
「え？」

何のことかと思っていたら、まとかがバッグの中から少し大きめの箱を取り出す。
赤い箱にリボンが付いている。
手作りのようだ。

「受け取ってくれますか？」

まどかが誠に恥ずかしそうに渡してきた。
誠は急に心臓が高鳴るのを感じた。
他の人から貰うのとは、はっきりと違う緊張感。

「もちろんです。有り難うございます」
「良かった。でもこんな事なら、もう少し小さく作れば良かった」

箱を開けてみて、まどかの言う意味がわかった。
大きなハート型の手作りチョコ。
Ｍａｋｏｔｏと名前まで書いてある。

「そんなことないです。本当に嬉しいです」

食べるのがもったいないぐらいだ。
まどかが、くすっと笑った。

「去年は市販のものだったので」
「そうでしたね。初めてのデートの時だ」
「初キス失敗の」
「それは言わないで下さい」

誠は顔を赤くして頭をかいた。
今でもあれを思い出すと、恥ずかしい。
あれから一年と思うと、長いような、短いような。

ふたりで、ふふふ、と笑った。

「あの時よりもっと愛をこめて、今年は手作りにしてみました」
「嬉しいです。僕も手作りでお返ししようかな」
「師匠はスイーツも作れるんですか？」
「作ったことはないのですが、たぶん大丈夫かと」
「一緒にケーキでも作りましょうか」
「それもいいですね」
「それとも、お返しを作るほうが先かな」
「あっ、なるほど」

確かにまともに買っていたら、すごい出費になってしまう。
いずれにせよ、まどかと一緒なら何でも楽しみに感じてしまう。

「これは大切に食べます。でも、勿体無くて一生とっておきたい気分です」
「ふふ、カビちゃうので食べて下さい。いくらでもまた作りますから」

とにかくびっくりした一日だったが、これはこれで忘れがたい日になった。
きっと人生で一番モテた日なのかも知れない。
きっと後で懐かしく思い返すのだろう。

ただひとつ、まどかからのチョコがあれば良かったのだけれどね。

結局、ふたりでチョコを食べながら勉強をしつつ、誠はそんなことを考えたのだった。

模擬試験

４月になり、誠もまどかも3年生になった。
残念ながら同じクラスにはなれなかったが、学校が終わった後はいつも一緒なので、それほど寂しさは感じていない。
この1年は、気持ちに上でも受験という緊張感がある。
遊びや行事などもあまりなく、ふたりの意識も大学受験に向けて意識が集中してきていた。

そして、予備校主催の模擬試験が始まる。
この季節にある試験は、まだまだ気持ちの上では早すぎる印象があるが、誠は受けておいた方がいいとまどかに勧めた。

「試験というものに慣れるのも大切ですし、自分の位置を確かめるのも大切です。そして、まだ勉強が不十分なところをチェックするのにも役立ちます」

というのが、誠の勧める理由のようだ。

「でも多分、まだまだ全然解けないかも……」
「浪人生が有利であるとは思いますが、現役の進行具合も考慮された試験内容のはずです。それにこれで合格が決まるわけでもありません。今後、成績を上げていけばいいのです」
「はい」

自信はなかったが、まどかは誠の言葉にうなずいた。

初めて入った予備校の校舎の雰囲気に、まどかは緊張感と不安を感じた。
誠も違うクラスにいて、近くにいない。
ひとりきりの戦いであることを、否応にも感じてしまう。
自分がやって来たこと、身についたことだけが頼りなのだ。

誠のことは信じているが、自分の身にどれだけの実力が付いているのか、まだまだ不安があった。

塾の講師と思われる男性が教室に入ってきて、説明を始める。
数名の手伝いの男女も現れ、学校のテストとは比べものにならないスムーズさで、用意が進んでいく。
テスト用紙が配られ、開始時間を待った。

「始めて下さい」

試験官の合図と共に、紙をめくる音が教室に響き渡る。

まどかもいつもの習慣から、すっとテストに気持ちが集中していくことができた。

思っていたよりも難しくはない。
確かに学校のテストとは違うが、問われている内容は勉強してきた範囲をそれほど超えない。
教科書通り、問題集通りということはないが、しっかり理解していれば回答できるレベルだ。

まどかはいくらかほっとしながら、問題を解き続けた。

英語、数学、国語、理科、社会。

数学と英語は、誠の方針で毎日やっている。
そのせいか、特に数学に手応えを感じる。
あれだけ苦手だったのが嘘のようだ。
何とか答えが解る。
計算だけは間違えないように気をつけた。

国語も以前言われたように、理論的に問題を捉えることができる。
曖昧ではなく、しっかりとこれが答えだと選択することがだいぶできるようになっていた。

理科は物理と化学を選択した。
医学部であることも含めて、生物のほうが良いようにも感じたが、

「生物はおそらく医学部に入ってから、また勉強します。物理と化学は大変ですが、今勉強しておくことは大切だと思います」

と誠の判断だった。
確かに大変だが、科学館に行ってからは、楽しくも感じている。

社会は日本史。
これも、地理や倫理などから選んだほうが良いのかも知れないが、

「日本人として、日本の歴史を理解しておくことは大切です」

と、これも誠も意見。
憶えるのは大変だが、誠が脱線して教えてくれる日本史の物語はけっこう楽しい。
合格したら歴史物の小説も読んでみたいところだった。

1日の試験が終わるとさすがにぐったりとする。
まどかは家にそのまま帰ると、早めに寝てしまった。
それぐらい集中して受けられたのはいいことだと、誠が褒めてくれたが。

果たして、成績はどうだったか。

結果は郵送で自宅へ届けられた。

まどかはドキドキしながら封筒を開け、誠と一緒に中身を確認した。

「あ、C判定です」
「いいですね。今の時期にこれだけ取れれば上出来です。頑張りましたね」

C判定というと、正直微妙なラインだが、誠はそれでいいという。

「前にも話しましたが、今は浪人生のほうがリードしています。ここから追い上げ、追い抜かしていきましょう」
「できますか？」
「保証します」

相変わらず勉強に関しては、誠の言葉は力強い。

「ところで師匠はどうでしたか？」
「僕ですか？　A判定でした」
「解っていましたが、さすがですね」

もはや驚きもない。
B判定だったから、驚いたかも知れない。

「順位はどうでした？」

予備校の試験は、各教科で点数と偏差値と判定と順位が出ている。
判定は当然Aとしても、まどかは誠の順位を聞いてみたかった。

「1位みたいです」
「えっ？」
「全国1位のようです」

なんですと？

渡された紙を見ると、たしかに1という数字が並んでいる。
すべての教科ではないが、ほとんどの教科で1位。
1位を逃した教科の順位さえ1桁以内の数字だった。

ありえない……。

全国で言えば、誠のような勉強好きの人間がいたり、塾や家庭教師とかお金や時間をかけている人もいたに違いない。

眼の前にいる、この人が1位？

何となく後光がさしているように見えてきて、まどかは思わず拝んでしまった。

「神様」

誠は苦々しく笑った。

「やめてください。偶然です。きっと」
「偶然でとれる数字ではないと」
「マークシートですし。それに、もっと優秀な人が受けていない可能性もあります」
「それでも凄いです」
「まあ、今のまま、まどかさんとの勉強を続けていけばいいんだ、と言う自信にはなりました」
「申し訳ないです……」

最高の家庭教師を一円も払わずに、毎日見てもらえる幸運。
何か誠の訳に立てないか、と真剣に悩んでしまう。

「まどかさんと一緒に合格して、同じ学校、同じ学部で勉強できるのであれば、もうそれが最大のプレゼントです」

と誠は嬉しいことを言ってくれた。

本当に頑張ろう。

辛くても、大変でも、たった1年なのだから。

知識と知恵

誠の教える方法は、いくつかの特徴があった。
ひとつは、英語と数学は必ず毎日ある、ということ。

「僕たちが受ける大学は、英語と数学の配点がとても高いのです。それにこの2教科は、記憶だけが頼りの教科よりも、毎日の積み重ねが大切なので」

と言うのが、その理由。

数学は公式の理解と慣れ、それに解法のパターンをたくさん解いて、自分のものにすること。
問題文を見たら、それがすぐに数式に置き換えられる力をつけること。
それをすぐに間違い無く出来るように、繰り返し、毎日、問題を解いている。

英語は、教科書のすべての単語、熟語、文法、発音を理解した上で、ひたすら音読。
もう空で言えるまで。

こんな単純なものでいいのだろうか、と思うが、

「英語は基礎が大事です」

とひたすら繰り返す。
その上で、良い文章をひとつひとつ完璧にして積み上げたり、短時間で英作文を作ったりしている。

そして、もうひとつの特徴は、早いこと。

「１００の単語を覚えるのに、毎日１０個ずつ憶えて１０日かけるか。毎日１００個を憶えて、１０日繰り返すか。同じ時間をかけて、どちらが身になるかと言うと、後者なんです」

と言う誠の教えの従い、１日にやる量がとても多い。
あまり悩むことに時間をとらない。
さっさと進む。

「早くやるほどが頭が高回転で動くし、集中力もつきます。早く適当ではなく、早いが集中して正確に、が大切です」

どんどん早くなるので、着いていけるか不安になることがあるが。

そして、３つ目が復習。
とにかく勉強の始まりは復習から始まる。
今までに勉強したことを、誠が問題形式で聞いてくる。
それに即答できればよいが、少しでも悩むと、その周りの知識も含めて復習が始まる。

歴史で言えば、人物の名前が言えないと、その人物の名前がでいるノートの部分を、見開き全部覚え直す。

「網目状の記憶回路を作るためです」

あまり繰り返すので、だんだん教科書やノートの端が黒ずんでき

ていた。

その日の勉強が終わる頃に、もう一度、その日の復習を行う徹底ぶり。

とにかく、誠は復習を本当に大切にする。

一日の勉強時間は長いが、間に休憩はけっこう入れてくれる。

５０分ぐらい集中して１０分休憩。

教科も変えたりして、けっこうメリハリがある。

ただ誠がひとりで勉強するときは集中できる時間がもっと長いようで、休憩の時間もほとんど無い。まどかに合わせてくれているのだろう。

休憩の時間は身体を動かしたり、音楽を聴いたり、たわいもない話をしたり。

時折、勉強に関わる面白い話をしてくれたりして、それがまた勉強になったりすることもある。

誠が目標としていた教科書と問題集と参考書は、合わせるとそれなりの量があった。

初めから、

「これが目標です」

と提示してくれたので、その点は解りやすかった。

当初は量が多いなと感じたが、分厚くても簡単な本もけっこうある。

夏休みに入ると授業が無い分、かなり問題集と参考書をこなすことができた。

夏が勝負というが、確かに学校がある時よりもペースが上がり、知識が積み重なっている実感が少しずつ沸いてくる。

誠が月に1回のデートに連れて行ってくれたときのこと。
それこそ、もう誠の問題に即答することが慣れてきて、頭の中が詰め込んだ知識で膨れあがっているのではないかと錯覚するほどの状態だった。

「そろそろだと思うのですが」

ふたりで池のある大きな公園を散歩していたときに、ふと誠がつぶやく。
まどかにはその意味が解らず、首をかしげた。

「見てて下さい」

そう言って、誠は足下にあった石をひとつ、ふたつと手に取り、池に向かってそれを投げ込んだ。

ぽちゃん。

池の穏やかな水面に、石が落ちたところを中心にして小さな波が広がり始めた。

「見えますか？」
「え？」

最初は誠の言うことが解らなかったが、いつもの質問するような口調に刺激されたのか、ふと違うものが見え始めた。

広がる波が、波動の公式に見えてきたのだ。

「あっ！」

まどかは思わず声を上げた。

今まで単なる波でしかなかったものが、数式と重なって見えてくる。

想像していなかった現象に、まどかはあ然としてしまった。

「もう一つ、いきますよ」

誠がもう一つ石を投げると、また新たな波が出て、波と波同士が合わさって高い波ができる。

するとまどかの頭に干渉の公式が現れる。

「わっ、すごい。面白い！」

まどかが驚くと、誠が満足そうにうなずいた。

「勉強の成果が出ていますね」

「師匠は、いつもこんなふうに見えるのですか？」

「まあ、そうですね。機械を見ると、その構造が浮かんできたり、ニュースを聞くとその関連のノートがぱっと思い浮かんだり」

「同じものを見ていても、見えている世界が違ったんですね……」

まどかが驚きの声を上げると、誠は恥ずかしそうにしながらも、

うなずいた。

「まどかさんなら、見えると思っていました」

「見えてびっくりしました」

「例えば、月を見て枕草子の言葉を思い出したり、日本語を話すようにふと英語が口についたり」

「私はそこまでは、まだ……」

「続ければ大丈夫ですよ。今のだって見えたのですから」

即答できるまで、身体に染みつくまで繰り返す理由が、初めて実感できたような気がした。

ここまでやると世界観が変わってくる。

確かに今まで、はたして受験のためにここまで繰り返すことが必要なのか、と思うことがあった。

新しい問題をひとつでも解いた方がいいんじゃないか、と考えることもあった。

しかし、ここまでやりこむと応用力が出るというか、知識から知恵に変わった感じがする。

そのことを誠に話すと、

「それはもちろん、広げられるならば広げた方がいいです。ただ、新しい問題に時間ばかりかけて、広大な知識の海を前に不安になるよりは、確かな知識を少しずつ広げて自信を持つ方が大切だと思っています」

と説明してくれた。

「しょせん僕が知っていることも、世界の知識のほんの一部です。広げようと思ってもきりがないのです。１００の技を知っている格

闘家より、ひとつの技に習熟している格闘家の方が、おそらく強い。僕はそう思っています」

それでも、誠の知識は十分に広いと思うのだが。

まどかが人とのつながりの大切さや楽しさを、誠に教えた。

誠はまどかに、人の周りに広がっている大切な知恵を授けてくれた。

「師匠のこと、本当に尊敬しています」
「僕もですよ。まどかさんのこと、尊敬しています」
「互いに尊敬し続けられると、いいですね」
「そうですね。そうなると思います」

互いに手と手を取り合う。

笑顔で視線を交わすと、ふたりはまた公園をゆっくりと歩き始めた。

初詣

勉強ばかりの日々は単調ながらも、確実に日々を重ねていく。
秋の模擬試験で、まどかはB判定が出た。それは合格圏内を意味する。
自分でも、もしかして、という期待と希望が膨らむが、まだまだ昔の自分を思い出して不安になることがある。
数カ月の間に、その結果も出ることになるが。

年が明けての初詣は、曜子と3人で出かけることになった。
今までも時折、3人で勉強することもあったり、デートで一緒に遊んだりすることもあった。
誠とまどかは別のクラスになったが、実は誠と曜子が同じクラスで、普段もけっこう仲良くしていた。
そのふたりの様子を見て、まどかが妬くこともあったが、それも一瞬ですぐに仲の良い3人組に戻る。
お互いにそんな関係が続いていた。

元旦の朝、せっかくだからと市内の大きな神社を訪れる。
昨日降った雪が砂利道にすこしばかり積もり、凍てつくような寒さのなか、人の波に混ざって3人は固まって歩いていた。

「いよいよ試験が近づいてきたね」

曜子がまどかに声をかける。

「うん。だんだん緊張してきている」

まどかは胸に手をあてて、そう答えた。

「昔のまどかを知っているから、よく頑張っていると、本当に思うよ。夢のためとは言え……ああ、今は夢のためだけではないかも知れないけど……」

「夢のためだけではない、って？」

「ほら、誠と同じ大学、同じ学部に行きたいなぁ、とか」

「あ、いや、その」

図星だった。

まどかは頬を赤く染めて、曜子の言葉を否定しきれずにうつむいた。

「まあ、誠は現役で合格するだろうから、まどかも今年で受かりたいね」

「今年受かりたい、と思うから、よけい緊張しちゃう」

何とかふたりで合格して、ふたりで同じ道を歩きたい。

その思いが強いほど、不安が広がってしまう。

「そのあたりは、誠はどうアドバイスしているの？」

曜子が誠の方に顔を向けて質問する。

誠は一瞬戸惑ったものの、もともと考えていたのかスムーズに返答をしてきた。

「プレッシャーを無くす方法は無い、と思っています。積み重ねたものに自信を持つか、自分と相手の距離を正確に把握するか。それでも、やっぱり緊張はするし、実力が出し切れないこともあると思います」

誠の言葉に曜子もうなずく。

「そうだね。でも誠のことだから、それでも何かあるかな、と思って」

曜子は本当に、そう信じているようだ。

誠は曜子の表情を見てそう理解し、小さなため息をついた。

「秘策という程でもないのですが」

「なに？」

「ひとつは、試験や受験を戦う敵と思わないこと、です」

「というと？」

「怖さや焦りは、集中しても判断ミスを犯しやすい。やっぱり真剣な中に、どこか楽しさがあってほしいのです」

「試験や受験を楽しむ、っていうの？」

「はい。思い込みでもいいので」

誠は以前に、人と向かい合う緊張から逃れるために、いろいろな本を読んでみた。

そして、段階的に慣れることや、思い込むことで新しい思考回路を作ることの大切さを感じた。

誠は人と対することに対する負の思い、相手にしてくれないのではないか、楽しいと思ってくれないのではないか、と言った自分の思考回路に、思ったほど相手は自分のことを意識しているわけでもない、とか、意外に楽しいと思ってくれている、という考えを持つ

ようになってきていた。
というか、思い込むように訓練をしてきた。
一気に解決とはいかないが、無限ループの中から解決の螺旋階段へ登り始めているような感触がある。

「大学は合格するのを叩き落とそうとする怖い存在でもなく、同じ学部を目指す学生が敵というわけでもない。大学は自分を受け入れようとしてくれている存在だし、受験生は一緒に学ぶかもしない仲間なのです。そう思い込むだけでも、いくらか緊張は違います」

「簡単に思えればいいけれけど」

「イメージが大切ですね。繰り返すことも。それと、まああまりいい話ではないのですが、大学は一回限りの勝負ではありません。浪人が許されるのであれば、何度もチャンスがあります」

「まあね」

「僕がついています。まとがさんの能力があれば、何らかの不運な出来事があって失敗したとしても、何度も失敗させることは絶対にさせません。かならず夢を叶えられます。必ず叶えますから、変な緊張で実力を出せない状況を自分で作って欲しくないな、とは思います」

「なるほどね」

人混みに並びゆっくりと歩いていたが、話している間に気づけば本宮の前にたどり着いていた。
お賽銭を中に投げて、二礼二拍手一礼をする。

シンプルに合格祈願を心のなかでつぶやいた。

「ところで、曜子さんはどこを受けられるのですか？」

お参りをした帰り道、誠が曜子に尋ねた。

「私もあなた達と同じ大学は受けるわよ。学部は違うけどね」

「どの学部ですか？」

「文学部。まあ、まだ将来の夢が決まっているわけではないから」

「本を沢山読まれていましたね。そういえば」

「まあね」

他にもいくつか大学は受けるようだが、彼女も成績はいい。

おそらくそう不安なく、合格するだろう。

「また大学でも一緒に遊べるといいね」

まどかが嬉しそうにつぶやくと、誠も一緒にうなずいた。

「そう言ってくれると嬉しいね。いつもお邪魔じゃないか、と心配になるから」

「お邪魔なんて……」

誠は本気でそういうと、曜子は、

「ふたりがラブラブすぎるから。近くにいると暑くって」

と返してきた。

誠とまどかが顔を見合わせて、ちょっと恥ずかしそうな表情を浮かべた。

「私もいい出会いがあるといいな」

曜子は真っ青な空に向かって両手を上げて、寒さに縮こまった身体をゆっくりと伸ばした。

「それまでは一緒だね」

まどかが曜子の手を取って、笑う。

そして、反対の手で誠の手を握った。

そんなまどかを見て、曜子も誠も思わず微笑を浮かべた。

「そうだね。そうでありたいね」

曜子は小さくつぶやいた。

いつまで続くか解らないが、この心地よい関係が長く続くことを、それぞれに願っていた。

センター試験は、もう間近に迫っていた。

センター試験

センター試験の当日は、この季節で一番寒い日だった。
まどかは身体が冷えないように厚着をして玄関を出た。

「行っいきます！」
「行ってらっしゃい。気をつけてね」

母親の芳子が、笑顔で見送ってくれた。
不安そうな表情は無く、だんだんと逞しくなっていく娘を頼もしげに見つめる様子に、まどかもいくらか心を落ち着かせることができた。

やるべきことは、やってきたと思う。
誠がたてた勉強の目標も達成し、センター試験の模擬も何度か体験した。

「毎日と同じ生活サイクルを崩さないこと。新しい勉強には手を付けず、今までの復習だけにして、自分はできると信じてあげて下さい」

昨夜、誠はそうアドバイスしてくれた。

初詣の時に誠が買ってくれたお守りを、ポケットでそっと握りしめて、まどかは試験会場へ向かった。

大学の教室を使った試験会場は、緊張感に包まれていた。
最後の復習をしている人も入れば、鉛筆などの準備をして心を落ち着かせている人もいる。

「すべて正解しなくていいんです。できない問題があっても、心配しないで下さい。　自分にあるもので合格できます。　点数は、今までやってきたことをあまり裏切りません」

深呼吸をして、誠の言葉をひとつずつ思い出す。

「周りの人達を見渡して下さい。敵ではなく、誰もが緊張している仲間です。ただ目の前のことに集中して、楽しむ心を忘れずに」

はい、師匠。

まどかは心の中でうなずいた。

試験監督が教室に入ってくる。

それを合図に、会場全体が静まりかえる。

注意事項の説明の後、テスト用紙が前から配られ、まどかの前にも白い紙が置かれた。

いよいよ、始まる。

「始めて下さい」

運命の試験が始まりを告げた。

センター試験は2日に分けて行われる。
科目数も多いが、公平に実力を試すためか問題の数も多い。
この2日間は、ぎっちりと問題詰めだ。

何度も模擬試験を受けてきたが、やはり本番とは違う。

集中できたがゆえに、最後の試験が終わりを告げると、まどかはぐったりと疲れてしまった。

「終わった……」

解答が回収されると、しばらくまどかは座ったまま呆然としてしまった。

手応えはあった。

誠が言うとおり、勉強してきた範囲を大きく超えることはなかった。
問い方は違っていても、自分の頭の中にある知識のどれかで対応

することができた。
そう信じて解答したし、間違っていないと思う。

「よしっ」

少し元気が出てきた。
まどかは帰る準備を整えると、みんなに遅れて教室を後にした。

外に出たところで、誠に電話をかけた。
誠は数コールの後に出てくれた。

「師匠。終わりました」
「どうでした？」
「まずまずできたと思います」
「良かった。今日はゆっくり休んで下さい。お疲れ様」
「有り難うございます。感謝の気持ちでいっぱいです」
「合格したら、ふたりでお祝いをしましょうね」
「嬉しい！　楽しみにしていますよ！」
「僕もです。それじゃあ、明日。学校で」
「はい」

まどかは携帯を閉じると、足早に帰宅の途についた。

翌日、学校で緊張しながら答え合わせをした。
新聞で発表されたものをもとに、自分で書いたはずの解答を合わせていく。

正解が1つ1つ積み重なるごとに、少しずつ笑みがこぼれる。
間違えたところは、誠が解説を加えてくれる。
それをまた、ノートに書きこんでおく。
まだ次の本試験が待っている。

すべての採点が終わると、ふーっと思わず大きなため息をついた。
点数を数えてみると、合格ラインはわからないが、かなり高得点がとれていたことが解る。

「よく頑張りましたね。これなら大丈夫です」

誠がまどかの頭を優しく撫でてくれた。

「本当ですか？　嬉しい！」

まどかは心から嬉しい気持ちが湧き上がり、自然と笑みがこぼれる。
誠も嬉しそうに微笑んでくれた。

「次は本試験ですね」
「はい。緊張します」
「大丈夫です。もうその力はあります」
「本当ですか？」
「僕を信じて下さい」

誠の言葉が心のなかにストンと落ちて、じわっと安心感が広がる。

あともう少し。

もう1ヶ月もない。

まどかは誠の手をぎゅっと握りしめた。

本試験

とうとう大学入試の日がやって来た。
前期試験と後期試験があるが、後期試験は地域医療を志す人のみが対象となり、卒業後１２年ほどの義務を生じるため、誠と行動を共にしたいまどかは選択できない。
つまり、前期試験が彼女が受ける唯一の入試試験だった。

二日にわけて国語、理科、数学、英語の試験がある。
国語もあるが配点は低い。やはり理科、数学、英語が要となる。

もともと苦手だった数学も、この３年間ほぼ毎日問題を解き続け、点数のとれる科目になってきていた。
はたして入試に太刀打ちできる実力がついているのか……不安は拭いきれない。

まどかは何度か見学に来た大学の道を歩き、試験会場となる校舎へ向かった。
センター試験の頃と比べると寒さは和らいでいるが、今日の空は曇天で何となく肌寒い。
まどかは手袋をはめた手をぎゅっと握った。

案内に従って校舎に入り、階段を上って教室に入る。
まだ時間が早かったせいか、受験生がまばらにいるだけだったが、その中に誠の姿もあった。

誠もまどかが入って来たことに気付き、視線を合わせるとにっこりと笑ってくれた。
まどかは嬉しそうに小さく手を振ると、誠はゆっくりとうなずいてくれる。

あえて言葉は交わさず、まどかも自分の席を確認して座る。
試験の間、助けてもらうわけにはいかない。
自分で道を開かなくては。

まどかはコートを脱いだり、トイレに行ったり、必要なものを机に並べたりして準備を整えた。

もうここまできたら、復習もいらない。
むしろ心を落ち着かせて、気合いを入れすぎないように、楽しむ心を思い出してみる。

試験が終わったら、みんなと食事をする約束をしている。
そして、合格したら、誠とふたりでお祝いがある。
楽しそうな未来に、思わず笑みがこぼれる。

大丈夫。

誠が何度もそう言ってくれた言葉を信じてみる。
自分を信じてみよう。

これが終わりではない。

始まりなのだから。

センター試験時と同じように試験官が入って来て、説明を始める。

まどかは、すこし胸がドキドキするのを感じた。

さすがに緊張するが、それは仕方がない。

まどかはひとつだけ大きな深呼吸をした。

試験用紙が配られる。

試験官が時計を確認しながら、正確に開始を告げた。

「始めて下さい」

数学は確かに難しい。

しかし、まったく太刀打ちできないレベルではない。

問題を正確に数式になおし、そして、それを正確に計算していく。

次の問題は、解法のパターンが必要だった。

すぐとは気付かないが、基本を理解していれば気付くことができる。

時間はかかったが、すべての解答欄を埋めて、見直す時間もできた。

英語は多様な能力を問うてくる。
英文もやや難解だが、ていねいに読み込んでいくうちに何を聞いてきているのかは理解できてくる。
勘違いしないように、しっかりとじっくりと読み解いて記入していく。

物理と化学は徹底的にやっていたから、その範囲を超えることはなかった。
ある程度は確実に点数を確保できる。
科学館でのデートを連想してしまって、試験の途中だというのに、まどかはちょっとだけ笑ってしまった。

国語は、理論的に解答する方法を徹底的に教えてもらった。
曖昧な問い方もしていない。解答もそれに対応して書いていく。
悩む部分もあるが、これでいいはずだ。
古文は読んだことのある部分が出た。
これならば対処できる。

そして、すべての試験が終わる。

本当に、これですべて。

「鉛筆を置いて下さい。用紙を回収します」

試験官の声が教室に響いた。

「終わった……」

センター試験の時以上の疲れと安堵感が、身体全体に広がっていく。

何も考えることもできず、ただ目の前の回収されていく解答用紙を眺めていた。

どんな採点をされるのだろうか。

受け入れて、もらえるのだろうか。

まるで告白して、結果を待っているような気持ち。

とにかく全力を尽くした。

あとは待つしかない。

不安な気持ちが沸くまどかの頭に、ふわっと柔らかい感触が乗ってくる。

見上げると、誠がまどかの頭にそっと手を乗せて立っていた。

「終わりましたね」

「はい……終わりました」

言葉にすると、じわっと実感が広がる。

あんなに遠くに感じた日が過ぎていく。

「3年間、本当によく頑張りました。本当に……」

誠がゆっくりと頭を撫でてくれた。

まどかは嬉しそうに、その柔らかな感触を受け止めた。

「今日はゆっくり休んで下さい。もう採点もしません。明日はみんなとの食事を楽しみましょう」

「はい」

採点しても合格ラインが解らない。

あとは結果を待つしかないのだ。

たった１０日後。

一緒に合格できるといいな。

心から、そう願う。

帰りの準備を整えるとまどかは誠の手を握り、いつものように、ふたりで家に向かって歩き始めた。

打ち上げ

前期試験翌日の打ち上げは、まどかや誠が仲の良い友だちに声をかけたのが始まりだった。

結局、宗志や大成が幹事を引き受けてくれて、場所や時間も設定してくれたので、言いだしっぺのくせに誰が集まるかもわからないまま、ふたりは指定された居酒屋に着いたのだった。

駅近くにあるチェーンの居酒屋で、もちろんふたりは入るのは初めて。

案内された部屋には、広い畳敷きにいくつも平机が置かれていた。まだお客さんも含め、誰も座っていない。

まどかと誠は隅のほうにふたりで向かい合って座ることにした。

「どのぐらい集まるのかな」

「幹事をお願いしちゃったからね。試験が残っている人もいるし、そんなに集まらないと思うけど」

１５人から２０人ぐらいか。

曜子や悠太や桜達にも声をかけたら、みんな喜んで受けてくれた。受験勉強のせいで、しばらく会っていない人達に会えることが楽しみでもあったが、そんな友達とも高校卒業をしたらなかなか会えなくなると思うと、寂しくもある。

まどかと誠はしばらく、高校生活の楽しい思い出を懐かしく語っていた。

しばらくして幹事の宗志がやってきた。

「よっ、おふたりさん。相変わらず早いね」

ひらひらと手を振り、笑顔でふたり近くに座ってくる。

「宗志くん、久しぶり。今日は有り難うね」

まどかが軽く頭を下げてお礼を言った。

「いやいや、きっかけを作ってくれて有り難う。卒業までに一度みんなで集まりたいと思っていたから、ちょうど良かった」

そういいながら、宗志はやってきた店員さんと簡単な打ち合わせを始める。

ひとりあたりの値段の確認と、未成年なのでアルコールは出さないようにお願いしている。

万が一、酔って何らかの問題を起こして、せっかくの大学合格を駄目にさせないように、幹事としても気を使っているようだ。

打ち合わせが終わると、小さなため息をついて、宗志はまたふたりの方に顔を向ける。

「ところで、今日は何人ぐらい集まるの?」

誠が宗志に尋ねると、宗志がにやっと笑う。

「ふたりとも人気者だね。たくさん来るよ」

「宗志くんが声をかけてくれたからだよ」

「人が集まるには、引き寄せる人が必要なんだよ。桜ちゃんや悠太

も来てくれるのは大きかった」
「あのふたりは有名人だからね」

まどかと誠はふたりで、うんうんとうなずく。

「君達も有名人だという自覚は相変わらず無いのね」

宗志は苦笑いをしてつぶやく。

「僕たちはおまけみたいなものだから」
「ねえ」

ふたりで顔を見合わせてうなずく。

「成績も学年で1番と2番。誰もがうらやむ美男美女カップルで、後輩達からも憧れの的だというのに」
「師匠は1番だけど、私はそんな……」
「まどかさんは美女だけど、美男というのは……」

ちょうどそこに曜子がやってきた。

「謙遜もあまり過ぎると嫌みに聞こえるよ」

細身のジーンズを着てラフな格好なのに、それがよく似合っている。

同じテーブルに座り、話の輪に入って来た。

「まあ、自覚がないのが良いところでもあるけれど」
「天然というかね」
「そうそう」

宗志と曜子が互いにうなずき合う。

「それで、何人来るの？」

まどかがもう一度、宗志に尋ねた。

「ん？　この居酒屋、貸し切った」

「え？」「ん？」

ざっと計算しただけで１００名以上は座れる。

まさか、そんなに……。

ふたりが呆然としていると、時間が近づいてきたのか、どんどんと人が入ってきた。

「久しぶり！」

玲が懐かしそうに手を振る。

他にも、高校１年の時の懐かしい顔が現れる。

涼、賢治、洋介、凛、薫子、桜、美緒、麻友、楓。

２年生の大成、智、隆成、真、尊、悠太。

他にも、３年生の同級生に、ふたりにとって馴染みのない人達もいる。

多分、友達がさらにその友達を呼ぶ形で膨れ上がったのだろう。

あっという間に店は人で溢れかえり、思い思いにグループを作っ

て座り始めた。
ひとりきりの人間ができないように、幹事達が調整をしたりして、ようやく落ち着いた時はすでに予定時間を超えてしまっていた。
懐かしい顔が集まったせいか、それぞれに会話が弾んでしまい、飲みものが来る前だというのに店全体が話し声で騒がしくなる。
宗志が立ち上がり、いつものように良く通る声で叫んだ。
「みんな！　今日はたくさん集まってくれて、有り難う！」
宗志の声に呼応するように、拍手が広がる。
「まだ試験が終わっていない人達もいるかも知れないけれど、今日は楽しんで下さい！　そして、卒業したらなかなか会えなくなるかも知れない友達とも、しっかり話をして下さい！」
いろいろな場所から「はーい」と返事が返ってくる。
「それと、今日は8時半まで貸し切りです！　アルコールは提供されませんので、ジュースかお茶でお願いします！」
ビールが飲めないことに一部でブーイングが起きるが、ほどなく収まる。
その代わりに「幹事、有り難う！」という声が聞こえてきた。
宗志がうなずく間に、お茶やジュースが行き渡る。
宗志もお茶の入ったグラスを掲げた。
「それじゃあ、グラスを上げて！　乾杯！」

合図と共に、そこかしこでグラスが合わさる音がする。
すぐに料理が運び込まれ、あたりはまた元の喧騒に包まれた。

「本当に有り難う。こんなに集めてくれるなんて」

まどかがグラスを掲げて、宗志と乾杯する。

「いや、ふたりのお陰でもあるから、こちからお礼を言いたいよ。
それに、ふたりのお陰で、いろいろと楽しかったよ」

これには誠もうなずいて、言葉をつなげた。

「確かに。あの1年が一番楽しかったかも知れない」
「女装とか？」
「あれは……忘れたいけれど」

苦笑いする誠の回りで、笑いが起きた。

「あれは似合いすぎだった」
「そう言えば、何故僕だけ女装だったの？」
「すべて楓任せだよ。おーい、楓ぇ！」

近くに座っていた楓がこちらを向いて、自分？　と尋ねるように首をかしげる。
宗志が手招きすると、楓が立ち上がってこちらまでやって来た。
ふたりにとっても懐かしい顔だったが、何となくついこの前のような気もする。
楓も笑顔でまどかの隣に座った。

「楓、誠がなんで自分だけ女装だったのかって。今更だけど」
「あ、そのこと？」
楓は意外そうに表情を浮かべる。
もうきっと彼女にとっては過ぎ去った遠い昔の出来事なのだろう。
「私の判断基準は簡単。一番似合いそうなもの、受けの良さそうなものは何かを考えただけ。その場合、笑いを狙ってはいけない。感動を目指したつもり」
誠が複雑な表情を浮かべる。
「僕の女装が感動を呼ぶ……？」
「何言っているの。一番、感動させておいて」
誠の自己評価に反して、周囲は楓の言葉に強くうなずいていた。
「あの似合い方は、反則だと思ったね」
宗志がポテトを口にしながらつぶやく。
「反則ですか」
「だって本当に女だったら、付き合いたいと思ったもん」
「……勘弁して下さい」
「だから、本当の女だったとしたらだよ」
まどかと楓と曜子が笑った。
そうして、しばらく高校1年の時の懐かしい話で盛り上がった。

それぞれの告白

そんな中、悠太がまどかに声をかけてきた。

「まどか、ちょっといいかな」

「あっ、うん」

「誠、ちょっと借りるよ」

「……はい」

悠太の存在はふたりにとっても特別なものだ。

ある意味、曜子と同じように、近くにいることが不自然ではない存在というか。

ただ、高校3年では互いに違う教室になり、悠太とも会う機会は少なくなっていたが。

それでも、今なお女の子からの告白を断り続けているところを見ると、悠太のまどかへの思いは消えていないのだろう。

悠太はちょっと離れた席に移動して、まどかと一緒に座った。

騒がしかった話し声が少し遠くなり、近くであれば小さな声でも会話が通じるぐらいになる。

まどかは悠太の向かい側に座り、悠太の顔を見る。

いつもならまどかの目をじっと見つめる悠太だったが、今日はどこかうつむき加減で表情が硬い。

「どうしたの？　悠太」

悠太が声をかけたくせに、まどかの問い掛けにも口を開こうとしただけで、悠太の口からは言葉が出なかった。

何か話しづらいことなのだろうか。

しばらくの沈黙の後、悠太が大きなため息をついて話しだした。

「俺、東京に行くことになった」

「え？」

「東京の大学に受かったんだ。そこに行こうと思う」

「……」

まどかにとって悠太は産まれてからずっと近所にいて、近くにいるのが当たり前の存在だった。

それがいつまでも続くわけはないのだが、それでも家が近いからか、離れることはまだ先の事のように思っていた。

「だから、しばらく会えない。もう……守ってやることもできない……」

「悠太……」

表情を変えぬまま、悠太の目から涙がひとつだけこぼれた。

「ずっと一緒にいたかった。いれるものだと思っていた」

「……」

「まどかが悪いわけじゃない。誠が悪いわけでもない。ただ、縁がなかったんだ」

悠太は独り言のように、しずかにつぶやく。

「俺は東京に行く。まどか、元気でな」

「悠太、私、悠太がいてくれて本当に嬉しかったし、楽しかった」

本当に寂しい思いをしなかったのも、楽しい思い出も、悠太がい

てくれたから、と言っても大げさではないほど、いつも傍らにいてくれた。

「解ってる」
「ずっと幼馴染でいてくれて有り難う」
「……もし、誠と別れることがあったら、真っ先に知らせろよ？」

悠太が笑みを浮かべて冗談のようにつぶやくと、まどかも思わず笑ってしまった。

「わかった。その時は一番最初に知らせる」

たぶん、無いとは思うが。
そして、それは悠太も解っている。

「約束だぞ。でも、俺が新しい彼女を見つけていたらゴメンな」
「そうしたら、今度は私が怒るから」
「うん、怒って。いっぱい怒っていいから」
「グーで殴るよ」
「殴っていいよ」
「それで、お幸せに、て言うから」
「ああ」

ふたりは、ちいさく笑いあう。
それで十分だった。

「それじゃあな。元気で」
「悠太も。気をつけて」
「有り難う。困った時はいつでも連絡くれよ。どんな時でも俺はお前の味方だから」

「うん。解った。連絡する」

まどかが手を上げると、悠太がそれに気づいてハイタッチをする。
昔、遊んでいたときに、ふたりで良くやっていた。
野球をしたり、サッカーをしたり。
嬉しい気持ちを分かち合いたい時にやっていたハイタッチ。
その瞬間だけは、昔に戻ったような気がした。

互いにうなずいて、そして、ふたりはそれぞれの席に戻って行った。

誠は麻友に呼ばれて話をしていた。
部屋の隅の空間に座って、ふたりで向かい合う。

当初は苦手意識のあった麻友だが、今では誠にとって気楽に話のできる数少ない女友達のひとりだった。
いつのまにか、麻友はまどかとも仲良くなっているのだから、そのコミュニケーション能力は相変わらず尊敬するほど高い。

今日もいつものように麻友の方から話し始めた。

「誠くん、本当にいろいろと有り難うね」
「何が？」
「私、誠くんのこと好きになってよかった」
「……」

麻友は自分のコップのウーロン茶をゆっくりと飲む。
ひとつ小さな息を吐いてから、また話し始めた。

「最初は、なんで振り向いてくれないんだろう、ってイライラした。何でこんな奴、好きになっちゃったんだろ、って後悔した。こんな経験したことがなかったから、戸惑っちゃって」
「……うん」
「だけどね、そうやって本当に好きになる気持ちに気付いたり、好きになってもらえないことの辛さが解ったり。今までは気ままに付き合ったり、ふったりしていたから」

麻友も誠とまどかの恋愛を見て、気づいてしまった。
ひとりの人を強く愛すると、あんなに幸せそうに笑えるということに。
そして、互いに離れられない絆ができることを。

それを麻友も素敵だな、と思ってしまった。
そう思ったら、もう今までの恋愛には戻れなくなっていた。
今までは寂しさを紛らすように絶えず彼氏がいたが、今はいなくても構わない。
だけど、付き合うなら本当に好きになりたい。

「ふたりを見ていて、いつの間にかふたりを見守る気持ちのほうが大きくなってきていたの。悔しいけど、憧れかな」
「麻友さん……」
「ふたりはお似合いよ。ちゃんと離さずに、結婚しちゃいなさい」

麻友の言葉にちょっと戸惑いながらも、誠はうなずいた。
できれば、そうありたいと思っているから。
麻友は、ふふっ、と笑った。

「私も素敵な人を見つけて結婚するから。そうしたら、また夫婦で

お付き合いしましょうね」
「はい。楽しみにしています」
「約束よ」
「約束します」

麻友は優しい笑顔をして、そして手招きをする。

「ちょっと耳貸して」

誠は海旅行の出来事を思い出して、眉をしかめた。

「大丈夫だから。信頼してよ」

麻友は笑いながら手招きをする。
誠はこわごわと麻友に近寄り、耳を向けた。
麻友が手で口元を隠して、誠の耳元に近寄る。

「あのね……」

麻友の小さな声と吐息が耳にあたってこそばゆい。
誠は麻友の次の言葉を待った。

かぷっ。

「……！！！」

みっ、耳をかまれたぁぁ！！

誠はぱっと麻友から離れ、噛まれた耳を押さえて、顔を真っ赤に

した。

「っ！　ぁっ！　……！」

驚きすぎて、言葉がでない。

麻友は何事もなかったかのように、涼しげな笑顔を浮かべた。

「最後の愛の告白」

嬉しそうにそう言うと、

「じゃあねぇ。またね！」

と手をひらひらさせて、戻って行ってしまった。

誠ははぁっと深い溜息をついた。

最後まで、麻友には勝てなかった。

出会いと別れ

誠が席に戻ると、そこには桜と美緒が待ち構えていた。

「まーちゃん！」

「はいはい、ここ座ってぇ！」

誠は苦笑いしながら、言われるままにふたりの前に座った。

ふたりに言われれば断ることのできない誠だが、この時は一緒に話をしたいと誠も考えていた。

本当に3年間、不思議に繋がり続けたふたりであるし、何となくこれからも縁が続くような気がしていた。

そこにちょうどまどかも戻ってきて、4人でひとつのテーブルを囲んで座ることになる。

話し始めたのは、いつものように桜だった。

「まどかも誠も受験勉強、お疲れ様。まあ、よく飽きもせずによく勉強し続けていたね」

なんとも微妙な労りの言葉に、誠は苦笑いしてしまった。

「桜さんも最期はだいぶ頑張っていたじゃないですか」

年末辺りから、桜には無理やり勉強を教えさせられていた。

「本当にやばい！」とか「絶対に合格させなさい」と脅迫されなが

ら一緒に勉強したのだが、桜はなかなかの集中力で何とか間に合わせたようだ。

「本当に、まーちゃんのお陰。有り難う！」

桜は東京にある大学の合格を何とか決めていた。

それなりに名の知れた大学で、桜は新しく始まる生活を心から楽しみにしている様子だった。

「いつ引越しですか？」

「本当にもう近々。だから、会えるのは今日が最後かもしれない」

「それは寂しいですね」

「……何か心がこもっていないような気がするのは気のせい？」

「そんなことないですよ」

「目が泳いでるぞ！」

ふたりの相変わらずのやり取りに、笑いが起きる。

誠としても、こんな時間がもっと続いて欲しい、と本当は思っていた。

「そう言えば、美緒はどうするの？　勉強している様子があまりなかったけれど」

桜が不意に美緒に話を振ると、美緒はいつもの天使の笑顔を浮かべて答えた。

「私は女子大に推薦が決まっていたから」

「女子大！」

市内にある女子大はふたつで、そのひとつにすでに推薦入学が決

まっていたらしい。

「それは、良かったですね。美緒さんらしいというか」

彼女は見かけとは裏腹に、軽い男性恐怖症だと知っているのは数少ない友達だけだ。

彼女にとって、女性だけが通う大学は願ってもない環境なのだろう。

「そう。ようやく気楽に学生生活が楽しめそう」

柔らかな、溶けてしまいそうな笑顔の美緒。

どうやら明るい笑顔の下で、それなりの苦労があったらしい。

まあ、告白されたり、告白されたり……そんなところだろうが。

「まどかとまーちゃんも一緒に合格できるといいね」

「大丈夫よ、このふたりは。私はもう確信している！」

桜の言葉に、まだ不安の残るまどかが苦笑いする。

「そうだといいけれど」

「大丈夫！　大丈夫！　まーちゃんがそう言っているんだから」

「うん、そうだね」

桜の言葉に、まどかにもようやく笑顔が戻る。

「あーあ、もっとこのメンバーで遊びたかったなぁ」

「結局、温泉に行けなかったね」

「そうなの。残念」

「僕はほっとしていますが」

桜と美緒のやり取りに、誠の正直な感想が入る。

「こんな美女たちの有り難いお誘いに、何ていうことを！　あとで絶対に後悔させてやる」

「やっても後悔、やらなくても後悔。難しい選択肢ですね……」

「絶対にいつか混浴に連れ込んでやる！」

笑いが起きるなか、美緒が、

「まどかと、桜と、まーちゃんと私。一緒に、家族風呂に入るとか？」

とずいぶん具体的な提案をしてきた。

3人に囲まれて温泉に入る図を想像してしまい、久しぶりの強い刺激に誠はめまいを覚えた。

「それいいね！」

「お風呂で溺死しそうです……」

「そうしたら、私が口と口とで人工呼吸をしてあげるから！」

「……心臓を止めないで下さい」

笑いすぎて、涙が出そうになる。

もうすぐこんな時間が無くなってしまうなんて、信じたくなかった。

そう思っていたのは、誰もが同じだったらしい。

「それぞれ離れるけれど、絶対にまた会いに来るから」

桜がいつになく真剣な顔でつぶやくと、美緒も同じくうなずいた。

「これからも宜しくね」
「こちらこそ」

何となく、みんなで固い握手をした。
別れ難いが、また会う約束をそれぞれに交わして、たわいも話に戻る。
そうして、いつまでも笑い声が続いたのだった。

この縁は、本当にこれからも続くのだが、それはまた別の話。

あっという間に楽しい時間は過ぎ、打ち上げは終わりを告げた。
名残り惜しいが、それぞれに別れの挨拶を交わして、それぞれの帰途についた。

帰りは、まどかと誠と曜子の3人で帰ることにした。

「楽しかったね！」

まどかが本当に嬉しそうな笑顔でつぶやくと、誠も曜子もうなずいた。
受験勉強からの開放感と、しばらく会えない寂しさからか、異様な盛り上がりを見せた打ち上げは、本当に楽しい時間だった。

「楽しい時間の後は、何となく寂しく感じますね」

今までいつでも会えると思っていた人達との別れ。
こんな寂しい気持ちになるのは、誠にとっても初めてのことだった。
戻れない時を振り返り、まだしばらくそこに残っていたかった。

「また会えますよ！」

まどかが明るく励ましてくれる。

「別れの後は、また新しい出会いもある」

曜子も別の形で慰めてくれる。

そうだ、別れはあるけれど、出会いもある。

「また、こんな出会いがあるかも知れないのなら、新しい世界も悪くはないですね」
「人生はそんな別れと出会いの連続よ」
「本当、そうですね」

続く縁もあって欲しいが、新しい世界に希望抱くのも悪くない。
自分の人生の中に、どんな出会いが待っているのだろうか。

「曜子とも、長い縁が続くといいな」

まどかの言葉に、曜子も笑顔でうなずく。

「きっと、続くよ。それよりも、まどかと誠の縁が早く固まるといいな」
「縁が固まる？」

曜子がくすっと笑う。

「結婚する、ということよ」

曜子の言葉に、まどかと誠が顔を赤くする。

「実はね、曜子。クリスマスプレゼントに、指輪もらっちゃった」

ふたりだけの秘密を、まどかが暴露してしまった。

知らなかった曜子だが、嬉しそうに驚いてくれた。

「本当!?　婚約指輪?」

「本物ではないのですが。気持ちしては」

誠が恥ずかしそうに説明した。

「いま持っているの?」

曜子の問いかけに、まどかがうなずくと、首にかけていたチェーンを引っ張り出す。

まどかは指輪にチェーンをつけて、人から見えないようにいつも首にかけていたのだ。

チェーンの先にある、指輪を手の平に乗せて、曜子に見せた。

「わあ、素敵。誠、やるじゃない」

曜子からの初めてのお褒めの言葉かもしれない。

ある意味での卒業証書か。

「いつか本当の指輪を渡したいです」
「気持ちを伝えたのが偉い。早すぎて引く子もいるかも知れないけれど、まどかにとっては安定剤になったわね」

曜子の感想は的確で、まどかはうんっとうなずく。
あの日から、まどかの不安はだいぶ軽減されている。
指輪はまどかにとってまさに安定剤で、今ではいつでも離さずに持っている。

「幸せにね。ふたりとも」
「そうなれるように、頑張ります」
「大丈夫よ、ふたりなら」

曜子は本気でそう感じていた。

「私の相手は、いまどこで何をしているやら」

曜子の自嘲的なつぶやきに、ふたりが笑ってしまった。

「意外に近くにいたりして」
「どうだろうね。まあ、その時を楽しみにしているわ」

曜子もまた、新しい世界に希望を託すことにした。
出会いはいつあるかもわからない。どう変化するかも。
それを楽しみにしましょう……曜子はそう考えることにした。

「まあ、いずれにせよ、合格したら大学生活も宜しくね」
「こちらこそ」
「うー、合格していますように」

「大丈夫よ」
「その時は、３人でお祝いしましょう」
「そうね。一緒に遊園地でも行こうか」
「あっ、それいい！」

静かな夜空の下、３人は別れるまでの帰り道を、そうして歩き続けていた。

もうすぐ、運命の結果発表の日が来る。

合格発表

合格発表の朝。
まどかは緊張のあまり、いつもより早く目が覚めてしまった。
もう一度寝ようかとも思ったが、横になっても眠れそうにない。
まどかはそのまま、身支度を整えることにした。

カーテンを開けると、ようやく白んできた空は凛と澄んでいて、
深い青色がどこまでも広がっていた。

とうとう今日、決まってしまう。

医学部の入学は医師になる途中経過でしかないことは解っている。
でも、ここを合格しないことには医師になれないことも確かだ。

まどかは胸にそっと手をあてて祈った。

「どうか、合格していますように」

誠と一緒に。

しばらくの静かな祈りの後、まどかは着替え始めた。

合格発表の場である大学内の敷地は、すでに人で賑わっていた。

まどかは芳子と、誠は真穂とやってきて、正門で待ち合わせると一緒に発表会場へ向かった。
まどかと誠が並び、その後ろに芳子と真帆が並んだ形で４人で歩く。

今日は晴天で、何となく春の暖かさを感じる。
発表日でなければ、気分が浮き立っていただろう。

まどかはいつの間にか握りしめた手の平に、汗をかいているのを感じていた。
手の平を広げ、かるく手を振ってみる。

緊張をしている。

まどかははっきりとそう自覚していた。
いつもは感じない動悸も、今は感じる。

早く結果が解ってすっきりしたい気持ちと、結果を見ることの怖さとが、心のなかで半分ずつ占めていて、悩めるまどかの歩みはどうしても重くなってしまっていた。

そんなまどかの思いが伝わったのか、誠が手を取って握ってくれた。
誠の目を見ると、落ち着いた視線を向けてくれていて、まどかはいくらか落ち着くことができた。

ふたりで、ゆっくりと歩を進める。

そしてとうとう、ふたりは掲示板の前にたどり着いた。

「確認しましょう」
「はい」
「番号を私にも見せて下さい」

まどかの受験票をふたりで確認して、受験番号を憶える。
医学部の掲示板を見つけ、数字を探し始めた。

ひとつ、ひとつ、数字をたどる。

あるか、ないか。

数字は……。

「ありましたよ」
「え？」
「ありました。おめでとう」

誠が静かに伝えてくれた。
まどかも数字を追うと、確かに同じ番号があった。

受験票と同じ番号。

「あった……」

「うん」

「師匠！　ありました！」

まどかは、思わず誠に抱きついた。

もう嬉しくて、嬉しくて、力のかぎり誠のことを抱きしめてしまった。

そこでまどかは、はっと気付いた。

そうだ、誠は？

「師匠は？　番号ありました？」

当然合格しているだろうと思って、忘れかけていた。

誠はくすっと笑って、うなずいた。

「ありましたよ。僕も合格していました」

「やったぁ！！」

まどかはまた、ぎゅっと誠を抱きしめた。

嬉しかった。

本当に、嬉しくて、嬉しくて。

もう他の言葉でいい表せないくらい嬉しくて。

緊張がとけて安心したのか、まどかの目に涙が滲んだ。

「師匠もおめでとうございます。そして、有り難うございました」
「こちらこそ、有り難う。それで、その……ひとつお願いがあるのですが」
「……？　なんですか？」
思いもよらないタイミングだったので、誠からのお願いの検討もつかないまどかは首をかしげた。
ちょっと恥ずかしそうに、誠はつぶやいた。
「もう、今日から師匠ではないですので、その……誠……って呼んでくれませんか？」
「あっ……」
そうだ。
今までは勉強を教えてくれる先生であり、師匠だった。
でもそれも、今日まで。
今日からは……。
まどかは頬を赤くして、うなずいた。
「はい……誠さん！」
「うん」
ふたりは抱き合ったまま、ふふっと笑う。
そうしたら、相手のことが愛しくて、愛しくて。
ついついまどかも誠も、お互いに顔を近づけてしまった。

そして

ちゅっ……

ちょっとだけ長いキス。

「あっ」

誠が不意に唇を離し、何かを思い出したかのように声を上げたので、まどかも「え？」とびっくりした声を上げてしまった。

そしてまどかも思い出した。

母親と一緒に来ていたことを。

「……」

恐る恐るふたりが後ろを振り向くと、そこには、苦笑いをする芳

子と真穂の姿があった。

すべて見られていたことに気づいて、恥ずかしくなったふたりは母親の顔を見ることもできず、顔を真っ赤にして視線をそらした。

芳子と真穂は互いに視線をかわして微笑み合う。

いつの間にか、ふたりの子供達はたくましく成長し、教えるでもなく夢を見つけ、そのための階段も登ってしまった。

そして、心配していた恋の相手も見つけ、知らぬ間にふたりの愛をしっかり育んでいたようだ。

芳子と真穂の心は驚きの気持ちよりも、ふたりの成長を微笑ましく思う温かな気持ちで満たされていた。

その一方で、誠とまどかはますます顔を赤くして、まだ春先だというのに額に汗をかき始めていた。

でもよく見ると、無意識にふたりは互いの手を握りしめている。

真穂はそんなふたりを見て、くすりと笑った。

そして、真穂は静かにこう言ったのだった。

「もう、ふたりとも。結婚しちゃいなさいよ」

〈　勉強の神様は人見知り　終わり　〉

後書き

最後まで読んでいただき、有り難うございました。
心から感謝しております。

そして、読んで楽しんでいただけたか、すこし心配しています。

この作品は思いのほか、たくさんの方々に読んでいただき、支えてもらいました。

最初に、何と言っても「攻撃魔術の使えない魔術師」の絹野帽子さん。小説家になろう、の作品群の中でも歴代トップ１０に入る作品を書かれている方なのに、たくさん支えてもらってしまいました。
タイトルもあらすじも、絹野さんが新たに考えてくれました。
それに、ほぼ毎日のメッセージのやり取りを通して、誤字脱字の指摘や次の話のアイデアなどをいただきました。

絹野さんがいなければ、この作品も無かった、とさえ思っています。
忙しいのに、本当に有り難うございました。

そして、初期の頃から読んでいただき、感想を何度も書いていただいた小説中毒さん。励みになりました。有り難うございました。
傑作になったかどうか解りませんが、楽しんでいただけたなら幸いです。

青崎赤斗さん、Ｍｏｏｎｌｉｇｈｔさん、卯田手石さん、ひおさん、神崎直人さん、トマトクンさん……他にも感想をいただいた方。本当に有り難うございました。

紅茶さんには、感想の他に初のレビューもいただいて、本当に嬉しかったです。受験、頑張ってくださいね。

それと、「半径三メートルの箱庭生活」の白い黒猫さん。感想と素敵なレビューをいただいて、嬉しかったです。私自身も白い黒猫さんの作品、読ませていただいています。お互いに頑張りましょうね。

あと、私もファンの「Ｂグループの少年」櫻井春輝さん。感想の他にも、活動報告のコメントをいただいたりして、励みにさせていただきました。有り難うございます。続き楽しみにしていますので、頑張って下さいね。

お気に入り登録や評価をしていただいた方の名前は、システム上解りませんが、総合評価が少しずつ上がるたびに、感謝で拝ませていただいてました。有り難うございます。

そして、ユニークやＰＶ。読んでくださっていた方々にも感謝。どんな方々が読んでいて、楽しみにしていただいていたのかな、と想像しています。

有り難うございました。

さて、まどかと誠のその後ですが。

１９歳で同棲して、２０歳で結婚します。
大学中に男の子を出産。
卒業後、誠は小児科に、まどかは消化器内科に進みます。
もうひとり、女の子を出産。
誠は大学の講師まであっという間に駆け上り、東京の私大の准教授として招かれて就任します。
まどかも子供も真穂も一緒に東京に行きます。
誠は小児癌の遺伝子研究の権威に。
まどかは消化器内科の臨床医として頼られる女性に育ちます。
子供達は賢いけれどやんちゃで、けっこうふたりを悩ませます。

曜子ですが、彼女は大学卒業後にとある会社に就職し、そこで知り合った後輩を面倒見る間になつかれ、互いに好きになり、結婚します。
子供を3人産み、幸せな家庭を作ります。

悠太は失恋が十分に癒えないまま、大学生活を送ります。
そこで元気な心優しい女の子と出会い、しだいに互いに心惹かれるようになり、長いお付き合いのあとに結婚します。
彼は弁護士になります。

桜は大学在学中にスカウトされてモデルになり、トークが楽しいからとタレントになり、顔が売れてからは女優もこなし、そのドラマのオープニングテーマを歌って、いつの間にか歌姫として有名になってしまいます。
しかし、有名になるが故に恋の機会にはめぐまれず、ずっと独り身を続けます。

桜は料理も洗濯も嫌いなため、誠一家の家に入り浸りつづけ、専用の部屋まで用意され、鍵まで渡される間柄が続きます。

麻友は卒業後に大企業の社長秘書となり、御曹司に猛烈にアタックされ、玉の輿結婚をします。

約束通り、一柳家と夫婦でのお付き合いが始まり、困った事があると何かと助けてくれる存在になります。

美緒は女子大生活を謳歌していたのですが、頼まれてやらされた選挙のバイトで若手国会議員に目を付けられ、長い年月の末に結婚。旦那を支える妻を演じつつ、東京に来たのを良い事に、桜や麻友達との付き合いを再開します。

いま、彼らの続きの話を書こうか、まったく別の話を書こうか、それともしばらくお休みしようか、悩んでいます。

少し立ち止まって、自分の書きたい物語が何かを考えてみたいと思います。

とは言え、読んでもらって喜んでもらえてこそ、書きがいがあるもの。

どんな話を読んでみたいか、感想かメッセージをいただけると有り難いです。

最後にあらためて感謝の言葉を綴り、終わりの挨拶とさせて頂き

ます。

本当に、有り難うございました。

8月の熱い夜に

京夜

あとがき、その2

たくさんの感想を有り難うございました。

結局、この話の続きを書くことにしました。

別の話も考えたのでが、そうなると多分戻ってこれなさそうで、せっかくですからアフターストーリーを書いておこうと思いました。

誠とまどかと、もうしばらくお付き合いしていただけると有り難いです。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３０８ｗ／

「ふたり家族になるまでの」

ふたりが大学生となって同棲し、結婚して、出産するまでの３年間を書きたいと思っています。

中編ぐらいの長さかな。

よろしくお願いいたします。

そのあとで、悠太の話と麻友の話も、書いてみようかな、と思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6171s/

勉強の神様は人見知り

2011年10月5日03時05分発行